IBM Unica Campaign バージョン 公開日: 2011年6月7日 8.5.0

ユーザガイド

Copyright

© Copyright IBM 2011 IBM Corporation Reservoir Place North 170 Tracer Lane Waltham. MA 02451-1379

すべてのソフトウェアおよび関連ドキュメントには、「IBMインターナショナルプログラムライセンス契約」に規定されている使用および開示に関する権限、米国政府ユーザに対する制限付き権限、および適用可能な輸出制限が適用されます。

本書の例で使用されている企業、名前、およびデータは、特に指定のない限り架空のものです。

IBM、IBMのロゴ、Unica、Unicaのロゴ、NetInsight、AffiniumおよびMarketingCentralは、米国およびその他の国、もしくはその両方における商標または登録商標です。 その他の製品およびサービスの名称は、IBMまたはその他の企業の商標である場合があります。 © Copyright IBM Corporation 2011. All rights reserved.

目次

はじめに IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ	18
1 IBM Unica Campaignの概要	20
Campaignでできること	20
Campaignのユーザ	21
その他のIBM Unica 製品との統合	21
IBM Unica Marketing Operationsとの統合について	22
レガシキャンペーンについて	22
Campaignの概念	23
キャンペーン	23
フローチャート	23
セッション	24
プロセス	24
オファー	25
セル	25
2 はじめに	26
はじめに	26
ユーザ名とパスワード	26
IBM Unica Marketingにログインするには	26
役割と権限	27
Campaignのセキュリティレベル	27
開始ページの設定	28
3 キャンペーン	29
キャンペーンについて	29
キャンペーンデータの準備	29
キャンペーンの設計	30
例: マルチチャネルリテンションキャンペーン	30
キャンペーンへのアクセスについて	32
キャンペーンの操作	33
キャンペーンを作成するには	33

キャンペーンへの戦略的セグメントの関連付け	34
セグメントをキャンペーンに関連付けるには	34
キャンペーンへのオファーの関連付け	34
[キャンペーンサマリ]タブからオファーを"トップダウ	ン"に関連付けるには35
キャンペーンを表示するには	35
リンクされているレガシーキャンペーンからMarketing は	
キャンペーンのサマリの詳細を編集するには	36
キャンペーンの実行について	37
キャンペーンを印刷するには	37
キャンペーンを移動するには	37
キャンペーンの削除について	38
キャンペーンを削除するには	38
キャンペーン結果の分析	39
キャンペーンの整理	39
キャンペーンフォルダを追加するには	39
キャンペーンのフォルダ名と説明を編集するには	39
キャンペーンフォルダを移動するには	40
キャンペーンフォルダを削除するには	40
キャンペーンリファレンス	41
[キャンペーン-覧]ページのアイコン	41
[キャンペーンサマリ]タブのアイコン	42
[キャンペーンサマリ]タブリファレンス	43
4 フローチャート	44
フローチャートについて	44
フローチャートの作成	45
フローチャート設計時の注意事項	45
新規フローチャートを作成するには	45
フローチャートのコピー	46
フローチャートをコピーするには	46
フローチャートの表示	47
フローチャートを表示するには	47
フローチャートの確認	48
フローチャート内のプロセスを確認するには	48
フローチャートの編集	49

フローチャートを編集用に開くには	49
フローチャートのプロパティを編集するには	49
フローチャートの検証	50
フローチャートを検証するには	50
フローチャートのテスト	51
フローチャートをテスト実行するには	51
フローチャートのブランチをテスト実行するには	51
フローチャートの実行	52
フローチャートを実行するには	52
フローチャートのブランチを実行するには	53
プロセスを実行するには	53
実行履歴オプションについて	54
実行履歴オプションのシナリオ	54
[実行履歴オプション]ウィンドウリファレンス	54
フローチャートの実行を一時停止するには	55
一時停止中のフローチャートの実行を続行するには	55
フローチャートの実行を停止するには	56
停止中のフローチャートの実行を続行するには	56
ランタイムエラーのトラブルシューティング	56
フローチャートの削除	57
フローチャートを削除するには	57
フローチャートを印刷するには	57
トラブルシューティングのためのフローチャートファイルのパッケージ化	58
トラブルシューティングのためにフローチャートファイルのパッケージを作成するには	58
IBM Unica テクニカルサポートへのフローチャートデータパッケージの転送	59
フローチャートデータのパッケージ化オプション	59
フローチャートリファレンス	62
[フローチャート]タブのアイコン(表示モード)	62
[フローチャート]ページのアイコン(編集モード)	63
プロセス	65
プロセスについて	65
プロセスのタイプ	65
コンタクトプロセス	66
データ操作プロセス	66

実行プロセス	67
最適化プロセス	67
プロセスの操作	68
新規プロセスをフローチャートに追加するには	68
プロセスのコピーと貼り付けを実行するには	69
プロセスを切り取るには	69
テンプレートライブラリからプロセスを貼り付けるには	70
プロセスを移動するには	70
プロセスを削除するには	70
2つのプロセスを接続するには	71
2つのプロセス間の接続を削除するには	71
例: プロセスの接続	72
プロセスの設定と編集	72
プロセス設定ウィンドウにアクセスするには	73
プロセスを実行するには	73
実行履歴オプションについて	74
実行履歴オプションのシナリオ	74
[実行履歴オプション]ウィンドウリファレンス	74
プロセスに対するデータソースの選択	75
着信のセル、セグメント、またはテーブルをプロセスへの入力として選択するには	75
複数のテーブルをプロセスへの入力として選択するには	76
ソースとして選択するために新しいテーブルをマッピングするには	76
プロセスに対するデータベース内処理の選択	76
データベース内処理のオン/オフの切り替え	77
フローチャートでデータベース内処理をオンまたはオフにするには	78
データベース内処理のオン/オフをグローバルに切り替えるには	78
プロセス内でのクエリの作成	78
Campaignプロセス内でのクエリの評価方法	78
ポイント&クリックでクエリを作成するには	79
SQL入力でクエリを作成するには	80
入力サポートを使用してクエリを作成するには	81
SQLを使用したクエリの作成	82
Campaignでの未加工SQLステートメントの構築	83
未加工SQLクエリでのTempTableトークンおよびOutputTempTableトークンの使用	83

例: TempTableトーク	ンとOutputTempTableトークンの使用	84
未加工SQLクエリでの	の書込みテーブルの参照	85
SQLテキスト入力領域	或で未加工SQLクエリを作成するには	85
未加工SQLステート>	メントで複数のコマンドを渡すには	86
前処理または後処理S	GQLステートメントを指定するには	86
項目のプロファイル		87
項目をプロファイルする	5には	87
プロファイルの入力制限	₹	88
プロファイルの無効化		90
プロファイルオプション	/の設定	90
[プロファイルオプシ	ョン]ウィンドウにアクセスするには	90
プロファイルセグメン	ットの最大数の指定	90
プロファイリングのた	とめの最大セグメント数を設定するには	91
データ型による並べを	替え	91
プロファイル数の更新		91
クエリにプロファイルカ	ウテゴリを挿入するには	92
プロファイルの結果を印	卩刷するには	92
プロファイルデータをエ	Cクスポートするには	92
コンタクトログ用の出カフ	7ァイルまたはテーブルの指定	93
コンタクトログ用に出力	カファイルを指定するには	93
コンタクトログ用にデー	-タベーステーブルを指定するには	94
乱数選択用の種の変更		95
レコード選択用の乱数種	重を変更するには	95
プロセス出力での重複IDの)除外	95
カレンダーツールを使用す	rるには	96
S IBM Unica Campaignフ	プロセス	97
プロセスのリスト		97
データ操作プロセス		97
オーディエンス		98
オーディエンスレベル	ν	98
世帯設定		99
レベルの切り替え		99
オーディエンスプロセ	セスの設定	100
オーディエンスプロセ	セスを設定するには	100

	例: オーディエンスプロセス	. 102
	例: レコードのフィルタリング	.102
	同じ入力/出力オーディエンスレベルの使用	.103
	<異なるオーディエンス>ごとに1つの<入力/出力オーディエンス>エントリを選択するには.	.104
	<異なるオーディエンス>ごとに複数の<オーディエンス>レコードを選択するには	.105
	オーディエンスレベルのエントリごとにエントリを選択するには	.106
	異なる入力/出力オーディエンスレベルの使用	. 107
	すべての<出力オーディエンスレベル>エントリを選択するには	.108
	複数の<異なる出力オーディエンスレベル>エントリを選択するには	.108
	<異なる入力オーディエンス>ごとに1つの<出力オーディエンス>を選択するには	.109
書	込み	. 110
	例: トランザクションデータの書込み	.111
	eMessageランディングページからデータを書込むための前提条件	.111
	書込みプロセスの設定	. 111
	セル、1つのテーブル、または戦略的セグメントからデータを書き込むには	.112
	eMessageランディングページからデータを書込むには	.113
	[書込み]タブリファレンス	.115
₹	[*] ージ	. 116
	マージプロセスを設定するには	.116
ij	・ンプル	. 117
	サンプルプロセスを設定するには	. 117
	サンプルサイズ計算について	. 119
	サンプルサイズ計算を使用するには	.119
t	グメント	. 120
	データ項目で作成	.121
	クエリで作成	. 121
	別のセグメントプロセスへの入力としてのセグメントの使用	.121
	セグメント化についての注意事項	. 122
	セグメント化方法の選択	.122
	データの重複禁止	.122
	セグメントサイズの制限	.122
	ソースセルの選択	.122
	セグメントプロセスを項目で設定するには	.123
	セグメントプロセスをクエリで設定するには	.123

セグメントプロセスの設定: [セグメント]タブ	124
セグメントプロセスの設定: [書込み]タブ	126
セグメントプロセスの設定: [全般]タブ	127
[新規セグメント]ダイアログと[セグメントの編集]ダイアログ	127
選択	129
選択プロセスを設定するには	129
実行プロセス	130
コールリスト	131
コンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)を設定するには	131
セグメント化	136
セグメント化プロセスを設定するには	136
キューブ	137
キューブプロセスを設定するには	138
メールリスト	139
コンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)を設定するには	139
スケジュール	144
スケジュールプロセスを設定するには	145
スケジュールプロセスでカレンダーツールを使用するには	147
トリガに基づいたスケジュール指定	147
トリガで実行するようにスケジュールプロセスを設定するには	148
トリガでの実行	148
例: トリガでの実行	148
実施後トリガ実行	149
トリガと他のスケジュールオプションとの併用	149
スナップショット	149
スナップショットプロセスを設定するには	149
最適化プロセス	152
モデル	152
モデルプロセスを設定するには	152
レスポンス	154
レスポンスプロセスを設定するには	155
スコア	156
スコアプロセスを設定するには	157
トラッキング	159

トラッキングプロセスを設定するには	159
7 オファー	162
オファーについて	162
統合システムを使用したオファー管理	163
オファー属性	163
オファーバージョン	164
オファーテンプレート	165
オファーリストについて	166
静的オファーリスト	167
スマートオファーリスト	167
セキュリティおよびオファーリスト	168
処理	168
コントロールグループ	169
ターゲットセルへのコントロールセルの関連付け	169
オファーの操作	169
オファーの新規作成	170
新規オファーを追加するには	170
オファーの関連製品	171
貼り付けを使用して関連製品リストをオファーにインポートするには	171
オファーの関連製品クエリを編集するには	172
オファーの関連製品クエリを消去するには	173
選択した製品を関連製品クエリから削除するには	173
オファーの複製	173
[オファー]ページからオファーを複製するには	173
オファーをオファーの[サマリ]ページから複製するには	174
オファーのグループ化	174
属性の使用	
フォルダでのオファーのグループ化	175
オファーを編集するには	175
オファーまたはオファーリストを移動するには	176
オファーまたはオファーリストの追加	176
オファーの削除	176
オファーまたはオファーリストを削除するには	177
オファーの回収	178

オファーまたはオファーリストを回収するには	178
プロセス設定ダイアログからセルにオファーを割り当てるには	179
オファーの検索	180
詳細検索を使用してオファーを検索するには	181
[オファー一覧]ページのアイコン	181
オファーのレポートを[サマリ]ページから表示するには	182
オファーリストの操作	183
静的オファーリストを追加するには	183
スマートオファーリストを追加するには	183
オファーリストを編集するには	184
オファーリストの移動	184
オファーリストの削除	185
オファーリストの回収	185
セルへのオファーリストの割り当て	185
8 セルの管理	187
セルについて	187
セル名とセルコード	188
例: セル名の変更シナリオ	189
セルの操作	191
フローチャートのプロセス内にセルを作成するには	192
出力セルのサイズ制限	192
出力セルから入力を取得するプロセス	192
入力セルサイズに基づく出力セルサイズの制限	193
入力セルのサイズに基づいて出力セルのサイズを制限するには	194
テーブルから入力を取得するプロセス	194
テスト実行時のセルサイズ制限の適用	196
セル名の変更	196
フローチャートのプロセス内のセルの名前を変更するには	197
セル名のリセット	197
セル名をリセットするには	198
グリッド内のすべてのセルをコピーして貼り付けるには	198
セル名とコードを外部のスプレッドシートから貼り付けるには	198
セルコードの変更	199
フローチャートのプロセス内のセルのコードを変更するには	199

[ターケットセルの照合とリンク]タイアロクを使用してフローチャートのセルを照合して るには	
[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを使用してフローチャートのセルの照合また を解除するには	
[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを使用してフローチャートのセルを手動で照 ンクするには	
プロセス設定ダイアログを使用してフローチャートのセルをターゲットセルにリンクする は	
プロセス設定ダイアログを使用してターゲットセルからフローチャートのセルのリンクを るには	
フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当てるには	203
セルへのオファーリストの割り当て	204
セルに割り当てられているオファーにパラメータを設定するには	204
ターゲットセルスプレッドシートについて	205
ターゲットセルスプレッドシートでのセルステータス情報	206
セル数の更新	206
セル数を手動で更新するには	206
ターゲットセルスプレッドシートの操作	206
ターゲットセルスプレッドシートに1行追加するには	207
ターゲットセルスプレッドシートに複数の空白行を追加するには	207
ターゲットセルスプレッドシート内のセルに行を複製するには	208
ターゲットセルスプレッドシート内を検索するには	208
現在のセルがコントロールセルであるかどうかを指定するには	209
現在のセルにコントロールセルを指定するには	209
ターゲットセルスプレッドシート内にセルコードを生成して使用するには	209
ターゲットセルスプレッドシートを編集するには	210
外部ソースからターゲットセルスプレッドシートにデータを貼り付けるには	210
.csvファイルからターゲットセルスプレッドシートにデータをインポートするには	211
ターゲットセルスプレッドシートにインポートするCSVファイルの必須形式	211
ターゲットセルスプレッドシートからデータをエクスポートするには	213
ターゲットセルスプレッドシート内のセルにオファーを割り当てるには	214
ターゲットセルスプレッドシート内のセルからオファーへの割り当てを解除するには	214
割り当てられているオファーまたはオファーリストを表示するには	215
[ターゲットセル]タブのアイコン	215
]ンタクト履歴とレスポンストラッキング	217
コンタクト房庭について	247

	コンタクト履歴とオーディエンスレベル	218
	詳細コンタクト履歴	218
	コンタクト履歴テーブルへのエントリの書き込み	218
	処理履歴(UA_Treatment)	219
	ベースコンタクト履歴(UA_ContactHistory)	220
	コンタクト履歴への追加トラッキング項目の書き込み	221
	コンタクト履歴の更新	222
	詳細コンタクト履歴(UA_DtlContactHist)	223
	オファー履歴	223
	コンタクト履歴への書き込みの無効化	223
	テスト実行	223
	ログオプションを無効にするには	224
	コンタクト履歴とレスポンス履歴の消去	224
	コンタクト履歴およびレスポンス履歴を消去するには	225
	レスポンストラッキングについて	
	レスポンストラッキングの実行	226
	複数のレスポンストラッキングフローチャートの使用	227
	マルチパートオファーコードを使用したレスポンストラッキング	229
	レスポンストラッキングの日付範囲	229
	コントロールのレスポンストラッキング	
	カスタマイズされたオファーに対するレスポンストラッキング	230
	レスポンスタイプ	231
	レスポンスカテゴリ	231
	直接レスポンス	232
	直接完全一致	
	直接不完全一致	
	推定レスポンス	
	コントロールグループからの推定レスポンス	234
	帰属方法	
	最適な一致	
	断片的一致	
	複数一致	
10)保存オブジェクト	237
	保存オブジェクトについて	237

ユーザ定義項目について	237
ユーザ定義項目の作成	238
ユーザ定義項目の命名制約	238
ユーザ定義項目を作成するには	238
既存のユーザ定義項目から、新規のユーザ定義項目を作成するには	239
カスタムマクロを使用してユーザ定義項目を作成するには	239
ユーザ定義項目の保存	240
ユーザ定義項目を保存するには	240
ユーザ定義項目式を使用するには	241
ユーザ定義項目を固定するには	241
例: 永続的なユーザ定義項目	241
ユーザ変数について	243
ユーザ変数を作成するには	244
カスタムマクロについて	245
カスタムマクロを作成するには	246
カスタムマクロの使用ガイドライン	247
カスタムマクロを管理するには	250
テンプレートについて	250
テンプレートライブラリにテンプレートをコピーするには	251
テンプレートライブラリからテンプレートを貼り付けるには	251
テンプレートを管理するには	252
テーブルカタログについて	252
テーブルカタログにアクセスするには	252
テーブルカタログを編集するには	253
テーブルカタログを削除するには	253
11 セッション	254
セッションについて	254
セッションの操作	255
セッションを作成するには	255
セッションを表示するには	255
セッションのサマリ詳細を編集するには	256
セッションのフローチャートを編集するには	256
セッションのフローチャートのプロパティを編集するには	257
セッションのコピーについて	257

セッションの実行について	257
セッションを移動するには	257
セッションの削除について	258
セッションを削除するには	258
セッションの整理について	259
セッションフォルダを追加するには	259
セッションフォルダの名前と説明を編集するには	259
セッションフォルダを移動するには	260
セッションフォルダを削除するには	260
[セッション一覧]ページのアイコン	261
戦略的セグメントについて	261
戦略的セグメントのパフォーマンスの向上	262
戦略的セグメントを作成するための前提条件	263
戦略的セグメントを作成するには	263
例: 戦略的セグメントを作成するセッションフローチャート	264
[セグメント一覧]ページからセグメントを表示するには	264
[キャンペーンサマリ]ページから戦略的セグメントを表示するには	265
セグメントのサマリ詳細を編集するには	265
戦略的セグメントのソースフローチャートを編集するには	265
[セグメント一覧]ページのアイコン	266
戦略的セグメントの実行	266
戦略的セグメントの整理	267
セグメントフォルダを追加するには	267
セグメントフォルダの名前と説明を編集するには	267
セグメントフォルダを移動するには	268
セグメントフォルダを削除するには	268
セグメントを移動するには	269
戦略的セグメントの削除	270
セグメントを削除するには	270
グローバル抑制とグローバル抑制セグメントについて	271
グローバル抑制の適用	271
グローバル抑制の無効化	271
フローチャートのグローバル抑制を無効にするには	272
ディメンション階層について	272

例: ディメンション階層	272
ディメンション階層の作成	273
Campaignディメンションに階層的ディメンションをマッピングするには	273
ディメンション階層を更新するには	274
保存されたディメンション階層を読み込むには	275
キューブについて	275
12 IBM Unica Campaignでのレポートの使用	277
IBM Unica Campaignでのレポートについて	277
レポートタイプ	277
Campaignリストポートレット	278
Campaign IBM Cognosレポートポートレット	278
レポートの操作	279
レポートのアクセスと表示	279
[キャンペーン分析]ページからレポートを表示するには	280
キャンペーンの[レポート]タブからレポートを表示するには	280
[キャンペーン]ページの[レポート]タブのアイコン	280
セルレポートをフローチャートから表示するには	281
レポートコントロール	281
レポートツールバー	281
レポートを電子メールで送信するには	282
さまざまな形式でのレポートの表示	282
レポートをHTML形式で表示するには	283
レポートをPDF形式で表示するには	283
レポートをExcel形式で表示するには	283
レポートをCSV(カンマ区切り値)形式で表示するには	283
レポートをXML形式で表示するには	284
Campaignのレポートリスト	284
フローチャートセルレポート	284
セルレポートを印刷およびエクスポートするには	285
セルリストレポート	285
セルリストレポートを生成するには	285
セルプロファイルレポート	285
セルプロファイルレポートを生成するには	286
セルクロス集計レポート	287

	セルクロス集計レポートを生成するには	287
	セル内容レポート	288
	セル内容レポートを生成するには	288
	セルウォータフォールレポート	289
	セグメントクロス集計レポート	290
	セグメントクロス集計レポート	291
	セグメントプロファイルレポート	291
	キャンペーンカレンダー	291
	キャンペーンおよびオファーリストレポート	291
	キャンペーンサマリ	291
	オファーキャンペーンリスト	291
	パフォーマンスレポート	292
	「What If」オファー収支サマリ	292
	キャンペーン詳細-オファーレスポンスの詳細	293
	オファー別キャンペーン収支サマリ(実績)	293
	月別キャンペーンオファーパフォーマンス	293
	キャンペーンパフォーマンス比較	293
	キャンペーンパフォーマンス比較(収益)	293
	キャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンス比較	293
	セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ	293
	セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)	294
	セルおよびキャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンスサマリ	294
	オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ	294
	オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)	294
	日別オファーパフォーマンス	294
	オファーパフォーマンス比較	295
	オファーパフォーマンス指標	295
	キャンペーン別オファーパフォーマンスサマリ	295
A I	IBM Unica Campaignオブジェクト名内の特殊文字	296
	特殊文字について	296
	サポートされていない特殊文字	297
	命名上の制約がないオブジェクト	297
	命名上の特定の制約があるオブジェクト	298

はじめに

■ IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ

IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ

ドキュメントを参照しても解決できない問題が発生した場合は、社内のサポート担当者からIBM Unica テクニカルサポートに問い合わせることができます。 このセクションの情報を参照すると、問題を効率的に正しく解決できます。

サポート担当者でない場合は、社内のIBM Unica 管理者に問い合わせてください。

収集すべき情報

IBM Unica テクニカルサポートに問い合わせる前に、次の情報を収集する必要があります。

- 問題に関する簡単な説明。
- 問題発生時に表示される詳細なエラーメッセージ。
- 問題を再現するための詳細な手順。
- 関連するログファイル、セッションファイル、設定ファイル、およびデータファイル。
- 使用している製品およびシステム環境に関する情報。この情報は以下の「システム 情報」の説明に従って取得できます。

システム情報

IBM Unica テクニカルサポートに問い合わせるときに、使用環境に関する情報が求められることがあります。

その問題が発生してもログインできる場合、この情報の多くは[バージョン情報]ページで確認できます。このページにはインストールしたIBM Unica アプリケーションに関する情報が表示されます。

[バージョン情報]ページにアクセスするには、[ヘルプ] > [バージョン情報]を選択します。 [バージョン情報]ページにアクセスできない場合は、各アプリケーションのインストールディレクトリにあるversion.txtファイルを表示するとIBM Unica アプリケーションのバージョン番号を確認できます。

IBM Unica テクニカルサポートの問い合わせ先

IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ方法については、IBM Unica 製品テクニカルサポートのWebサイト(http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm) を参照してください。

1 IBM Unica Campaignの 概要

- Campaignでできること
- Campaignのユーザ
- その他のIBM Unica 製品との統合
- Campaignの概念

Campaignでできること

Campaignは、バックエンドサーバ、Webサーバ、ActiveXクライアント、およびMarketing Platformセキュリティで構成されるWebベースの企業マーケティング管理(EMM)ソリューションです。Campaignにより、ダイレクトマーケティングキャンペーンを設計、実行、および分析することができます。

Campaignには、簡単に操作できるグラフィカルユーザインタフェースが用意されており、顧客IDの出力リストの選択、抑制、セグメント化、サンプリング、および作成のためのダイレクトマーケティングプロセスがサポートされています。 Campaign のUniversal Dynamic Interconnect (UDI)データ通信層により、リレーショナルデータベース(データベースタイプには関係なく)、またはフラットファイル を含むすべてのデータソースのデータにシームレスにアクセスして、そのデータを操作できます。

Campaignプロセスでは、コンタクト履歴とレスポンス履歴への入力が行われ、レスポンス帰属機能およびレポーティング機能がサポートされます。

アプリケーションは、未加工SQL、マクロ、および関数をサポートしていますが、ユーザは、キャンペーンを設計するためにSQLを理解する必要はありません。 データベーステーブルは、一度マッピングされるとその後簡単に選択、マージ、サンプリング、およびセグメント化することができ、その結果として生じた顧客をさまざまなオファーに関連付けることができます。 また、キャンペーンの結果を記録したり、レスポンスをトラッキングしたり、投資収益率(ROI)を計算することが可能になります。 キャンペーンは、特定の日時で実行したり、特定のイベントでトリガするようにスケジュールすることができ、これらを行うのにSQLの知識は必要ありません。

Campaignは、1つ以上のプロセスで構成された1つ以上のフローチャートで構成される単体のエンティティとしてマーケティングキャンペーンを処理します。 キャンペーンは、1つ以上の戦略的セグメント、オファー、およびレポートに関連付けることができ、複数のフローチャートを含むことができます。

キャンペーンフローチャートの構成要素であるプロセスは、実際のデータ操作、スケジューリング、オファー照合、リスト生成、および最適化を行うものなので、Campaignの中心になります。つまり、プロセスを使用して、キャンペーンを定義および実装します。

Campaignのユーザ

Campaign データマイニング、オンライン分析処理(OLAP)、およびSQLを実行するエクスパート向けに設計されている一方、データマイニングやSQLの知識がないマーケティングエクスパート向けとしても設計されています。

テクニカルエクスパート(このガイドではCampaign管理者と呼ばれます)は、データベーステーブルのマッピングを行ったり、データマートを操作したり、コア固定データ(戦略的セグメントなど)を作成します。

つまり、Campaign管理者は、ダイレクトマーケティングやキャンペーンの開発と実行を専門に行う同僚のために、基礎部分を作成します。 Campaign管理者が実行するタスクの詳細については、『*Campaign管理者ガイド*』を参照してください。

その他のIBM Unica 製品との統合

Campaignは、次のIBM Unica 製品と統合することもできます。

- Distributed Marketingにより、一元管理キャンペーンの分散カスタム実行をサポートできます。
- eMessageにより、ターゲット指定による測定可能な電子メールマーケティング キャンペーンを構築できます。
- Interactにより、カスタマイズしたオファーと顧客のプロファイル情報を、リアルタイムでインタラクティブに取得できます。 インタラクティブフローチャートおよび バッチフローチャートのInteractプロセスの使用方法を含むCampaignのInteract機能 の使用方法については、IBM Unica Interactのドキュメントを参照してください。
- Marketing Operationsにより、Campaignのキャンペーン開発機能とMarketing Operationsのマーケティングリソース管理機能を統合できます。 詳細について は、「IBM Unica との統合についてMarketing Operations」を参照してください。
- CustomerInsightにより、ダイレクトマーケティングキャンペーンを設計する際、CustomerInsightグループ選択内容にアクセスできます。
- NetInsightにより、ダイレクトマーケティングキャンペーンを設計する際、NetInsight訪問者セグメントにアクセスできます。
- Optimizeにより、ビジネスルールと制約を検討する際、顧客中心の視点でコンタクトを最適化できます。
- PredictiveInsightにより、レスポンスモデリング、クロスセリング、顧客評価、およびセグメント化を実行するために、予想モデルのスコア設定を利用できます。

Campaignと統合したその他のIBM Unica 製品の詳細については、製品に付属のドキュメントを参照してください。

IBM Unica Marketing Operationsとの統合について

CampaignはMarketing Operationsと統合することにより、マーケティングリソース管理機能を利用して、キャンペーンを作成、計画、および承認できます。

CampaignがMarketing Operationsと統合されると、以前はスタンドアロンCampaign環境で実行していた多くのタスクがMarketing Operationsで実行されるようになります。 これらのタスクは次のとおりです。

- キャンペーンの操作
 - キャンペーンの新規作成
 - キャンペーンの表示、移動、および削除
 - キャンペーンサマリ詳細の操作
- オファーの管理(作成、編集、承認、回収)。 このような統合製品におけるオファー 管理には2つのオプションがあり、それぞれ[操作]または[キャンペーン]メニュー(片 方のみ)から使用できます。
- ターゲットセルスプレッドシートの操作
- セルへのオファーの割り当て
- コントロールセルの指定
- カスタムキャンペーン属性の作成と設定
- カスタムセル属性の作成と設定

Marketing Operationsでこれらのタスクを実行する場合の詳細については、『*Marketing Operations*―*Campaign統合ガイド*』を参照してください。

スタンドアロン環境および統合環境両方のCampaignで実行されるタスクは次のとおりです。

- フローチャートの作成
- フローチャートの実行
- キャンペーン、オファー、およびセルの詳細分析

レガシキャンペーンについて

レガシキャンペーンとは、統合を有効にする前にCampaign (またはAffinium Campaign 7.x)で作成された既存のキャンペーンのことです。 Marketing Operations–Campaign統合環境では、Campaignを、次のタイプのレガシキャンペーンにアクセスするように設定できます。

• バージョン8.0の統合が有効になる前にスタンドアロンCampaign (Campaignの現在または前のバージョン)で作成されたキャンペーン。 これらのキャンペーンは、Marketing Operationsプロジェクトにリンクできません。

• Affinium Campaign 7.xで作成され、Affinium Plan 7.xプロジェクトにリンクされているキャンペーン。 これらのキャンペーンでは、両製品の属性間のデータマッピングに基づいて、バージョン7.xのときと同じ機能が維持されます。

バージョン8.0の統合が有効になった後でも、Campaignを使用して両タイプのレガシキャンペーンにアクセスして操作することができ、これは新しく作成されたすべてのキャンペーンに適用されます。

Campaignの概念

Campaignを使用する前に理解しておく必要がある基本概念は、次のとおりです。

- キャンペーン
- フローチャート
- セッション
- プロセス
- オファー
- セル

キャンペーン

ダイレクトマーケティングキャンペーンを管理および反映するためにCampaignでキャンペーンを作成します。 各キャンペーンは次の要素によって定義されます。

- 名前
- ・ セキュリティポリシー
- 説明
- 目的
- キャンペーンコード
- 有効期間
- キャンペーンタイプ
- 所有者
- カスタム属性

キャンペーンには、キャンペーンを実行するために必要なデータ上で一連のアクションを実行するように設計されている1つ以上の*フローチャート*が含まれます。

フローチャート

Campaignでは、フローチャートは、使用データ上で実行するプロセスと呼ばれる構成要素によって定義される、一連のアクションを表します。 フローチャートは、手動またはスケジューラで、あるいは定義済みトリガへの応答により実行できます。

ダイレクトメールキャンペーンの受信対象者を決定したり、このグループまたは受信者のメーリングリストを生成したり、各受信者を特定のオファーに関連付けるなど、特定のマーケティング目標を達成するためにフローチャートを使用します。 また、フローチャートを使用して、キャンペーンへのレスポンスに対してトラッキング処理を行ったり、キャンペーンの投資収益率(ROI)を計算することもできます。

各キャンペーン内で、キャンペーンを実装する1つ以上のフローチャートを設計して、 必要なデータ操作やアクションを実行するフローチャートを構成するプロセスを定義し ます。

各フローチャートには、次の要素が含まれます。

- 名前
- 説明
- 設定および接続されたプロセス
- 1つ以上のデータソース

また、Interactのライセンスユーザは、Campaignを使用して、イベントの発生に依存するリアルタイムのインタラクティブフローチャートを実行できます。 インタラクティブフローチャートの詳細については、『*Interactユーザガイド*』を参照してください。

関連トピック

・フローチャートについて

セッション

セッションはアプリケーション内の特別な場所で、後ですべてのキャンペーンで使用できる基本的な固定グローバルデータコンストラクタ(戦略的セグメント、キューブなど)が、Campaign管理者によって作成されます。 キャンペーン同様、セッションも、個々のフローチャートで構成されます。

関連トピック

・セッションについて

プロセス

フローチャートは、データの選択、2つのオーディエンスグループのマージ、キャンペーン結果の書き込みなど、キャンペーンまたはセッションで特定のタスクを実行するように定義された個々のプロセスで構成されます。

関連トピック

- ・プロセスのタイプ
- ・プロセスについて

オファー

オファーとは、さまざまな方法で配信可能な単一のマーケティングメッセージです。

Campaignでは、1つ以上のキャンペーンで使用できるオファーを作成します。

オファーは次の状況で再利用可能です。

- さまざまなキャンペーン間で
- さまざまなタイミングで
- さまざまなグループ(セル)間で
- バージョン間で(オファーのパラメータ化された項目を変えることによって)

コンタクトプロセスの1つを使用して、フローチャート内でターゲットセルにオファーを割り当て、そのオファーを受け取った顧客と、レスポンスした顧客についてのデータを取得することによって、キャンペーン結果をトラッキングします。

セル

セル は、データベースから取得される識別子(顧客IDや見込み客IDなど)のリストです。 Campaignでは、フローチャート内でデータ操作プロセスを設定して実行することにより、セルを作成します。 これらの出力セルは、同じフローチャート内の他のプロセスへの入力としても使用できます(そのセルを生成したプロセスからのダウンストリーム)。 作成できるセル数に制限はありません。

Campaignで1つ以上のオファーに割り当てるセルは、ターゲットセルと呼ばれます。ターゲットセルは、同種の個人のグループ(または、個人顧客や世帯アカウントなど、オーディエンスレベルを定義するエンティティ)を表すものです。 たとえば、高価値顧客、オンラインショップを好む顧客、分割払いのアカウント、電子メールコミュニケーションの受信を選択している顧客、またはリピーターに対するセルを作成できます。作成した各セルまたはセグメントは、異なるチャネルを介して異なるオファーまたはコミュニケーションを受け取るなど、別々に処理できます。

オファーの受信対象ではあるが、分析目的で実際には受信が除外されるセルは、コントロールセルと呼ばれます。 Campaignでは、コントロールは常に検証コントロールです。

「セル」という用語は、「セグメント」と混同して使われることがあります。 戦略的セグメントは、キャンペーンフローチャートではなくセッションで作成されるセルです。 戦略的セグメントは、どのキャンペーンでも使用できるグローバルなセグメントである以外、他のセル(フローチャート内のセグメントプロセスにより作成されるセルなど)と同じです。 戦略的セグメントは、これを作成したフローチャートが再実行されるまでは、IDの静的リストです。

2 はじめに

- はじめに
- ユーザ名とパスワード
- IBM Unica Marketingにログインするには
- 役割と権限
- Campaignのセキュリティレベル
- 開始ページの設定

はじめに

Campaignで実際の作業にとりかかる前に、データベーステーブルをマッピングし、必要に応じてセグメント、ディメンション、キューブなどのデータオブジェクトを作成したり、個々のキャンペーンを計画して設計する必要があります。 これらのタスクは、初回はIBM Unica コンサルタントのサポートを受けながら行います。以降のキャンペーンについては、基本的に初回キャンペーンおよびこのガイドを参考にして設計および実行します。また、サポートの度合いを変更することで、初回キャンペーンの改良、拡張、および追加構築を行います。

設定タスクおよびその他管理タスクの詳細については、『*Campaignインストールガイド*』および『*Campaign管理者ガイド*』を参照してください。

ユーザ名とパスワード

Campaignにアクセスするには、Marketing Platformで作成され、Campaignへのアクセスが承認されているユーザ名とパスワードの組み合わせが必要です。

有効なユーザ名とパスワードがない場合は、システム管理者にお問い合わせください。

IBM Unica Marketingにログインするには

IBM Unica Marketingの使用を開始する前に、次を準備しておく必要があります。

- IBM Unica Marketingサーバにアクセスするためのイントラネット(ネットワーク)接続。
- コンピュータにインストールされたMicrosoft Internet Explorer。
- IBM Unica Marketingにサインインするためのユーザ名とパスワード。

- ネットワークでIBM Unica MarketingにアクセスするためのURL。 正しいURLが不明な場合やユーザ名またはパスワードが必要な場合は、IBM Unica Marketing管理者に連絡してください。
- 1. Microsoft Internet Explorerブラウザを起動します。
- 2. ブラウザのアドレス項目にIBM Unica MarketingのURLを入力します。

IBM Unica MarketingがWindows Active DirectoryまたはWebアクセスコントロールプラットフォームと統合されている場合、システムにログインすると、IBM Unica MarketingにはダッシュボードまたはIBM Unica Marketing管理者が設定した既定の開始ページが表示されます。 この場合、ログインは完了しています。 それ以外の場合は、ログインページが表示されます。

使用中のバージョンのIBM Unica MarketingでSSLが使用されている場合は、初めてサインインするときにデジタルセキュリティ証明書を受け入れるかどうかを確認するメッセージが表示される場合があります。[はい]をクリックして証明書を受け入れます。

3. ユーザ名とパスワードを入力し、[サインイン]をクリックします。

IBM Unica Marketingでのパスワードルールの設定によっては、[パスワードの変更]ページが表示される場合があります。 新しいパスワードを入力してから、確認のためにパスワードをもう一度入力し、[パスワードの変更]をクリックします。

ログインが成功すると、IBM Unica MarketingにはダッシュボードまたはIBM Unica Marketing管理者が設定した既定の開始ページが表示されます。

役割と権限

Campaignでは、ユーザ名は、そのユーザが組織で実行する必要がある機能に応じて、「Reviewer」、「Designer」、「Manager」など(管理者により定義)、1つ以上の役割と関連付けられます。 役割は、Campaign内でそのユーザが実行を許可される機能を決定し、一方、組織により実装されるオブジェクトレベルのセキュリティは、特定のオブジェクトに対する機能を実行できるかどうかを決定します。

既存の権限では許可されないオブジェクトへのアクセスやタスクの実行が必要な場合は、システム管理者にお問い合わせください。

Campaignのセキュリティレベル

Campaignのセキュリティは2つのレベルで機能します。

• 機能 — 自分に割り当てられている役割に基づいて、オブジェクトタイプに対して実行できるアクションが決まります。 これらの役割は実装時に組織で決定され、各役割に権限セットが関連付けられ、この権限により、その役割に属するユーザが実行できるアクションが決まります。 たとえば、「Administrator」という役割が割り当てられたユーザには、システムテーブルのマッピングと削除を実行できる権限があり、「Reviewer」という役割が割り当てられたユーザには、システムテーブルのマッピングと削除を実行できる権限がない、などになります。

• オブジェクト — 許可されているアクションを実行できるオブジェクトタイプが決まります。 つまり、キャンペーンを編集できる汎用権限を持つ役割に属しているユーザに対して、Campaignのオブジェクトレベルのセキュリティにより、特定のフォルダ内のキャンペーンにしかアクセスできないようにセットアップできます。 たとえば、グループAに属するユーザを、その役割に関係なく、グループBに属するフォルダの内容にはアクセスできないように設定することができます。

開始ページの設定

IBM Unica Marketingに初めてログインするときにダッシュボードページを表示しない場合は、インストールしたIBM製品のいずれか1つから開始ページとしてページを選択できます。

表示しているページを開始ページとして設定するには、[設定] > [現在のページから開始する]を選択します。 開始ページとして選択できるページは、各IBM Unica Marketing製品およびIBM Unica Marketingでの権限によって決まります。

表示しているページで、[現在のページから開始する]オプションが有効であれば、そのページを開始ページとして設定できます。

3 キャンペーン

- キャンペーンについて
- キャンペーンデータの準備
- キャンペーンの設計
- キャンペーンへのアクセスについて
- キャンペーンの操作
- キャンペーンの整理
- キャンペーンリファレンス

キャンペーンについて

キャンペーンは、キャンペーンを実行するために必要なデータ上で一連のアクションを実行するように設計されている1つ以上のフローチャートで構成されます。 フローチャートはプロセスで構成されます。プロセスは、キャンペーンで必要とされる実際のデータ操作、コンタクト、スケジューリング、およびレスポンストラッキングを実行するように設定されます。 つまり、プロセスがキャンペーンを定義して実装します。

複数チャネルでオファーを配信するリテンションキャンペーン用に設計されたサンプルフローチャートについては、「例: マルチチャネルリテンションキャンペーン」を参照してください。

キャンペーンデータの準備

キャンペーンのデータを準備するには、まず、データソース内のどのテーブルまたはファイルに必要な顧客と製品についての情報が含まれているかをCampaignに指定する必要があります。 データをCampaign内にマッピングすることにより、このデータをプロセス操作で使用できるようになります。 詳細については、『Campaign管理者ガイド』のデータベーステーブル管理についてのセクションを参照してください。

キャンペーンで使用するオファー、戦略的セグメント、その他のデータオブジェクトを作成することが必要になる場合もあります。 キャンペーンで使用するためのオブジェクトの作成の詳細については、「保存オブジェクト」を参照してください。

キャンペーンの設計

キャンペーンを作成する前に、紙上でキャンペーンを設計し、キャンペーンの目標を決定しておく必要があります。 紙上でキャンペーンを設計したら、Campaign上でキャンペーンを作成して、キャンペーンの目標を達成する1つ以上のフローチャートを作成することにより、この設計を実装します。

キャンペーンは、1つ以上のフローチャートで構成されます。 フローチャートは、相互接続されたプロセスで構成されます。 フローチャートの構成要素であるプロセスは、実際のデータ操作、スケジューリング、およびレスポンストラッキングを行うものであるため、Campaignの中心になります。つまり、プロセスがキャンペーンを定義して実装します。

例: マルチチャネルリテンションキャンペーン

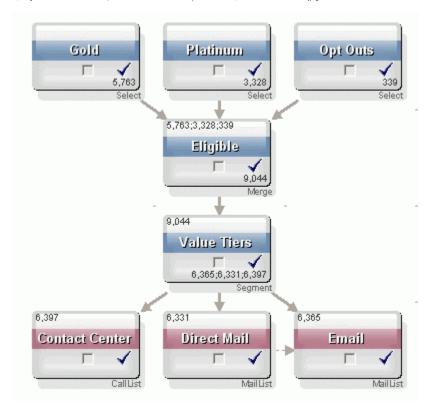
この例では、複数のチャネルを使用して、キャンペーンを離れる可能性のある顧客にオファーを配信するリテンションキャンペーンを示します。

2種類のフローチャートが必要です。 1つは、オファーを(各セグメントについて異なるチャネルで)送信する顧客リストを生成するフローチャート、もう1つは、レポーティングや分析目的でオファーへのレスポンスをトラッキングし、レスポンスデータを書き出すフローチャートです。

コンタクトフローチャート

コンタクトフローチャートでは、それぞれの価値セグメント内の対象顧客を選択し、各セグメントのチャネルに対してコンタクトリストを出力します。

リテンションキャンペーンフローチャートの例



フローチャートの第一層では、2つ目の選択プロセスでゴールドセグメントとプラチナセグメントの顧客が選択され、3つ目の選択プロセスでは、マーケティングコミュニケーションをオプトアウトしている顧客がリストに含まれます。

第二層では、ゴールド顧客とプラチナ顧客がマージプロセスで結合され、オプトアウト している顧客は除外されます。

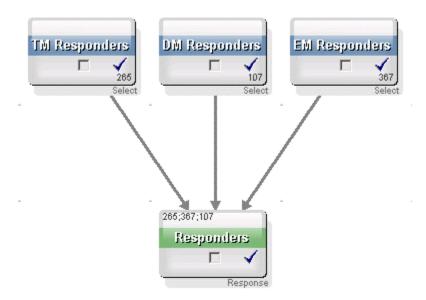
第三層では、セグメントプロセスを使用して、対象顧客全員をスコアに基づいて価値層 にセグメント化します。

最後に、コールリストプロセスにより高価値顧客がコールリストに出力されます。これらの顧客には電話でオファーが提供されます。 中価値顧客は、メールリストプロセスによりメールリストに出力されます。これらの顧客にはダイレクトメールでオファーが提供されます。 低価値顧客には電子メールでオファーが提供されます。

レスポンスフローチャート

この同じキャンペーン内の2つ目のフローチャートでは、コールセンターとレスポンスキャプチャシステムにより取得された、電話、ダイレクトメール、および電子メールオファーに対するレスポンスがトラッキングされます。 レスポンス情報は、Campaign上のさまざまなパフォーマンスレポートで確認できます。

リテンションキャンペーンのレスポンストラッキングフローチャート



キャンペーンへのアクセスについて

キャンペーンには、[キャンペーン一覧]ページからアクセスできます。このページは、 メニューの[Campaign] > [キャンペーン]リンクから開くことができます。

[キャンペーン一覧]ページに表示される情報は、Campaign環境がどのように設定されているかによって異なります。

- スタンドアロンCampaign環境 [キャンペーン一覧]ページには、すべてのキャンペーペーンと、ユーザが読み取りアクセス権以上のアクセス権を持っているキャンペーンフォルダが表示されます。
- Marketing Operations-Campaign統合環境 レガシキャンペーンへのアクセスが有効になっている場合、[キャンペーン一覧]ページには、レガシキャンペーンのみが表示されます。 それ以外の場合は、このページにキャンペーンは表示されません。 Marketing Operationsで作成されたキャンペーンには、キャンペーンプロジェクトを通してアクセスできます。

レガシキャンペーンの詳細については、「レガシキャンペーンについて」を参照してください。 レガシキャンペーンへのアクセスを有効にするようにCampaignを設定する方法の詳細については、インストールマニュアルを参照してください。

[キャンペーン一覧]ページからMarketing Operationsで作成されたキャンペーンプロジェクトにアクセスする場合は、"キャンペーンプロジェクト"フォルダのリンクをクリックしてください。 このフォルダから、Marketing Operationsのプロジェクトビューにアクセスできます。 表示されるプロジェクトは、Marketing Operationsで設定されている既定のプロジェクトビューによって異なります。 必要に応じて既定のプロジェクトビューを設定して、すべてのキャンペーンプロジェクトを表示することもできます。

キャンペーンプロジェクトの詳細については、『Marketing Operations-Campaign統合ガイド』を参照してください。 プロジェクトビューの詳細については、『Marketing Operationsユーザガイド』を参照してください。

☆ "キャンペーンプロジェクト"フォルダは、削除、移動、またはコピーできません。

キャンペーンの操作

ここでは、Campaignでキャンペーンに対して実行できるタスクについて説明します。

- ☆ Campaign環境をMarketing Operationsと統合している場合にキャンペーンを操作するには、Marketing Operationsでキャンペーンプロジェクトを使用する必要があります。 Campaign環境に、統合が有効になる前に作成された既存のキャンペーンがあり、Campaignがそのレガシキャンペーンにアクセスできるように設定されている場合、このガイドのインストラクションに従ってこれらのキャンペーンを操作してください。 詳細については、「Marketing Operationsとの統合について」を参照してください。
- ☆ キャンペーンを使用するには、適切な権限が必要です。 権限の詳細については、 『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

キャンペーンを作成するには

- 1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。
 - [キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたはキャンペーンが表示されます。
- 2. キャンペーンを追加するフォルダが開くまで、フォルダ構造を移動します。
- 3. [キャンペーンの追加]アイコンをクリックします。 [新規キャンペーン]ページが開きます。
- 4. [キャンペーンサマリ]の項目を入力します。
- 5. キャンペーンサマリの詳細を入力したら、[保存と終了]をクリックします。 [キャンペーン]ページに新規キャンペーンが表示されます。
 - ☆ [保存とフローチャートの追加]をクリックして、キャンペーンのフローチャートの作成をすぐに開始することもできます。ただし、適切なセグメントとオファーをキャンペーンに関連付けた後でフローチャートを作成することをお勧めします。こうすると、フローチャート内での顧客の選択とコンタクトリストの作成を容易に行うことができます。

関連トピック

•[キャンペーンサマリ]タブリファレンス

キャンペーンへの戦略的セグメントの関連付け

戦略的セグメントは、セッション内でシステム管理者(または上級ユーザ)によって作成されたIDリストで、すべてのキャンペーンで使用できます。 戦略的セグメントは、どのキャンペーンでも使用できるグローバルなセグメントである以外、他のセグメント(セグメントプロセスにより作成されるセグメントなど)と同じです。

キャンペーンに戦略的セグメントを関連付けておくと、フローチャートを作成するときにそのセグメントを選択しやすくなります。 また、キャンペーンに複数の関連する戦略的セグメントを関連付けると、Campaign内のレポーティング機能が向上します。

セグメントをキャンペーンに関連付けるには

- [キャンペーンサマリ]タブで、[セグメントの追加/削除]アイコンをクリックします。
 [セグメントの追加/削除]ウィンドウが表示されます。
- 2. 追加するセグメントを選択します。
 - フォルダをクリックし、追加するセグメントが見つかるまでフォルダ構造内を移動します。
 - [ツリー表示/リスト表示]をクリックし、セグメントのリスト表示に変更して、追加するセグメントまで移動します。
 - [検索]をクリックして[検索]タブにアクセスし、追加するセグメントを検索する ため名前または説明コードを入力します。
- 3. 追加するセグメントを選択して[>>]をクリックし、[含まれているセグメント]リストにセグメントを移動します。 Shiftキーを押しながらクリックするか、Ctrlキーを押しながらクリックすると、複数のセグメントを選択できます。
- 4. キャンペーンに関連付けるセグメントを選択したら、[変更の保存]をクリックします。

追加したセグメントが、[キャンペーンサマリ]ページの**[関連セグメント]**の下に一覧表示されます。

☆ 選択プロセスを使用して、キャンペーンフローチャート内で顧客を選択すると、 キャンペーンに関連付けられているセグメントはリストの一番上に表示されるので 簡単に見つけることができます。

キャンペーンへのオファーの関連付け

キャンペーン定義時にキャンペーンにオファーを関連付けておくと、コンタクトプロセスでオファーをセルに割り当てるときに、そのオファーを選択しやすくなります。 [キャンペーンサマリ]タブから、キャンペーンに対して関連するオファーを定義することを「トップダウン」の関連付けと呼びます。最初にキャンペーンに関連付けないで単にオファーをフローチャート内で使用する場合は、「ボトムアップ」の関連付けと呼びます。

[キャンペーンサマリ]タブからオファーを"トップダウン"に関連付けるには

- 1. [キャンペーンサマリ]タブで、**[オファーの追加/削除]**アイコンをクリックします。 [オファーの追加/削除]ウィンドウが表示されます。
- 2. 追加するオファーを選択します。
 - フォルダをクリックし、追加するオファーが見つかるまでフォルダ構造内を移動します。
 - [検索]をクリックして[検索]タブにアクセスし、追加するオファーを検索するため名前、説明、またはコードを入力します。
- 追加するオファーを選択して[>>]をクリックし、[含まれているオファー]リストにオファーを移動します。 Shiftキーを押しながらクリックするか、Ctrlキーを押しながらクリックすると、複数のセグメントを選択できます。
- 4. キャンペーンに関連付けるオファーを選択したら、[変更の保存]をクリックします。

追加したオファーが、[キャンペーンサマリ]タブの**[関連オファー]**の下に一覧表示されます。 これらのオファーは、このキャンペーンのフローチャートで使用するまでグレー表示です。

[キャンペーンサマリ]タブの[関連オファー]セクションに、キャンペーンに関連付けられているすべてのオファーが一覧表示されます。 "トップダウン"で関連付けられたオファーと"ボトムアップ"から関連付けられたオファーは、視覚的に区別されます。 つまり、オファー名の横のアスタリスクは、"トップダウン"方法でキャンペーンに関連付けられたオファーを示します。 最初にトップダウンで定義されずにフローチャート内で直接使用されたオファーは、アスタリスクは表示されません。 トップダウンで定義され、フローチャート内でまだ使用されていないオファーは、フローチャートで使用されるまでグレー表示です。

コンタクトプロセスを使用してキャンペーンフローチャート内でコンタクトリストを作成すると、トップダウンで定義されたオファーはリストの一番上に表示されるので、簡単に見つけて選択し、1つ以上のターゲットセルに割り当てることができます。

キャンペーンを表示するには

1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。

[キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたは キャンペーンが表示されます。

- 2. 表示するキャンペーンを含むフォルダまで移動します。
- 表示するキャンペーンの名前をクリックして、キャンペーンを[サマリ]タブに開きます。

または

4. 表示するキャンペーン名の横の[タブを表示]アイコンをクリックします。

[Campaign]ディスプレイの上またはポップアップメニューに[サマリ]および[ターゲットセル]、[分析]タブの選択肢が表示され、キャンペーン内の各フローチャートの表示の選択しも表示されます。

5. 表示するキャンペーンのタブをクリックします。

キャンペーンが選択したタブに開きます。

リンクされているレガシーキャンペーンからMarketing Operationsプロジェクトに移動するには

1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。

[キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたはキャンペーンが表示されます。 レガシーキャンペーンのみ一覧表示されます。

Marketing OperationsとCampaignの統合を有効にして作成されたキャンペーンを表示するには、[キャンペーンプロジェクト]フォルダをクリックします。 レガシーキャンペーンがない場合、またはレガシーキャンペーンが設定で有効にされていない場合は、このページには何も表示されません。

2. Affinium Planのプロジェクトに以前にリンクしたキャンペーンの名前をクリックします。

キャンペーンは[サマリ]タブに開きます。

- 3. **[関連プロジェクト]**項目に表示されるプロジェクトの名前をクリックします。
 Marketing Operationsが開き、リンクされているプロジェクトの**[サマリ]**タブが表示されます。
- 4. Campaignに戻るには、Marketing Operationsの(関連キャンペーン(コード)) 項目内のプロジェクトの名前をクリックします。

キャンペーンのサマリの詳細を編集するには

[キャンペーン]ページで、サマリの詳細を編集するキャンペーンの名前をクリックします。

[タブを編集]アイコンをクリックし、コンテキストメニューから[サマリ]を選択して、キャンペーンのサマリに編集モードで直接アクセスすることもできます。

キャンペーンは[サマリ]タブに開きます。

- 2. 「サマリの編集]アイコンをクリックします。
- 3. [サマリ]タブで必要な編集を加えます。
 - ☆ キャンペーン名には特有の文字制限があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 4. 変更作業が完了したら、「保存して終了」をクリックします。

変更が保存されてキャンペーンが閉じます。

キャンペーンの実行について

キャンペーン内の1つまたは複数のフローチャートを実行することによりキャンペーンを実行します。 フローチャートを実行するには、そのフローチャート内のすべてのプロセスが正しく設定されている必要があります。 未設定のフローチャートプロセスは灰色で表示されます。設定が完了しているフローチャートはカラーで表示されます。

システムテーブルに出力を書き込まないで、フローチャートをテスト実行できます。

関連トピック

- フローチャートの編集
- フローチャートの検証
- ・フローチャートのテスト
- フローチャートの実行

キャンペーンを印刷するには

キャンペーン内のページは「項目の印刷」アイコンで印刷できます。

- 印刷するキャンペーンのタブを選択します。
 選択したタブが開きます。
- 2. [項目の印刷]アイコンをクリックします。 新しいウィンドウが開き、現在のページが印刷形式で表示されます。
- [印刷]をクリックします。
 [印刷]ウィンドウが開くので、ここで印刷オプションを設定できます。
- 4. [印刷]ウィンドウの[印刷]をクリックします。 ページが印刷されます。

キャンペーンを移動するには

キャンペーンをフォルダ間で移動して整理できます。

- 移動しようとするキャンペーン内のフローチャートを他のユーザが編集している場合、キャンペーンを移動すると、そのフローチャート全体が失われる可能性があります。 キャンペーンを移動するときは、キャンペーン内で編集用に開いているフローチャートがないことを確認してください。
- 1. [キャンペーン]ページで、移動するキャンペーンの横のチェックボックスをオンにします。 複数のキャンペーンを選択して一度に同じ場所に移動できます。
- [移動]アイコンをクリックします。
 [アイテムの移動]ウィンドウが開きます。

- キャンペーンの移動先のフォルダをクリックします。
 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 4. **[OK]**をクリックします。
 - ☆ また、フォルダをダブルクリックすると、フォルダの選択と確定を一度に行うことができます。

キャンペーンが目的のフォルダに移動されます。

キャンペーンの削除について

キャンペーンを削除すると、キャンペーンとすべてのフローチャートファイルが削除されます。 キャンペーンの一部を再利用するために保存する場合、保存オブジェクトとして保存できます。 詳細については、「保存オブジェクトについて」を参照してください。

コンタクト履歴レコードまたはレスポンス履歴レコードが関連付けられているキャンペーンを削除すると、対応するすべてのコンタクト履歴レコードとレスポンス履歴レコードも削除されます。 関連付けられているコンタクト履歴とレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、キャンペーンを削除しないでください。

キャンペーンを削除するには

- 1. [キャンペーン]ページで、削除するキャンペーンまで移動します。
- 2. 削除するキャンペーンの横のチェックボックスをオンにします。 複数のキャンペーンを選択して一度に削除できます。
- 3. 【選択項目の削除】アイコンをクリックします。
 - コンタクト履歴レコードまたはレスポンス履歴レコードが関連付けられているキャンペーンを削除しようとすると、該当するすべてのコンタクト履歴レコードとレスポンス履歴レコードが削除されることを示す警告メッセージが表示されます。該当するコンタクト履歴およびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、「キャンセル1をクリックします。
- 4. 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。

選択したキャンペーンが削除されます。

☆ キャンペーンの表示中に[削除]アイコンをクリックして、キャンペーンを削除することもできます。

キャンペーン結果の分析

キャンペーンを実行した後、結果を測定したり、その結果を参考にして戦略を調整することができます。Campaignは、レスポンダ単位でのレスポンス率、収益、利益を含むさまざまなキャンペーン情報を分析します。 この情報に基づいて、Campaignは、収益と利益の合計や増分、および全体のROIを計算できます。

Campaignには、キャンペーン情報を取得し、分析するのに役立つさまざまなタイプのレポートが用意されています。 レポート操作の詳細については、「Campaignでのレポートの使用」を参照してください。

キャンペーンの整理

1つまたは複数のフォルダを作成することにより、キャンペーンを整理できます。 作成したフォルダ構造内で、キャンペーンをフォルダから別のフォルダに移動できます。 キャンペーンを整理するためのフォルダを追加、移動、または削除することができます。 また、フォルダの名前と説明を編集することもできます。

キャンペーンフォルダを追加するには

1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。

[キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたは キャンペーンが表示されます。

2. サブフォルダを追加するフォルダまで移動して[サブフォルダの追加]をクリックするか、単に[サブフォルダの追加]をクリックして、最上位レベルにフォルダを追加します。

[サブフォルダの追加]ページが開きます。

- 3. フォルダの名前、セキュリティポリシー、および説明を入力します。
- 4. [変更の保存]をクリックします。

[キャンペーン一覧]ページに戻ります。 作成した新しいフォルダまたはサブフォルダが 表示されます。

キャンペーンのフォルダ名と説明を編集するには

- 1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。
 - [キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたは キャンペーンが表示されます。
- 2. 名前を変更するフォルダをクリックします。
- 3. [名前の変更]をクリックします。

[サブフォルダ名の変更]ページが開きます。

- 4. フォルダの名前と説明を編集します。
- 5. [変更の保存]をクリックします。

[キャンペーン一覧]ページに戻ります。 フォルダまたはサブフォルダの名前が変更されます。

キャンペーンフォルダを移動するには

- 1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。
 - [キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたは キャンペーンが表示されます。
- 2. 移動するサブフォルダを含むフォルダまで移動します。
- 3. 移動するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して同じ場所に移動できます。
- 4. [移動]アイコンをクリックします。
 - [アイテムの移動]ウィンドウが開きます。
- サブフォルダの移動先のフォルダをクリックします。
 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 6. **[OK]**をクリックします。
 - ☆ また、フォルダをダブルクリックすると、フォルダの選択と確定を一度に行うことができます。

サブフォルダおよびその内容がすべて移動先フォルダに移動されます。

キャンペーンフォルダを削除するには

フォルダを削除するには、事前にフォルダの内容を移動するか、削除しておく必要があります。

- ☆ フォルダを削除するために必要な権限がある場合は、そのフォルダ内のサブフォルダも削除できます。
- 1. [キャンペーン] > [キャンペーン]を選択します。
 - [キャンペーン一覧]ページが開き、現在のパーティション内にあるフォルダまたはキャンペーンが表示されます。
- 2. 削除するサブフォルダを含むフォルダまで移動します。

- 3. 削除するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して削除できます。
- 4. [選択項目の削除]をクリックします。
- 5. 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。

フォルダおよびすべての空のサブフォルダが削除されます。

キャンペーンリファレンス

このセクションでは、キャンペーンを操作するためのCampaignインタフェースの項目 とアイコンについて説明します。

[キャンペーン一覧]ページのアイコン

[キャンペーン一覧]ページでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

☆ Campaignインタフェースのアイコンの多くは、権限を必要とする機能に関連付けられています。 For more information, see the Marketing Platform Administrator's Guide.

アイコン名	説明
キャンペーンの追加	新しいキャンペーンを追加する場合にクリックします。
	ユーザに適切な権限がない場合、またはMarketing OperationsとCampaignの統合が有効である場合、このアイコンは表示されません。 Marketing Operationsでのキャンペーンプロジェクトの作成の詳細については、『Marketing Operations – Campaign統合ガイド』を参照してください。
サブフォルダの追加	新しいキャンペーンサブフォルダを追加する場合にクリックし ます。
項目の印刷	ページを印刷します。
移動	各アイテムの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のキャンペーンまたはキャンペーンサブフォルダを選択し、 次にこのアイコンをクリックして、選択したアイテムの移動先 を指定します。

アイコン名	説明
選択内容を削除	各アイテムの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以上のキャンペーンまたはキャンペーンサブフォルダを選択し、次にこのアイコンをクリックして、選択したアイテムを削除します。
キャンペーンの再読み込み	ページのキャンペーンリストを更新するには、このアイコンを クリックします。

[キャンペーンサマリ]タブのアイコン

[キャンペーンサマリ]タブでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

アイコン名	説明
サマリの編集	キャンペーンサマリを編集するには、このアイコンをクリック します。
セグメントの追加/削除	キャンペーンに関連付けられている戦略的セグメントを変更す るには、このアイコンをクリックします。
オファーの追加/削除	キャンペーンに関連付けられているオファーを変更するには、 このアイコンをクリックします。
実行	[実行]メニューにアクセスするには、このアイコンをクリック します。このメニューで [すべて実行]を選択して、キャンペー ンのすべてのフローチャートを実行できます。
フローチャートの追加	キャンペーンにフローチャートを追加するには、このアイコン をクリックします。
項目の印刷	キャンペーンサマリを印刷するには、このアイコンをクリック します。
キャンペーンの移動	キャンペーンの移動先を指定するには、このアイコンをクリッ クします。

アイコン名	説明
キャンペーンの削除	キャンペーンを削除するには、このアイコンをクリックしま す。

[キャンペーンサマリ]タブリファレンス

次の表で、[キャンペーンサマリ]タブの項目について説明します。

項目	説明
セキュリティポリシー	キャンペーンに適用されるセキュリティポリシー。
説明	キャンペーンの説明。 この説明は、[キャンペーン一覧]ページ でキャンペーン名の下に表示されます。
目的	キャンペーンの目的。
キャンペーンコード	指定された形式でのキャンペーンの一意の識別子。Campaign は、既定の形式またはユーザの組織のカスタム形式に従って、新しいキャンペーンごとに一意のキャンペーンコードを自動的に生成します。 このコードを編集したり、[コードの再生成]をクリックして新しいコードを生成したりできます。
期間	キャンペーンの有効期間。 日付は手動で入力するか、カレン ダーアイコンをクリックするか、前後の矢印で選択します。
キャンペーンタイプ	キャンペーンが属するタイプ。 使用可能なキャンペーンタイ プのリストはシステム管理者が作成します。
所有者	この編集不可能な項目には、キャンペーンを作成したユーザ名 が表示されます。

組織で使用するその他のカスタムキャンペーン属性がシステム管理者によって作成されている場合は、ページの下部に表示されます。

4 フローチャート

- フローチャートについて
- フローチャートの作成
- フローチャートのコピー
- フローチャートの表示
- フローチャートの確認
- フローチャートの編集
- フローチャートの検証
- フローチャートのテスト
- フローチャートの実行
- フローチャートの削除
- フローチャートを印刷するには
- トラブルシューティングのためのフローチャートファイルのパッケージ化
- フローチャートリファレンス

フローチャートについて

フローチャートを使用してデータで一連のアクションを実行し、キャンペーンロジックを実行できます。 キャンペーンは1つ以上のフローチャートで構成されています。 フローチャートは、キャンペーンに必要なデータの操作、コンタクトリストの作成、またはコンタクトおよびレスポンスのトラッキングを実行するために設定されるプロセスで構成されています。 実際、プロセスはキャンペーンの定義方法と実装方法を表します。

☆ フローチャートを使用するには適切な権限が必要です。 権限の詳細については、 『IBM Unica Campaign管理者ガイド』を参照してください。

フローチャートの作成

新しいフローチャートを作成するか、既存のフローチャートをコピーすることにより、 キャンペーンに新しいフローチャートを追加できます。

既存のフローチャートをコピーすると、完成しているフローチャートを使用して必要に 応じて変更することができるため、時間の節約になります。

フローチャートの構成を簡素化するために、事前設定済みのフローチャートテンプレートを使用して、共通のキャンペーンロジックや一連のプロセスボックスをすばやく作成することができます。 クエリ、テーブル、カタログ、トリガ、カスタムマクロ、ユーザ変数、ユーザ定義項目の定義など、その他のオブジェクトを保存して再利用することもできます。

フローチャート設計時の注意事項

フローチャートを作成する際は、次の点に注意してください。

- 循環依存を回避する。プロセス間で循環依存が発生しないように注意してください。 たとえば、選択プロセスがセグメント化プロセスに入力を渡すようなフローチャートです。 選択プロセスで入力として選択したセグメントが、その選択プロセスが出力を渡した同じセグメント化プロセスによって作成されたセグメントである場合、循環依存が発生しています。 このような状況は、プロセス実行時にエラーの原因となります。
- グローバル抑制の適用。 社内で、グローバル抑制機能が使用されている場合、特定のIDセットが自動的にターゲットセルとキャンペーンから除外される可能性があることに注意してください。

新規フローチャートを作成するには

- ☆ インタラクティブフローチャートを作成する場合は、詳細についてInteractのドキュメントを参照してください。
- フローチャートを追加するキャンペーンまたはセッションで、[フローチャートの追加]アイコンをクリックします。

[フローチャートのプロパティ]ページが開きます。

- 2. フローチャートの名前と説明を入力します。

 - ☆ Interactのライセンスを供与されたユーザでない場合、[フローチャートタイプ] で使用できるオプションは[標準バッチフローチャート]だけです。 ライセンス供 与されたInteractがインストールされている場合は、インタラクティブフロー チャートも選択できます。

3. [保存とフローチャートの編集]をクリックします。

[フローチャート]ページに、プロセスパレットと空白のフローチャートワークスペースが表示されます。

4. プロセスをフローチャートに追加します。

一般にフローチャートは、使用する顧客またはその他のマーケティング可能なエンティティを定義するために、1つ以上の選択またはオーディエンスプロセスで開始されます。

- フローチャートにプロセスを追加して設定するときは、頻繁に[保存]をクリック してください。
- 5. フローチャートの作成を終了したら、[保存]または[保存と終了]をクリックします。

関連トピック

・特殊文字について

フローチャートのコピー

既存のフローチャートをコピーしてキャンペーンに追加すると、完成しているフロー チャートを使用して必要に応じて変更することができるため、時間の節約になります。

コピーされたフローチャートにコンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)が含まれ、ターゲットセルがターゲットセルスプレッドシートで定義されているターゲットセルにリンクされている場合、セルコードの重複が発生しないように、フローチャートの新しいコピー内のセルに対して新しいセルコードが生成されます。 ただし、ターゲットセルが「ボトムアップ」つまりフローチャートから定義されており、コンタクトプロセスで[セルコードを自動生成]オプションが無効になっている場合、コピーしたフローチャートを貼り付けても新しいセルコードは生成されません。

☆ 既存のフローチャートをコピーしたとき、フローチャートロジックが、古いフローチャートからセルコードを参照するユーザ定義項目を使用している場合、新しいフローチャートでそのロジックは破棄されます。

プロセス設定は、新しいフローチャートにコピーされます。 ただし、元のフローチャートを実行した結果として作成された一時ファイルまたは一時テーブルは、新しいフローチャートにはコピーされません。

フローチャートをコピーするには

- コピーするフローチャートを表示します。
 たとえば、キャンペーンを表示しながらフローチャートのタブをクリックできます。
- 2. **[コピー]**アイコンをクリックします。 [フローチャートの複製]ウィンドウが開きます。

- フローチャートのコピー先キャンペーンを選択します。
 フォルダの横の[+]記号をクリックしてフォルダを展開し、リストを移動します。
- 4. **[OK]**をクリックします。
 - ☆ また、フォルダをダブルクリックすると、フォルダの選択と確定を一度に行うことができます。

フローチャートは選択したキャンペーンに移動します。

関連トピック

フローチャートの表示

フローチャートの表示

フローチャートに対して表示権限がある場合、そのフローチャートを読み取り専用モードで開くことができます。これにより、フローチャート構造を表示することはできますが、プロセス設定ダイアログを開いたり、変更を加えることはできません。 読み取り専用モードでは、プロセスおよびプロセス間の接続を表示して、フローチャートの目的を素早く確認することができます。

フローチャートを開いて表示する際、ズームアウトしてより多くのプロセスが1度に表示されるようにしたり、ズームインしてフローチャートの詳細を部分的に拡大したりできます。

フローチャート内のプロセスの設定方法など、フローチャートの詳細を確認するには、 フローチャートを開いて確認および編集する必要があります。

フローチャートを表示するには

フローチャートは、次の3つの方法で表示できます。

- [キャンペーン]ページで、キャンペーンの横の**[タブを**表示**]**アイコンをクリックし、 表示するフローチャートをコンテキストメニューから選択します。
- [フローチャート]タブをキャンペーンから直接開きます。
- キャンペーンの[レポート]タブを開き、フローチャートリストからフローチャート名をクリックします。

ズームイン/ズームアウトするには

[ズームイン]および[ズームアウト]アイコンをクリックします。

フローチャートの確認

フローチャートの確認権限がある(編集権限はない)場合、フローチャートを確認モードでのみ開くことができます。ここでは、プロセス設定を表示したり、フローチャートを変更できますが、変更を保存したり、フローチャートまたはそのプロセスを本番実行することはできません。 これにより、フローチャートを誤って変更してしまうことなく、フローチャートのコンテンツを安全に確認したり、フローチャート内でプロセスをコピーして再利用することが可能になります。

プログログ テスト実行でも、出力を書き込んだりトリガを実行できることに注意してください。また、確認モードでも、適切な権限があればフローチャート内のカスタムマクロやトリガを編集することができるため、フローチャートを変更できる場合があります。

確認モードで実行できるその他の操作は次のとおりです。

- テスト実行(適切な権限がある場合)
- 確認中のプロセスまたはフローチャートをテンプレートとして保存
- 確認モードでは、フローチャートの自動保存オプションは無効になっており、有効にできません。フローチャートへの変更を保存するには、編集権限が必要です。

フローチャート内のプロセスを確認するには

フローチャートは、次のいくつかの方法で確認用に開くことができます。

- [キャンペーン]ページで、キャンペーンの横の[タブを編集]アイコンをクリックし、 コンテキストメニューから確認するフローチャートを選択します。
- キャンペーンを開いて、[フローチャート]タブをクリックします。 [フローチャート] ページで、[編集]アイコンをクリックします。

Ctrlキーを押しながら[フローチャート]タブをクリックして、フローチャートを確認 モードで直接開くこともできます。

キャンペーンの[レポート]タブを開き、確認するフローチャートへのリンクをクリックして、[編集]アイコンをクリックします。

[レポート]タブで、**Ctrlキー**を押しながらフローチャートのリンクをクリックして、フローチャートを確認モードで直接開くこともできます。

フローチャートを確認モードで開くと、フローチャートは確認モードで、加えた変更は 保存できないことを知らせるメッセージが表示されます。 ページのヘッダには「確 認」と示され、[キャンセル]オプションだけが表示されます。

フローチャートの編集

プロセスを追加または削除したり、プロセスを設定するためにフローチャートを編集します。 フローチャートの名前と説明を編集することもできます。

他のユーザが編集中のフローチャートを編集しようとすると、別のユーザがそのフローチャートを開いていると警告されます。 そのままフローチャートを開いたままにすると、他のユーザによる変更内容が即時に完全に失われます。 この作業ロスを防ぐには、フローチャートを開き続ける場合、最初に他のユーザに問い合わせます。

フローチャートを編集用に開くには

フローチャートは、次のいくつかの方法で編集用に開くことができます。

- [キャンペーン]ページで、キャンペーンの横の[タブを編集]アイコンをクリックし、 コンテキストメニューからフローチャートを選択します。
- キャンペーンを開いて、[フローチャート]タブをクリックします。 [フローチャート] ページで、[編集]アイコンをクリックします。

Ctrlキーを押しながら[フローチャート]タブをクリックして、フローチャートを編集 モードで直接開くこともできます。

キャンペーンの[レポート]タブを開き、編集するフローチャートへのリンクをクリックして、[編集]アイコンをクリックします。

Ctrlキーを押しながらフローチャート名をクリックして、フローチャートを編集 モードで直接開くこともできます。

フローチャートのプロパティを編集するには

- 1. 編集するフローチャートを開きます。
- [フローチャート]ツールバーの[プロパティ]アイコンをクリックします。
 [フローチャートプロパティの編集]ページが開きます。
- 3. フローチャートの名前または説明を変更します。
 - ☆ フローチャート名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 4. [変更の保存]をクリックします。

変更したフローチャートの詳細が保存されます。

フローチャートの検証

フローチャートの検証機能を使用して、いつでも(フローチャートの実行時以外)フローチャートの有効性をチェックできます。 フローチャートを検証するためにフローチャートを保存する必要はありません。

フローチャートの検証を実行すると、フローチャートに対して次の項目がチェックされます。

- フローチャートにプロセスが設定されているかどうか。
- フローチャート内でセルコードが一意であるかどうか(AllowDuplicateCellCodes設定 パラメータがNoに設定されている場合のみ)。このパラメータがYesに設定されて いる場合、フローチャート内のセルコードの重複は許可されます。
- フローチャート内でセル名が一意かどうか。
- コンタクトプロセスにより参照されているオファーとオファーリストが有効かどうか(つまり、それらが回収または削除されていないか)。参照先のオファーリストが空である場合、エラーではなく、警告のみが発生します。
- ターゲットセルスプレッドシートからトップダウンエントリにリンクしているセル が接続されているか。

検証ツールは、フローチャートで最初に検出したエラーを報告します。 すべての検出 エラーを確実に解決するには、検証ツールを連続して数回(表示される各エラーを解決 するごとに)実行することが必要になる場合があります。

☆ 特に、バッチモードでフローチャートを実行する場合や本番実行に監視が行われない場合など、本番実行前には必ずフローチャートに対して検証ツールを実行することをお勧めします。

フローチャートを検証するには

1. 編集 モードの[フローチャート]ページで、[実行]アイコンをクリックして[フローチャートの検証]を選択します。

Campaignによってフローチャートが検証されます。

2. フローチャートにエラーがある場合は、メッセージボックスが開き、最初に見つかったエラーが表示されます。 エラーを1つずつ修正して検証ツールを再実行していくことで、残りのエラーが続いて表示されます。

フローチャートのテスト

データを出力したり、テーブルまたはファイルを更新したくない場合、フローチャートまたはブランチに対してテスト実行を行うことができます。 ただし、トリガの実行については、テスト実行でも本番実行でも行われます。

プロセス、ブランチ、またはフローチャートをテスト実行する際、グローバル抑制が適用されます。

フローチャートをテスト実行するには

1. 編集 モードの[フローチャート]ページで、[実行]アイコンをクリックして[フローチャートのテスト実行]を選択します。

フローチャートがテストモードで実行します。 データはどのテーブルにも書き込まれません。

各プロセスは正常に実行されると青いチェックマークが表示されます。 エラーがあるプロセスには、赤い「X」が表示されます。

2. [保存して終了]をクリックして、フローチャートを保存します。

[保存]をクリックしてフローチャートを保存し、その後も編集用にフローチャートを開いたままにしておくこともできます。

フローチャートの実行が終了する前に[保存して終了]をクリックすると、フローチャートはそのまま実行されて終了時に保存されます。 フローチャートが実行中にもう一度開かれると、フローチャートに加えた変更は失われます。 このため、フローチャートは実行前に必ず保存してください。

実行を一時停止するには、プロセスボックスをクリックして[実行] > [一時停止]を選択します。 実行を停止するには、プロセスボックスをクリックして[実行] > [停止] を選択します。

3. [キャンペーン]ツールバーの[レポート]タブをクリックし、フローチャートステータ スサマリレポートを表示して、フローチャートの実行でエラーが発生したかどうか を確認します。

フローチャートのブランチをテスト実行するには

- 編集 モードの[フローチャート]ページで、テストするブランチのプロセスをクリックします。
- 2. [実行]アイコンをクリックし、[選択したブランチのテスト実行]を選択します。

フローチャートがテストモードで実行します。 データはどのテーブルにも書き込まれません。

各プロセスは正常に実行されると青いチェックマークが表示されます。 エラーがある場合は、プロセスに赤のX印が表示されます。

関連トピック

・ランタイムエラーのトラブルシューティング

フローチャートの実行

フローチャート全体、ブランチのみ、またはフローチャート内の個々のプロセスを選択して実行できます。 フローチャートの構築時に、発生するエラーをトラブルシューティングできるようにテスト実行を行っておくことをお勧めします。また、テスト実行前、または本番実行前に、各フローチャートを保存しておくようにしてください。

- コンタクトプロセスを含むフローチャートでは、フローチャートの各本番実行でコンタクト履歴が1回だけ生成されます。 同じIDリストから複数のコンタクトを生成するには、IDリストのスナップショットを作成し、フローチャートの実行ごとにリストから読み取ります。
- ☆ 管理権限を持つユーザは監視ページにアクセスできます。 このページでは、実行中のすべてのフローチャートとそのステータスを表示し、フローチャートの実行の一時停止、再開、または停止を行うコントロールを提供します。

フローチャートを実行するには

1. フローチャートを表示している場合は、[実行]アイコンをクリックし、[実行]を選択 してフローチャートを実行できます。

フローチャートを編集している場合は、[実行]アイコンをクリックし、[フローチャートを保存して実行]を選択します。

2. フローチャートが既に実行されている場合は、確認ウィンドウで[OK]をクリックします。

実行のデータは適切なシステムテーブルに保存されます。 正常に実行された各プロセスには、青いチェックマークが表示されます。 エラーがあるプロセスには、赤い「X」が表示されます。

3. 【保存して終了】をクリックして、フローチャートを保存します。

[保存]をクリックしてフローチャートを保存し、編集用に開いたままにしておくこともできます。

いずれかのレポートで実行の結果を表示するには、実行後に一度フローチャートを保存する必要があります。 フローチャートを保存すると、繰り返された実行の結果がすぐに確認できます。

☆ フローチャートの実行が完了する前に[保存して終了]をクリックすると、フローチャートの実行は続行されて、完了時に保存されます。

4. Campaignツールバーで[分析]タブをクリックし、Campaignフローチャートステータスサマリレポートを表示すると、フローチャートの実行でエラーが発生したかどうかを確認できます。

フローチャートのブランチを実行するには

- 編集 モードの[フローチャート]ページで、実行するブランチのプロセスをクリックします。
- 2. [実行]アイコンをクリックし、[選択したブランチを保存して実行]を選択します。

各プロセスは正常に実行されると青いチェックマークが表示されます。 エラーがある場合は、プロセスに赤のX印が表示されます。

関連トピック

・ランタイムエラーのトラブルシューティング

プロセスを実行するには

各プロセスを設定して接続したら、正しく設定されていて、予期したとおりの結果が得られることを確認するため、すぐに実行することをお勧めします。

- ☆ プロセスを実行すると、前回の実行時の結果は失われます。
- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が、設定されたプロセスと共に表示されます。
- 2. 実行するプロセスをクリックします。
 - プロセスに、ソースプロセスからのデータが必要な場合は、ソースプロセスが既に 正常に実行され、データが使用可能であることを確認してください。
- 3. [実行]アイコンをクリックし、[選択したプロセスを保存して実行]を選択します。プロセスを右クリックし、コンテキストメニューから[選択したプロセスを保存して実行]を選択することもできます。
- 4. プロセスの実行が終了したら、確認ウィンドウの[OK]をクリックします。

正常に実行されたプロセスには、青のチェックマークが表示されます。 エラーがある場合は、プロセスに赤のX印が表示されます。

実行履歴オプションについて

☆ [実行履歴オプション]ウィンドウが表示されるのは、現在の実行IDのコンタクト履歴が既に生成されているブランチまたはプロセスを実行する場合だけです。 特定の再実行ブランチやプロセスに新しい実行インスタンスが存在しない場合、[実行履歴オプション]ウィンドウは表示されません。

[実行履歴オプション]ウィンドウを使用して、生成する新しいコンタクト履歴をコンタクト履歴テーブルに書き込む方法を選択します。

実行履歴オプションのシナリオ

2つのブランチと2つのコンタクトプロセス(AとB、ともにコンタクト履歴にログを記録するように設定されている)からなるフローチャートがあります。

[フローチャートの実行]コマンドを使用して、上からフローチャート全体を1回実行します。 これにより、新しい実行ID(例: 実行ID=1)が作成されて、この実行IDのコンタクト履歴が生成されます。

フローチャート全体を一度正常に実行した後で、最初のオファーを受け取ったのと同じ個人にフォローアップオファーを送信するようにコンタクトプロセスAを編集します。このため、コンタクトプロセスAを再実行します。現在の実行IDは「1」で、プロセスAと実行ID=1に対してコンタクト履歴が既に存在しています。

コンタクトプロセスAを選択して[プロセスの実行]をクリックすると、[実行履歴オプション]ウィンドウが表示されます。 実行IDは変更せずに実行ID=1のまま残し、この実行IDに関連付けられている既存のコンタクト履歴を置き換えることができます。あるいは、新しい実行インスタンスを作成(実行IDを2に増分する)して、実行ID=1に関連付けられているコンタクト履歴は未変更のまま残し、実行ID=2に関連付けられた新しいコンタクト履歴を追加できます

フォローアップオファーを送信し、かつ最初のオファーに関連付けられたコンタクト履歴を失わないように、[新しい実行インスタンスの作成]を選択します。 この場合、実行IDは「2」に変わり、最初のオファーを受け取った個人と同じIDのコンタクト履歴レコードがコンタクト履歴テーブルに追加されます。

次にコンタクトプロセスBを編集して実行した場合、[実行履歴オプション]ウィンドウは表示されません。これは、現在の実行ID=2と実行ID=2に関連付けられているコンタクト履歴が、コンタクトプロセスBに対して存在していないからです。コンタクトプロセスBだけを実行すると、実行ID=2の追加コンタクト履歴レコードが生成されるだけです。

[実行履歴オプション]ウィンドウリファレンス

[実行履歴オプション]ウィンドウには次のオプションがあります。

オプション	説明
新しい実行インスタンスの作 成	新しい実行IDを使用して、フローチャートの特定のブランチやプロセスを再実行します。 新しい実行IDに関連付けられた新しい結果は、コンタクト履歴テーブルに追加されます。 既存のコンタクト履歴は変更されません。
以前の実行のコンタクト履歴 を置換	以前の実行IDを再使用して、この実行IDに対して以前に生成されたコンタクト履歴を置き換えます(実行中のプロセスまたはブランチのみ)。 フローチャートの他のブランチやプロセスに対して以前に生成されたコンタクト履歴レコードは変更されません。
キャンセル	ブランチまたはプロセスの実行をキャンセルして、既存のコンタクト履 歴に対して何も行いません。 フローチャートは編集モードで開いたま まです。

関連付けられたレスポンス履歴が存在している場合は、コンタクト履歴を置換できません。 このため、[以前の実行のコンタクト履歴を置換]を選択して、関連付けられたレスポンス履歴レコードが存在している場合は、次の2つのオプションのどちらか1つを選択できます。

- 関連付けられたレスポンス履歴レコードとコンタクト履歴レコードを消去する場合は、[OK]をクリックします。 レスポンス履歴が存在していて、以前の実行のコンタクト履歴を置換する場合には、これが唯一のオプションです。
- コンタクト履歴レコードの消去をキャンセルする場合は、[キャンセル]をクリックします。 代わりに[新しい実行インスタンスの作成]を選択して、現在のコンタクトプロセスを実行する新しい実行インスタンスを作成できます。

フローチャートの実行を一時停止するには

実行中のフローチャート、ブランチ、またはプロセスを一時停止すると、サーバは処理 済みのデータをすべて保存して実行を停止します。 サーバの計算リソースを解放する ために実行を一時停止する必要がある場合があります。

一時停止した実行は、後から続行することも停止することもできます。

[フローチャート]ページで[実行]アイコンをクリックし、[一時停止]を選択します。

☆ 適切な権限がある場合は、[監視]ページからフローチャートを制御することもできます。

一時停止中のフローチャートの実行を続行するには

一時停止中の実行を続けて実行すると、その実行は停止した地点から再開します。 たとえば、選択プロセスが10件のレコードを処理した後で一時停止された場合、このプロセスは11件目のレコードの処理から実行を再開します。

[フローチャート]ページで[実行]アイコンをクリックし、[続行]を選択します。

☆ 適切な権限がある場合は、[監視]ページからフローチャートを制御することもできます。 詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

フローチャートの実行を停止するには

[フローチャート]ページで[実行]アイコンをクリックし、[停止]を選択します。

現在実行中のプロセスの結果は失われ、それらのプロセスには赤いXが表示されます。

☆ 適切な権限がある場合は、[監視]ページからフローチャートを制御することもできます。

停止中のフローチャートの実行を続行するには

停止中のフローチャートは、そのフローチャートが停止したプロセスで開始されるフローチャートのブランチを実行することにより続行できます。 このプロセスと後続のすべてのプロセスが再実行されます。

- 編集モードのフローチャートページで、赤いXが表示されているプロセスをクリックします。
- 2. [実行]アイコンをクリックし、[選択したブランチを保存して実行]を選択します。
 - ☆ 適切な権限がある場合は、[監視]ページからフローチャートを制御することもできます。 詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

ランタイムエラーのトラブルシューティング

正しく設定されたプロセスは、カラー表示されます(プロセスのタイプごとに色が異なります)。 名前がイタリックで示され、グレー表示になっているプロセスには、設定エラーがあります。 エラーの詳細を確認するには、プロセスの上にマウスを置いて、エラーメッセージの説明を表示します。

フローチャートの実行がエラーにより停止した場合、実行中だったプロセスには赤いXが表示されます。そのプロセス上にマウスを置くと、エラーメッセージが表示されます。

☆ Campaignがシステムテーブルをデータベースに保存するように設定されており、フローチャートを表示していない状態で、データベース接続エラーにより実行が停止した場合、プロセスに赤いXは表示されません。 その代わり、最後に保存された状態のフローチャートが表示されます。

その他、ログファイルからシステムエラー情報を確認したり、キャンペーンの分析やパフォーマンス/収益性レポートから、予想どおりの結果が得られているかどうか確認する必要もあります。

フローチャートの削除

フローチャートを削除すると、フローチャートと、ログファイルを含めた関連ファイルがすべて完全に削除されます。 フローチャートの一部を再利用するために保存する場合、保存オブジェクトとして保存できます。

出力ファイル(スナップショット、最適化、またはコンタクトプロセスによって書き込まれたファイル)は削除されません。コンタクト履歴情報とレスポンス履歴情報は保持されます。

他のユーザが編集中のフローチャートを削除しようとすると、別のユーザがそのフローチャートを開いていると警告されます。 そのままフローチャートを削除すると、他のユーザによる変更内容が即時に完全に失われます。 この作業ロスを防ぐには、フローチャートを削除し続ける場合、最初に他のユーザに問い合わせます。

フローチャートを削除するには

- 削除するフローチャートを表示モードで開きます。
 [フローチャート]タブが表示されます。
- 2. [フローチャートの削除]アイコンをクリックします。
- 3. 確認ウィンドウで**[OK]**をクリックしします。 フローチャートおよびすべての関連ファイルが削除されます。

フローチャートを印刷するには

フローチャートのハードコピーをCampaignから印刷できます。

- 1. 印刷するフローチャートを表示または編集モードで開きます。
- [印刷]アイコンをクリックします。
 [ページ設定]ウィンドウが開きます。
- [OK]をクリックします。
 [印刷]ウィンドウが開きます。
- 4. 現在のフローチャートを印刷するには、[OK]をクリックします。
 Campaignのウィンドウが開き、フローチャートが印刷中であることが示されます。

トラブルシューティングのためのフローチャー トファイルのパッケージ化

フローチャートのトラブルシューティングを行うためにIBMのサポートが必要な場合、 関連データを自動的に収集してIBMテクニカルサポートに送信することができます。 含 める項目をリストから選択し、日付範囲を指定できます。 選択したデータ項目が、選 択したフォルダに書き込まれます。その内容が圧縮されてIBMテクニカルサポートに送 信されます。

選択したデータ項目に加え、Campaignにより、次の内容を識別するサマリファイルも 自動的に含まれます。

- 現在の日時
- ソフトウェアのバージョンとビルド番号
- ユーザ名
- パッケージに含めるように選択された内容

トラブルシューティングのためにフローチャートファ イルのパッケージを作成するには

この処理を実行できるのは、フローチャートを編集または実行(テスト実行または本番 実行)できる権限のあるユーザに限られます。 「ログの表示」権限がない場合は、ログ に関連するエントリを選択ウィンドウで選択できません。

フローチャートのトラブルシューティングに関する支援が必要な場合に、フローチャートのデータファイルを自動的にパッケージ化してIBMテクニカルサポートに送信できるようにするには、このタスクを実行します。

- 編集モードのフローチャートページで、[システム管理] > [フローチャートデータの 収集]を選択します。 [トラブルシューティングのためにデータパッケージを作成] ウィンドウが開きます。
- 2. パッケージの名前を入力するか、既定の名前をそのまま使用します。 パッケージ名 は、選択したデータ項目が書込まれるサブフォルダを作成するために使用されます。
- 3. [参照]をクリックし、データパッケージの保存先フォルダを選択します。
- 4. パッケージに含めたい各アイテムのチェックボックスをオンにします。 選択すると きに書込みデータをフィルタリングするための追加情報を入力できるアイテムもあります。

あるいは、[既定のアイテムを選択]チェックボックスをオンにします。 このチェックボックスをオンにすると、トラブルシューティングのために一般的に必要なすべてのデータが自動的に選択されます。つまり、ログファイル以外の一覧されている全アイテム、ユーザテーブル、コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの内容、戦略的セグメント、スタックトレースファイルなどです。

5. **[OK]**をクリックしてパッケージを作成します。

IBM Unica テクニカルサポートへのフローチャート データパッケージの転送

IBM Unica テクニカルサポートには、電子メール、またはサポート担当者が勧める方法により、データパッケージを送ることができます。 IBM Unica テクニカルサポートは、圧縮されていないデータ(パッケージサブディレクトリ全体)も受け付けていますが、IBMに送る前に、ファイルの圧縮、暗号化、および1つのファイルへのパッケージ化を任意で選択できます。

フローチャートデータのパッケージ化オプション

項目	含まれるものの説明	ユーザが設定できる追加の指定
[既定のアイテムを 選択]チェックボッ クス	フローチャートのトラブルシューティングのために一般的に必要なすべてのデータ。 一覧表示されているすべてのアイテム(ただしログファイルを除く)とユーザテーブルおよびコンタクト履歴テーブルの内容が含まれます。	
フローチャート	フローチャートの.sesファイル。	実行結果を含めるかどうか オプションで、ランタイムデータファイル(「アンダースコア」ファイルともいう)を含めるか除外するかを指定します。
フローチャートロ グ	フローチャートの.logファイル。	オプションで、開始と終了のタイムスタ ンプを設定します。 設定しない場合、 既定はログファイル全体です。
リスナログ	unica_aclsnr.logファイル。	オプションで、開始と終了のタイムスタ ンプを設定します。 設定しない場合、 既定はログファイル全体です。
起動ログ	The AC_sess.log file.	オプションで、開始と終了のタイムスタ ンプを設定します。 設定しない場合、 既定はログファイル全体です。
Webメッセージロ グ	AC_web.log ファイル。	オプションで、開始と終了のタイムスタ ンプを設定します。 設定しない場合、 既定はログファイル全体です。
Campaign構成	.configファイル。フローチャートの トラブルシューティングを支援するため に、 Campaign環境の設定プロパティと 設定を一覧表示します。	

項目	含まれるものの説明	ユーザが設定できる追加の指定
キャンペーンカス タム属性	customcampaignattributes.dat ファイル。キャンペーンカスタム属性に ついて、属性の名前と値のペアを一覧表 示します。 現在のキャンペーンに関連 するエントリのみが含まれます。	
セルカスタム属性	customcellattributes.datファイル。キャンペーンセルカスタム属性について、属性の名前と値のペアを一覧表示します。 現在のキャンペーンに関連するエントリのみが含まれます。	
オファーの定義	次のオファー関連のシステムテーブルごとに、すべての行が含まれ+ます。 UA_AttributeDef.dat, UA_Folder.dat, UA_Offer.dat, UA_OfferAttribute.dat, UA_OfferList.dat, UA_OfferListMember.dat, UA_OfferTemplate.dat, UA_OfferTemplate.dat, UA_OfferToProduct.dat, UA_Product.dat, UA_ProductIndex.dat	
ターゲットセルス プレッドシート データ	targetcellspreadsheet.datファイル。ターゲットセルスプレッドシート全体について、UA_TargetCellsからのデータが含まれます。 現在のキャンペーンのデータが、列/行の区切り記号付きのテキスト形式で含まれます。	
カスタムマクロの 定義	custommacros.datファイル。UA_CustomMacrosの次の項目が、列/行の形式で含まれます。 Name, FolderID, Description, Expression, ExpressionType, DataScrName, DataVarType, DataVarNBytes, CreateDate, CreatedBy, UpdateDate, UPdateBy, PolicyIS, ACLID	
システムテーブル マッピング	systablemapping.xmlファイル。 データソースなど、すべてのシステム テーブルマッピングが含まれます。	

項目	含まれるものの説明	ユーザが設定できる追加の指定
+ システムテーブ ルの内容を含める	このオプションを選択すると、すべての システムテーブルが展開されて一覧表示 されます。	
		サブオプションを選択しないと、システムテーブルはパッケージに含まれませ ん。
+ コンタクト履歴 テーブルを含める	このオプションを選択すると、各オー ディエンスレベルのコンタクト履歴と詳 細なコンタクト履歴テーブルが展開され て表示されます。	選択するセットごとに、該当するオーディエンスレベルのコンタクト履歴および詳細なコンタクト履歴レコードがパッケージに含まれます。
		オプションで、開始と終了のタイムスタ ンプを設定できます。 設定しない場 合、既定はすべてのレコードです。
		サブオプションを選択しないと、コンタ クト履歴テーブルの情報はパッケージに 含まれません。
+ レスポンス履歴 テーブルを含める	このオプションを選択すると、すべての オーディエンスレベルのレスポンス履歴 テーブルが展開されて表示されます。	
		選択するテーブルごとに、オプションで開始と終了のタイムスタンプを設定できます。 設定しない場合、既定はすべてのレコードです。
		テーブルを選択しないと、レスポンス履歴テーブルの情報はパッケージに含まれません。
+ ユーザテーブル の内容を含める		含めるユーザテーブルをフローチャート から選択します。
		何も選択しないと、ユーザテーブルの内 容はパッケージに含まれません。
		選択するユーザテーブルごとに、含める 最大行数をオプションで設定できます。 最大行数を設定しないと、テーブル全体 がパッケージに含まれます。
+ 戦略的セグメン トを含める	このオプションを選択すると、パッケー ジに対して選択できるすべての戦略的セ グメントが展開されて表示されます。	

項目	含まれるものの説明	ユーザが設定できる追加の指定
+ スタックトレー スファイルを含め る	UNIXバージョンでのみ使用できるオプションです。 このオプションを選択すると、uni- ca_aclsnr.logと同じディレクトリに あるスタックトレースファイ ル(*.stack)のリストが展開されて表示 されます。	パッケージに含めるスタックトレース ファイルを選択します。 サブオプショ ンを選択しないと、スタックトレース ファイルはパッケージに含まれません。

フローチャートリファレンス

このセクションでは、フローチャートを操作するためのCampaignインタフェースのアイコンについて説明します。

[フローチャート]タブのアイコン(表示モード)

[フローチャート]タブでは、表示モードで次のアイコンを使用します。















アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

☆ インタフェースのアイコンの多くは、権限を必要とする機能に関連付けられています。 詳細については、『Marketing Platform管理者ガイド』を参照してください。
[コピー]アイコンと[フローチャートの削除] アイコンは、適切な権限がないと表示されません。

アイコン名	説明
編集	フローチャートを編集するには、このアイコンをクリックしま す。
実行	[実行]メニューにアクセスするには、このアイコンをクリック します。
フローチャートの追加	キャンペーンに別のフローチャートを追加するには、このアイ コンをクリックします。
ズームイン	フローチャートの表示サイズを拡大するには、このアイコンを クリックします。
ズームアウト	フローチャートの表示サイズを縮小するには、このアイコンを クリックします。

アイコン名	説明
項目の印刷	フローチャートを印刷するには、このアイコンをクリックしま す。
コピー	フローチャートのコピーを作成するには、このアイコンをク リックします。
フローチャートの削除	フローチャートを削除するには、このアイコンをクリックしま す。

[フローチャート]ページのアイコン(編集モード)

[フローチャート]ページでは、編集モードで次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

☆ インタフェースのアイコンの多くは、権限を必要とする機能に関連付けられています。 詳細については、『Marketing Platform管理者ガイド』を参照してください。

アイコン名	説明
実行	[実行]メニューにアクセスするには、このアイコンをクリック します。
プロパティ	[フローチャートのプロパティ]ウィンドウを表示または編集するには、このアイコンをクリックします。
オプション	[オプション]メニューにアクセスするには、このアイコンをク リックします。
システム管理	[システム管理]メニューにアクセスするには、このアイコンを クリックします。
レポート	フローチャートセルレポートにアクセスするには、このアイコ ンをクリックします。
切り取り	フローチャートで1つ以上の項目を選択してからこのアイコン をクリックして、選択した項目を削除します。
コピー	フローチャートで1つ以上の項目を選択してからこのアイコン をクリックして、選択した項目をコピーします。
貼り付け	切り取った項目またはコピーした項目をフローチャートに貼り 付けるには、このアイコンをクリックします。

アイコン名	説明
ズームイン	フローチャートの表示サイズを拡大するには、このアイコンを クリックします。
ズームアウト	フローチャートの表示サイズを縮小するには、このアイコンを クリックします。
印刷	フローチャートを印刷するには、このアイコンをクリックしま す。

5 プロセス

- プロセスについて
- プロセスのタイプ
- プロセスの操作
- プロセスに対するデータソースの選択
- プロセスに対するデータベース内処理の選択
- プロセス内でのクエリの作成
- 項目のプロファイル
- コンタクトログ用の出力ファイルまたはテーブルの指定
- 乱数選択用の種の変更
- プロセス出力での重複IDの除外
- カレンダーツールを使用するには

プロセスについて

プロセスはフローチャートの構成要素で、必要な出力を得る特定のタスクを実行するために設定します。 たとえば、マージプロセスを使用して2つの異なるオーディエンスグループをマージしたり、コンタクトプロセス(コールリストやメールリスト)を使用してキャンペーン全体の結果を書き出します。

一般にタスクは、セルを操作するプロセスを使用して実行されます。 セルは、マーケティングメッセージ受信者の識別子(顧客や見込み客のIDなど)のリストです。 一般にフローチャート内の各プロセスは入力として1つ以上のセルを取り込み、データを変換して、1つ以上のセルを出力として生成します。

Campaignで使用できるプロセスは、フローチャートのプロセスパレット(フローチャートの作成やプロセスの操作に使用するスペース)に表示されます。

プロセスのさまざまなタイプは、色によって区別されます。 データ操作プロセスは 青、実行プロセスは赤、最適化プロセスは緑色で表示されます。

フローチャートを作成するには、必要なタイプのプロセスをプロセスパレットからフローチャートの作業空間に移動し、それらを接続して設定します。

プロセスのタイプ

Campaignのプロセスは機能ごとに3つのタイプに分けられ、フローチャートのプロセスパレットでは色によって区別されます。

- データ操作プロセス 青
- 実行プロセス 赤
- 最適化プロセス 緑

「コンタクトプロセス」と呼ばれる特殊な実行プロセスセットは、コンタクトリストを 生成します。

☆ このセクションで説明するCampaignのプロセスに加え、Interact、Optimize、およびeMessageにもキャンペーンフローチャートで使用するその他のプロセスがあります。 それらのプロセスの詳細については、各製品のマニュアルを参照してください。

コンタクトプロセス

メールリストプロセスやコールリストのプロセスをコンタクトプロセスと呼びます(以前のリリースでは「コンタクトスタイルプロセス」(CSP)と呼ばれていました)。 これらのプロセスはコンタクトリストを生成します。

※ メールリストプロセスとコールリストプロセスは実行プロセスでもあります。

関連トピック

- ・メールリスト
- ・コールリスト

データ操作プロセス

データ操作プロセスを使用してデータソースから顧客IDを選択し、これらのIDをさまざまな方法で操作して意味のあるグループや対象オーディエンスを作成します。

データ操作プロセスでは、一連の条件に基づいて顧客を選択する、付加または除外のために顧客リストをまとめてマージする、意味のあるグループに顧客をセグメント化する、テストやコントロールグループ用にサンプリングする、キャンペーンの対象オーディエンスを指定するなどのタスクを実行できます。

データ操作プロセスには、次のものがあります。

- オーディエンス
- 書込み
- マージ
- サンプル
- セグメント
- 選択

実行プロセス

目的のオーディエンスを選択するようにキャンペーンを構築したら、実行プロセスを使用して、利用しやすいように結果を出力する必要があります。 実行プロセスはフローチャートの実行を制御して、実際の顧客コンタクトをトリガします。

実行プロセスは、完成しているキャンペーンの実際の実行を制御します。これには、コンタクトリストの管理と出力、対象オーディエンスの処理、レスポンスおよびコンタクトのトラッキング、データの記録、およびキャンペーンやセッションの実行のスケジューリングが含まれます。

実行プロセスには次のものがあります。

- コールリスト
- セグメント化
- キューブ
- メールリスト
- スケジュール
- スナップショット
- ☆ メールリストプロセスとコールリストプロセスは、コンタクトプロセスとも呼ばれます。

最適化プロセス

最適化プロセスでは、キャンペーンを細かく調整して最大限の効果を実現できます。オーディエンスの選択を絞り込むためのスコアを生成するには、最適化プロセスを使用します。 コンタクトとレスポンスをトラッキングし、CampaignまたはPredictiveInsightなどのデータマイニング製品の予想モデルの結果を使用して、オーディエンスの選択を絞り込み、最大限のROIを実現できます。 最適化プロセスには、各見込み顧客にコンタクトするために組織全体で使用する最も効果的なキャンペーン、オファー、チャネルを特定する機能もあります。

最適化プロセスには次のものがあります。

- モデル
- ・ レスポンス
- スコア
- トラッキング

プロセスの操作

Campaignでは、視覚的な操作プロセスによりキャンペーンフローチャートを簡単に作成できます。 さまざまなフローチャート設計を試しながら、プロセスの作成、接続、設定、実行ができます。 以下のセクションでは、プロセスで実行できるタスクについて説明します。

- フローチャートへの新規プロセスの追加
- プロセスのコピー、切り取り、貼り付け
- テンプレートライブラリからのプロセスの貼り付け
- プロセスの移動
- プロセスの削除
- プロセスの接続
- プロセスの設定と編集
- プロセスの実行

新規プロセスをフローチャートに追加するには

フローチャートにプロセスを追加するには、追加するプロセスのタイプをパレットから 選択し、フローチャートの作業空間に移動して設定し、フローチャート内の他のプロセスと接続します。

新規プロセスを作成して設定する以外にも、既存の設定済みプロセスをコピーするか、 テンプレートライブラリからテンプレートを貼り付けることもできます。 テンプレー トには、1つ以上の設定済みプロセスと接続が含まれています。

- 1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 - プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- プロセスパレットで、フローチャートに追加するプロセスをクリックします。 プロセスがハイライト表示されます。
- 3. 作業空間内で、プロセスを配置する場所をクリックします。

選択されたプロセスが作業空間に追加されます。 新たに追加されたプロセスは、正しく設定されるまではグレー表示されます。正しく設定されると、タイプに基づいてカラー表示されます(データ操作プロセスは青、実行プロセスは赤、最適化プロセスは緑)。

フローチャートの作業空間で、プロセスボックス上に1つ以上の別のプロセスボックスを置くと、スタック状に積み重なって表示されます。 スタック内の次のプロセスボックスを表示するには、一番上のプロセスボックスをクリックし、動かします。

4. プロセスを右クリックすると、プロセスに対して実行できるアクションの一覧がメニューに表示されます。

プロセスのコピーと貼り付けを実行するには

設定済みのプロセスをコピーすることで、フローチャートの構築にかかる時間を節約で きます。 また、設定済みプロセスを切り取り、クリップボードに設定を保存して、作 業空間の別の場所や、他のフローチャートにプロセスを貼り付けることもできます。

- 1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 - プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 既に作業空間に存在するプロセスの中から、コピーするプロセスをクリックします。
 - ☆ Shiftキーを押しながらクリックして複数のプロセスを選択するか、マウスをドラッグしてプロセスのグループを選択するか、またはCtrl+Aキーを押して、フローチャート内のすべてのプロセスを選択します。
- 3. [コピー]アイコンをクリックします。
 - コンテキストメニューから[コピー]を選択するか、Ctrl+Cキーを押すこともできます。
- 4. [貼り付け]アイコンをクリックします。
 - コンテキストメニューで[貼り付け]をクリックするか、Ctrl+Vキーを押すこともできます。
 - 作業空間にプロセスのコピーが表示されます。
- 5. コピーされたプロセスをクリックし、フローチャート内の別の領域にドラッグします。

プロセスを切り取るには

- 1. キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 - プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 既に作業空間に存在するプロセスで、切り取るプロセスをクリックします。
 - ☆ Shiftキーを押しながらクリックして複数のプロセスを選択するか、マウスをドラッグしてプロセスのグループを選択するか、またはCtrl+Aキーを押して、フローチャート内のすべてのプロセスを選択します。
- 3. [フローチャート]ツールバーで[切り取り]アイコンをクリックします。
 - コンテキストメニューで[切り取り]をクリックするか、Ctrl+Xキーを押すこともで きます。

プロセスがフローチャートから削除され、クリップボードに保存されます。 このプロセスを現在のフローチャートに貼り付けることや、別のフローチャートに貼り付けることができます。

テンプレートライブラリからプロセスを貼り付けるに は

テンプレートライブラリのテンプレートを使用すると、フローチャートの構築にかかる 時間を節約できます。 テンプレートには、1つ以上の設定済みプロセスと接続が含まれ ています。

- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. [オプション]アイコンをクリックし、[テンプレート]を選択します。 使用可能なテンプレートを示す、[テンプレート]ウィンドウが開きます。
- 3. [項目リスト]で、フローチャートに貼り付けるテンプレートを選択します。
- 4. [テンプレートの貼り付け]をクリックします。

選択したテンプレート内のプロセスが、フローチャートに貼り付けられます。

フローチャートの作業空間で、プロセスボックス上に1つ以上の別のプロセスボックスを貼り付けると、スタック状に積み重なって表示されます。 スタック内の次のプロセスボックスを表示するには、一番上のプロセスボックスをクリックし、動かします。

プロセスを移動するには

編集中のフローチャートのプロセスは、作業空間内の別の場所にドラッグすることにより、移動できます。

Campaignでは、プロセスを上に積み重ねるように配置できます。ただし、多数のプロセスを含む大規模なフローチャートでは、プロセスを積み重ねるのではなく、拡大機能を使用するとすべてのプロセスを簡単に表示できます。

- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 作業空間で、新しい場所に移動するプロセスをクリックし、ドラッグします。 マウスを放すと、プロセスが新しい場所に移動します。 移動するプロセス間の既存 の接続は残され、移動先に再描画されます。

プロセスを削除するには

フローチャートを設計および作成するときに、追加したプロセスを削除しなければならない場合があります。

- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットとワークスペースが表示されます。
- 2. ワークスペースで、削除するプロセスを右クリックし、コンテキストメニューから[削除]をクリックします。

☆ Shiftキーを押しながらマウスを使用してプロセスを選択すると、複数のプロセスを同時に選択できます。

選択したアイテムを削除するかどうかの確認メッセージが表示されます。

- 3. **[OK]**をクリックします。
- 4. 選択したプロセスがワークスペースから削除されます。 プロセスに対する接続もフローチャートから削除されます。

2つのプロセスを接続するには

フローチャート内のプロセスを接続して、データフローの方向と、プロセスが実行される順番を指定します。 作業空間内でプロセスを移動すると、既存の接続は残り、移動したプロセスの新しい場所に合わせて調整されます。 接続の追加や削除は簡単に行うことができます。

- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 接続の作成に使用するプロセスの接続ボックスの上にカーソルを置きます。 カーソルが、3本の下向き矢印に代わります。
- クリックし、接続先のプロセスまでドラッグして線を引きます。
 ソースプロセスがハイライト表示されます。 カーソルをドラッグすると、ソースプロセスから接続線が引かれます。
- 4. 接続先プロセス上でマウスを放します。
- ソースプロセスと接続先プロセスが、データフローの方向を表す矢印で接続されます。 ソースプロセスは接続先プロセスの前に実行され、ソースプロセスからのデータ出力 が、接続先プロセスの入力として使用されます。
- ☆ 接続先プロセスがソースプロセスからデータを受信する場合、接続は実線で表示されます。接続先プロセスがソースプロセスからデータを受信することはないものの、ソースプロセスが完了しなければ正常に実行できない場合は、接続が点線で示されます。

2つのプロセス間の接続を削除するには

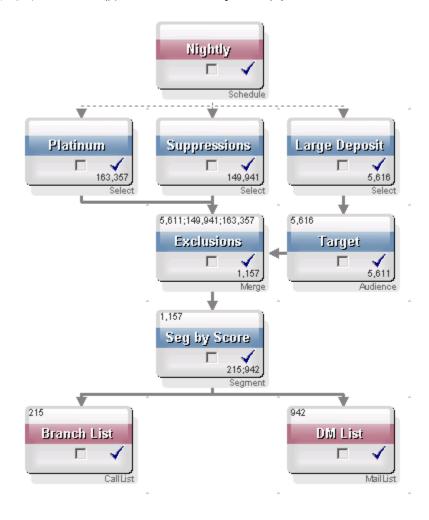
- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 削除する接続をクリックします。
- 3. 次のいずれかを実行します。
 - 接続を右クリックし、コンテキストメニューから[削除]を選択する。
 - Deleteキーを押す。

- [フローチャート]ツールバーで[切り取り]アイコンをクリックする。
- Ctrl+Xキーを押す。

接続が削除されます。

例: プロセスの接続

次のフローチャートは、毎晩自動的に実行するようにスケジュールされています。 スケジュールプロセスと3つの選択プロセスをつなぐ点線は、スケジュールプロセスの実行が終了するまで選択プロセスは実行されないが、データはスケジュールプロセスから選択プロセスに渡されないことを示します。



プロセスの設定と編集

プロセスは設定されていないと実行できません。 プロセスを設定するときは、プロセスが使用するデータソース、処理するID、プロセスの出力を用いて行う操作など、プロセスに関する重要な情報をCampaignに指定します。

フローチャート内のプロセスは、キャンペーンの実行時に実行される順に設定することをお勧めします。 一部のプロセスはソースプロセスからの入力を必要とするため、接続してから設定する必要があります。

プロセス設定ウィンドウにアクセスするには

- キャンペーンまたはセッション内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が表示されます。
- 2. 設定するプロセスをダブルクリックします。 プロセスを右クリックして、コンテキストメニューから[プロセス設定]を選択することもできます。
 - そのプロセスのプロセス設定ウィンドウが開きます。
- 3. プロセス設定ウィンドウの各タブの項目に情報を入力します。 ヘルプを参照するには、「ヘルプ」をクリックします。
- 4. 設定の詳細の入力が完了したら、[OK]をクリックします。

正しく設定されたプロセスは、カラー表示されます(プロセスのタイプごとに色が異なります)。 名前がイタリックで示され、グレー表示になっているプロセスには、設定エラーがあります。 エラーの詳細を確認するには、プロセスの上にマウスを置いて、エラーメッセージの説明を表示します。

プロセスを実行するには

各プロセスを設定して接続したら、正しく設定されていて、予期したとおりの結果が得られることを確認するため、すぐに実行することをお勧めします。

- ☆ プロセスを実行すると、前回の実行時の結果は失われます。
- キャンペーン内で、編集するフローチャートを開きます。
 プロセスパレットと作業空間が、設定されたプロセスと共に表示されます。
- 2. 実行するプロセスをクリックします。
 - プロセスに、ソースプロセスからのデータが必要な場合は、ソースプロセスが既に 正常に実行され、データが使用可能であることを確認してください。
- 3. [実行]アイコンをクリックし、[選択したプロセスを保存して実行]を選択します。プロセスを右クリックし、コンテキストメニューから[選択したプロセスを保存して実行]を選択することもできます。
 - ☆ フローチャートのプロセスまたはブランチのみを実行しても、フローチャートの実行IDは増分されません。プロセスまたはブランチのみを実行すると、コンタクト履歴レコードが存在する場合は、続行する前に実行履歴オプションを選択するように求めるメッセージが表示されます。 詳細については、「実行履歴オプションについて」を参照してください。
- 4. プロセスの実行が終了したら、確認ウィンドウの[OK]をクリックします。

正常に実行されたプロセスには、青のチェックマークが表示されます。 エラーがある場合は、プロセスに赤のX印が表示されます。

実行履歴オプションについて

☆ [実行履歴オプション]ウィンドウが表示されるのは、現在の実行IDのコンタクト履歴が既に生成されているブランチまたはプロセスを実行する場合だけです。 特定の再実行ブランチやプロセスに新しい実行インスタンスが存在しない場合、[実行履歴オプション]ウィンドウは表示されません。

[実行履歴オプション]ウィンドウを使用して、生成する新しいコンタクト履歴をコンタクト履歴テーブルに書き込む方法を選択します。

実行履歴オプションのシナリオ

2つのブランチと2つのコンタクトプロセス(AとB、ともにコンタクト履歴にログを記録するように設定されている)からなるフローチャートがあります。

[フローチャートの実行]コマンドを使用して、上からフローチャート全体を1回実行します。 これにより、新しい実行ID(例: 実行ID=1)が作成されて、この実行IDのコンタクト履歴が生成されます。

フローチャート全体を一度正常に実行した後で、最初のオファーを受け取ったのと同じ個人にフォローアップオファーを送信するようにコンタクトプロセスAを編集します。このため、コンタクトプロセスAを再実行します。現在の実行IDは「1」で、プロセスAと実行ID=1に対してコンタクト履歴が既に存在しています。

コンタクトプロセスAを選択して[プロセスの実行]をクリックすると、[実行履歴オプション]ウィンドウが表示されます。 実行IDは変更せずに実行ID=1のまま残し、この実行IDに関連付けられている既存のコンタクト履歴を置き換えることができます。あるいは、新しい実行インスタンスを作成(実行IDを2に増分する)して、実行ID=1に関連付けられているコンタクト履歴は未変更のまま残し、実行ID=2に関連付けられた新しいコンタクト履歴を追加できます

フォローアップオファーを送信し、かつ最初のオファーに関連付けられたコンタクト履歴を失わないように、[新しい実行インスタンスの作成]を選択します。 この場合、実行IDは「2」に変わり、最初のオファーを受け取った個人と同じIDのコンタクト履歴レコードがコンタクト履歴テーブルに追加されます。

次にコンタクトプロセスBを編集して実行した場合、[実行履歴オプション]ウィンドウは表示されません。これは、現在の実行ID=2と実行ID=2に関連付けられているコンタクト履歴が、コンタクトプロセスBに対して存在していないからです。コンタクトプロセスBだけを実行すると、実行ID=2の追加コンタクト履歴レコードが生成されるだけです。

[実行履歴オプション]ウィンドウリファレンス

[実行履歴オプション]ウィンドウには次のオプションがあります。

オプション	説明
新しい実行インスタンスの作 成	新しい実行IDを使用して、フローチャートの特定のブランチやプロセスを再実行します。 新しい実行IDに関連付けられた新しい結果は、コンタクト履歴テーブルに追加されます。 既存のコンタクト履歴は変更されません。
以前の実行のコンタクト履歴 を置換	以前の実行IDを再使用して、この実行IDに対して以前に生成されたコンタクト履歴を置き換えます(実行中のプロセスまたはブランチのみ)。 フローチャートの他のブランチやプロセスに対して以前に生成されたコンタクト履歴レコードは変更されません。
キャンセル	ブランチまたはプロセスの実行をキャンセルして、既存のコンタクト履歴に対して何も行いません。 フローチャートは編集モードで開いたままです。

関連付けられたレスポンス履歴が存在している場合は、コンタクト履歴を置換できません。 このため、[以前の実行のコンタクト履歴を置換]を選択して、関連付けられたレスポンス履歴レコードが存在している場合は、次の2つのオプションのどちらか1つを選択できます。

- 関連付けられたレスポンス履歴レコードとコンタクト履歴レコードを消去する場合は、[OK]をクリックします。 レスポンス履歴が存在していて、以前の実行のコンタクト履歴を置換する場合には、これが唯一のオプションです。
- コンタクト履歴レコードの消去をキャンセルする場合は、[キャンセル]をクリックします。 代わりに[新しい実行インスタンスの作成]を選択して、現在のコンタクトプロセスを実行する新しい実行インスタンスを作成できます。

プロセスに対するデータソースの選択

オーディエンス、セグメントの作成、キューブ、書込み、モデル、レスポンス、セグメント、選択などの多くのプロセスでは、プロセスが影響するデータのソースを指定する必要があります。 プロセスのデータソースが着信セル、セグメント、テーブル、または複数のテーブルである場合もあります。

ほとんどの場合、プロセスのデータソースは、設定ウィンドウの1つ目のタブの[入力]項目で、[入力]ドロップダウンリストを使用して指定します。

着信のセル、セグメント、またはテーブルをプロセス への入力として選択するには

プロセス設定ダイアログの1つ目のタブで、[入力]ドロップダウンリストから着信セル、セグメント、またはテーブルを選択します。 [入力]ドロップダウンリストには、テーブルカタログに現在マッピングされているすべてのベーステーブルと、そのオーディエンスレベルが表示されます。 着信セルがある場合は、セルと同じオーディエンスレベルを持つテーブルだけが表示されます。

複数のテーブルをプロセスへの入力として選択するに は

複数のテーブルをプロセスへの入力として選択することができます。

- 1. プロセス設定ダイアログの[入力]ドロップダウンリストから、[テーブル] > [複数の テーブル]を選択します。

省略記号ボタンをクリックすることもできます。 [テーブルの選択]ウィンドウの、 キャンペーンのテーブルカタログに、すべてのベーステーブルが表示されます。

- 2. 選択する各テーブルの隣にあるボックスをチェックします。
- 3. **[OK]**をクリックして、プロセス設定ダイアログに戻ります。 **[**入力**]**項目に「複数の テーブル」と示されます。これは、省略記号をクリックすると表示できます。

ソースとして選択するために新しいテーブルをマッピ ングするには

プロセス設定ダイアログの[入力]ドロップダウンリストから、**[テーブル] > [新規テーブル]**を選択します。

[新規テーブル定義]ウィンドウで、ベースレコードテーブルのタイプがあらかじめ選択されて表示されます。 新しいベーステーブルは、[テーブルマッピング]ダイアログからテーブルをマッピングするのと同じ方法で、プロセス設定ダイアログにマッピングします。

☆ テーブルをマッピングするには、適切な権限が必要です。 テーブルのマッピングの 詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

プロセスに対するデータベース内処理の選択

データベース内処理はオプションです。この処理では、フローチャートのプロセスのオン/オフをグローバルに切り替えることも、フローチャートごとに切り替えることもできます。

☆ データベース内処理がサポートされないデータベースもあります。 お使いのデータ ソースでこのオプションを使用できるかどうかは、Campaign管理者に確認してくだ さい。

データベース内処理オプションは、次のことを特定します。

- データベースレベルまたはローカルのCampaignサーバレベルで実行される操作は何か
- 操作の結果として何が起こるか

一般に、データベース処理内オプションを使用すると、データベースのIDが処理のため にCampaignサーバに不要にコピーされなくなるため、フローチャートのパフォーマン スが改善されます。 データベース内処理がオンの場合、データのソート、結合、マー ジなどのタスクの処理は可能な限りCampaignサーバではなくデータベースサーバで実 行され、処理の出力セルはデータベースサーバ上の一時テーブルに格納されます。

必要なロジックによっては、データベース内処理がオンであっても、一部の機能はCampaignサーバ上で実行されます。 たとえば、Campaignはユーザ定義項目を計算するときに、最初にユーザ定義項目の式を評価して、SQLを使用して計算できる部分があるかどうかを確認します。 単純なSQLステートメントを使用して計算できる場合、その計算は「データベース内」で処理できます。 そうでない場合は、一時テーブルをCampaignサーバ上に作成して計算を処理し、プロセスの結果をフローチャート内のプロセスに保持します。

■ 出力セルサイズの制限を指定した場合や、一時テーブルがプロセスで使用できない場合は、データベース内処理を実行できません。

未加工SQLステートメントで構成されるカスタムマクロの処理はデータベース内処理で実行されますが、次の制限があります。

- すべての未加工SQLのカスタムマクロはselectで開始し、残りのテキストにfrom を1つだけ含んでいる必要があります。
- <TempTable>構文への挿入のみをサポートするデータベースでは、未加工SQLのカスタムマクロと同じオーディエンスレベルで同じデータソースにマッピングされるベーステーブルが少なくとも1つ必要です。未加工SQLのカスタムマクロで選択された項目が一時テーブルの項目に対して大きすぎる場合は、ランタイムエラーが発生します。
- 『データベース内処理で未加工SQLを使用している場合は、未加工SQLをコーディングしてアップストリームにあるプロセスの一時テーブルと結合する必要があります。こうしないと、結果はアップストリームにあるプロセスの結果で処理されません。

データベース内処理のオン/オフの切り替え

データベース内処理は、次のように設定できます。

- フローチャートごと
- グローバル(システム全体)

グローバル設定をオフにして、フローチャートレベルでオプションを設定することをお 勧めします。

フローチャートでデータベース内処理をオンまたはオ フにするには

個々のフローチャートのデータベース内処理オプションは、グローバル設定よりも優先 されます。

1. 編集モードのフローチャートページで、[システム管理]アイコンをクリックし、[詳細設定]を選択します。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

- 2. [フローチャート実行中にデータベース内最適化を使用する]チェックボックスをオンにします。
- 3. **[OK]**をクリックします。

フローチャートを保存、および実行したら、可能な場合はデータベース内処理が使用されます。

データベース内処理のオン/オフをグローバルに切り 替えるには

データベース内処理のオン/オフをグローバルに切り替えるには、設定ページのCampaign > partitions > partition[n] > server > optimization > useInDbOptimizationプロパティを適切な値(TRUEまたはFALSE)に設定します。

設定ページの詳細については、『Marketing Platform管理者ガイド』を参照してください。

プロセス内でのクエリの作成

特定のプロセスを設定するときに、クエリを使用してデータソースから特定のデータを返すことができます。Campaignでは、次の方法を使用してクエリを簡単に作成できます。

- ・ ポイント&クリック
- SQL入力
- 入力サポート
- SQL

Campaignプロセス内でのクエリの評価方法

Campaignプロセス内のクエリは、算術ルールを使用して左から右に評価されます。 たとえば、次のステートメントの場合:

[UserVar.1] < PDF < [UserVar.2]

は次のように評価されます。

([UserVar.1] < PDF) < [UserVar.2]

つまり、ステートメントの最初の部分([UserVar.1] < PDF)がTrueまたはFalse (1または0)と評価され、その結果が2番目のステートメントに渡されます。

[1 | 0] < [UserVar.2]

この例が[UserVar.1]よりも大きく[UserVar.2]よりも小さいPDFとして評価されるためには、次のクエリを構築する必要があります。

[UserVar.1] < PDF AND PDF < [UserVar.2]</pre>

このステートメントは以下と同等です。

([UserVar.1] < PDF) AND (PDF < [UserVar.2])

ポイント&クリックでクエリを作成するには

プロセス設定ダイアログのポイント&クリック機能を使用して、新しいクエリを作成する方法について説明します。

既存のクエリを編集するには、クエリ内の任意のアイテムをダブルクリックし、別の値を選択します。 [ソースの選択]ドロップダウンリストから新しい項目を選択すると、既存のクエリが削除されます。

1. セグメント、選択、書込みなど、クエリが必要なプロセスで、クエリテキストボックスを含むプロセス設定ダイアログにアクセスします。

既定では、ポイント&クリッククエリビルダが表示されます。 既存のクエリは、すべてクエリテキストボックスに表示されます。

- 2. 左側のテキスト領域(FieldName、演算子、値、And/Or)をクリックすると、選択された列で選択可能なオプションが、右側のボックスに表示されます。
 - [項目名]列をクリックすると、IBM Unica Campaign定義項目など、選択項目の リストが表示されます。 また、[ユーザ定義項目]をクリックして、ユーザ定義項 目を作成することもできます。
 - [演算子]列をクリックすると、演算子のリストが表示されます。
 - [値]列をクリックすると、[項目名]の選択に応じて、使用可能な値が表示されます。
 - [And/Or]列をクリックすると、演算子としてANDまたはORが表示されます。 複数のステートメントを作成するには、この列を使用します。
 - 式全体を選択すると、式の操作 (追加、削除、すべて消去、上へ移動、下へ移動、挿入、および削除)を実行するためのアクションが表示されます。
- 3. 左側のテキスト領域で各列のセルをクリックし、右側のリストでダブルクリックして選択し、クエリを作成します。 また、1回クリックしてから[<-使用]をクリックすることで、左側のテキストボックスに移動することもできます。
 - ☆ テーブル項目を選択すると、[プロファイル]をクリックすることで、選択した項目の値を確認できます。

4. クエリの構文を確認するには、**[構文チェック]**をクリックします。 クエリの構文を チェックしても、データベースサーバには負荷はかかりません。

エラーが検出されると、Campaignにより確認ウィンドウが表示されます。 **[OK]**をクリックします。

- 5. 実行中のクエリの結果を表示するには、[件数確認]をクリックします。
 - ↓ グローバル抑制とセルサイズの制限は、件数確認のカウントには適用されません。 クエリから、正規化されていないデータが返されることもあります。 正確な結果件数を得るには、プロセスをテスト実行してください。

クエリのテスト中は、進行状況バーが表示されます。 テストを停止する場合は[キャンセル]をクリックします。

テストが完了すると、Campaignの確認ウィンドウに、クエリから返された行数が表示されます。 (この数値は、キャンペーンが実際に実行された場合とは異なる場合があります。)

6. クエリの作成が完了したら、[OK]をクリックします。

SQL入力でクエリを作成するには

プロセス設定ダイアログのSQL入力機能を使用して、新しいクエリを作成する方法について説明します。

既存のクエリを編集するには、クエリテキストボックス内のクエリのテキストを直接編集します。

1. セグメント、選択、書込みなど、クエリが必要なプロセスで、クエリテキストボックスを含むプロセス設定ダイアログにアクセスします。

既定では、ポイント&クリッククエリビルダが表示されます。 既存のクエリは、すべてクエリテキストボックスに表示されます。

2. [SQL入力]をクリックします。

[ポイント&クリック]クエリ列が、空白のテキストボックスに置換されます。

3. **[ソースの選択]**ドロップダウンリストから、入力データソースと、クエリを実行するデータソースを選択します。

[ソースの選択]で選択した内容に応じて、[選択項目]のリストが表示されます。

- 4. 次の手順を実行して、クエリを作成します。
 - [選択項目]リストから項目名またはテーブル名を選択し、ダブルクリックしてクエリテキストボックスに挿入します。 また、1回クリックしてから[<-使用]をクリックすることで、クエリテキストボックスに移動することもできます。
 - 必須の演算子と値を入力します。 選択した項目の値を表示するには、[プロファイル]をクリックします。

- ☆ クエリテキストボックスに項目名とテーブル名を直接入力することもできますが、構文エラーを回避するために、リストから選択して入力することをお勧めします。
- 5. クエリの構文を確認するには、「構文チェック」をクリックします。

エラーが検出されると、Campaignにより確認ウィンドウが表示されます。 **[OK]**をクリックします。

クエリの構文をチェックしても、データベースサーバには負荷はかかりません。

- 6. 実行中のクエリの結果を表示するには、[件数確認]をクリックします。
 - ↓ グローバル抑制とセルサイズの制限は、件数確認のカウントには適用されません。 クエリから、正規化されていないデータが返されることもあります。 正確な結果件数を得るには、プロセスをテスト実行してください。

クエリのテスト中は、進行状況バーが表示されます。 テストを停止する場合は[キャンセル]をクリックします。

テストが完了すると、Campaignの確認ウィンドウに、クエリから返された行数が表示されます。 (この数値は、キャンペーンが実行された場合とは異なる場合があります。)

7. クエリの作成が完了したら、[OK]をクリックします。

プロセス設定ボックスが閉じられ、編集モードのフローチャートページに戻ります。

入力サポートを使用してクエリを作成するには

入力サポートを使用すると、選択可能な演算子や関数が表示され、それらを使用可能な項目と組み合わせてクエリを構築できます。 入力サポートを使用して、Campaignのマクロ言語や、カスタムマクロでクエリを構築することができます。

1. セグメント、選択、書込みなど、クエリが必要なプロセスで、クエリテキストボックスを含むプロセス設定ダイアログにアクセスします。

既定では、ポイント&クリッククエリビルダが表示されます。 既存のクエリは、すべてクエリテキストボックスに表示されます。

2. [SQL入力]をクリックします。

[ポイント&クリック] クエリ列が、空白のテキストボックスに置換されます。 [入力 サポート]ボタンが有効になります。

3. 「入力サポート」をクリックします。

クエリテキストボックスの下に、入力サポートが表示されます。 入力サポートには、よく使用される演算子を挿入するためのボタンと、マクロのリストがあります。

4. 次の手順を実行して、クエリを作成します。

- a. 入力サポート のマクロのリストから、使用するマクロを選択し、ダブルクリックしてクエリテキストボックスに挿入します。 マクロを選択すると、入力サポートには、選択されたマクロに関する簡単な説明と構文が表示されます。
- ☆ カスタムマクロを選択した場合、マクロに関する説明と構文は、マクロの作成者によって作成されたものです。
- b. 必要な演算子は、直接入力するか、入力サポートのボタンを使用して入力します。
- ☆ クエリテキストボックスに項目名とテーブル名を直接入力することもできますが、構文エラーを回避するために、リストから選択して入力することをお勧めします。
- 5. **SQL**入力を使用して、クエリの作成を続行します。
- 6. クエリの作成が完了したら、[閉じる]をクリックします。 入力サポートが終了します。
- 7. [OK]をクリックして、プロセス設定ダイアログを終了します。

SQLを使用したクエリの作成

経験豊富なSQLユーザであれば、独自のSQLクエリを作成したり、他のアプリケーションで作成されたSQLクエリをコピーして貼り付けることで使用できます。 未加工SQLの作成はCampaignの高度な機能であり、正しい構文とクエリ結果についてはユーザの責任です。

『データベース内最適化が有効で選択プロセスに対して入力セルが存在している場合、選択プロセスで未加工SQLを使用して正しい結果(正しいオーディエンスIDのリスト)を得るには、<TempTable>トークンを使用する必要があります。 これに加え、<TempTable>トークンを使うと、データベース内最適化を使用していない場合であっても、Campaignが非常に大きなテーブルを処理する際のパフォーマンスを大幅に改善できます。

SQLクエリは、ベーステーブルのキーで定義に従って、一意のIDのみのリストを返す必要があります。

クエリには次の構文を使用する必要があります。

SELECT DISTINCT(<key1>[<key2>,...]) FROM <table> WHERE <condition> ORDERBY <unique_id>

クエリはデータベースを要求して、ソートとデータの重複解消を実行します。 DISTINCT句またはORDERBY句を省略しても、Campaignはアプリケーションサーバ上 でデータのソートと重複解消を実行します。そのため、正しい結果を得られますが、パ フォーマンスは遅くなります。

• [すべての顧客IDを選択]を選択した場合は、選択プロセスの実行前または実行後に、指定したデータベース内のレコードに対して実行する未加工SQLコマンドを作成できます。

• 上記に加え、選択条件を顧客IDに適用することも選択した場合は、選択条件の作成時にクエリビルダでの未加工SQLの使用を有効にすることもできます。 それ以外の場合は、Unica式とカスタムマクロのみを使用できます。

Campaignでの未加工SQLステートメントの構築

クエリが必要なプロセスでは、クエリ編集ウィンドウで[詳細設定]をクリックして[詳細 設定]機能にアクセスします。 実際の機能はプロセスによって異なります。

たとえば選択プロセスでは、[詳細設定]を使用して、未加工SQLを使用するクエリを作成したり、前処理/後処理SQLコマンドを実行したりできます。

[詳細設定]ウィンドウには、2つのペインがあります。

- 前処理 クエリの実行前に処理される未加工SQLを入力します。
- 後処理 クエリの実行後に処理される未加工SQLを入力します。

この機能ではSQL手順をプロセス実行の一部として組み込むことができ、Campaignを使用してETL、ルーチンマートの更新、インラインパフォーマンスの調整、セキュリティ機能などを含む作業を行う場合に役立ちます。

前処理および後処理SQLステートメントを[詳細設定]で使用して、次のことを実行できます。

- データベース内のストアドプロシージャを実行する
- テーブルおよびインデックスを作成、ドロップ、再作成する
- 他のユーザやグループの権限を付与または変更する
- 複数のステップから成るデータベースコマンドを整理する
- 外部スクリプトを使用してデータベースに接続する必要なく、複雑なデータベース ルーチンを実行する

SQLステートメントは表示順に実行されます。

- 前処理SQLステートメントはクエリの実行前に実行されます。
- 後処理SQLステートメントはクエリの実行後に実行されます。

これらは、選択プロセスのクエリで未加工SQLまたは標準処理と一緒に使用できます。

未加工SQLクエリとデータベース内処理

未加工SQLクエリを使用したデータベース内処理の詳細については、「プロセスに対するデータベース内処理の選択について」を参照してください。

未加工SQLクエリでのTempTableトークンおよびOutputTempTableトークンの使用

選択プロセスで入力セルと併せて未加工SQLクエリを使用すると、データベース内最適化が有効な場合と無効な場合でCampaignの動作が異なります。

データベース内最適化が無効な場合、未加工SQLクエリのIDリストは入力セルのIDリストと自動的に照合されるため、IDの結果リストは予想されるセルのサブセットになります。 ただし、データベース内最適化が有効な場合、Campaignは選択プロセスで生成されるIDリストが最終的なリストであると見なすため、このリストを入力セルのIDリストと自動的に照合しません。 したがって、データベース内最適化が有効な場合は、中間の選択プロセス(入力セルを伴う選択プロセス)用の未加工SQLクエリで<TempTable>トークンを使用して、入力セルと適切に結合させることが重要です。 これにより結果が正しくなるだけでなく、入力セルとの結合により、入力セル内にないオーディエンスIDに対する外部からの処理がされなくなるためパフォーマンスも向上します。

☆ データベース内最適化を使用していない場合でも、<TempTable>トークンを使用することをお勧めします。 <TempTable>トークンを使用すると、パフォーマンスを飛躍的に向上できます。特にCampaignが非常に大きなテーブルを処理する際には顕著です。

さらに、<OutputTempTable>トークンを使用することでデータベース内最適化が維持され、データベースから取得されるオーディエンスIDがCampaignサーバに戻されなくなります。

例: TempTableトークンとOutputTempTableトークンの使用

「ゴールド」の顧客10,000人を選択するSelect1プロセスがあるとします(例: Indiv.AcctType = 'ゴールド')。 未加工SQLクエリを使用して、Select1を2番目の選択プロセス("Select2")に接続します。

Select p.CustID from Indiv p, <TempTable> where p.CustID =
<TempTable>.CustID group by p.CustID having sum(p.PurchAmt) > 500

この例では、購入額の合計が\$500を超えていて、入力セル内にある顧客(つまりアカウントタイプが「ゴールド」の顧客)を選択します。

これとは対照的なのが、<TempTable>トークンを省略して結合する未加工SQLクエリです。

Select p.CustID from Purchases p group by p.CustID having sum(p.PurchAmt) > 500

まずPurchasesテーブルのすべての顧客(顧客数が数百万になる場合もある)の購入額の合計を計算し、次に「ゴールド」の顧客であるかどうかには関係なく、購入額の合計が\$500を超える顧客をすべて選択します。

このため、パフォーマンスを最適にするため、データベース内最適化が無効になっている場合であっても、入力セルがあるときは<TempTable>トークンを使用して未加工SQLクエリを作成することをお勧めします。

簡素化する目的で、この例では<OutputTempTable>トークンを使用していませんが、 データベース内最適化を維持してデータベースから取得されるオーディエンスID がCampaignサーバに戻されないようにするには、<OutputTempTable>トークンを未加 エSQLクエリに含める必要があります。 例:

Create table <OutputTempTable> as Select p.CustID from Purchases p, <TempTable> where p.CustID = <TempTable>.CustID group by p.CustID having sum(p.PurchAmt) > 500

未加工SQLクエリでの書込みテーブルの参照

<Extract>トークンを使用して、未加工SQLクエリからダウンストリームプロセス内の書込みテーブルを参照できます。 後続の処理用にデータのサブセットを指定するには、このトークンを使用します。これにより、大きなテーブルを使用している場合のパフォーマンスを改善できます。

次の例は書込みテーブルをクエリして、口座残高が\$1,000以上のすべての顧客の顧客IDを選択します。

Select p.CUSTOMERID from USER_TABLE p, <Extract> where p.CUSTOMERID =
<Extract>.CUSTOMERID group by p.CUSTOMERID having sum(p.BALANCE) >
1000

複数の書込みプロセスを含むフローチャートでは、<Extract>トークンは最新の使用可能な書込みテーブルを常に参照します。

☆ マージの後は、⟨Extract⟩トークンが有効な場合と有効でない場合があります。
フローチャートをテスト実行して、トークンが正常に動作するかどうかを判断してください。

SQLテキスト入力領域で未加工SQLクエリを作成するには

- 選択プロセスの[ソース]タブで、[条件を指定してデータ選択]オプションを有効にします。
- [詳細設定]をクリックします。
 [詳細設定]ウィンドウが開きます。
- 3. [未加工SQLを利用してデータ選択]を有効にします。
- 4. **[データベース]**ドロップダウンリストから、クエリを実行するデータソースを選択します。
- 5. **[オーディエンスレベル]**ドロップダウンリストから、ターゲットにするオーディエンスを選択します。
- 6. [OK]をクリックして、[詳細設定]ウィンドウを終了します。
- 7. SQLテキスト入力領域の内側をクリックします。
- 8. 次の手順を実行してクエリを構築します。
 - SQLテキスト入力パネルで、未加工SQLを入力する
 - 入力サポートを使用する
 - ポイント&クリックを使用する
 - ☆ [ポイント&クリック]をクリックすると、非SQLクエリ式の構築に戻ります。
- 9. (オプション) [件数確認]をクリックします。

- ↓ グローバル抑制とセルサイズの制限は、件数確認のカウントには適用されません。 クエリから、正規化されていないデータが返されることもあります。 正確な結果件数を得るには、プロセスをテスト実行してください。
- 10. クエリの構築とテストが終了したら、**[OK]**をクリックしてウィンドウを閉じ、設定を保存します。

未加工SQLステートメントで複数のコマンドを渡すには

未加工SQLステートメントで複数のコマンドを渡すことができます。

データベースで複数のコマンドを渡すことが許されている場合、必要な数だけ有効なSQLコマンドを入力できますが、その際は次のルールに従う必要があります。

- コマンドが適切な区切り記号で区切られていること。
- 最後のコマンドはselectコマンドであること。
- このselectコマンドでは、オーディエンスレベルを定義するために必要なすべての関連項目を、オーディエンスレベルの定義と同じ順番で選択すること。
- それ以外のselectコマンドは使用できません。
- 1. 選択プロセスの[ソース]タブで、**[条件を指定してデータ選択]**オプションを有効にします。
- 2. [詳細設定]をクリックします。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

- 3. [未加工**SQLを**使用する]をクリックして有効にします。
 - これにより、データベースに正確なクエリ構文を渡す機能である、未加工SQLが有効になります。
- 4. 使用するデータベースと、必要なオーディエンスレベルを選択します。 [OK]をクリックします。
- 5. **[条件を指定してデータ選択]**テキストボックスにSQLコマンドを入力します。 **[OK]**をクリックします。

前処理または後処理SQLステートメントを指定するには

- 選択プロセスの[ソース]タブで、[詳細設定]をクリックします。
 [詳細設定]ウィンドウが開きます。
- 2. 前処理未加工SQLステートメントを入力するには、[前処理]項目の内側をダブルク リックし、プロセスの実行前に実行するSQLステートメントを入力します。
- 3. 次に、その行の[データベース]項目をクリックし、このステートメントを実行する データベースの名前を選択します。

- ☆ [データベース]ドロップダウンリストに、使用可能なすべてのデータベースが表示されます(Marketing Platformの設定ページで、データソースカテゴリが設定されているもの)。 このドロップダウンリストにデータベースが表示されない場合は、Campaignシステム管理者にお問い合わせください。
- 4. リストパネルにSQL関数のみを表示する場合は、[SQL]チェックボックスをクリックして選択します。 再度クリックして選択を解除すると、使用可能な関数と演算子がすべて表示されます。
 - ☼ [詳細設定]ウィンドウで[未加工SQLを使用する]オプションが既に有効になっている場合は、入力サポートの[SQL]オプションが有効になっています。 これによりCampaignのマクロ関数が非表示になり、SQL演算子と関数のみが表示されます。

項目のプロファイル

プロファイル機能では、選択した項目についての個別の値およびその値の発生頻度のリストをプレビューできます。 [プロファイル]ボタンが表示されるプロセスで使用できる項目(セグメントプロセスの[データ項目で作成]ドロップダウンリストや、その他のプロセスの設定ダイアログの[選択項目]リストや[候補項目]リストなど)は、いずれもプロファイルできます。 カウントが事前集計されていない限り、現在のセルのレコードだけがカウントされます。

☆ 項目をプロファイルするには、適切な権限が必要です。 この機能へのアクセスについて質問がある場合は、システム管理者に問い合わせてください。

項目をプロファイルするには

Campaignでは、対応する[プロファイル]ボタンが含まれる項目で項目を選択すると、その項目が自動的にプロファイルされます。 マップされたどのデータソースのどの項目 でもプロファイルできます。

1. [プロファイル]ボタンが表示されているプロセスの設定ウィンドウで、プロファイル する項目を選択します。 ユーザ定義項目もプロファイルできます。

[プロファイル]ウィンドウが開きます。

選択した項目のデータがCampaignでプロファイルされます。 プロファイルが進行する につれてカテゴリおよび頻度の数が動的に更新されます。

☆ プロファイル結果を使用する前にプロファイルが完了するまで待機し、すべてのカテゴリが処理されてカウントが完全であることを確認します。

プロファイルが完了すると、[プロファイル]ウィンドウが表示されます。

• 選択した項目の値のリストが[カテゴリ]列に表示され、対応するIDの[カウント]にそ の値が表示されます。

- ☆ 表示可能なカテゴリの最大数(値の瓶数)は25です。Campaignではカテゴリの最大数の値が自動的に表示され、それらの値はグループ化されてほぼ同じサイズのセグメントが作成されます。カテゴリの最大数は変更できます。
- 右側の[統計情報]ペインには、IDの合計数とその項目のデータに関する次のような 詳細情報が示されます。
 - 検出されたNULL値の数
 - その項目のカテゴリ(または値)の合計数
 - 平均値、標準偏差、最小値、最大値などのデータの統計値
 - ☆ ASCIIテキスト項目では、[平均値]、[標準偏差]、[最小]、および[最大]は使用できません。 テキスト項目をプロファイルすると、これらの値はすべてゼロとして表示されます。

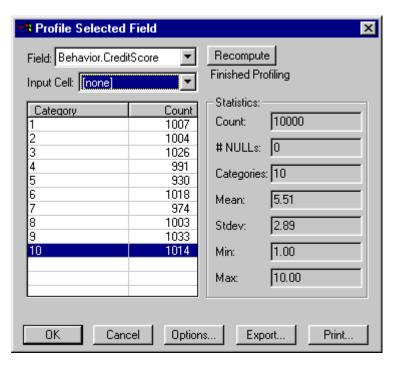
プロファイルの入力制限

Campaignは項目をプロファイルするときに、プロファイルを実行しているプロセスへの入力として使用できるセグメントだけを作成します。

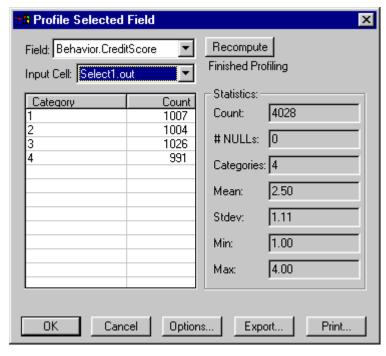
つまり、セグメントプロセスへの入力を制限し、制限された同じ項目に基づいてデータをプロファイルする場合、このプロファイルの結果で表示されるのは制限された入力として使用できるセグメントだけです。

たとえばセグメントプロセスで、10段階ある信用スコアレベルのリストから信用スコアが5未満のIDだけを選択するクエリを使用して、この同じ項目(この例ではBehavior.CreditScore)をプロファイルすると、Campaignは残りの4つの信用スコアレベルに対応する4つのセグメントだけを表示します。

次の例は、制限のないプロファイル([プロファイル]ウィンドウで[入力<mark>セル]が[なし]</mark>に設定されている)と制限されたプロファイル(**[入力セル]**が[Select1.out]に設定されている)を比較します。



[プロファイル]ウィンドウで、[入力セル]が[なし]に設定されています。 プロファイリングが実行されると、Behavior.CreditScore項目の10段階すべての値が表示されます。



[プロファイル]ウィンドウで、[入力セル]が[Select1.out](信用スコアが1から4に制限された現在のプロセスへの入力を指定する選択プロセスからの出力セル)に設定されています。

プロファイルが実行されると、入力セルで使用できる値にそれぞれ対応する4つのカテゴリだけが表示されます。

プロファイルの無効化

リアルタイムプロファイルでは、選択した項目の特性の表示や使用ができます。 ただし、大きなデータベースを使用している場合はパフォーマンスに影響します。 このためCampaignでは、このオプションを無効にできます。

リアルタイムプロファイルが無効な場合に[プロファイル]をクリックすると、[プロファイル]ウィンドウが表示されますが、リアルタイムプロファイルが使用できないことを示すメッセージがウィンドウの下部に表示されます。

プロファイルが無効化されていて項目を事前集計項目として設定できない場合、[プロファイル]ウィンドウに使用可能なデータがないことが表示され、カウントやカテゴリは表示されません。また、**[統計情報]**のすべてのカウントはゼロになります。

事前集計値が項目に対して使用できる場合、プロファイルが実行されると、無効な「ライブ」値に代わってこれらの値が表示されます。 [プロファイル]ウィンドウには、「インポートされた」データソースであることが示され、事前集計値の最終更新日時が表示されます。

リアルタイムプロファイルの無効化の詳細については、『Campaign管理者ガイド'』を 参照してください。

プロファイルオプションの設定

プロファイル機能の動作は、次のようにして制御できます。

- プロファイルの入力制限
- プロファイルの無効化

さらに、次のオプションは[プロファイルオプション]ウィンドウで設定できます。

- プロファイルセグメントの最大数の指定
- データ型による並べ替え

[プロファイルオプション]ウィンドウにアクセスするには

1. [プロファイル]オプションを使用できるプロセス設定ダイアログで、プロファイルを 行う項目を選択するか、**[プロファイル]**をクリックします。

[プロファイル]ウィンドウが開きます。

[プロファイル]ウィンドウで[オプション]をクリックします。
 [プロファイルオプション]ウィンドウが開きます。

プロファイルセグメントの最大数の指定

項目をプロファイルすると、Campaignは、[プロファイルオプション]ウィンドウで設定されている最大数までセグメントが自動的に作成されます。 既定では、最大25個のセグメントを作成できます。

プロファイルに使用するセグメントの最大数は変更可能です。 この設定を一度変更すると、リセットしない限り、後続のすべてのプロファイルで新しい設定が使用されます。

プロファイリングしている項目の個別の値の数がセグメントの最大許容数を超える場合、最大セグメント数を超えないように、ほとんど同じサイズのセグメントに複数の値がまとめられます。

プロファイリングのための最大セグメント数を設定するには

- [プロファイル]ウィンドウで[オプション]をクリックします。
 [プロファイルオプション]ウィンドウが開きます。
- 2. **[セグメント数]**項目で、項目値をグループ化する際の最大セグメント数を整数で入力します。 既定値は25です。
- 3. **[OK]** をクリックして設定を保存し、[プロファイル]ウィンドウに戻ります。 プロファイルは、セグメント最大数の新しい設定を使用して再計算されます。

データ型による並べ替え

[プロファイルオプション]ウィンドウの[データ型による並べ替え]チェックボックスを有効または無効にして、プロファイルする(並べ替える)ときにメタデータ型情報を使用するかどうかを指定できます。

通常は、[データ型による並べ替え]を有効にします。 日付、金額、電話番号、その他の数値情報を含む項目に関連付けられたデータ型は、ASCIIテキストに基づいて単にソートされるのではなく、メタデータ情報を使用して正しくソートおよび破棄されます。

たとえば、次の表は、日付項目をデータ型情報を使用してソートした場合とデータ型情報を使用せずにソートした場合を示します。 データ型を使用せずにプロファイル(並べ替え)を行うと単に数値でソートされた結果になりますが、データが日付として書式設定されていることを認識するデータ型を使用してプロファイル(並べ替え)を行うと、データはデータ型に従ってソートされます。

データ型による並べ替え	データ型を使用しない並べ替え
25-DEC-2006	20-FEB-2007
20-FEB-2007	20-MAR-2007
20-MAR-2007	25-DEC-2006

プロファイル数の更新

結果が変わる可能性のある何らかの要因(たとえば、新しい値が項目に追加されたなど)が発生したときや、データベーステーブルが更新された可能性があるときは、プロファイル数の更新が必要になる場合があります。

[プロファイル]ウィンドウの項目に対してプロファイル結果を更新するには、[再計算]を クリックします。

☆ ディメンションテーブルの項目を最初にプロファイルする場合、Campaignはディメンションテーブル内の項目と一致する件数を返します。 [再計算]をクリックしてプロファイル結果を更新する場合、Campaignはディメンションテーブルにリンクされているベーステーブルとの結合結果から件数を返します。 ベーステーブルを結合せずにディメンションテーブルの項目をプロファイルするには、ディメンションテーブルをベーステーブルとしてマッピングします。

クエリにプロファイルカテゴリを挿入するには

プロセス設定ダイアログでクエリ式を構築するときに、クエリ式に項目値を挿入できます。

- 1. 選択された項目に対し、プロファイルを実行します。
- 2. プロファイルが終了したら、[プロファイル]ウィンドウでカテゴリをダブルクリックして、値をクエリテキストボックスの現在のカーソル位置に挿入します。
 - ☆ 必要な値が見当たらない場合は、プロファイルセグメントで複数の値がグループ 化されている可能性があります。プロファイルセグメントの最大数として、([プロファイル]ウィンドウでレポートされる)カテゴリの数よりも大きな値を設定した場合、各項目値は別々のカテゴリとして一覧に表示されます。これにより、すべての既存のカテゴリにアクセスできるようになります。

プロファイルの結果を印刷するには

- 「プロファイル]ウィンドウで[印刷]をクリックします。
 [ページ設定]ページが表示されるので、プリンタおよび印刷オプションを指定します。
- 2. [OK]をクリックして、プリンタに印刷ジョブを送信します。

プロファイルデータをエクスポートするには

項目でプロファイルを実行後、プロファイルデータを区切り記号付きのテキストファイルにエクスポートできます。

- 1. [プロファイル]ウィンドウで、[エクスポート]をクリックします。
 - ☆ プロファイルが終了するまで、[エクスポート]ボタンは使用できません。

[エクスポート]ウィンドウが開きます。

- 2. (オプション)[先頭行に項目名を出力]チェックボックスを選択すると、エクスポート されるデータに列見出しを含めることができます。
- 3. 【エクスポート】をクリックします。

[ファイルのダウンロード]ウィンドウが開きます。

4. **[開く]**をクリックしてプロファイルデータを開くか、**[保存]**をクリックしてファイル の保存先を指定します。

[開く]をクリックすると、プロファイルデータがスプレッドシートのウィンドウに表示されます。

[保存]をクリックすると、[名前を付けて保存]ウィンドウが開きます。

- 5. [保存]をクリックした場合は、[名前を付けて保存]ウィンドウで、エクスポートファイルの保存先に移動し、エクスポートファイルの名前を入力します。 既定では、エクスポートファイルの名前はCampaign.xlsファイルです。
- 6. **[OK]**をクリックします。

指定されたファイルにデータがエクスポートされます。 [ダウンロードが完了しました]ウィンドウが開きます。

コンタクトログ用の出力ファイルまたはテーブ ルの指定

メールリストやコールリストなどのコンタクトプロセスの結果の出力先として、次のものを指定できます。

- システムテーブル
- ユーザが指定する新規または既存の外部ファイル
- マップされていないデータベーステーブル

コンタクトログ用に出力ファイルを指定するには

1. 編集モードのフローチャートで、プロセス設定ダイアログの[エクスポート先]または[保存先]ドロップダウンリストから、[ファイル]を選択します。 [ファイル]オプションは、通常はリストの一番下(マッピングされたテーブルのリストの下)に表示されます。

[出力ファイルの指定]ウィンドウが開きます。

- 2. 書き込むファイルのタイプを選択します。
 - [データディクショナリ付きフラットファイル]は、新しい固定長のファイルと、 新しいデータディクショナリファイルを作成する場合に指定します。
 - [既存のデータディクショナリに基づくフラットファイル]は、新しい固定長のファイルを作成し、既存のデータディクショナリファイルを選択する場合に指定します。
 - [区切り記号付きファイル]は、項目値がタブ、カンマ、またはその他の文字で区切られた、新しいファイルを作成する場合に指定します。
- 3. [区切り記号付きファイル]を選択した場合は、次のようにします。

- [タブ]、[カンマ]、または[その他]オプションを選択します。 [その他]を選択した場合は、区切り記号として使用する文字を[その他]項目に入力します。
- ファイルの1行目に、データの各列のラベルを含めるには、[先頭行のラベルを含める]をチェックします。
- 4. [ファイル名] 項目に、ファイルの完全なパスと名前を入力します。 [参照]をクリックすると、ディレクトリ内を移動して、既存のファイルを選択できます。
 - ☆ 出力ファイル名にはユーザ変数を使用できます。 たとえば、MyFile<UserVar.a>.txtをテーブル名として指定し、プロセス実行時のユーザ変数「a」の値が「ABC」である場合、出力はMyFileABC.txtというファイルに書き込まれます。 フローチャートの実行前にユーザの初期値と現在の値を設定する必要がある点にご注意ください。
- 5. Campaignでは、入力したファイルと同じ名前で、同じ場所にある.dctファイルが、「データディクショナリ」項目に自動的に挿入されます。
- 6. 別のデータディクショナリを使用する場合、またはデータディクショナリの名前を変更する場合は、データディクショナリファイルの完全なパスと名前を[データディクショナリ]項目に入力します。
- 7. **[OK]**をクリックします。

[出力ファイルの指定]ウィンドウが閉じます。 プロセス設定ダイアログに戻ります。**[エクスポート先]、[保存先]** 項目には、入力したパスとファイル名が表示されます。

コンタクトログ用にデータベーステーブルを指定する には

1. プロセス設定ダイアログの[エクスポート先]または[保存先]ドロップダウンリストから、[新規テーブル] または [データベーステーブル]を選択します。 このオプションは、通常はリストの一番下(マッピングされたテーブルのリストの下)に表示されます。

[データベーステーブルの指定]ウィンドウが開きます。

- 2. テーブル名を指定します。
 - ☆ テーブル名にはユーザ変数を使用できます。 たとえば、MyTable<UserVar.a>を テーブル名として指定し、プロセス実行時のユーザ変数「a」の値が「ABC」で ある場合、出力はMyTableABCというテーブルに書き込まれます。 フロー チャートの実行前にユーザの初期値と現在の値を設定する必要がある点にご注意 ください。
- 3. ドロップダウンリストからデータベース名を選択します。
- 4. **[OK]**をクリックします。

[データベーステーブルの指定]ウィンドウが閉じます。 プロセス設定ダイアログに戻ります。[エクスポート先]、[保存先]項目には、入力したデータベーステーブルの名前が表示されます。

- 5. 指定した名前を持つテーブルが既に存在する場合は、出力データを書き込むための オプションを選択します。
 - [データ追記] このオプションを選択した場合、既存のテーブルには、出力 データと互換性のあるスキーマが必要です。 つまり、項目名と項目のタイプが 一致し、項目サイズが出力データの書き込みに十分である必要があります。
 - [データ置換] このオプションを選択した場合、テーブルの既存の行は、新しい行に置換されます。

乱数選択用の種の変更

乱数種は、レコードをランダムに選択するためにCampaignが使用する開始点を表します。 レコードをランダムに選択している場合、次のような状況では乱数種を変更することがあります。

- まったく同じ順序の同じ数のレコードがあり、このプロセスを実行するたびに同じ 種値を使用することでレコードが同じサンプルに作成される場合。
- 現在のランダムサンプルでは非常に偏った結果になる場合(たとえば、データ内のすべての男性が1つのグループに、すべての女性が別のグループに分かれるなど)。

レコード選択用の乱数種を変更するには

プロセス設定ダイアログの**[セルサイズの制限]** タブで、次のいずれかの方法を使用してランダム選択の開始点を変更します。

- [乱数種]テキストボックスに数値を入力する。
- 「選択]をクリックして、Campaignに新しい種値をランダムに選択させる。

プロセス出力での重複IDの除外

書込み、コールリスト、メールリスト、およびスナップショットプロセスでは、プロセス出力で重複IDをどのように扱うかを指定できます。 既定では、出力で重複IDが許可されます。 出力から重複IDを除外するよう指定するには、次の手順を実行します。

1. プロセスの設定ウィンドウで[詳細]をクリックします。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

a. 重複IDを持つすべてのレコードを除外するよう設定するには、[重複IDのデータを除外]チェックボックスをオンにし、重複IDが返される場合にどのレコードを維持するかを決定するためにCampaignで使用される条件を選択します。 たとえば、MaxOfおよびHousehold_Incomeを選択すると、重複IDが返されたときに、世帯収入が最も多いIDのみをCampaignがエクスポートするように設定できます。

- ☆ このオプションでは、同一の入力項目での重複のみが除外されます。 複数の項目に同じIDが存在する場合は、データの重複IDは許容されます。 すべての重複IDを除外するには、書込みプロセスの上流工程にあるマージプロセスまたはセグメントプロセスを使用して、重複IDを消去するか、データの重複を許可しないセグメントを作成する必要があります。
- 2. **[OK]**をクリックして、[詳細設定]ウィンドウを終了します。 重複ID設定が設定ウィンドウに表示されます。

カレンダーツールを使用するには

Campaignでは、どの項目でもカレンダーツールを使用して、日付の値を入力することができます。

- 日付値が必要な項目の横にある、省略記号ボタンをクリックします。
 カレンダーツールが表示されます。 既定では、その日の日付が選択されています。
- 2. 表示されている月の日をクリックして選択するか、次の操作を実行します。
 - 月を変更するには、「月」ドロップダウンリストを使用します。
 - 年を変更するには、上矢印または下矢印を使用します。
- 3. **[OK]**をクリックして項目に指定日を入力し、[カレンダー]ウィンドウを終了します。

6 IBM Unica Campaignプ ロセス

- プロセスのリスト
- データ操作プロセス
- 実行プロセス
- 最適化プロセス

プロセスのリスト

Campaignでは、プロセスタイプで分類される次のプロセスを使用できます。

各プロセスの該当セクションで、そのプロセスの設定手順について説明します。 各プロセスの設定手順は、設定前にそのプロセスをフローチャートに追加していることが前提になっています。 プロセスをフローチャートに追加する方法の詳細については、「新規プロセスをフローチャートに追加するには」を参照してください。

プロセスを設定する一般手順については、「プロセスの操作」も参照してください。 Campaignには、次のプロセスタイプが用意されています。

- データ操作プロセス
- 実行プロセス
- 最適化プロセス

☼ Interact、Optimize、およびeMessageには、その他のプロセスもあります。 詳細については、各製品のマニュアルを参照してください。

データ操作プロセス

Campaignには、次のデータ操作プロセスが用意されています。

- オーディエンス
- 書込み
- マージ
- サンプル
- セグメント

• 選択

オーディエンス

オーディエンスレベルは、アカウント、顧客、世帯、製品、または部門など、操作するターゲットエンティティを定義します。また、テーブルマッピングプロセス中にシステム管理者によって定義されます。

オーディエンスレベルを切り替えたり、オーディエンスレベルでIDをフィルタリングするには、フローチャート内でオーディエンスプロセスを使用します。 このプロセスを使用して、別のレベルに関連した1つのレベルのすべてのエンティティ、複数のエンティティ、または1つのエンティティを選択できます。

たとえば、オーディエンスプロセスを使用して次のことを行うことができます。

- ビジネスルール(たとえば、最年長の男性、または残高が一番高い人など)に基づいて、1世帯につき1人の顧客を選択する
- 特定の顧客グループに所属するすべてのアカウントを選択する
- 特定の顧客グループに所属し、残高がマイナスになっているすべてのアカウントを 選択する
- 当座預金口座を持つ個人がいる全世帯を選択する
- 指定期間内に3回以上の買い物をした顧客を選択する
- ☆ オーディエンスプロセスは、どのような定義済みテーブルからでも選択できるため、フローチャート内で最初にデータを選択するための最上位プロセスとして使用することもできます。

関連トピック

- ・オーディエンスレベル
- 世帯設定
- レベルの切り替え
- オーディエンスプロセスの設定

オーディエンスレベル

オーディエンスレベルは、アカウント、顧客、世帯、製品、部門など、顧客データの保存方法を示すキーエンティティを表します。 オーディエンスレベルは、必要に応じて階層的に整理できます。 顧客マーケティングデータベースで一般的に使用される階層的オーディエンスレベルの例を次に示します。

- 世帯 > 顧客 > アカウント
- 会社 > 部門 > 顧客 > 製品

社内で、無制限にオーディエンスレベルを定義して使用できます。 複数のオーディエンスレベル(たとえば、顧客と世帯)を使用している場合、業務上の目的を達成するために、オーディエンスレベルとオーディエンスプロセスをどのように使用するのか理解しておく必要があります。

オーディエンスレベルは、Campaign管理者により作成され、管理されます。 オーディエンスレベルから別のオーディエンスレベルに移動するには、両方のオーディエンスレベルのキーが同じテーブル内で定義されている必要があります。 これにより、切り替えるオーディエンスレベルを検索できます。

オーディエンスレベルはグローバルであり、マッピングされた各ベーステーブルに添付されます。したがって、フローチャートが読み込まれると、そのフローチャート内のテーブルマッピングと共にオーディエンスレベルが読み込まれます。

Campaignでテーブルをマッピングする権限がある場合には、新しいテーブルをマッピングする際、テーブルを1つ以上の既存のオーディエンスレベルにマッピングできますが、新しいオーディエンスレベルを作成することはできません。 適切な権限があるユーザのみ(通常はシステム管理者)が、Campaignでオーディエンスレベルを作成できます。

オーディエンスプロセスでは、入力オーディエンスレベルと出力オーディエンスレベルを指定します。 入力オーディエンスレベルと出力オーディエンスレベルは、同じ(たとえば、両方を「顧客」)にでも、別々(たとえば、「顧客と世帯」)にでもできます。オーディエンスプロセスを使用して、同じオーディエンスレベルのままにしたり、オーディエンスレベルを切り替えたりできます。

世帯設定

「世帯設定」とは、別のオーディエンスレベルを使用して、現在のオーディエンスレベルのメンバ数を削減することを示す一般的な用語です。 「世帯設定」の最も一般的な例は、各世帯の対象顧客1人を識別することです。 たとえば、次のようなマーケティングビジネスルールに従って、1世帯当たり1個人を選択します。

- 口座残高が一番多い個人
- 特定の製品カテゴリで最も購入金額が大きい個人
- 在職期間が一番長い個人
- 世帯内の18歳以上の一番若い男性

オーディエンスプロセスを使用して、ユーザ指定条件に基づいてオーディエンスレベルを変更し、IDをフィルタリングできます。

レベルの切り替え

複雑なキャンペーンでは、最終的なターゲットエンティティのリストにたどり着くまでに複数のオーディエンスレベルでの処理が必要な場合があります。 たとえば、1つのオーディエンスレベルから始まり、計算を実行してこの出力を取得し、次に、別のオーディエンスレベルに移動して他の計算を実行する場合などです。

たとえば、次のように、複数レベルでの複雑な抑制が必要となる場合があります。 顧客と口座間に1対多または多対多のリレーションシップがあるデータモデルで、マーケティングアナリストが次の操作を行うキャンペーンを構築します。

- 特定の条件を満たす顧客の全口座を削除する(たとえば、債務不履行の口座を削除する)
- 特定の条件を満たす特定の口座を削除する(たとえば、低収益の全口座を削除する)

この例では、キャンペーンは顧客レベルから始まります。顧客レベルの抑制を実行し(債務不履行の口座を抑制)、次に口座レベルに切り替えます。口座レベルの抑制(低収益の口座を抑制)を適用したら顧客レベルに戻り、最終的なコンタクト情報を取得します。

オーディエンスプロセスの設定

オーディエンスプロセスを使用するには、複数のオーディエンスレベルが定義されているテーブルを操作する必要があります。 これらのレベルは1つのテーブル内で定義され、あるレベルから別のレベルにリレーションシップが「翻訳」されます。

- 1つのキーが、そのテーブルの「プライマリ」キー、または「既定の」キーとして定義されます。 (この既定のキーは、このデータソースに対して最も頻繁に使用されるオーディエンスを表します。)
- 他のキーは、オーディエンスレベルの切り替えに使用できる「代替」キーです。

オーディエンスレベルを切り替えると、Campaignで、既定のキーが同じオーディエンスレベルのテーブルのみが表示されます。 定期的に複数のオーディエンスレベルで作業する場合、Campaign内で、複数回同じテーブルを異なるプライマリ(既定の)キーでマッピングする必要が発生する場合があります。 1つのテーブルに関連付ける既定のレベルは、テーブルマッピングプロセス中に指定されます。 テーブルのマッピングの情報については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

オーディエンスプロセスの設定ダイアログで使用できるオプションは、状況によって異なります。

- 入力オーディエンスレベルと出力オーディエンスレベルを同じにするか別々にする か
- これらのテーブルでオーディエンスレベル値が正規化されているかどうか
- 選択されたテーブルに複数のオーディエンスレベルが定義されているかどうか

このため、以降のセクションで説明するすべてのオプションは、入力/出力テーブル選 択のすべての組み合わせにおいて使用できるわけではありません。

オーディエンスプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがオーディエンスプロセスによって入力 として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、オーディエンスプロ セスが接続されていることを確認します。
- 2. フローチャートの作業空間でオーディエンスプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [入力]ドロップダウンリストから、入力データソースを選択します。 1つ以上のプロセスがオーディエンスプロセスに接続されている場合、使用可能な入力ソースとしてそれらの出力セルも表示されます。

入力データソースを選択すると、その入力に対応するオーディエンスレベルが[入力]項目の隣に表示されます。オーディエンスプロセスへの入力がない場合、オーディエンスレベルは「未選択」と表示されます。選択オプションにも入力オーディエンスレベルが反映されます。

たとえば、入力オーディエンスを選択する前の[選択]オプションのラベルは、[1エントリずつ...]、[数エントリずつ...]、および[オーディエンスごと]であるとします。

オーディエンスレベルが「顧客」である入力を選択すると、[選択]オプションのラベルは[すべてのエントリ]、[数個のエントリ]、および[各顧客に1つのエントリ]になります。

- 4. [オーディエンスの選択]ドロップダウンリストから出力オーディエンスを選択します。 ドロップダウンリストには、入力データソースと同じオーディエンスレベルで 定義されたキーを含むテーブルに対して定義されているオーディエンスレベルのみ が表示されます。 テーブルに複数のレベルが定義されている場合は、各レベル が[オーディエンスの選択]ドロップダウンリストのエントリとして使用可能です。
 - ☆ 目的のオーディエンスレベルが表示されない場合は、テーブルを再マップすることが必要になる場合があります。

出力オーディエンスを選択すると、[選択]オプションに入力と出力の両方のオーディエンスレベルが反映されます。

たとえば、入力のオーディエンスレベルが「世帯」の場合にオーディエンスレベルが「個人」の出力を選択すると、[選択]オプションのラベルは [すべての個人IDのエントリ]、[各世帯IDに1つの個人IDのエントリ]などになり、あるオーディエンスレベルを別のレベルに切り替える際にIDの選択方法を指定できるようになります。

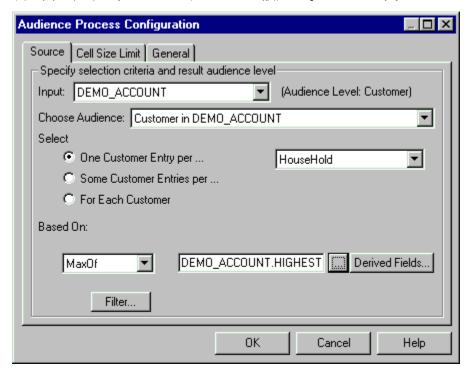
- 5. レコードの選択方法を指定するには、[選択]オプションと[フィルタ]オプションを使用します。 これらのオプションは、すべてのIDを選択するか(この場合はフィルタリングオプションなし)、レベルを切り替えるか、同じレベルのまま変更しないかに応じて、異なります。 オーディエンスレベルを切り替えるかどうかに基づいた選択およびフィルタの方法の詳細については、次のトピックを参照してください。
 - 同じ入力/出力オーディエンスレベルの使用
 - 異なる入力/出力オーディエンスレベルの使用
- 6. 出力セルのサイズを制限する(つまり、プロセスによって生成されるIDの数を制限する)には、**「セルサイズの制限**]タブをクリックします。
- 7. [全般]タブをクリックします。このタブでは、プロセス名、出力セルの名前、または セルコードをオプションで変更したり、プロセスに関する説明 を入力したりできます。
- 8. プロセスの設定が完了したら、**[OK]**をクリックします。 プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

関連トピック

- ・プロセスに対するデータソースの選択
- ・出力セルのサイズ制限
- セル名とセルコード
- ・セル名の変更
- セルコードの変更
- ・プロセス設定ダイアログを使用してフローチャートのセルをターゲットセルにリンクするには

例: オーディエンスプロセス

次の図は、オーディエンスプロセスの設定を示しています。



- 選択されている入力オーディエンスレベルは顧客で、これは DEMO_ACCOUNTテーブ ルの既定のオーディエンスレベルです(このオーディエンスレベルは入力項目の右側 に表示されます)。
- 出力オーディエンスレベルも同じ 顧客で、 DEMO_ACCOUNTテーブルで定義されています。 DEMO_ACCOUNTテーブルには、その他2つのオーディエンスレベルとして Branchおよび HouseHold.
- プロセスは、項目の最大値に基づいて、各世帯に1つの顧客エントリを選択するよう に設定されています。 HIGHEST_ACC_IND .

例: レコードのフィルタリング

件数または統計関数(MaxOf、MedianOf、MinOf)またはAny Oneに基づいてIDを選択するオーディエンスプロセスを設定する場合、[フィルタ]ボタンが使用可能になります。 [フィルタ]をクリックすると、[選択条件の指定]ウィンドウが表示され、 選択ルールの計算で使用されるレコードを指定するクエリ式を入力できます。

☆ 選択ルール計算が実行される前にフィルタ条件が適用され、対象レコードを絞り込むことができます。

たとえば、計算を実行する前に、対象範囲を日付で制限することができます。 去年の 購入トランザクションのみを対象としたい場合、次のようなフィルタクエリ式を入力で きます。 CURRENT JULIAN() - DATE(PURCH DATE) <= 365

その後、Amount項目の合計を選択する選択ルール計算を実行すれば、去年1年のトランザクションの金額のみが合計されます。

同じ入力/出力オーディエンスレベルの使用

[オーディエンスの選択]ドロップダウンリストで、入力オーディエンスレベルと同じオーディエンスレベルを選択した場合、次の選択オプションが使用可能になります。

- <異なるオーディエンス>ごとに1つの<入力/出力オーディエンス>
- <異なるオーディエンス>ごとに複数の<オーディエンス>レコード
- オーディエンスレベルのエントリごとのエントリ

選択オプションは、選択した入力オーディエンスレベルと出力オーディエンスレベルの関係によって異なります。 意味を成さないオプションは無効になります。

たとえば、特定のオーディエンスレベル(たとえば「顧客」)がテーブルで正規化されている場合、異なるレベル(たとえば「世帯」)ごとに1つのレベル(たとえば「顧客」)を選択するオプションは無効になります。 テーブル内で複数のレベルが定義されている場合、選択オプションは、「1顧客エントリずつ」になり、その他に使用可能なオーディエンスレベルオプションがドロップダウンリストに表示されます。

☆ Campaignでは、選択されたオーディエンスレベルの名前がプロセス設定ダイアログで自動的に使用されます。たとえば、入力オーディエンスレベルが「顧客」の場合、「1エントリずつ」オプションが自動的に「1顧客エントリずつ」になります。以降のセクションでは、オプションテキストのこの動的変更部分が、適宜<入力/出力オーディエンス>として示されます。

選択オプションには、次の項目が含まれます。

方法	説明	例
1エントリずつ	もう一つのオーディエンスレベ ルで範囲設定される入力/出力 オーディエンスレベルの1つのメ ンバ	各世帯に1つの顧客
複数のエントリずつ	もう一つのオーディエンスレベ ルで範囲設定される入力/出力 オーディエンスレベルの複数の メンバ	その世帯内の平均購入額以上の 全顧客
以下の条件で選択	選択されているオーディエンス レベルから条件を満たすメンバ を選択	アカウント数が1より多い、また は購入数が3より多い

<異なるオーディエンス>ごとに1つの<入力/出力オーディエンス>エントリを選択するには

この選択オプションは、<異なるオーディエンス>ごとに1つの<入力/出力オーディエンス>があることを示します。 入力および出力のオーディエンスレベルが同じでありながら、出力の範囲設定には異なるオーディエンスレベルが使用されている場合は、このオプションを選択します。

たとえば、このオプションを使用して、各世帯から最も古い口座を持っている顧客を一人選択できます(入力オーディエンスレベルは顧客、出力オーディエンスレベルも顧客ですが、 MinOf (BaseInfo.AcctStartDt) を使用して、世帯レベルで範囲が設定されています)。

1つのエンティティの選択方法を示すビジネスルール(たとえば、ある項目の最小値、最大値、最頻値)を指定するか、または[任意の1つ]を選択します(後者の場合、どの項目も選択できません)。

1. [入力]に入力ソースを選択し、オーディエンスプロセスの出力オーディエンスに同じオーディエンスレベルを選択します。

関連する[選択]オプションが使用可能になります。

2. [1エントリずつ]オプションを選択します。

選択したオプションの横にドロップダウンリストが表示されます。

3. ドロップダウンリストからオーディエンスレベルを選択します。

定義されている代替オーディエンスレベル(入力オーディエンスレベルを除く)がリストに表示されます。

- 4. [選択ルール]ドロップダウンリストから、使用する値を選択します。
 - [任意の1つ]を選択すると、[選択ルール]の値を選択する必要はありません。
 - [最大値選択]は、選択した項目の最大値を返します。
 - [最頻値選択]は、選択した項目の最頻値を返します。
 - [最小値選択]は、選択した項目の最小値を返します。

いずれも、入力オーディエンスレベルから1つのメンバだけを返します。 最大値、最小値、最頻値に複数のエントリが関連付けられている場合は、最初に検出されたエントリが返されます。

5. **[任意の1つ]**以外の**[選択ルール]**条件を選択した場合は、その関数の処理対象となる項目を選択します。 このドロップダウンリストには、**[オーディエンスの選択]**項目で選択されたテーブルのすべての項目と、マッピングされたディメンションテーブルが含まれます。 「+」記号をクリックしてテーブルを展開します。 作成されたユーザ定義項目は一番下に表示されます。

たとえば、各世帯で口座残高が最も多い口座の所有者を選択するには、[選択ルール]条件に[最大値選択]を選択し、 Acct_Balanceをテーブル項目のリストから選択します。

また、[ユーザ定義項目]をクリックして、ユーザ定義項目を作成または選択することもできます。

6. (オプション)基準となるカウントを選択すると[フィルタ]ボタンが使用可能になります。

[選択ルール]の計算に使用できるIDの数を減らすには、[フィルタ]機能を使用します。 たとえば、過去6か月の平均口座残高に基づいて顧客IDを選択するとします。 ただし、その処理を行う前に、口座が非アクティブになっているすべての顧客をフィルタリングします。

[選択ルール]の計算を実行する前にレコードをフィルタリングするには、[フィルタ]をクリックします。 [選択条件の指定]ウィンドウが開きます。 クエリ式を入力して、[選択ルール]の計算に使用するレコードを指定できます。 フィルタリング条件は[選択ルール]の計算が実行される前に適用されるため、対象外のレコードを除外できます。

- 7. フィルタクエリの構築が完了したら、[OK]をクリックしてクエリを保存し、[選択条件の指定]ウィンドウを閉じます。
- 8. 残りのタブの項目をすべて入力して、プロセスの設定を続けます。

関連トピック

- ・ユーザ定義項目について
- •プロセス内でのクエリの作成
- オーディエンスプロセスの設定

<異なるオーディエンス>ごとに複数の<オーディエンス>レコードを 選択するには

この選択オプションは、オーディエンスごとに複数のエントリがあることを示します。この場合は、入力および出力のオーディエンスレベルは同じですが、出力の範囲設定には異なるオーディエンスレベルが使用されています。 たとえば、世帯ごとに、\$100を超える購入を行ったすべての顧客を選択するには、このオプションを選択します(入力のオーディエンスレベルは顧客、出力のオーディエンスレベルも顧客ですが、次の条件を使用して、世帯レベルで範囲が設定されています: Maximum Purchase Value>\$100

[選択ルール]の条件は、クエリの作成だけでなくキーワードにも対応しており、GROUPBYマクロ関数と同等のレベルの機能を実行できます。

- 1. [入力]で入力ソースを選択し、オーディエンスプロセスの出力オーディエンスに同じオーディエンスレベルを選択します。 関連する[選択]オプションが使用可能になります。
- 2. [数エントリずつ...]オプションを選択します。 選択したオプションの横にドロップ ダウンリストが表示されます。
- 3. ドロップダウンリストからオーディエンスレベルを選択します。 定義されている代替オーディエンスレベル(入力オーディエンスレベルを除く)がリストに表示されます。
- 4. [選択ルール]項目をクリックしてクエリを入力します。 [選択条件の指定]ウィンドウ が開きます。
- 5. 有効なクエリ式を入力または構築し、[OK]をクリックして保存したら、[選択条件の 指定]ウィンドウを閉じます。

6. 残りのタブの項目をすべて入力して、プロセスの設定を続けます。

関連トピック

- ・プロセス内でのクエリの作成
- オーディエンスプロセスの設定

オーディエンスレベルのエントリごとにエントリを選択するには

この選択オプションは、複数のオーディエンスレベルからの複数の選択肢があることを示します。 選択されているオーディエンスレベルのメンバ数が複数の条件を満たす場合に、このオプションを選択します(たとえば、 Number of Accounts > 1や Number of Purchases > 3).

- ☆ このオプションは、入力オーディエンスレベルが正規化されておらず(つまり、[レベルの選択]で選択したテーブル内でレコードIDが一意でない)、かつ入力と出力のレベルが同じ場合にのみ使用できます。 出力オーディエンステーブルに代替キーが定義されていない場合、使用できるオプションはこれだけです。
- 1. [入力]に入力ソースを選択し、オーディエンスプロセスの出力オーディエンスに同じオーディエンスレベルを選択します。

関連する[選択]オプションが使用可能になります。

- 2. [各エントリ]オプションを選択します。
 - ☆ このオプションは、入力オーディエンスレベルが正規化されていない場合(つまり、[レベルの選択]で選択したテーブル内でレコードIDが一意でない場合)にのみ使用できます。

選択したオプションの横にドロップダウンリストが表示されます。

3. 「選択ルール」を選択します。

[オーディエンスの選択]で選択したテーブル(出力オーディエンス)が正規化されていないと、結果が重複する場合があります。 レコードの選択時にCampaignで[選択ルール]の方法を使用して、重複を避けることができます (たとえば、同じ世帯の複数の個人が結果に含まれる場合に、[選択ルール]を使用して、この機能で設定する条件に基づいてその世帯から一人の個人だけを選択するようにできます)。

[選択ルール]では、[カウント]または[条件]のいずれかの方法を選択する必要があり ます。

[選択ルール]で使用する[カウント]を指定します。

このオプションでは、 <Input Audience Level> IDを選択できます。ここで、 <Input Audience Level> IDの発生回数は指定された条件を満たします。

リレーションシップ(<、<=、>、>=、=)を切り替えるには、目的のリレーションが表示されるまで演算子ボタンを繰り返しクリックします。

--または--

・ [選択ルール]で使用する[条件]を指定します。

[条件]の右側にあるテキストボックスをクリックします。

[選択条件の指定]ウィンドウが開きます。

有効なクエリ式を入力または構築し、[OK]をクリックしてクエリを保存したら、[選択条件の指定]ウィンドウを閉じます。

4. (オプション)基準となるカウントを選択すると[フィルタ]が使用可能になります。

[選択ルール]の計算に使用できるIDの数を減らすには、[フィルタ]機能を使用します。 たとえば、過去6か月の平均口座残高に基づいて顧客IDを選択するとします。 ただし、その処理を行う前に、口座が非アクティブになっているすべての顧客をフィルタリングします。

[選択ルール]の計算を実行する前にレコードをフィルタリングするには、[フィルタ]をクリックします。[選択条件の指定]ウィンドウが開きます。 クエリ式を入力して、[選択ルール]の計算に使用するレコードを指定できます。 フィルタリング条件は[選択ルール]の計算が実行される前に適用されるため、対象外のレコードを除外できます。

- 5. フィルタクエリの構築が完了したら、[OK]をクリックしてクエリを保存し、[選択条件の指定]ウィンドウを閉じます。
- 6. 残りのタブの項目をすべて入力して、プロセスの設定を続けます。

関連トピック

- ・プロセス内でのクエリの作成
- オーディエンスプロセスの設定

異なる入力/出力オーディエンスレベルの使用

入力オーディエンスと出力オーディエンスで別々のオーディエンスレベルを選択した場合、選択オプションでレコードの選択方法を指定できます。

使用可能な選択オプションは、入力オーディエンスレベルと出力オーディエンスレベルの関係によって異なります。 [オーディエンスの選択]ドロップダウンリストで、入力レベルとは異なるオーディエンスレベルを選択した場合、次の選択オプションが使用可能になります。

- すべての<出力オーディエンスレベル>エントリ
- 複数の<異なる出力オーディエンスレベル>エントリ
- <異なる入力オーディエンスレベル>ごとにに1つの<出力オーディエンスレベル>
- ☆ Campaignでは、選択されたオーディエンスレベルの名前がプロセス設定ダイアログで自動的に使用されます。たとえば、入力オーディエンスレベルが「顧客」の場合、「1エントリずつ」オプションが自動的に「1顧客エントリずつ」になります。以降のセクションでは、オプションテキストのこの動的変更部分が、適宜<入力/出力オーディエンス>として示されます。

選択オプションには、次の項目が含まれます。

方法	説明	例
すべて	もう一つのオーディエンスレベルで範囲設定され る、入力オーディエンスレベルの全メンバを選択 します。	各世帯のすべての顧客
複数	出力オーディエンスレベルの複数のメンバを選択 します。指定の条件を満たすIDのみを保持しま す。	世帯内の18歳以上のすべての 顧客
1エントリずつ	各入力オーディエンスレコードに対して1つの出力 オーディエンスレコードを選択します。	各世帯に1つの顧客

すべての<出力オーディエンスレベル>エントリを選択するには

フィルタリングを実行せずに出力オーディエンスレベルを切り替えるには、このオプションを選択します(たとえば、1つの世帯のすべての顧客を選択したり、一人の顧客が保有するすべての口座を選択するなど)。 この場合、入力IDに関連付けられているすべての出力オーディエンスレベルのエントリを持つ出力セルが作成されます。 このオプションは、選択条件やフィルタリング条件を適用せずにオーディエンスレベルを切り替えます。

プライマリオーディエンスレベルから別のオーディエンスレベルに変更すると、次のプロセスでユーザ定義項目が使用できなくなります。

1. [入力]で入力ソースを、[**オーディエンスの選択**]で別の出力オーディエンスを選択します。

[選択]オプションが使用可能になります。

- 2. [すべての<出力オーディエンスレベル>のエントリ]を選択します。
- 3. **[OK]**をクリックしてオーディエンスプロセス設定ダイアログを閉じ、設定を保存します。

複数の<異なる出力オーディエンスレベル>エントリを選択するには

指定された条件を満たすIDのみを保持したまま、入力オーディエンスレベルを別の出力オーディエンスレベルに切り替えるには、このオプションを選択します(たとえば、世帯内の18歳以上のすべての顧客を選択したり、残高がプラスの顧客のすべての口座を選択する場合など)。

[選択ルール]の条件を使用すると、クエリ式を入力して、選択される出力オーディエン スレベルのエントリを限定できます。

1. [入力]で入力ソースを、[オーディエンスの選択]で別の出力オーディエンスを選択します。

[選択]オプションが使用可能になります。

2. **[複数の<異なる**出力オーディエンスレベル>エントリ**]**を選択します。

[選択ルール]項目が使用可能になります。

- 3. **[選択ルール]**項目をクリックしてクエリを入力します。 [選択条件の指定]ウィンドウが開きます。
- 4. 有効なクエリ式を入力または構築し、[OK]をクリックしてクエリを保存したら、[選 択条件の指定]ウィンドウを閉じます。
- 5. **[OK]**をクリックして、オーディエンスプロセス設定ダイアログを閉じ、エントリを保存します。

関連トピック

•プロセス内でのクエリの作成

<異なる入力オーディエンス>ごとに1つの<出力オーディエンス>を 選択するには

入力オーディエンスレコードごとに出力オーディエンスレコードを1つだけ選択する(たとえば、顧客ごとに1つの電子メールアドレスを選択する)には、このオプションを選択します。 1つのエンティティの選択方法を示すビジネスルール(たとえば、ある項目の最小値、最大値、最頻値)を指定するか、または[任意の1つ]を選択する必要があります(後者の場合、どの項目も選択できません)。

このオプションは、入力オーディエンスレベルが正規化されていない場合(つまり、[レベルの選択] で選択したテーブル内でレコードIDが一意でない場合)にのみ使用できます。

[選択ルール]の条件は、クエリの作成だけでなくキーワードにも対応しており、GROUPBYマクロ関数と同等のレベルの機能を実行できます。

1. [入力]に入力ソースを選択し、オーディエンスプロセスに出力オーディエンスを選択します。

[選択]オプションが使用可能になります。

- 2. [<入力オーディエンスレベル>ごとに1つの<出力オーディエンスレベル>]を選択します。
- 3. 「選択ルール」ドロップダウンリストから値を選択します。

[任意の1つ]を選択すると、ドロップダウンリストの右側の項目選択が淡色表示になります。 [任意の1つ]を選択した場合は、手順5に進んでください。

- 4. 次のドロップダウンリストで、[選択ルール]の関数を関連付ける項目を選択します。
 - a. [選択ルール]テキストボックスをクリックします。

[項目の選択]ウィンドウが開きます。 [オーディエンスの選択]ドロップダウンリストで選択されたテーブルのすべての項目(マッピングされたディメンションテーブルを含む)が表示されます。

「+」記号をクリックすると、テーブルを展開できます。 作成されたユーザ定義項目は一番下に表示されます。

- b. 項目を選択して[**OK**]をクリックします。
- c. (オプション)[ユーザ定義項目]をクリックして、ユーザ定義項目を作成します。

- 5. (オプション)[選択ルール]の計算を実行する前にレコードをフィルタリングするには、[フィルタ]を使用します。
- 6. **[OK]**をクリックして、オーディエンスプロセス設定ダイアログを閉じ、エントリを 保存します。

関連トピック

プロセス内でのクエリの作成

書込み

書込みプロセスでは、あるテーブルから項目を選択し、後続処理用に別のテーブルに書き込むことができます。 これは、後続処理用に大量のデータを管理可能なサイズにまで削減するためのプロセスであり、結果、パフォーマンスを大きく向上させることができます。

書込みプロセスは、セル(たとえば選択プロセスに接続している場合)、1つのテーブル、 戦略的セグメント、最適化リスト(Optimizeのみ)、またはeMessageランディングページ(eMessageのみ)から入力を取得できます。 戦略的セグメントを入力として選択する 場合は、項目を書込む前にそのセグメントをテーブルに結合しておく必要があります。

複数の書込みプロセスを直列で使用する場合は、最後の書込みプロセス内の項目のみが 書き込まれます。

複数の書込みプロセスを並列で(つまり、同じフローチャート内の別々のブランチで)使用する場合、次のように、固定ユーザ定義項目と同じように動作します。

- 書込み項目は着信セルに添付される
- 書込み項目はそのプロセス内のクエリ式の前に計算される
- 複数の書込み項目は後続プロセスで使用可能
- 書込み項目がコンタクトプロセスに送信されると
 - 書込み項目がセルに対して定義されていない場合、値はNULLになる
 - 1つのIDが複数のセルにある場合、各セルについて1行が出力される
- 書込み項目がセグメントプロセスまたは決定プロセスに送信される場合、書込み項目は、クエリでのセグメント化で使用されるように、選択されたすべての入力セルに存在する必要があります。

書込みテーブル

データはCampaignサーバ上のバイナリファイルまたは**UAC_EX**プレフィックスを持つ データマート内のテーブルとして書込まれます。

ー時テーブルとは違い、書込みテーブルは、フローチャートの実行後に削除されることはありません。 書込みテーブルは、ユーザが項目のプロファイリングなどの操作を行うために常にアクセスできるよう、保持される必要があります。

書込みテーブルは、関連付けられている書込みプロセス、フローチャート、キャンペーン、またはセッションを削除するときにのみ削除されます。

☆ データマートの領域を保持するために、システム管理者は定期的にUAC_EXプレフィックス付きのテーブルを削除する必要があります。 ただし、これらのテーブルを削除した場合に、フローチャートを再実行したり、削除されたテーブル内の項目をプロファイルしようとする際には、ユーザはまず影響のある書込みプロセスを再実行する必要があります。 再実行を行わないと、Campaignによって「テーブルが見つかりません」というエラーが生成されます。

例: トランザクションデータの書込み

支払い遅延のない顧客全員(顧客ベースの約90%)の過去3か月分の購入トランザクションに基づいて、選択または計算を実行するキャンペーンを設計して、そのデータが4GBになったとします。

Campaignでこれらの顧客に対して一時テーブルを作成した場合、たとえばGROUPBYマクロを実行するなど、購入トランザクションテーブルに結合し直した際、4GBの行の約90%を読み込むことが(また、過去3か月以外の全トランザクションを破棄することが)必要になります。

しかし、書込みプロセスを購入トランザクションレベルに配置して使用すれば、過去3か月以内の全トランザクションを取得し、データベース内のテーブルに出力し、その後複数のGROUPBYマクロとその他の計算(最小値、最大値、平均値など)を実行することができます。

eMessageランディングページからデータを書込むための前提条件

書込みプロセスを設定して、eMessageランディングページから入力を取得するために必要な前提条件を次に示します。

- eMessageがインストールされ、実行されて、有効になっている必要があります。
- eMessageランディングページが適切に設定されている必要があります。
- メーリングが実行され、メーリング受信者からのレスポンスが受信される必要があります。

eMessageランディングページの詳細については、『eMessageユーザガイド』を参照してください。

書込みプロセスの設定

書込みプロセスを設定する手順は、次のどの入力ソースを選択するかによって異なります。

- セル、1つのテーブルまたは戦略的セグメント
- eMessageランディングページ
- 最適化リスト(『Optimizeユーザガイド』を参照)

セル、1つのテーブル、または戦略的セグメントからデータを書き込むには

1. 編集モードのフローチャートで、フローチャートの作業空間の書込みプロセスをダ ブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが開きます。

- 2. [ソース]タブで、選択先のデータソースを選択します。
 - [入力]ドロップダウンリストから、入力セル、テーブル、または戦略的セグメントを1つ選択します。
 - 戦略的セグメントを入力データソースとして選択する場合は、[ソースの選択]ドロップダウンリストからテーブルを選択して、戦略的セグメントをそのテーブルに関連付けます。
- 3. 入力として使用するレコードを指定します。 次のいずれかのオプションを選択します。
 - すべてのレコードを入力データソースに含めるには、[全データ選択]を選択します。
 - [条件を使用してデータ選択]を選択し、クエリを使用して定義した条件に基づいて、入力から特定のレコードだけを選択します。
- 4. **[条件を指定してデータ選択]**オプションを使用し、指定した条件に基づいて特定の レコードのみ選択する場合は、次のいずれかの方法でクエリを作成します。
 - ・ ポイント&クリック

これは既定の表示です。 [項目名]、[演算子]、 [値]、および[And/Or]列のセルを クリックして値を選択し、クエリを構築します。 このツールでは最も単純かつ 簡単にクエリを作成でき、構文エラーの発生を防ぐ上で役立ちます。

SQL入力

未加工SQLを作成する、またはUnicaマクロを使用する場合は、このツールを使用します。

- マクロ
 - Unicaマクロにアクセスするには、[SQL入力]内の[入力サポート]を使用します。
- 未加工SQL
- 5. クエリを構築する場合は、クエリに含める項目([IBM Unica Campaign定義項目] や[ユーザ定義項目]など)を[選択項目]リストから選択します。 詳細について は、「プロセス内でのクエリの作成」を参照してください。
 - ◇ IBM Unica Campaign定義項目と同じ名前のテーブル項目をクエリに含める場合は、次の構文を使用して項目名を限定する必要があります。
 〈table_name〉.〈field_name〉.この構文は、IBM Unica Campaign定義項目の代わりにテーブル項目を使用することを示します。
- 6. [書込み]タブで、出力先を選択します。
 - データをバイナリ形式で保存するには、[Campaignサーバ]を選択します。

- データにUAC_EXプレフィックスを付加して、一意の名前が指定されたテーブルに保存するには、使用可能なデータベースを選択します。
- 7. [選択項目]リストから、書込み項目を選択します。
 - [追加]をクリックして、選択した項目を[書込み項目]リストに追加します。
 - [書込み項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[削除]をクリックします。
 - [書込み項目]リスト内の項目の順序を変更するには、[1つ上へ]ボタンと[1つ下へ]ボタンを使用します。
 - 書込み項目の既定の出力名を変更するには、[書込み項目]リストで項目を選択し、[出力名]列で名前をクリックして、新しい名前を入力します。

[書込み]タブの項目の詳細については、「[書込み]タブリファレンス」を参照してください。

- 8. オプションで、次の操作を実行します。
 - [プロファイル]をクリックして、セル、テーブル、または戦略的セグメントから使用可能な項目をプロファイルします。 項目のプロファイルの詳細については、「項目のプロファイル」を参照してください。
 - [選択項目]リストにユーザ定義項目を追加します。 「ユーザ定義項目について」 を参照してください。
 - 出力から重複IDを除外するよう指定します。 「プロセス出力での重複IDの除外」を参照してください。
 - 出力セルのサイズを制限します(つまり、プロセスによって生成されるIDの数を制限します)。 「出力セルのサイズ制限」を参照してください。
 - [全般]タブをクリックして、プロセス名、出力セル名、セルコードを変更したり、ターゲットセルへリンクしたり、またはプロセスに関する説明を入力します。

ターゲットセルへのリンクの詳細については、「ターゲットセルスプレッドシート内のセルをフローチャートセルにリンクするには」を参照してください。

9. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

eMessageランディングページからデータを書込むには

eMessageランディングページのデータを書込む前に、IBM Unica 環境が必須要件を満たしていることを確認してください。 詳細については、「eMessageランディングページからデータを書込むための前提条件」を参照してください。

1. 編集モードのフローチャートで、フローチャートの作業空間の書込みプロセスをダ ブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが開きます。

2. [ソース]タブで、[eMessageランディングページ]を選択します。

- 3. ポップアップウィンドウで、[eMessageランディングページ]を入力として選択します。
- 4. ランディングページで使用できるオーディエンスレベルが複数ある場合は、適切な オーディエンスレベルをドロップダウンリストから選択します。 使用可能なオー ディエンスレベルが1つのみの場合は、それが自動的に選択されます。
- 5. **[OK]**をクリックします。
- 6. [書込み]タブで、出力先を選択します。
 - データをバイナリ形式で保存するには、[IBM Unica Campaignサーバ]を選択します。
 - データにUAC_EXプレフィックスを付加して、一意の名前が指定されたテーブルに保存するには、使用可能なデータベースを選択します。
- 7. [選択項目]リストから、書込み項目を選択します。
 - [追加]をクリックして、選択した項目を[書込み項目]リストに追加します。
 - [書込み項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[削除]をク リックします。
 - [書込み項目]リスト内の項目の順序を変更するには、[1つ上へ]ボタンと[1つ下へ]ボタンを使用します。
 - 書込み項目の既定の出力名を変更するには、[書込み項目]リストで項目を選択し、[出力名]列で名前をクリックして、新しい名前を入力します。

[書込み]タブの項目の詳細については、「[書込み]タブリファレンス」を参照してください。

- 8. オプションで、次の操作を実行します。
 - [選択項目]リストにユーザ定義項目を追加します。 「ユーザ定義項目について」 を参照してください。
 - 出力から重複IDを除外するよう指定します。 「プロセス出力での重複IDの除外」を参照してください。
 - 出力セルのサイズを制限します(つまり、プロセスによって生成されるIDの数を制限します)。 「出力セルのサイズ制限」を参照してください。
 - [全般]タブをクリックして、プロセス名、出力セル名、セルコードを変更したり、ターゲットセルへリンクしたり、またはプロセスに関する説明を入力します。

ターゲットセルへのリンクの詳細については、「ターゲットセルスプレッドシート内のセルをフローチャートセルにリンクするには」を参照してください。

☆ eMessageランディングページの属性ではプロファイルは使用できません。

9. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

孝込みプロセス中、Campaignでは、UCC_LPVプレフィックスが付加されたシステムテーブルに中間ビューが作成されます。この内部ビューは、プロセスボックスが削除されるまで残ります。このビューを削除する場合は、対応する書込みプロセスを再設定してからプロセスまたはフローチャートを実行する必要があります。この手順に従わない場合、Campaignでテーブルの欠落エラーが生成されます。

[書込み]タブリファレンス

次の表で、[書込み]タブの項目について説明します。

項目	説明
ターゲットデータソース	このプロセスからの出力が書き込まれる場所。 Campaign サーバおよび接続しているその他のデータソースには、[ター ゲットデータソース]ドロップダウンリストからアクセスでき ます。
選択項目	書込み可能な項目のリスト。入力データソースに基づいた項目 名やデータ型などが含まれます。
	入力ソースがeMessageのランディングページの場合、各項目名はランディングページの属性です。 特殊文字やスペースが含まれている属性は、有効な項目名に変換されます。 すべてのランディングページ属性のデータ型は、テキストとして一覧表示されます。
書込み項目	[選択項目]リストからの書込みを選択した項目。 出力名は既定 で[書込み項目]列の項目名になります。
[プロファイル]ボタン	[プロファイル]ウィンドウが開き、選択した項目内のレコード の値と配信を計算します。 項目名が [選択項目]リストで選択 されている場合のみアクティブになります。
[ユーザ定義項目]ボタン	[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。
[詳細]ボタン	[詳細設定]ウィンドウが開きます。このウィンドウには、重複 レコードをスキップするオプションとCampaignが重複を特定 する方法を指定するオプションが含まれます。

マージ

マージプロセスを使用して、フローチャート内の後続プロセスにセルを含めたり、後続 プロセスからセルを除外したりできます。 たとえば、マージプロセスを使用して、 マーケティング資料を受信しないと選択している顧客を抑制できます。

マージプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがマージプロセスによって入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、マージプロセスが接続されていることを確認します。
- 2. フローチャートの作業空間でマージプロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが開きます。 マージプロセスに接続されているプロセスのセルは、[入力] リストに自動的に表示されます。

3. [操作]タブで、含めるまたは除外する入力セルを指定します。 [入力]リストの各セルをクリックし、適切な[追加>>]ボタンを使用して、セルを[選択するデータ]リストまたは[除外するデータ]リストに追加します。

[選択するデータ]リストに表示されるセルのIDは、一意なIDの1つのリストにまとめられます。 [除外するデータ]リストに表示されるIDは、マージプロセスの出力に表示されません。

4. [選択するデータ]リストに表示される入力セルの重複IDを処理する方法を指定します。、重複IDを削除するには[OR条件で選択]を選択し、すべての入力セルに表示されるIDのみを含めるには[AND条件で選択]を選択します。

たとえば、顧客ID C123が**Gold.out**セルと**Platinum.out**セルの両方に表示されていて、一意な顧客IDのリストが必要な場合は、**[OR条件で選択]** を選択すると、マージ結果リストには顧客ID C123のインスタンスが1つだけ含まれています。

ただし、ゴールドとプラチナの出力セルの両方に含まれている顧客だけのリストが必要な場合は、[AND条件で選択]をクリックします。 この場合、顧客ID C123 がGold.outセルとPlatinum.outセルの両方に表示されていないと、このIDはマージ結果リストに含まれません。

- 5. 出力セルのサイズを制限する(つまり、プロセスによって生成されるIDの数を制限する)には、[セルサイズの制限]タブをクリックします。
- 6. [全般] タブをクリックします。このタブでは、プロセス名、出力セルの名前、またはセルコードをオプションで変更したり、プロセスに関する説明を入力したりできます。
- 7. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

サンプル

サンプルプロセスを使用して、さまざまな処理、コントロールグループ、またはモデリング用データのサブセットに対し、1つ以上のセルを作成します。 サンプルリングでは、さまざまな設定を使用できます。

サンプルプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがサンプルプロセスによって入力として 使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、サンプルプロセスが接続されていることを確認します。
- 2. フローチャートの作業空間でサンプルプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [入力]ドロップダウンリストから、サンプリングするセルを選択します。 サンプル プロセスに接続されているプロセスからの出力セルは、すべてこのドロップダウン リストに表示されます。 複数のソースセルを使用するには、[複数セル]オプション を選択します。 複数のソースセルが選択されている場合は、各ソースセルで同じ サンプリングが実行されます。
 - ☆ 選択されるセルは、すべて同じオーディエンスレベルで定義されている必要があります。
- 4. 各入力セルに対して作成するサンプルの数を決定して、その数を[サンプル数]項目に入力します。 既定では、「Sample1」、「Sample2」、「Sample3」という既定の名前で、入力セルごとに3つのサンプルが作成されます。
- 5. 既定のサンプル名を変更するには、[出力名]列からサンプルを選択します。 [サンプルの編集]セクションが使用可能になります。 [セル名]テキストボックス内にカーソルを置き、サンプル名を修正します。 文字、数字、およびスペースの任意の組み合わせを使用できます。 ピリオド(.)やスラッシュ(/または\)は使用しないでください。
 - サンプルの名前を変更する場合は、このサンプルが入力セルとして使用された後続プロセスすべてを更新する必要があります。 サンプル名を変更すると、後続の接続プロセスが設定解除される場合があります。 通常は、後続プロセスを接続する前にサンプルの名前を編集する必要があります。
- 6. [パーセント(%)でサイズを指定]または[データ数でサイズを指定]オプションを選択 して、サンプルのサイズを指定する方法を示します。
 - [パーセント(%)でサイズを指定]を選択した場合は、[出力名]列の各出力セルをクリックすると、[サイズ]および[最大サイズ]が自動的に計算されます。ただし、これらの値は編集可能です。
 - [データ数でサイズを指定]を選択した場合は、[出力名]列の各出力セルをクリックすると、[サイズ]列は有効ですが空です。
- 7. **[サンプルの編集]**セクションの[最大データ件数]項目に、選択したセルの最大レコード件数を入力します。

- ※ [データ数でサイズを指定]を選択した場合は、出力セル情報も変更できます。
- 8. 選択した出力セルのサイズが他のセルのサイズによって決定されるように指定するには、[残りすべて]チェックボックスをオンにします。選択した出力セルには、他のセルが計算された後で残りのレコード件数/パーセントが割り当てられます。 [残りすべて]を選択できるのは、1つの出力セルに対してだけです。
- 9. (オプション) [サンプルサイズ計算]をクリックして[サンプルサイズ計算]を使用すると、キャンペーン結果評価におけるサンプルサイズの統計的な有意性を理解するのに役立ちます。 エラー限度値を入力し、必要となるサンプルサイズを計算することにより、必要な精度を指定できます。また、サンプルサイズを入力して、その結果のエラー限度値を計算できます。 報告される結果の信頼度は95%です。
- 10. **[サンプリング方法]**セクションで、サンプリングを実行するためにCampaignで使用する方法を選択します。 完全にランダムなサンプル、レコードをソートして**x**件単位で分配するサンプル、または階層化されたサンプルを作成できます。
 - ランダムサンプル このオプションは、指定された乱数種に基づく乱数生成を使用して、レコードをランダムにサンプルグループに配分します。 統計的に有効なコントロールグループまたはテストセットを作成するには、[ランダムサンプル]オプションを使用します。
 - データをソート順に各サンプルに配分 このオプションは、最初のレコードを最初のサンプルに、2件目のレコードを2番目のサンプルにというように、指定されたサンプル件数(x)までレコードを配分します。 (x+1)件目のレコードは最初のサンプルへ、(x+2)件目のレコードは2番目のサンプルへというように、以降も同様です。 [データをソート順に各サンプルに配分]オプションを使用するには、レコードのソート順序の基となる項目を指定する必要があります。
 - データをソート順に分割— このオプションは、最初のN 件のレコードを最初のサンプルに、次のレコードセットを2番目のサンプルにというように配分して、サンプルグループを作成します。 このオプションは、何らかの基準でソートされた項目(累積購入額やモデルスコアなど)に基づいて、上から10件(またはその他の単位)ごとにグループを作成する場合に便利です。 [データをソート順に分割]オプションを使用するには、レコードのソート順序の基となる項目を指定する必要があります。
- 11. **[ランダムサンプル]**を選択した場合は、Campaignで使用する既定以外の乱数種をオプションで指定できます。 **[乱数種]**項目に数値を直接入力するか、**[選択]**をクリックして新しい乱数種の値をランダムに選択します。

新しい乱数種の値のサンプルは、次のような場合に使用します。

- まったく同じ順序で同じ数のレコードがあり、同じ乱数種の値を使用すると、そのたびに同じサンプルにレコードが作成される場合。
- ランダムサンプルが良くないため非常に偏った結果になる場合(たとえば、すべての男性が1つのグループに、すべての女性が別のグループに分かれるなど)。
- 12. [データをソート順に各サンプルに配分]または[データをソート順に分割]を選択した場合は、ソートする項目とソート順序も指定する必要があります。
 - a. ドロップダウンリストから[ソート条件]項目を選択するか、[ユーザ定義項目]を クリックしてユーザ定義項目を使用します。

- b. [昇順]または[降順]オプションを選択して、レコードをソートする方向を指定します。 If you choose [昇順]を選択すると、数値項目は小さな値から大きな値への順、英字項目はアルファベット順にソートされます。 [降順]を選択した場合のソート順序は、その反対になります。
- 13. **[全般]** タブをクリックします。このタブでは、プロセス名、出力セルの名前、またはセルコードをオプションで変更したり、プロセスに関する説明を入力したりできます。
- 14. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

関連トピック

- ・新規プロセスをフローチャートに追加するには
- ・2つのプロセスを接続するには
- ・サンプルサイズ計算を使用するには
- ・ユーザ定義項目について
- セル名とセルコード
- セル名の変更
- セルコードの変更
- プロセス設定ダイアログを使用してフローチャートのセルをターゲットセルにリンクするには
- プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

サンプルサイズ計算について

Campaignには、サンプルサイズ計算機能が用意されており、キャンペーン結果評価におけるサンプルサイズの統計的な有意性を理解するのに役立ちます。 エラー限度値を入力し、必要となるサンプルサイズを計算することにより、必要な精度を指定できます。また、サンプルサイズを入力して、その結果のエラー限度値を計算できます。 報告される結果の信頼度は95%です。

サンプルサイズ計算を使用するには

1. サンプルプロセス設定ダイアログの[サンプル]タブで、[サンプルサイズ計算]をクリックします。

[サンプルサイズ計算]ウィンドウが開きます。

2. **[予想レスポンス率]**に、マーケティングキャンペーンから予想される最小レスポンス率と最大レスポンス率を入力します。

この2つの値は、0~100の範囲のパーセントでなければなりません。 同じレベルの 精度を実現するためには、予想レスポンス率が低いほどサンプルサイズを大きくする必要があります。

- 3. [モデルによる推定]に、モデルによる推定情報を指定します。
 - モデルを使用しない場合は、[モデルなし]を選択します。

- モデルを使用する場合は、[モデル適応度]を選択して、適切なモデル適応パーセントを入力します。 これはリフト曲線での領域を表し、モデル適応度レポートで報告されます。
- 4. 特定のエラー限度値に必要なサンプルサイズを計算するには、次の手順に従います。
 - a. **[エラー限度値(+または-)]**項目に、許容されるエラー限度値として0~100の範囲 の値を入力します。
 - b. **[サンプルサイズの計算]**をクリックします。 特定のエラー限度値を得るために必要な最小サンプルサイズが、[最小サンプルサイズ]テキストボックスに表示されます。
- 5. 特定のサンプルサイズで予想されるエラー限度値を計算するには、次の手順に従います。
 - a. 「最小サンプルサイズ」テキストボックスに、サンプルサイズを入力します。
 - b. [エラー限度値の計算]をクリックします。
 - エラー限度値が、[エラー限度値(+または-)]テキストボックスに表示されます。
- 6. 終了したら、[完了]をクリックします。

[サンプルサイズの計算]ウィンドウが閉じます。

☆ 計算されたサンプルサイズをコピーして貼り付けて、サンプルプロセス設定ダイアログで使用できます。

セグメント

データを異なる処理やオファーを受け取るグループ(セグメント)に分けるには、セグメントプロセスを使用します。 セグメントを作成したら、セグメントプロセスをコンタクトプロセス(コールリストまたはメールリスト)に接続して、処理またはオファーをセグメントに割り当てます。 作成できるセグメント数に制限はありません。

データのセグメント化は、 項目の固有値を使用する方法と、クエリを使用して項目の データをフィルタリングする方法の2つの方法で行うことができます。 データのセグメ ント化には、データベーステーブル項目の他にユーザ定義項目を使用できます。 ユー ザ定義項目により、カスタムセグメント化を実行できます。

セグメントプロセスで作成されるセグメントは、セグメント化プロセスにより作成されるグローバル固定戦略的セグメントとは異なります。グローバル固定戦略的セグメントは、どのセッションやキャンペーンでも使用できます。

関連トピック

セグメント化

データ項目で作成

データベーステーブル内の項目でデータをセグメントに分類すると、その項目内の固有値で各セグメントが作成されます。 このオプションは、項目内の値が作成するセグメントに対応している場合、最も有効です。

たとえば、10の領域内の顧客に、領域別に異なるオファーを割り当てるとします。 顧客データベースには、各顧客が所属する領域を示すregionIDという項目があります。 regionID項目でセグメント化し、10の領域セグメントを作成します。

関連トピック

・ユーザ定義項目について

クエリで作成

クエリで作成オプションでは、作成するクエリの結果に基づいてデータをセグメントに 分類します。 このオプションは、必要なセグメントを作成するために項目内のデータ をフィルタリングする場合、最も有効です。

たとえば、去年の購入履歴に基づいて、顧客を高価値(\$500超過)、中価値(\$250~\$500)、低価値(\$250未満)のセグメントに分類する必要があるとします。 顧客データベース内のPurchaseHistory項目に、各顧客の購入合計金額が格納されています。 個々のクエリを使用して各セグメントを作成し、各クエリにより、そのセグメントの条件を満たすPurchaseHistory項目値を持つレコードを選択します。

☆ 未加工SQLを使用して、データをセグメント化することもできます。

関連トピック

• プロセス内でのクエリの作成

別のセグメントプロセスへの入力としてのセグメントの使用

セグメントは、別のセグメントプロセスへの入力セルとして使用することもできます。 たとえば、6つの年齢範囲で顧客を分類する必要があるとします。 データベース に、AgeRangeという項目があり、各顧客に6つの年齢範囲のうちの1つを割り当てま す。 AgeRange項目で、6つのセグメントを作成します。

そうすると、別の項目やクエリで顧客をさらに分類する別のセグメントプロセスで、これら6つのセグメントを入力として使用することができます。 たとえば、データベースに、各顧客の優先コンタクトチャネル(ダイレクトメール、テレマーケティング、Fax、電子メール)を指定するPreferredChannelという項目があるとします。 6つの年齢範囲セグメントを入力として使用して、PreferredChannel項目で分類する2つ目のセグメントプロセスを作成できます。 6つの年齢範囲セグメントは、それぞれ4つの優先チャネルセグメントにさらに分類され、合計24の出力セグメントが作成されます。

セグメント化についての注意事項

データをセグメント化する際には、次のオプションとガイドラインを参考にしてください。

- セグメント化方法の選択
- データの重複禁止
- セグメントサイズの制限
- ソースセルの選択

セグメント化方法の選択

項目またはクエリでセグメントを作成した場合、どちらも同じ結果になる場合があります。 たとえば、データベースのAcctType項目で、顧客アカウントを標準レベル、優先レベル、プレミアレベルに分類するとします。 AcctType項目でセグメント化すると、これらのアカウントタイプに対して3つのセグメントが作成されます。 クエリを使用しても同じ結果を得られますが、そのためには3つのクエリを使用する必要があります。セグメント化するデータに応じて、最も効率的なセグメント化方法を選択してください。

データの重複禁止

セグメントをデータ重複禁止として指定できます。この場合、各対象レコードが、1つのセグメントにしか配置されないことが保証されます。 これにより、セグメントにオファーを割り当てると、各顧客は1つのオファーのみを受け取ります。

レコードは、定義された優先順位に基づいて、条件を満たす最初のセグメントに配置されます。 たとえば、顧客がセグメント1と3に当てはまり、セグメント1の優先順位のほうがセグメント3より高い場合、この顧客はセグメント1のみに配置されます。

セグメントサイズの制限

1セグメント当たりのレコード数の既定サイズは無制限です。 たとえば、フローチャートまたはプロセスのテスト実行を行う場合など、作成されるセグメントのサイズを制限することが必要な場合があります。

セグメントサイズは正の整数で指定できます。 指定するセグメントサイズが生成レコード総数より小さい場合、セグメントは、ランダムに選択された対象レコードで構成されます。

ソースセルの選択

選択されるセルは、すべて同じオーディエンスレベルで定義されている必要があります。 1つ以上のソースセルが選択されている場合は、各ソースセルで同じセグメント化が実行されます。

セグメントプロセスを項目で設定するには

- 1. [セグメントプロセスの設定]ウィンドウの[セグメント]タブで、[入力]ドロップダウンリストを使用してプロセスへの入力を指定します。 複数のソースセルを使用するには、[複数セル]ボタンをクリックして、ダイアログボックスからセルを選択します。
- 2. [データ項目で作成]を選択し、ドロップダウンリストからセグメントの作成に使用する項目を選択します。

[プロファイル]ウィンドウが開き、選択した項目のプロファイルが自動的に開始します。

3. プロファイルが完了してから**[OK]**をクリックして、すべてのセグメントが適切に作成されたことを確認します。

セグメントリストと[セグメント数]項目は、選択した項目のプロファイルの結果に基づいて更新されます。 項目を最初に選択した後で再プロファイルを行うには、[プロファイル]をクリックします。

- 4. 必要に応じて、残りの設定オプションを設定します。
- 5. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

関連トピック

- ・セグメントプロセスの設定: [セグメント]タブ
- ・セグメントプロセスの設定: [書込み]タブ
- ・セグメントプロセスの設定: [全般]タブ
- 項目のプロファイル
- ・出力セルのサイズ制限
- プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

セグメントプロセスをクエリで設定するには

- 1. [セグメントプロセスの設定]ウィンドウの[セグメント]タブで、[入力]ドロップダウンリストを使用してプロセスへの入力を指定します。 複数のソースセルを使用するには、[複数セル]ボタンをクリックして、ダイアログボックスからセルを選択します。
- 2. [クエリで作成]を選択します。
- 3. 作成するセグメント数を決定して、その数を[セグメント数]項目に入力します。
- 4. 各セグメントのクエリを構築するには、セグメントを選択して[編集]をクリックし、[セグメントの編集]ウィンドウを開きます。 詳細は、「[新規セグメント]ウィンドウと[セグメントの編集]ウィンドウ」を参照してください。
- 5. 必要に応じて、残りの設定オプションを設定します。
- 6. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

関連トピック

- ・セグメントプロセスの設定: [セグメント]タブ
- ・セグメントプロセスの設定: [書込み]タブ
- ・セグメントプロセスの設定: [全般]タブ
- 項目のプロファイル
- ・プロセス内でのクエリの作成
- ・出力セルのサイズ制限
- ・プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

セグメントプロセスの設定: [セグメント]タブ

次の表で、**[セグメントプロセスの設定]**ウィンドウの[セグメント]タブの項目、ボタン、コントロールについて説明します。

項目/コントロール	説明
入力	セグメントプロセスへの入力を指定します。 ドロップダウン リストには、セグメントプロセスに接続されているあらゆるプ ロセスからの出力セルがすべて含まれます。
[複数セル]ボタン	セグメントプロセスへの入力として複数のソースセルを選択で きるようにします。
データ項目で作成	データのセグメント化に使用する項目を指定します。 データは、選択した項目に存在している個別の値を使用してセグメント化されます。 項目内のそれぞれの値は別々のセグメントを作成します。
[プロファイル]ボタン	[プロファイル]ウィンドウが開き、選択した項目内のレコード の値と配信を計算します。 データ項目で作成する場合のみア クティブになります。
[ユーザ定義項目]ボタン	[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。 データ項目で 作成する場合のみアクティブになります。
クエリで作成	作成するクエリに基づいてデータをセグメント化します。

項目/コントロール	説明
セグメント数	作成するセグメント数を指定します。 クエリで作成する場合 のみアクティブになります。
	既定では、「Segment1」、「Segment2」、「Segment3」と いう既定の名前で3つのセグメントが作成されます。
	データ項目で作成する場合: [セグメント数] 項目は、選択した 項目のプロファイルの結果に基づいて更新されます。
データの重複を許可しない	データの重複を許可しない(つまり、条件を満たす各レコード が複数のセグメントに属さない)かどうかを指定します。
書込みテーブルの作成	セグメントで出力セルごとに書込みテーブルを作成するかどうかを指定します。 このオプションを選択すると、Campaignは、セグメント間で重複する対象オーディエンスをトラッキングし続けるために必要な情報を後のプロセスに確実に提供できるようになります。
	このチェックボックスをオンにすると、[書込み]タブのオプ ションが有効になります。
	[データの重複を許可しない]が選択されている場合、この チェックボックスは無効になります。
セグメント名	すべてのセグメントを名前で一覧表示します。
	既定では、「Segment1」、「Segment2」、「Segment3」と いう既定の名前で3つのセグメントが作成されます。
	データ項目で作成する場合: セグメント名は、選択した項目の プロファイルの結果に基づいて更新されます。 たとえ ば、「A」と「B」という2つの異なる値を持 つ「Acct_Status」というデータ項目で作成する と、「Acct_Status_A」および「Acct_Status_B」という名前 の2つのセグメントが作成されます。
最大データ件数	各セグメントに許容される最大レコード件数。
サイズ	セグメントの条件を満たすレコード件数。 プロセスの実行前 は、この数値には出力セル内のレコードの合計件数が既定で設 定されます。
クエリ	当該セグメントの条件を定義するクエリ。 クエリで作成する 場合のみ表示されます。
1つ上へ	選択したセグメントの処理順序を1つ上の位置に移動できま す。 セグメントは、テーブルに一覧表示されている順序で処 理されます。

項目/コントロール	説明
1つ下へ	選択したセグメントの処理順序を1つ下の位置に移動できます。 セグメントは、テーブルに一覧表示されている順序で処理されます。
[新規セグメント]ボタン	[新規セグメント] ウィンドウを開きます。 クエリで作成する場合のみアクティブになります。
[編集]ボタン	選択したセグメントを編集するために [セグメントの編集] ウィ ンドウを開きます。
削除	選択したセグメントを削除します。 セグメントが削除される と、 [セグメント数] 項目が自動的に更新されます。
0件のセグメントは後続処理を 行わない	当該プロセスのダウンストリームプロセスが空のセグメントに 対して実行されないようにします。

関連トピック

- 項目のプロファイル
- ・ユーザ定義項目の作成

セグメントプロセスの設定: [書込み]タブ

フローチャートのセグメントプロセスで指定した出力を、メールリストプロセスまたはコールリストプロセスへの入力としてアクセスできるようにするには、[セグメントプロセスの設定]ウィンドウの[書込み]タブを使用します。 次の表で、[書込み]タブの項目、ボタン、コントロールについて説明します。

項目	説明
ターゲットデータソース	このプロセスからの出力が書き込まれる場所。 Campaign サーバおよび接続しているその他のデータソースには、 [ター ゲットデータソース]ドロップダウンリストからアクセスでき ます。

項目	説明
選択項目	書込み可能な項目のリスト。入力データソースに基づいた項目 名やデータ型などが含まれます。
	入力ソースがeMessageのランディングページの場合、各項目名はランディングページの属性です。 特殊文字やスペースが含まれている属性は、有効な項目名に変換されます。 すべてのランディングページ属性のデータ型は、テキストとして一覧表示されます。
書込み項目	[選択項目]リストからの書込みを選択した項目。 出力名は既定 で[書込み項目]列の項目名になります。
[プロファイル]ボタン	[プロファイル]ウィンドウが開き、選択した項目内のレコード の値と配信を計算します。 項目名が [選択項目]リストで選択 されている場合のみアクティブになります。
[ユーザ定義項目]ボタン	[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。
[詳細]ボタン	[詳細設定]ウィンドウが開きます。このウィンドウには、重複 レコードをスキップするオプションとCampaignが重複を特定 する方法を指定するオプションが含まれます。

関連トピック

- 項目のプロファイル
- ・ユーザ定義項目について

セグメントプロセスの設定: [全般]タブ

[セグメントプロセスの設定]の[全般]タブでは、プロセス名、出力セル名、セルコードを変更したり、プロセスの 説明を入力したりできます。 これらのオプションの詳細については、次のトピックを参照してください。

- セル名の変更
- セル名のリセット
- グリッド内のすべてのセルをコピーして貼り付けるには
- セルコードの変更

[新規セグメント]ダイアログと[セグメントの編集]ダイアログ

次の表で、[新規セグメント]ダイアログと[セグメントの編集]ダイアログの項目、ボタン、コントロールについて説明します。

☼ New Segmentダイアログには、クエリで作成している場合のみアクセスできます。 データ項目で作成する場合は、[名前]項目と[最大データ件数]項目のみ[セグメント の編集]ダイアログからアクセスできます。

項目/コントロール	説明
名前	セグメントの名前。
最大データ件数	セグメントに許容される最大レコード件数。
ソースの選択	クエリの基準とするデータソースを指定します。
すべての <audience_level>IDを選択</audience_level>	データソースのすべてのIDを[入力]ドロップダウンリストに含めます。 <audience_level>はソースセルのオーディエンスレベルの名前です。</audience_level>
条件を指定して <audi- ence_level>IDを選択</audi- 	定義した条件に基づく特定のIDのみを選択するクエリを作成する関数にアクセスできます。 <audience_level>はソースセルのオーディエンスレベルの名前です。</audience_level>
[詳細設定]ボタン	 [詳細設定]タブを開きます。このタブには次のオプションがあ ります。
	 未加工SQLを使用する - 未加工SQLクエリを使用してデータをセグメント化します。 入力セルのクエリスコープを使用する - 当該セグメントプロセスに対するソースセルでクエリを使用する場合のみ使用できます。 ソースセルのクエリと現在の選択条件を(「AND」を使用して)結合するには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザ定義項目]ボタン	[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。
クエリテキストボックスとボ タン	クエリテキストボックスおよび関連する項目とボタンの詳細に ついては、「プロセス内でのクエリの作成」を参照してくださ い。

関連トピック

- SQLを使用したクエリの作成
- ・ユーザ定義項目の作成

選択

選択プロセスを使用して、キャンペーンフローチャートで使用する顧客データを指定します。 選択プロセスは、Campaignで最も頻繁に使用されるプロセスです。 大部分のフローチャートは、1つ以上の選択プロセスから開始します。選択プロセスにより、さらに処理するデータをデータマートから選択します。

選択プロセスを設定するには

1. 編集モードのフローチャートで、フローチャートの作業空間の選択プロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが開きます。

- 2. [入力]ドロップダウンリストから、プロセスのデータソースを指定します。
- 3. データソースからすべての行を選択するか、特定の条件に基づいて行をフィルタリングするかを決定します。

次のいずれかのオプションを選択します。

- [すべてのIDを選択]を選択し、[入力]ドロップダウンリストに、データソースの すべてのデータ行を含めます。
- [条件を指定してIDを選択]を選択し、定義した条件に基づいて特定のIDだけを選択するクエリを作成します。
- ☆ オプション名は、入力データソースのオーディエンスレベルに基づきます。 たとえば、オーディエンスレベルが「顧客」の場合、オプションは[すべての顧客IDを選択]および[条件を指定して顧客IDを選択]として表示されます。 オーディエンスレベルが「世帯」の場合、オプションは[すべての世帯IDを選択]および[条件を指定して世帯IDを選択]として表示されます。
- 4. [条件を指定してIDを選択] オプションを使用し、指定した条件に基づいて特定のID のみ選択する場合は、次のいずれかの方法でクエリを作成します。
 - ポイント&クリック

これは既定の表示です。 [項目名]、[演算子]、 [値]、および[And/Or]列のセルを クリックして値を選択し、クエリを構築します。 このツールでは最も単純かつ 簡単にクエリを作成でき、構文エラーの発生を防ぐ上で役立ちます。

SQL入力

未加工SQLを作成する、またはIBM Unica マクロを使用する場合は、このツールを使用します。

マクロ

IBM Unica マクロにアクセスするには、[SQL入力]内の[入力サポート]を使用します。

未加工SQL

- 5. クエリを構築する場合は、クエリに含める項目([IBM Unica Campaign定義項目] や[ユーザ定義項目]など)を[選択項目]リストから選択します。 詳細について は、「プロセス内でのクエリの作成」を参照してください。
 - ☆ Campaign定義項目と同じ名前のテーブル項目をクエリに含める場合は、次の構文を使用して項目名を限定する必要があります。

.<field name>

この構文は、Campaign定義項目の代わりにテーブル項目を使用することを示します。

- 6. 出力セルのサイズを制限する(つまり、プロセスによって生成されるIDの数を制限する)には、[セルサイズの制限]タブをクリックします。
- 7. [全般] タブをクリックします。このタブでは、プロセス名、出力セルの名前、またはセルコードをオプションで変更したり、プロセスに関する説明を入力したりできます。
- 8. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

関連トピック

- ・新規プロセスをフローチャートに追加するには
- ・2つのプロセスを接続するには
- プロセスに対するデータソースの選択
- ・ポイント&クリックでクエリを作成するには
- ・SQL入力でクエリを作成するには
- カスタムマクロについて
- SQLを使用したクエリの作成
- ・出力セルのサイズ制限
- セル名とセルコード
- ・セル名の変更
- セルコードの変更
- ・プロセス設定ダイアログを使用してフローチャートのセルをターゲットセルにリンクするには
- ・プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

実行プロセス

Campaignには、次の実行プロセスが用意されています。

- コールリスト
- セグメント化
- キューブ

- メールリスト
- スケジュール
- スナップショット

コールリスト

コールリストプロセスは、コンタクトプロセスの1つです。 コールリストプロセスを使用して、コンタクトリスト(たとえば、テレマーケティングキャンペーン用)を生成し、そのコンタクトリストに特定のオファーを割り当て、コンタクト履歴を記録します。

コールリストプロセスは、メールリストプロセスと同じように設定します。

コンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)を設定するに は

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがコンタクトプロセスによって入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、コンタクトセルが接続されていることを確認します。
 - 入力セルとして選択するセルは、すべて同じオーディエンスレベルである必要があります。
- 2. フローチャートの作業空間でコンタクトプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [実現]タブで、リスト出力のフルフィルメントの詳細を指定します。
 - a. [入力]ドロップダウンリストから、コンタクトリストのデータソースとして使用する入力セルを指定します。
 - ☆ 出力セルを指定するプロセスにコンタクトプロセスが接続されていない場合、[入力]ドロップダウンリストには選択するセルがありません。 入力プロセスで複数のセルが生成される場合は、ドロップダウンリストの[複数セル]オプションのみ選択可能です。
 - b. (オプション)コンタクトリスト出力の書き込み先を指定するには、[エクスポート 先を有効にする]チェックボックスがオンであることを確認してから、ドロップ ダウンリストを使用して次のオプションのいずれかを指定します。
 - プロセス出力をデータベーステーブルに書き込むには、[エクスポート先を有効にする]ドロップダウンリストで目的のデータベーステーブルの名前を選択します。
 - 使用するベーステーブルがリストに表示されない場合や、マップされていないテーブルにプロセス出力を書き込む場合は、ドロップダウンリストから[データベーステーブル]を選択して、[データベーステーブルの指定]ウィンドウを開きます。 このウィンドウでテーブルとデータベースの名前を指定します。 ここで指定するテーブル名にはユーザ変数を使用できます。

- プロセス出力をファイルに書き込むには、[エクスポート先を有効にする]ドロップダウンリストから[ファイル]を選択して、[出力ファイルの指定]ウィンドウを開きます。 このウィンドウを使用して、出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリを指定します。
- ☆ 確認可能な一時ファイルに出力がエクスポートされるプロセスを実行して、コンタクトプロセスをテストできます。

[エクスポート先を有効にする]チェックボックスは、既定でオンです。 オフにすると、ファイルやデータベーステーブルへ出力せずにプロセスを実行できます。

- c. (オプション)[サマリファイル]項目にパスとファイル名を入力してこのプロセスのサマリファイル(.sum)を作成するか、または省略記号ボタンをクリックしてファイルの場所まで移動します。 サマリファイルには、メール配信を円滑に行うためにメーリングハウスで必要とされる可能性があるエクスポートに関する情報が含まれます。
- d. (オプション)[トリガ送信]チェックボックスをオンにし、送信するトリガをドロップダウンリストから選択して、プロセスの実行終了時にトリガを送信します。 複数のトリガを送信するには、Ctrlキーを押しながら追加する各トリガをクリックして選択します。 選択されたトリガは、[トリガ送信]項目にカンマ区切りで表示されます。
- 4. [処理]タブをクリックして、このプロセスで定義されるターゲットセルごとに1つ以上のオファーまたはオファーリストを割り当てます。 [パラメータ]タブをクリックして、各セルにオファーパラメータを指定します。
- 5. **[カスタマイズ]**タブをクリックして、コンタクトリストに書き出される項目を指定します。
 - a. 「選択項目」リストから、出力に含める項目を選択します。

[IBM Unica Campaign定義項目]リストを展開してIBM Unica Campaign定義項目を使用したり、[ユーザ定義項目]ボタンをクリックしてユーザ定義項目を使用したりできます。 Ctrlキーを押しながらクリックして一度に複数の項目を選択するか、Shiftキーを押しながらクリックして連続した範囲内の項目を選択します。

- b. [追加>>]をクリックし、選択した項目を[出力項目]リストに移動します。
- c. [出力項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。
- d. テーブルをエクスポート(出力)先として選択した場合は、そのテーブルの項目が[出力項目]リストの[テーブル項目]列に表示されます。 [照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と完全一致する項目は、[出力項目]リストに自動的に追加されます。 一致する項目が複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。 [<<削除]または[追加>>]をクリックして、組み合わせを手動で変更できます。
- e. 必要に応じて、[出力項目]リスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。
- ☆ 項目内の値を表示するには、項目を選択して[プロファイル]をクリックします。

6. 重複するIDを持つレコードを除外するように指定する、またはレコードの出力順序 を指定するには、「詳細」をクリックします。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

- a. 重複IDを持つすべてのレコードを除外するよう設定するには、[重複IDのデータを除外]チェックボックスをオンにし、重複IDが返される場合にどのレコードを維持するかを決定するためにCampaignで使用される条件を選択します。 たとえば、MaxOfおよびHousehold_Incomeを選択すると、重複IDが返されたときに、世帯収入が最も多いIDのみをCampaignがエクスポートするように設定できます。
- ☆ このオプションでは、同一の入力セルでの重複のみが除外されます。 複数の入力セルに同じIDが存在する場合は、コンタクトリストの重複IDは許容されます。すべての重複IDをコンタクトリストから除外するには、コンタクトプロセスの上流工程にあるマージプロセスまたはセグメントプロセスを使用して、重複IDを消去するか、データの重複を許可しないセグメントを作成する必要があります。
- b. 出力コンタクトリストを何らかの順序で並べるように指定するには、[出力順] チェックボックスをオンにして、ソートに使用する項目とソート順序を選択しま す。 たとえば、Last_Nameと[昇順]を選択して、IDリストを名字で昇順にソー トするように指定できます。
- 7. [OK]をクリックして、[詳細設定]ウィンドウを終了します。

指定した、重複IDの除外とソート順序は、**[カスタマイズ]**タブの[出力項目] リストの 下に表示されます。

- 8. **[ログ]**タブをクリックして、このプロセスからコンタクトトランザクションのログを記録する方法を指定します。
 - ☆ コンタクト履歴のログオプションを有効または無効にするには、適切な権限が必要です。
 - a. コンタクト履歴のログをシステムテーブルに記録するには、[コンタクト履歴に記録]チェックボックスをオンにします。
 - ☆ Campaignからのトラッキングおよびレポーティングでコンタクト情報を使用できるようするために、システムテーブルにログを記録してください。メーリングリストを設定していて、何らかの処理(住所や世帯の確認など)を実行するメーリングハウスにメーリングリストを送信する予定がある場合は、システムテーブルにログを記録しないでください。代わりにトラッキングプロセスを使用して、実際にオファーを送信された顧客のリストだけを取得するのではなく、メーリングハウスから返される情報を記録します。
 - b. または、システムテーブル以外の場所に記録するために、[任意の保存先に記録] チェックボックスをオンにします。

- ☆ 情報を別の形式でさらに処理する必要がある場合は、コンタクト情報を別のテーブルまたはファイルに保存することが必要になる場合もあります。 また、コンタクトプロセスから出力された情報をテストしてからシステムテーブルに保存する場合も、システムテーブル以外の場所に情報を記録することが必要になる場合があります。
- c. [任意の保存先に記録]を選択した場合は、[保存先]ドロップダウンリストを使用して、テーブルまたはファイルを指定します。

[ファイル]を選択すると、[出力ファイルの指定]ウィンドウが表示されます。出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリをここで指定します。

9. コンタクト履歴に出力する項目を指定します。これを行うには、[選択項目]リストから項目を選択し、[追加>>]ボタンを使用して、[出力項目]リストに項目を移動します。 選択項目ではユーザ定義項目も使用できます。

[出力項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

必要に応じて、[ログ項目]リスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。

[照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と 完全一致する項目は、[ログ項目] リストに自動的に追加されます。 一致する項目が 複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。

- 10. 出力ファイルまたはテーブルへの更新がどのように処理されるかを指定するオプションを選択します。
 - データ追記 新しいコンタクト情報をテーブルまたはファイルの最後に追加します。 このオプションを区切り記号付きファイルに対して選択した場合、ラベルは1行目としてエクスポートされません。 これはデータテーブル向けに推奨される方法です。
 - データ置換 テーブルまたはファイルからすべての既存データを削除し、新しいコンタクト情報に置き換えます。
- 11. コンタクト履歴に書き込まれる情報をカスタマイズするには、[詳細オプション]を クリックします。

[コンタクト履歴ログオプション]ウィンドウが開きます。

a. このプロセスの実行時にコンタクト履歴が更新されないようにするには、[処理 の作成のみ]を選択します。

このオプションを選択すると、コンタクト履歴を更新*せずに*新しい処理が処理テーブルに生成されるため、履歴の更新を遅らせることができます。 たとえば、無効な住所や重複する住所を処理後に削除する予定であるため、コンタクト履歴の書き込みを避ける場合があるかもしれません。 オファーが実際に送信されたIDのリストを待つ場合、結果のコンタクト履歴はより小さくかつより正確になります。

このチェックボックスをオンにすると、コンタクト履歴が記録されないために適用されなくなる、このウィンドウ内の他のオプションが無効になることに注意してください。

既定では、このチェックボックスはオフで、コンタクト履歴はプロセスの実行時に 更新されます。 コンタクト履歴の記録の詳細については、「コンタクト履歴とレス ポンストラッキング」を参照してください。

b. 最新のプロセス実行と同じパッケージIDで新しい処理を生成するには、[前回のパッケージIDの使用]を選択します。

同じコンタクトプロセス内で個人に送信されたすべてのオファーは、1つの「パッケージ」としてみなされます。既定では、[前回のパッケージIDの使用]は選択されていません。つまり、コンタクトプロセスが本番実行されるたびに、各パッケージに一意のIDが割り当てられます。

顧客の履歴が更新されないように[処理の作成のみ]を選択した場合は、このチェックボックスもオンにして、前回の実行のパッケージIDが各オファーセットに割り当てられるようにすることで、オファーを既存のコンタクト履歴にリンクさせます。

- c. コンタクト履歴をトラッキングするオーディエンスレベルを[トラッキングオーディエンス]ドロップダウンリストから選択します。
- d. コンタクトリスト内の個人にコンタクトする日付を[コンタクト日付]項目に入力します。 カレンダーの日付をクリックして選択することもできます。 日付を入力しない場合、Campaignはフローチャート実行日を使用します。
- e. [コンタクトステータスコード]ドロップダウンリストを使用して、トラッキング のステータスコードを入力します。
- f. [ログ]タブで項目を選択したときと同じ方法で、[追加>>]、[<<削除]、[照合>>]、[1つ上へ]、および[1つ下へ]ボタンを使用して、項目を選択して[選択項目]リストと[ログ項目]リスト間で移動します。
- g. 記録する追加項目の指定が完了したら、[閉じる]をクリックします。

プロセス設定ダイアログの[ログ]タブに戻ります。

- 12. (オプション)コンタクトプロセスを次に実行する前に、既存のコンタクト履歴の一部またはすべてと、関連付けられているレスポンス履歴のエントリを消去するには、[履歴の消去]をクリックします。
 - [履歴の消去]は、コンタクトおよびレスポンスの履歴レコードをシステムテーブ ルから完全に削除します。 このデータは復元できません。
- 13. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

14. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

セグメント化

セグメント化プロセスを使用して、顧客データベーステーブルからオーディエンスIDのリストを作成します。 これらのセグメントは、選択のベース、ディメンションおよびキューブ作成のベース、またはオーディエンスレベルのグローバル抑制セグメントとして使用できます。

セグメント化プロセスは、Campaign管理者によって使用されるように設計されており、複数のキャンペーン間で使用されるため、アプリケーションの[セッション]領域で作成および定義される必要があります。

☆ このプロセスは、セッションフローチャートではなくキャンペーン内で使用できますが、複数のキャンペーン間で使用されるため、Campaignの[セッション]領域ですべてのグローバルコンストラクタを作成することをお勧めします。

戦略的セグメントを操作するには、次の操作を行います。

- アプリケーションの[セッション]領域でセグメントを作成する
- アプリケーションの[セグメント]領域からセグメントを管理する
- アプリケーションの[キャンペーン]セクションからこれらのセグメントをキャンペーンに使用する

セグメント化プロセスを設定するには

- ☆ セグメント化プロセスはCampaign管理者が使用するために設計されており、アプリケーションの[セッション]領域で作成して定義する必要があります。こうすることでセグメントが戦略的になり、すべてのキャンペーンでグローバルに使用できるようになります。
- 1. 編集モードのセッションフローチャートで、セグメント化プロセスをフローチャートの作業空間に追加します。
- 2. セグメント化プロセスを1つ以上のデータ操作プロセス(たとえば選択プロセス)に接続して、入力を指定します。
- 3. セグメント化プロセスをダブルクリックします。
 - プロセス設定ダイアログが開きます。
- 4. [セグメントの定義]タブで、次のことを行います。
 - a. [入力]ドロップダウンリストから1つ以上のソースセルを選択します。 これらの ソースセルがセグメントになります。
 - b. 作成したセグメントを重複禁止にするには、[データの重複を許可しない]を選択 します。
 - ☆ ディメンションやキューブではセグメントが重複禁止であることが要求されるため、ほとんどの場合はデータの重複を許可しません。
 - c. [結果セグメント]領域で、入力セルをハイライト表示し、[編集]をクリックして セグメントを設定します。

[セグメントの編集]ウィンドウが開きます。

- 5. [セグメントの編集]ウィンドウで、次のことを行います。
 - a. 目的を示す名前と、セグメントの用途の簡単な説明をセグメントに指定します。
 - b. **[配置先フォルダ]**ドロップダウンリストで、セグメントを保存するフォルダを選択します。
 - c. [一時テーブルのデータソース]ドロップダウンリストで、戦略的セグメントをキャッシュするデータソースを選択します。
 - ☆ データソースの選択が必要となるのは、

Campaign | Server | Optimization

ページの<userinput class="+ topic/ph sw-d/userinput

">doNotCreateServerBinFile</userinput>プロパティがTRUE . に設定されている場合のみです。このプロパティがTRUEに設定されている場合は、データソースを少なくとも1つ選択する必要があります。

- d. [セキュリティポリシー]ドロップダウンリストから、作成したセグメントが属するセキュリティポリシー(該当する場合)を選択します。
- e. 完了したら、[OK]をクリックして[セグメントの定義]タブに戻ります。
- 6. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

7. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。

☆ 戦略的セグメントは、セグメント化プロセスが運用モードで正常に実行された場合にのみ作成され、選択可能になります。 セグメント化プロセスをテストモードで実行しても、戦略的セグメントの作成または更新は行われません。

セグメント化プロセスをテストできますが、戦略的セグメントの作成や既存の戦略的セグメントの更新は行われません。

キューブ

キューブプロセスは、顧客データベーステーブルから作成された戦略的セグメントに基づいた、ディメンションによるデータキューブの作成をサポートします。

☆ キューブプロセスは、熟練したユーザまたはIBM Unica コンサルタントが使用する ことを前提としています。 すべてのグローバルコンストラクタ(キューブ、戦略的セ グメントなど)は、アプリケーションの[セッション]領域で作成することをお勧めし ます。

ユーザは、1つ以上の定義済みセグメントを選択し、キューブを作成し、データをドリル処理して、フローチャートに含めるために適切なプロセス(選択プロセスなど)に変換できる対象オーディエンスを選択することができます。

キューブプロセスを設定するには

[セッション]領域で作成されたキューブはグローバルに使用できます。

- 1. キューブプロセスを使用してキューブを作成するには、まず戦略的セグメントまた はディメンション階層を作成する必要があります。
- 2. セッションフローチャートで、キューブプロセスを選択して作業空間までドラッグ アンドドロップします。
- 3. フローチャートの作業空間でキューブプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 4. [ソース]タブで、 [入力セグメント]ドロップダウンリストを使用して、キューブへの入力として1つ以上のセグメントを選択します。
 - 複数のソースセグメントを選択する場合は、オーディエンスレベルがすべて同じであることを確認してください。
- 5. **[キューブ定義]**タブをクリックしてキューブを定義します。 [キューブ定義]ウィンドウが開きます。

[キューブ定義]ウィンドウでは、次のことを行えます。

- [追加]をクリックして新規キューブを追加します。
- 既存のキューブを選択し、[編集]をクリックして変更します。
- 既存のキューブを選択し、「削除」をクリックして削除します。
- 6. キューブを追加するには、次の手順に従います。
 - a. 「追加」をクリックします。 [キューブの編集]ウィンドウが開きます。
 - b. キューブの名前と説明を適切な領域に入力します。
 - c. 対応するドロップダウンリストから最大3つのディメンションを選択します。 ディメンションは、キューブソースが基づいている戦略的セグメントに関連して いる必要があります。
 - d. キューブの情報の入力を完了したら、**[OK]** をクリックします。 [キューブの編集]ウィンドウが閉じ、新しいキューブ定義が**[キューブ定義]**タブのキューブリストに表示されます。
- 7. **[追加項目の選択]** タブをクリックして、トラッキング用に追加項目を指定します。 [追加項目の選択]ウィンドウが開きます。

[追加項目の選択]ウィンドウでは、次のことを行えます。

• トラッキングする項目を[選択項目]リストから選択し、[追加>>]ボタンを使用して[選択済み項目]リストに移動します。

- [ユーザ定義項目]をクリックして、トラッキングするユーザ定義項目を選択また は作成します。
- 「プロファイル」をクリックして、選択した項目をプロファイルします。
- 8. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

9. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

メールリスト

メールリストプロセスは、コンタクトプロセスの1つです。 メールリストプロセスは、フローチャート内の他のプロセスからの出力セルを使用して、ダイレクトメールキャンペーンのコンタクトリストを生成し、そのコンタクトリストに特定のオファーを割り当て、コンタクト履歴を記録します。

コンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)を設定するに は

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがコンタクトプロセスによって入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、コンタクトセルが接続されていることを確認します。
 - 入力セルとして選択するセルは、すべて同じオーディエンスレベルである必要があります。
- フローチャートの作業空間でコンタクトプロセスをダブルクリックします。
 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [実現]タブで、リスト出力のフルフィルメントの詳細を指定します。
 - a. [入力]ドロップダウンリストから、コンタクトリストのデータソースとして使用する入力セルを指定します。
 - ☆ 出力セルを指定するプロセスにコンタクトプロセスが接続されていない場合、[入力]ドロップダウンリストには選択するセルがありません。 入力プロセスで複数のセルが生成される場合は、ドロップダウンリストの[複数セル]オプションのみ選択可能です。
 - b. (オプション)コンタクトリスト出力の書き込み先を指定するには、**[エクスポート** 先を有効にする**]**チェックボックスがオンであることを確認してから、ドロップ ダウンリストを使用して次のオプションのいずれかを指定します。

- プロセス出力をデータベーステーブルに書き込むには、[エクスポート先を有効にする]ドロップダウンリストで目的のデータベーステーブルの名前を選択します。
- 使用するベーステーブルがリストに表示されない場合や、マップされていないテーブルにプロセス出力を書き込む場合は、ドロップダウンリストから[データベーステーブル]を選択して、[データベーステーブルの指定]ウィンドウを開きます。 このウィンドウでテーブルとデータベースの名前を指定します。 ここで指定するテーブル名にはユーザ変数を使用できます。
- プロセス出力をファイルに書き込むには、[エクスポート先を有効にする]ドロップダウンリストから[ファイル]を選択して、[出力ファイルの指定]ウィンドウを開きます。 このウィンドウを使用して、出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリを指定します。
- ☆ 確認可能な一時ファイルに出力がエクスポートされるプロセスを実行して、コンタクトプロセスをテストできます。

[エクスポート先を有効にする]チェックボックスは、既定でオンです。 オフにすると、ファイルやデータベーステーブルへ出力せずにプロセスを実行できます。

- c. (オプション)[サマリファイル]項目にパスとファイル名を入力してこのプロセスのサマリファイル(.sum)を作成するか、または省略記号ボタンをクリックしてファイルの場所まで移動します。 サマリファイルには、メール配信を円滑に行うためにメーリングハウスで必要とされる可能性があるエクスポートに関する情報が含まれます。
- d. (オプション)[トリガ送信]チェックボックスをオンにし、送信するトリガをドロップダウンリストから選択して、プロセスの実行終了時にトリガを送信します。 複数のトリガを送信するには、Ctrlキーを押しながら追加する各トリガをクリックして選択します。 選択されたトリガは、[トリガ送信]項目にカンマ区切りで表示されます。
- 4. **[処理]**タブをクリックして、このプロセスで定義されるターゲットセルごとに1つ以上のオファーまたはオファーリストを割り当てます。 **[パラメータ]**タブをクリックして、各セルにオファーパラメータを指定します。
- 5. **[カスタマイズ]**タブをクリックして、コンタクトリストに書き出される項目を指定 します。
 - a. 「選択項目]リストから、出力に含める項目を選択します。

[IBM Unica Campaign定義項目]リストを展開してIBM Unica Campaign定義項目を使用したり、[ユーザ定義項目]ボタンをクリックしてユーザ定義項目を使用したりできます。 Ctrlキーを押しながらクリックして一度に複数の項目を選択するか、Shiftキーを押しながらクリックして連続した範囲内の項目を選択します。

- b. 「追加>>]をクリックし、選択した項目を「出力項目」リストに移動します。
- c. [出力項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

- d. テーブルをエクスポート(出力)先として選択した場合は、そのテーブルの項目が[出力項目]リストの[テーブル項目]列に表示されます。 [照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と完全一致する項目は、[出力項目]リストに自動的に追加されます。 一致する項目が複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。 [<<削除]または[追加>>]をクリックして、組み合わせを手動で変更できます。
- e. 必要に応じて、[出力項目]リスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。
- ☆ 項目内の値を表示するには、項目を選択して「プロファイル」をクリックします。
- 6. 重複するIDを持つレコードを除外するように指定する、またはレコードの出力順序 を指定するには、「詳細」をクリックします。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

- a. 重複IDを持つすべてのレコードを除外するよう設定するには、[重複IDのデータを除外]チェックボックスをオンにし、重複IDが返される場合にどのレコードを維持するかを決定するためにCampaignで使用される条件を選択します。 たとえば、MaxOfおよびHousehold_Incomeを選択すると、重複IDが返されたときに、世帯収入が最も多いIDのみをCampaignがエクスポートするように設定できます。
- ☆ このオプションでは、同一の入力セルでの重複のみが除外されます。 複数の入力セルに同じIDが存在する場合は、コンタクトリストの重複IDは許容されます。すべての重複IDをコンタクトリストから除外するには、コンタクトプロセスの上流工程にあるマージプロセスまたはセグメントプロセスを使用して、重複IDを消去するか、データの重複を許可しないセグメントを作成する必要があります。
- b. 出力コンタクトリストを何らかの順序で並べるように指定するには、[出力順] チェックボックスをオンにして、ソートに使用する項目とソート順序を選択しま す。 たとえば、Last_Nameと[昇順]を選択して、IDリストを名字で昇順にソー トするように指定できます。
- 7. [OK]をクリックして、[詳細設定]ウィンドウを終了します。
 - 指定した、重複IDの除外とソート順序は、[カスタマイズ]タブの[出力項目] リストの下に表示されます。
- 8. **[ログ]**タブをクリックして、このプロセスからコンタクトトランザクションのログを記録する方法を指定します。
 - ☆ コンタクト履歴のログオプションを有効または無効にするには、適切な権限が必要です。
 - a. コンタクト履歴のログをシステムテーブルに記録するには、[コンタクト履歴に記録]チェックボックスをオンにします。

- ☆ Campaignからのトラッキングおよびレポーティングでコンタクト情報を使用できるようするために、システムテーブルにログを記録してください。メーリングリストを設定していて、何らかの処理(住所や世帯の確認など)を実行するメーリングハウスにメーリングリストを送信する予定がある場合は、システムテーブルにログを記録しないでください。代わりにトラッキングプロセスを使用して、実際にオファーを送信された顧客のリストだけを取得するのではなく、メーリングハウスから返される情報を記録します。
- b. または、システムテーブル以外の場所に記録するために、[任意の保存先に記録] チェックボックスをオンにします。
- ☆ 情報を別の形式でさらに処理する必要がある場合は、コンタクト情報を別のテーブルまたはファイルに保存することが必要になる場合もあります。 また、コンタクトプロセスから出力された情報をテストしてからシステムテーブルに保存する場合も、システムテーブル以外の場所に情報を記録することが必要になる場合があります。
- c. [任意の保存先に記録]を選択した場合は、[保存先]ドロップダウンリストを使用して、テーブルまたはファイルを指定します。

[ファイル]を選択すると、[出力ファイルの指定]ウィンドウが表示されます。出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリをここで指定します。

9. コンタクト履歴に出力する項目を指定します。これを行うには、[選択項目]リストから項目を選択し、[追加>>]ボタンを使用して、[出力項目]リストに項目を移動します。 選択項目ではユーザ定義項目も使用できます。

[出力項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

必要に応じて、[ログ項目]リスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。

[照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と 完全一致する項目は、[ログ項目] リストに自動的に追加されます。 一致する項目が 複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。

- 10. 出力ファイルまたはテーブルへの更新がどのように処理されるかを指定するオプションを選択します。
 - データ追記 新しいコンタクト情報をテーブルまたはファイルの最後に追加します。 このオプションを区切り記号付きファイルに対して選択した場合、ラベルは1行目としてエクスポートされません。 これはデータテーブル向けに推奨される方法です。
 - データ置換 テーブルまたはファイルからすべての既存データを削除し、新しいコンタクト情報に置き換えます。
- 11. コンタクト履歴に書き込まれる情報をカスタマイズするには、**[詳細オプション]を** クリックします。

[コンタクト履歴ログオプション]ウィンドウが開きます。

a. このプロセスの実行時にコンタクト履歴が更新されないようにするには、[処理 の作成のみ]を選択します。

このオプションを選択すると、コンタクト履歴を更新*せずに*新しい処理が処理テーブルに生成されるため、履歴の更新を遅らせることができます。 たとえば、無効な住所や重複する住所を処理後に削除する予定であるため、コンタクト履歴の書き込みを避ける場合があるかもしれません。 オファーが実際に送信されたIDのリストを待つ場合、結果のコンタクト履歴はより小さくかつより正確になります。

このチェックボックスをオンにすると、コンタクト履歴が記録されないために適用されなくなる、このウィンドウ内の他のオプションが無効になることに注意してください。

既定では、このチェックボックスはオフで、コンタクト履歴はプロセスの実行時に 更新されます。 コンタクト履歴の記録の詳細については、「コンタクト履歴とレス ポンストラッキング」を参照してください。

b. 最新のプロセス実行と同じパッケージIDで新しい処理を生成するには、[前回のパッケージIDの使用]を選択します。

同じコンタクトプロセス内で個人に送信されたすべてのオファーは、1つの「パッケージ」としてみなされます。既定では、[前回のパッケージIDの使用]は選択されていません。つまり、コンタクトプロセスが本番実行されるたびに、各パッケージに一意のIDが割り当てられます。

顧客の履歴が更新されないように[処理の作成のみ]を選択した場合は、このチェックボックスもオンにして、前回の実行のパッケージIDが各オファーセットに割り当てられるようにすることで、オファーを既存のコンタクト履歴にリンクさせます。

- c. コンタクト履歴をトラッキングするオーディエンスレベルを[トラッキングオーディエンス]ドロップダウンリストから選択します。
- d. コンタクトリスト内の個人にコンタクトする日付を[コンタクト日付]項目に入力します。 カレンダーの日付をクリックして選択することもできます。 日付を入力しない場合、Campaignはフローチャート実行日を使用します。
- e. [コンタクトステータスコード]ドロップダウンリストを使用して、トラッキング のステータスコードを入力します。
- f. [ログ]タブで項目を選択したときと同じ方法で、[追加>>]、[<<削除]、[照合>>]、[1つ上へ]、および[1つ下へ]ボタンを使用して、項目を選択して[選択項目]リストと[ログ項目]リスト間で移動します。
- g. 記録する追加項目の指定が完了したら、[閉じる]をクリックします。 プロセス設定ダイアログの[ログ]タブに戻ります。
- 12. (オプション)コンタクトプロセスを次に実行する前に、既存のコンタクト履歴の一部またはすべてと、関連付けられているレスポンス履歴のエントリを消去するには、**「履歴の**消去**]**をクリックします。
 - 【履歴の消去】は、コンタクトおよびレスポンスの履歴レコードをシステムテーブ ルから完全に削除します。 このデータは復元できません。
- 13. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

14. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

スケジュール

本 スケジュールプロセスは、Unica Schedulerとは関係ありません。 Schedulerは、フローチャートが実行されていない場合でもフローチャートを開始しますが、フローチャート内のスケジュールプロセスは、そのフローチャートが実行している場合のみ動作します。 スケジュールプロセスを使用するフローチャートをスケジュールする場合、Schedulerは使用しないでください。

スケジュールプロセスを使用して、1つのプロセス、一連のプロセス、またはフローチャート全体を開始します。 スケジュールプロセスは、定義された期間、アクティブになります。 たとえば、その期間に指定されたイベントが発生すると、後続の接続プロセスの実行が開始されます。 スケジュールプロセスの最も一般的な使用方法は、フローチャート全体のタイミングをコントロールすることです。

スケジュールプロセスを設定して、プロセス実行開始からの時間制限を日、時間、および分単位で設定することにより、スケジュール合計期間を定義できます。

スケジュールオプションには、詳細設定と柔軟な設定の両方があります。

- プロセスの実行は、相対的、トリガまたはカレンダーなど、さまざまな方法により スケジュールできます。
- 複数のスケジュールオプションを組み合わせて、たとえば、毎週月曜日午前9時にプロセスを実行するようにスケジュールしたり、特定のイベント(Webサイト上でヒットした場合など)でトリガされたときに実行するようにスケジュールすることもできます。
- バッチプロセスをスケジュールすることもできます。たとえば、日中の仕事の邪魔にならないように夜間遅くに実行されるようにスケジュールできます。

フローチャートのスケジュールで同時に使用できるオプションは、その数に制限はありません。ただし、その組み合わせが互いに衝突するようなオプションでない場合に限ります。 (たとえば、フローチャートに対して「1回のみ」と「毎週月曜日」のオプションを同時にスケジュールすることはできません。)

通常、プロセスは、その入力がすべて正常に実行した場合(つまり、その依存性が一時的なものであっても、現在のプロセスに接続しているすべてのプロセスが実行された場合)のみ実行します。 ただし、複数のスケジュール入力が1つのブランチ内に存在するとき、プロセスは、その入力のいずれか1つが完了したところで(その入力の「論理積」ではなく「論理和」で)実行します。

トラッキングが有効になっているコンタクトプロセスには固有のスケジュールが含まれています。 フローチャート内でのスケジュールプロセスの使用は高度な機能です。 目的どおり動作しており、正しい結果が得られていることを確認してください。

☆ フローチャート内のスケジュールプロセスで、前の実行を完了する前にフロー チャートを実行するようにスケジュールしている場合、Campaignは、前の実行が終 了するまで要求を保留します。 この方法で保留できる実行は1回のみです。 このた め、場合によっては、フローチャートが予想より少なく実行される場合がありま す。

たとえば、フローチャートの実行に2時間かかり、10分ごとに実行を3回トリガするスケジュールプロセスがある場合、Campaignがまず最初の実行を開始します。 スケジュールプロセスが2回目の実行を開始しようとすると、Campaignはこれをキューに入れます。 スケジュールプロセスが3回目の実行を開始しようとすると、Campaignはこれを無視します。 最初の実行が終了すると、Campaignは2回目の実行を開始します。 3回目の実行は行われません。

スケジュールプロセスを設定するには

1. 編集モードのフローチャートで、フローチャートの作業空間のスケジュールプロセスをダブルクリックします。

プロセス設定ダイアログが開きます。

- 2. [スケジュール]タブで、スケジュールの条件を指定します。
 - a. [日]、[時間]、および[分]の項目に適切な値を入力して、[実施期間]の値を指定します。 実施期間は、スケジュールプロセスがアクティブである総期間です。 既定では、実施期間は30日に設定されます。
 - b. **[実施頻度]**ドロップダウンリストで実施頻度を選択して、スケジュールプロセス で後続の接続プロセスをアクティブにする正確なタイミングを指定します。
 - [1回のみ]オプションを選択すると、他のどのスケジュールオプションが追加されているかに関係なく、フローチャートは1回だけ実行されます。 他の値が選択されている場合、スケジュールオプションはORステートメントとして接続され、いずれかのオプションが満たされると、スケジュールプロセスは接続先のプロセスを開始します。
 - 最初に満たされたオプションによって、スケジュールの実行が開始されます。 選択されている唯一のオプションが[実施頻度]で、かつその設定が[1回 のみ]の場合、(遅延や実行許可が有効になっていない限り)プロセスはすぐに実行されます。
 - [時間]と[分]の項目では、スケジュールを実行する時間を指定できます。 時間の入力フォームは24時間時計(「軍事時間」とも呼ばれる)に基づきます。 つまり、9時間30分は午前9時30分、22時間35分は午後10時45分を意味します。 24時間ベースであるため、午前や午後の指定は不要です。
- 3. [実施頻度]ドロップダウンリストから[カスタム設定]を選択すると、[カスタム設定] オプションが使用可能になります。 [日時指定] チェックボックスまたは[トリガ指定]チェックボックス(あるいはその両方)をオンにして、スケジュールの実行を特定の時間にするか、それとも着信トリガに基づくかを指定します。 トリガの詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

[☆] この2つのオプションは、互いに排他的ではありません。 トリガの指定と時間の 指定を併せて選択できます。

- [日時指定]を選択する場合は、1つ以上の日時を指定する必要があります。 複数 のエントリは、カンマで区切る必要があります。 日時を選択するためのカレン ダー機能にアクセスするには、[カレンダー]をクリックします。
- [トリガ指定]を選択する場合は、1つ以上のトリガを指定する必要があります。 スケジュールプロセスを完全に設定するには、[ツール] > [トリガ]で名前付きトリガを定義する必要があります。 スケジュールプロセスをアクティブにできる各トリガの名前を入力します。 複数のトリガは、カンマで区切ります。 トリガ名にはカンマ以外の文字を使用できます。 トリガ名を一意にする必要はありません。 複数のキャンペーンやフローチャートで同じトリガを使用して、全部を同時にアクティブにできます。
- 4. [実行時に承認が必要]チェックボックスまたは[実行前の待機期間]チェックボック ス(あるいはその両方)をオンにして、実行制限の設定を指定します。
 - ☆ この2つのオプションは、互いに排他的ではありません。 どちらか1つだけを選択することも、両方を選択することもできます。
 - [実行時に承認が必要]を選択すると、他のスケジュール条件が満たされるたびに 実行許可を求める確認メッセージが表示され、許可されるまでスケジュールプロ セスはアクティブになりません。 このオプションを指定すると、他のスケ ジュール指示よりもこのオプションが優先され、承認が得られるまでプロセスは 開始しません。
 - [実行前の待機期間] を選択する場合は、[日]、[時間]、[分]の項目を使用して、スケジュール条件が満たされてからプロセスを実行するまでの待機時間を指定する必要があります。 この待機時間は、指定されている他のすべてのスケジュールオプションに適用されます。 たとえば、スケジュールプロセスが月曜日の午前9時に実行するように設定されていて、待機時間が1時間の場合、後続のプロセスは午前10時に実行を開始します。
- 5. (オプション)スケジュール実施完了後に送信するトリガを指定するには、[実施後トリガ実行]チェックボックスをオンにして1つ以上のトリガを指定します。

[実施後トリガ実行] チェックボックスをオンにすると、Campaignは、スケジュールプロセスがアクティブになるたびに1つ以上のトリガを実行します。 発信トリガはコマンドラインを実行します。これは、バッチファイルでもスクリプトファイルでも可能です。 [ツール] > [トリガ]を使用して、名前付きトリガを定義する必要があります。複数のトリガ名を指定する場合は、それらをカンマで区切る必要があります。

6. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

7. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

関連トピック

- ・新規プロセスをフローチャートに追加するには
- ・2つのプロセスを接続するには
- スケジュールプロセスでカレンダーツールを使用するには
- トリガに基づいたスケジュール指定
- プロセスを実行するには
- フローチャートのテスト

スケジュールプロセスでカレンダーツールを使用するには

カレンダーツールは、[実施頻度]ドロップダウンリストから[カスタム設定]を選択した場合に、スケジュールプロセス設定ダイアログで使用できます。

日付だけでなく時刻も選択できる点を除いて、Campaign内の他の場所にあるカレンダーツールと同じです。

1. スケジュールプロセス設定ダイアログの[スケジュール]タブで、[カレンダー]をクリックします。 このボタンは、[実施頻度]ドロップダウンリストから[カスタム設定]を選択した場合にのみ使用可能になります。

カレンダーツールが表示されます。 既定では、現在の日時が選択されています。

- 2. フローチャートを実行または開始する日付を指定します。
 - 表示されている月の日付をクリックするか、次の操作を実行します。
 - 「月1ドロップダウンリストで、月、年、時刻を変更します。
 - 年を変更するには、上矢印または下矢印を使用します。
- 3. **[実行時刻]**項目に目的の時刻を入力して、時刻を指定します。hh:mmの形式で、後ろにa.m.またはp.m.を付けてください。
- 4. [カレンダー]ウィンドウを開いたままにしておく場合、指定した日付と時刻を入力したら[適用]をクリックします。または、指定した日付と時間を入力したら[OK]をクリックして、[カレンダー]ウィンドウを閉じます。

[カレンダー]ウィンドウを開いたままにしておくと、簡単に複数の日時を入力することができます。

トリガに基づいたスケジュール指定

スケジュールプロセスは、次の方法でトリガを使用できます。

- トリガでの実行
- 実施後トリガ実行
- トリガと他のスケジュールオプションとの併用

トリガで実行するようにスケジュールプロセスを設定するには

1. スケジュールプロセル設定のダイアログの[スケジュール]タブで、[実施頻度]ドロップダウンリストから[カスタム設定]を選択します。

[カスタム設定]機能が使用可能になります。

- 2. [トリガ指定]項目に、スケジュールプロセスをアクティブにできる各トリガの名前を入力します。 複数のトリガは、カンマで区切ります。
 - トリガ名にはカンマ以外の文字を使用できます。
 - トリガ名を一意にする必要はありません。 複数のキャンペーンやフローチャートで同じトリガを使用して、全部を同時にアクティブにできます。

トリガでの実行

[実施頻度]ドロップダウンリストから[カスタム指定] を選択すると、[トリガ指定]オプションが使用可能になります。 このオプションを有効にして、スケジュールプロセスをアクティブにする1つ以上の着信トリガを指定します。

[トリガ指定]を有効にすると、1つ以上のトリガを指定する必要があります。 スケジュールプロセスを完全に設定するには、[ツール] > [トリガ]で名前付きトリガを定義する必要があります。

着信トリガは、実行中にフローチャートまたはキャンペーンを自動的に設定する外部イベントです。 Webサイトリンクのクリック、電子メールメッセージの受信、テレマーケティング担当者のレスポンス表示、データベースアップロードの完了など、その他あらゆる定義済みイベントをトリガできます。

[トリガ指定]オプションは、IBM Unica アプリケーションのunica_actrg(Campaignインストールに付属)を使用します。 トリガ指定の動作を理解するには、サンプルが役立ちます。

例: トリガでの実行

あるオンライン小売業者が、トリガで実行されるクロスセルキャンペーンを行います。 このキャンペーンでは、顧客が買い物をすると、クロスセルオファーがトリガされま す。

具体的には、顧客が買い物をすると、次のことが起こります。

- Webサイトでunica_actrg実行可能ファイルが実行され、キャンペーンコードとトリガ名(web_purchase)が渡されます。
- Campaignリスナで、キャンペーンがアクティブであり、トリガ名が存在していることが確認されたら、スケジュールプロセスが実行され、キャンペーンフローチャートがトリガされます。

トリガの詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

実施後トリガ実行

発信トリガはコマンドラインを実行します。これは、バッチファイルでもスクリプトファイルでも可能です。 スケジュールプロセスが[実施後トリガ実行]項目でトリガ名をアクティブ化するたびに1つ以上のトリガを実行するように、Campaignをセットアップできます。 複数のトリガ名を指定する場合、コンマで区切る必要があります。

この機能により、発信トリガを実行可能ファイルに送信できます。 ファイルの完全パスと名前を、[トリガ]ウィンドウで定義しておく必要があります。 スケジュールプロセスが起動するたびに、Campaignは指定の実行可能ファイルを実行します。

トリガと他のスケジュールオプションとの併用

トリガは、他のスケジュールオプションと組み合わせても、単独でも使用できます。 組み合わせて使用する場合、たとえば、毎週月曜日午前9時に、およびインターネット バナー広告がクリックされるたびにフローチャートを実行するようにセットアップでき ます。

たとえば、Webサイトでのヒットに基づいてフローチャートをトリガ実行するようにスケジュールしており、[実行前の待機期間]も指定している場合、イベント(Web上でのヒット)が発生して待機時間が終了するまで、フローチャートは開始しません。

スナップショット

スナップショットプロセスを使用して、IDおよび関連データのリストをキャプチャし、 それをテーブルまたはファイルにエクスポートします。

オファーをリストに関連付けたりトラッキングしたりするには、メールリストプロセスまたはコールリストプロセスを使用します。 重複行がエクスポートされないようにするには、書込みプロセスを使用してから、結果をスナップショットします。

スナップショットプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがスナップショットプロセスによって入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、スナップショットプロセスが接続されていることを確認します。
 - ☆ 入力セルとして選択するセルは、すべて同じオーディエンスレベルである必要があります。
- 2. フローチャートの作業空間でスナップショットプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [スナップショット]タブをクリックします。
 - a. [入力]ドロップダウンリストから、スナップショットのデータソースとして使用する入力セルを指定します。

- ☆ 出力セルを指定するプロセスにスナップショットプロセスが接続されていない場合、[入力]ドロップダウンリストには選択するセルがありません。 入力プロセスで複数のセルが生成される場合は、ドロップダウンリストの[複数セル]オプションのみ選択可能です。
- b. **[エクスポート先]**ドロップダウンリストで、スナップショット出力を書き込む テーブルまたはファイルを指定します。
- ☆ 確認可能な一時ファイルに出力がエクスポートされるプロセスを実行して、スナップショットプロセスをテストできます。
 - 使用するテーブルがリストに表示されない場合や、マップされていないテーブルに出力を書き込む場合は、[データベーステーブル]を選択します。 [データベーステーブルの指定]ウィンドウが開くので、テーブルとデータベースの名前を指定します。 ここで指定するテーブル名にはユーザ変数を使用できます。
 - [エクスポート先]ドロップダウンリストから[ファイル] を選択すると、[出力ファイルの指定]ウィンドウが表示されるので、出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリをここで指定します。
- c. 出力ファイルまたはテーブルへの更新がどのように処理されるかを指定するオプションを選択します。
 - データ追記 新しい情報をテーブルまたはファイルの最後に追加します。 このオプションを区切り記号付きファイルに対して選択した場合、ラベル は1行目としてエクスポートされません。 これはデータテーブル向けに推奨 される方法です。
 - データ置換 テーブルまたはファイルからすべての既存データを削除し、 新しい情報に置き換えます。
 - データ更新 (テーブルにエクスポートする場合のみ使用可能)スナップ ショット用に指定されているすべての項目は、現在のプロセス実行の値で更 新されます。
 - 新規ファイル作成 (ファイルにエクスポートする場合のみ使用可能) ファイルにエクスポートする場合は、このオプションが既定で選択されます。 プロセスを実行するたびに新規ファイルが作成され、「_1」、「_2」、などがファイル名に追加されます。
- 4. スナップショットプロセスによって書き出された項目を指定します。
 - a. [選択項目]リストから、出力に含める項目を選択します。

Campaign定義項目のリストを展開してCampaign定義項目を使用したり、[ユーザ定義項目]ボタンをクリックしてユーザ定義項目を使用したりできます。 Ctrlキーを押しながらクリックして一度に複数の項目を選択するか、Shift キーを押しながらクリックして連続した範囲内の項目を選択します。

- b. **[追加 >>]を**クリックし、選択した項目を**[エクスポート項目]**リストに移動します。
- c. [エクスポート項目]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

- d. テーブルをスナップショット(エクスポート)先として選択した場合は、そのテーブルの項目が[出力項目]リストの[テーブル項目]列に表示されます。 [照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と完全一致する項目は、[出力項目]リストに自動的に追加されます。 一致する項目が複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。 [<<削除]または[追加>>]をクリックして、組み合わせを手動で変更できます。
- e. 必要であれば、[エクスポート項目] リリストで項目を並べ替えることもできます。その場合は、項目を選択し、[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックして、項目をリスト内で上下に移動します。
- ☆ 項目内の値を表示するには、項目を選択して「プロファイル」をクリックします。
- 5. 重複するIDを持つレコードを除外するように指定する、またはレコードの出力順序を指定するには、「詳細」をクリックします。

[詳細設定]ウィンドウが開きます。

- a. 重複IDを持つすべてのレコードを除外するよう設定するには、[重複IDのデータを除外]チェックボックスをオンにし、重複IDが返される場合にどのレコードを維持するかを決定するためにCampaignで使用される条件を選択します。 たとえば、MaxOfおよびHousehold_Incomeを選択すると、重複IDが返されたときに、世帯収入が最も多いIDのみをCampaignがエクスポートするように設定できます。
- ☆ このオプションでは、同一の入力セルでの重複のみが除外されます。 複数の入力セルに同じIDが存在する場合は、スナップショットリストの重複IDは許容されます。 すべての重複IDを除外するには、スナップショップロセスの上流工程にあるマージプロセスまたはセグメントプロセスを使用して、重複IDを消去するか、データの重複を許可しないセグメントを作成する必要があります。
- b. スナップショット出力を何らかの順序で並べるように指定するには、[出力順] チェックボックスをオンにして、ソートに使用する項目とソート順序を選択しま す。 たとえば、Last_Nameと[昇順]を選択して、IDリストを名字で昇順にソー トするように指定できます。
- 6. [OK]をクリックして、[詳細設定]ウィンドウを終了します。
 - 指定した、重複IDの除外とソート順序は、[スナップショット]タブの[エクスポート項目] リストの下に表示されます。
- 7. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。
 - 名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。
- 8. **[OK]**をクリックします。
- プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。 プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されることを確認できます。

関連トピック

- ・新規プロセスをフローチャートに追加するには
- ・2つのプロセスを接続するには
- ・オーディエンスレベル
- ・コンタクトログ用の出力ファイルまたはテーブルの指定
- 項目のプロファイル
- ・ユーザ定義項目について
- ・プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

最適化プロセス

Campaignには、次の最適化プロセスが用意されています。

- モデル
- レスポンス
- スコア
- トラッキング

モデル

モデルプロセスを使用して、リアルタイムスコア設定またはバッチスコア設定で使用できるランタイムモデルファイルを作成できます。 これにより、レスポンスモデルの作成が自動化され、レスポンスが最も期待できる候補を判断するために、顧客または見込み客のスコア設定を行うのに使用できます。

通常、レスポンダ(オファーまたはコミュニケーションを受けて、肯定的または何らかのアクションを示したコンタクト)を表すセルと、非レスポンダ(何もアクションがなかったコンタクト)を表すセルから入力を取得するモデルプロセスをフローチャート内にセットアップします。

たとえば、オファーを受けた人を選択する選択プロセスと、レスポンダを選択する選択 プロセスを用意します。 その後、マージプロセスを使用してレスポンダを除外して、 非レスポンダのリストを作成します。 マージ出力と「レスポンダ」選択出力をモデル プロセスに接続し、モデルに対して非レスポンダセルとレスポンダセルを提供します。

別のシナリオでは、選択プロセスで1つのオファーにおけるすべてのコンタクトを選択し、次に、セグメントプロセスを使用してそのセルをレスポンダと非レスポンダで分類します。

モデルプロセスを設定するには

1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがモデルプロセスの入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、モデルプロセスが接続されていることを確認します。

- 2. フローチャートの作業空間でモデルプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [ソース]タブで、[レスポンダ]および[ノンレスポンダ]ドロップダウンリストから、レスポンダセルとノンレスポンダセルを選択します。 これらのドロップダウンリストには、モデルプロセスへの入力セルが挿入されています。モデルプロセスの入力がない場合は空です。
 - ☆ 両方の入力セルのオーディエンスレベルが同じである必要があります。
- 4. [説明変数]リストから、モデルの生成中にモデルプロセスで使用する変数を選択します。 すべての変数を選択([すべて使用]をクリック)して、モデリングに最も有効な入力セットをモデルプロセスで決定することができます。 ただし、値をモデルに追加しない変数(すべてのレコードで値が同じ変数や、すべてのレコードで値が異なる変数など)を除外すると、変数の自動選択プロセスを高速化できます。
 - ☆ 変数の予想値が疑わしい場合は、その変数を含めて、使用すべきかどうかをモデルプロセスで決定できます。

モデルの設定にユーザ定義項目を使用することもできます。

- 5. **[操作]**タブで、**[最適モデル]**オプションを使用して、データマイニングアルゴリズム がどのような方法で最適モデルにたどり着くのか (指定した時間に基づいてたどり着くのか、または指定した数の候補モデルの中からたどり着くのか)を選択します。
 - 最適モデル生成期間 (既定)モデリングの時間制限を指定できます。 モデルプロセスは、指定した期間に構築された最適モデルを保持します。 既定では3時間です。
 - 最適モデル候補数 構築するモデルの数を指定できます。 モデルプロセスは、 これらのうち最適なモデルを保持します。 既定では20です。
- 6. [使用アルゴリズム]ドロップダウンリストからアルゴリズムを選択して、実行するモデリングのタイプを選択します。 1つ、複数、またはすべてのアルゴリズムを選択できます。
 - ☆ [すべてのアルゴリズム] (既定)を選択すると、より正確なモデルが構築されますが、時間がかかる可能性があります。
- 7. **[保持するモデルの最大数]**項目に正の整数を入力して、保持するモデルの最大数を設定します。 既定では5です。 各上位モデルは、指定されたファイル名の最後にシャープ記号(#)が付けられて保存されます。 複数のモデルを保持する場合は、モデルのランクを示すインデックスがベースファイル名に追加されます。
 - ☆ 保持するモデルの数が多いほど、対応する情報を保存するためにより多くのディスク領域が必要になります。
- 8. **[モデルファイル名]**項目に、作成するモデルファイルの絶対パス名を指定するか、[参照]をクリックしてファイルに移動します。 プロセスを実行すると*NAME*.rtm モデルファイルが生成されます。このファイルは、スコアプロセスでのスコア設定に使用できます。

9. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

10. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

レスポンス

レスポンスプロセスは、メールリストプロセスまたはコールリストプロセスなどのコンタクトプロセスを使用してコンタクトした顧客のレスポンスをトラッキングします。プロセス設定中に定義されたルールに基づいて、どのレスポンスが有効であるか、およびそのレスポンスをどのようにキャンペーンまたはオファーに帰属させるかについて、レスポンスプロセスで評価します。 レスポンスプロセスの出力は、複数のレスポンス履歴システムテーブルに書き込まれ、そのデータは、キャンペーンパフォーマンス/収益性レポートによる分析で使用されます。

最も簡単な形式では、レスポンスプロセスは、選択プロセス(オプションで、セグメントプロセス)に接続する独自のフローチャートで使用されます。 このようなフローチャートでは、選択プロセスで、レスポンダとそのレスポンスアクションについてのデータが含まれるマッピングテーブルからIDを選択します。 これらのIDが、セグメントプロセスにより意味のあるグループに分類され、最終的にレスポンスプロセスに渡されます。ここで、レスポンストラッキングルールが適用され、レスポンス履歴テーブルに出力が書き込まれます。

レスポンスプロセスは、対応するコンタクトプロセスと緊密に連携します。現在トラッキングされているレスポンダは、このコンタクトプロセスにおいて、特定のオファーの対象セルのメンバであった可能性があります。 したがって、レスポンスプロセスを設定するには、事前に次の操作を行う必要があります。

- コンタクトリストのオーディエンスレベルを把握し、コンタクトおよびトラッキングする各オーディエンスレベルのコンタクト履歴システムテーブルとレスポンス履歴システムテーブルが、マッピング済みであることを確認します。これは通常、システム管理者が行います。
- レスポンダをトラッキングしている各オーディエンスレベルに対して別々にレスポンスプロセスをセットアップします。
- トラッキングするレスポンスタイプを表すコードを把握している必要があります。
- トラッキング用にマッピングするために、コンタクトリストに送信されたCampaign 生成コード(キャンペーン、セル、オファー、または処理コード)を把握している必 要があります。
- Campaignで、一時テーブルがCampaignシステムテーブルデータベースに作成されるようにします(つまり、AllowTempTablesプロパティをtrueに設定します)。

レスポンスプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがレスポンスプロセスによって入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、レスポンスプロセスが接続されていることを確認します。
- フローチャートの作業空間でレスポンスプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [ソース]タブをクリックします。
 - a. [入力] ドロップダウンリストから、ソースセルを選択します。 ソースセルは、 顧客のレスポンス情報を保持するデータマートにマッピングされたテーブルに由 来します。
 - ※ 区切り記号付きフラットファイルをレスポンスプロセスへの入力として使用する場合、入力ファイル内のデータ型はレスポンスプロセスによってマッピングされないため、すべてのデータ型が適切にマッピングされていることを確認する必要があります。 一致しないデータ型を使用すると(UA_Treatment.TreatmentCode項目が「文字列」型のときに、処理コードが「数値」としてマッピングされているなど)、一部のデータベース(DB2上のシステムテーブルなど)でデータベースエラーが発生する原因になります。
 - b. [レスポンス日付]ドロップダウンリストから、レスポンスプロセスで出力される レコードに関連付ける日付を選択します。 既定では「実行日付」の値が選択さ れています。 ユーザ定義項目を使用して[レスポンス日付]を入力することもでき ます。
 - c. トラッキングするレスポンスタイプコードを選択します。 レスポンスタイプ コードはグローバルに定義されており、すべてのキャンペーンで使用できます。
- 4. [処理へのマッピング]タブをクリックします。

[操作項目候補]リストが表示されるので、トラッキングする関連項目をここで選択します。 [オファー項目/処理項目の組み合わせ]リストの[オファー/処理属性]列に、システム内のすべてのオファーまたは処理属性が一覧表示されます。

a. 照合する適切な項目がペアになるように、トラッキングする項目を[操作項目候補]リストから選択し、[追加>>]ボタンを使用して[オファー項目/処理項目の組み合わせ]リストに移動します。

Ctrlキーを押しながらクリックして一度に複数の項目を選択したり、Shiftキーを押しながらクリックして連続した範囲内の項目を選択したりできます。 ユーザ定義項目を[操作項目候補]に使用することもできます。

- b. [オファー項目/処理項目の組み合わせ]リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。
- c. 必要に応じて、[オファー項目/処理項目の組み合わせ]リスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。

- ☆ マッピングされていない項目、および値を使用できない(またはNULLの)項目は、レスポンス属性に使用できません。 処理インスタンスがレスポンスに帰属するためには、すべてのコードが無視されるコントロールを除き、入力されたすべての項目が一致する必要があります。
- 5. [ログ]タブをクリックして、レスポンス履歴に記録する項目を指定します。

[選択項目]リストから項目を選択し、[追加>>]ボタンを使用して[ログ項目]リストに移動します。 選択項目ではユーザ定義項目も使用できます。

[ログ項目] リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

[ログ項目] リスト内の項目を並べ替えるには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックし、項目をリスト内で上下に移動します。

[照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と 完全一致する項目は、[ログ項目] リストに自動的に追加されます。 一致する項目が 複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。

6. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

7. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

スコア

スコアプロセスを使用して、買い物をしたりオファーに反応した各顧客の尤度を評価し、実行を計画しているキャンペーンの最適な顧客または見込み客を識別します。 スコア設定は、PredictiveInsightまたはCampaignのモデルプロセスで作成されたランタイムモデルファイル(.rtmファイル)からインポートされたモデリング結果に基づきます。

たとえば、スコアプロセスは、フローチャート内で次のように使用されます。 フローチャートを毎月実行するスケジュールプロセスにより、フローチャートが開始します。 スケジュールプロセスは、データマート内のデータから顧客IDのリストを生成する選択プロセスに接続されています。 IDは、データモデルに対してスコア設定を行うスコアプロセスに送信されます。 最後に、スコアプロセスの結果がスナップショットプロセスに送信され、スプレッドシートに書き込まれます。



スコアプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがスコアプロセスによって入力として使用されるように設定されているプロセスに、スコアプロセスが接続されていることを確認します。
- 2. フローチャートの作業空間でスコアプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [入力] ドロップダウンリストで、スコアを設定する顧客IDを含むソースセルを選択します。
- 4. **[モデル数]**項目で、整数を入力して作成するモデル数を指定するか、上下の矢印ボタンを使用してカウントを増減させます。
 - ☆ [パラメータ対象]ドロップダウンリストには、[モデル数]項目に指定した数のモデルが、Model 1、Model 2、Model 3、というように名前を付けられて含まれます。 モデル数を変更すると、[パラメータ対象]ドロップダウンリストに一覧表示されるモデルは自動的に変更されます。
- 5. スコア設定するモデルごとに、[スコア項目名]と[モデルファイル]を指定します。 [パラメータ対象]ドロップダウンリストを使用して、設定する必要のある各モデル を選択します。
- 6. [スコア項目名]項目に、モデルのスコア設定結果を保存する項目名を入力します。 既定の名前はスコアN_1 です。

この項目に「MYSCORE」と入力し、指定したモデルに1つの出力項目が定義されている場合、スコア項目名はMYSCOREになります。 複数の出力がある場合、スコア項目名はMYSCORE_1、MYSCORE_2、MYSCORE_3、(以下同様)になります。

使用可能な項目のリストがCampaignで表示されるとき、スコア項目はテーブルに属 しているように表示されます。

7. **[モデルファイル]**項目に、顧客IDのスコア設定に使用するモデルファイルのフルパスとファイル名を入力します。

使用するモデルのフルパスとファイル名を入力するか、[参照]をクリックし てWindowsの標準ファイル選択ウィンドウを呼び出します。

8. [変数の照合]をクリックして、変数名と入力ソースのテーブルの項目を照合します。 [変数の照合]ウィンドウが開きます。

顧客を適切にスコア設定するには、モデルで使用される変数がスコア設定されるデータセット内の対応する項目と確実に照合できることを確認する必要があります。 たとえば、モデルでaverage_balance変数が使用される場合、この変数は、スコア設定されるデータセット内の平均残高を含む項目と照合する必要があります。

a. [選択項目]リストでデータセット内の項目と一致する項目を選択し、[追加>>]ボタンを使用して[照合結果]リストに移動します。

[照合]をクリックし、同一の項目名を自動的に照合できます。 この場合、手動照合はすべて上書きされます。

また、[ユーザ定義項目]をクリックして、ユーザ定義項目を作成することもできます。

- スコアプロセスを設定するには、[照合結果リスト]内のすべての変数を照合する 必要があります。 変数名に項目名を照合する必要はありませんが、データ型(数 値や文字列)には照合が必要です。
- b. 変数名の照合を完了したら、[OK]をクリックします。

[変数の照合] ウィンドウが閉じ、プロセス設定ダイアログの[スコア]タブに戻ります。

9. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

10. **[OK]**をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテストして、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

関連トピック

- ・ユーザ定義項目について
- ・プロセスを実行するには
- フローチャートのテスト

トラッキング

コンタクト履歴内の既存レコードのコンタクトステータスまたは追加トラッキング項目 を更新するには、トラッキングプロセスを使用します。

☆ トラッキングプロセスは、コンタクト履歴の既存行のみ更新できます。新しい行は 作成できません。

たとえば、初めに「推奨」コンタクトステータスのレコードがコンタクト履歴に書き込まれていた場合、トラッキングプロセスを使用して、実際にコンタクトされたレコードのコンタクトステータスを、コンタクト履歴で「コンタクト済み」に更新できます。または、たとえば、ダイレクトメールが送信されたすべてのコンタクトが「コンタクト済み」のステータスでコンタクト履歴に書き込まれ、その後、配達不能郵便のリストを受け取った場合、そのリストの個人を「配達不能」として更新できます。

トラッキングプロセスを設定するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルがトラッキングプロセスの入力として使用されるように設定されている1つ以上のプロセスに、トラッキングプロセスが接続されていることを確認します。
- 2. フローチャートの作業空間でトラッキングプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. [ソース]タブをクリックします。
 - a. [入力]ドロップダウンリストから、ソースセルを選択します。
 - b. [コンタクト日付]ドロップダウンリストから、トラッキングプロセスで更新されるレコードに関連付けるコンタクト日付を選択します。 既定では「実行日付」の値が選択されています。 ユーザ定義項目を使用して[コンタクト日付]を入力することもできます。
 - c. コンタクト履歴内で更新するレコードに関連付けるコンタクトステータスコード を選択します。
- 4. [処理へのマッピング]タブをクリックします。

[操作項目候補]リストが表示されるので、処理コードと照合する関連項目を選択します。 処理コードは、コンタクト履歴内で更新する行を一意に特定します。 処理コードとペアになるように、照合に使用する項目を[操作項目候補]リストから選択し、[追加>>]ボタンを使用して[オファー項目/処理項目の組み合わせ]リストに移動します。

- 5. **[ログ]**タブをクリックして、このプロセスのコンタクト履歴を更新する方法を指定します。
 - ☆ コンタクト履歴テーブルの更新を有効または無効にするには、適切な権限が必要です。
 - a. システムテーブル内のコンタクト履歴を更新するには、[コンタクト履歴テーブルに記録]チェックボックスをオンにします。

a. [コンタクト履歴テーブルに記録]のみ選択した場合、追加項目をコンタクト履歴 に書き込むには、[追加項目] をクリックします。

[コンタクト履歴ログオプション]ウィンドウが開きます。

[ログ]タブで項目を選択したときと同じ方法で、[追加>>]、[<<削除] 、 [照合>>]、[1つ上へ]、および[1つ下へ] ボタンを使用して、項目を選択して[選択項目]リストと[ログ項目]リスト間で移動します。 照合されない項目は更新されません。

記録する追加項目の指定が完了したら、[閉じる]をクリックします。

b. または、システムテーブル以外の場所に記録するために、[任意の保存先に記録] チェックボックスをオンにして、別のテーブルまたはファイルへの書き込みを有 効にします。

[ファイル]を選択すると、[出力ファイルの指定]ウィンドウが表示されます。出力を書き込むファイルのタイプ、ファイル名、対応するデータディクショナリをここで指定します。

a. [任意の保存先に記録]のみを選択した場合は、[選択項目]リストから項目を選択して出力する項目を指定し、[追加>>]ボタンを使用して、[出力項目]リストに項目を移動します。

選択項目ではユーザ定義項目も使用できます。

[出力項目] リストから項目を削除するには、項目を選択してから[<<削除]をクリックします。

必要に応じて、[ログ項目] Iリスト内の項目を並べ替えます。これを行うには、項目を選択してから[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックしし、項目をリスト内で上下に移動します。

[照合>>]をクリックし、一致する項目を自動的に検索できます。 テーブル項目名と 完全一致する項目は、[ログ項目] リストに自動的に追加されます。 一致する項目が 複数ある場合は、最初の一致が取り出されます。

- b. [任意の保存先に記録]のみを選択した場合は、出力ファイルまたはテーブルへの 更新がどのように処理されるかを指定するオプションを選択します。
 - データ追記 新しいコンタクト情報をテーブルまたはファイルの最後に追加します。 このオプションを区切り記号付きファイルに対して選択した場合、ラベルは1行目としてエクスポートされません。 これはデータテーブル向けに推奨される方法です。
 - データ置換 テーブルまたはファイルからすべての既存データを削除し、 新しいコンタクト情報に置き換えます。
- 6. (オプション)名前や説明をプロセスに割り当てる場合は、**[全般]** タブをクリックします。

名前がフローチャートのプロセスに表示されます。 説明は、フローチャートのプロセス上にマウスを置くと表示されます。

7. [OK]をクリックします。

プロセスが設定され、有効になってフローチャートに表示されます。プロセスをテスト して、予想どおりの結果が返されるかどうかを検証できます。

関連トピック

- ・新規プロセスをフローチャートに追加するには
- ・2つのプロセスを接続するには
- プロセスに対するデータソースの選択
- ユーザ定義項目について
- ・コンタクトログ用の出力ファイルまたはテーブルの指定
- ・プロセスを実行するには
- ・フローチャートのテスト

7 オファー

- オファーについて
- 統合システムを使用したオファー管理
- オファー属性
- オファーバージョン
- オファーテンプレート
- オファーリストについて
- 処理
- コントロールグループ
- オファーの操作
- オファーリストの操作

オファーについて

オファーは、1つ以上のチャネルを使用して特定の対象者グループに送るマーケティングコミュニケーションです。 オファーには単純なものも複雑なものもあります。 シンプルなオファーとしては、たとえば、オンライン小売業が、4月中のすべてのオンライン購入に対して送料無料のオファーを提供します。 複雑なオファーとしては、たとえば、金融機関のクレジットカードで、対象者の借入限度額と信用格付に基づいたグラフィック、初期利率、および有効期限のカスタマイズされた組み合わせが考えられます。

Campaignでは、1つ以上のキャンペーンで使用できるオファーを作成します。

オファーは次の状況で再利用可能です。

- さまざまなキャンペーン間で
- さまざまなタイミングで
- ・ さまざまなグループ(セル)間で
- バージョン間で(オファーのパラメータ化された項目を変えることによって)

オファーは、一度使用したら削除することはできませんが、回収することはできます。

回収されたオファーは割り当てできなくなり、回収された割り当て済みオファーは提供 されなくなります。 回収されたオファーも、オファー階層上で表示され(淡色表示)、レ ポーティングやレスポンストラッキングで使用できます。

オファーは、社内で指定されている形式に基づいた、一意のシステム割り当てオファーコードで識別されます。 セキュリティ権限に応じて、オファーコードを上書きしたり再生成したりできますが、その場合、新しいオファーコードの一意性はCampaignによりチェックされなくなります。 一意でないオファーコードを作成し、レスポンストラッキングでそのオファーコードを使用した場合、トラッキング結果に不整合が発生する可能性があります。

オファーコードの詳細については、『Campaign管理者ガイド』の一意のコードの管理 に関するセクションを参照してください。

関連トピック

オファーの操作

統合システムを使用したオファー管理

IBM Unica Campaign環境をIBM Unica Marketing Operationsと統合している場合、オファー管理には2つのオプションがあります。

- システムがMarketing Operationsバージョンの機能を通じてオファー管理を行う場合、[操作]メニューの[オファー]オプションを使用します。 この方法でオファーを作成する場合の詳細については、『IBM Unica Marketing Operations IBM Unica Campaign 統合ガイド』を参照してください。
- システムがCampaignバージョンの機能を通じてオファー管理を行う場合、[キャンペーン]メニューの[オファー]オプションを使用します。 この方法でオファーを作成する場合の詳細については、本章を参照してください。

ご利用のシステムのオファー管理の設定については、システム管理者にお問い合わせください。

オファー属性

オファー属性は、オファーを定義する項目です。 オファー属性にはオファー名、説明、およびチャネルなどがあります。 属性によっては、オファータイプに固有のものもあります。 たとえば、利率はクレジットカードオファーの属性になりますが、送料無料オファーの属性にはなりません。

オファー属性には次の3つのタイプがあります。

- 基本 オファーの定義に必要な最小限の項目セット: オファー名、一意のオファーコード、オファーの説明、および関連製品。
- 標準 オファーを定義するための事前定義済みのオプション項目。たとえば、チャネルはオファーのオプション属性になります。

• カスタム — 各組織のオファー定義に対してカスタム作成された追加項目。部署、スポンサー、変動利率、在庫管理単位(SKU)など。 カスタム属性は、さらに細かくオファーを定義したり、オファーを分析したりするために、オファーテンプレートに追加できます(たとえば、ロールアップ分析のためにカスタム定義を使用してオファーを分類できます)。 カスタム属性の詳細については、『Campaign管理者ガイド』の「カスタム属性」を参照してください。

オファーテンプレートでオファー属性を定義する際、各属性は*静的*属性またはパラメータ化属性として定義できます。 同じオファー属性(たとえぱ、チャネル)を、あるオファーテンプレート内では静的属性として、別のオファーテンプレート内ではパラメータ化属性として設定できます。

- 静的属性 同じオファーのバージョン違いを作成する際に値が変更されないオファー属性。 たとえば、チャネル、オファーコード、オファー名、および説明は静的オファー属性になります。
- 表示されていない静的属性 オファー定義の一部ではあるが、オファーテンプレートを使用してオファーを作成するときにユーザには表示されない静的属性。 このため、表示されていない属性は編集できません。ただし、他のオファー属性と同じように、トラッキングとレポーティングの対象にはなります。 たとえば、オファーのコスト(組織がオファーを管理するためのコスト)などが、表示されない静的属性になります。 この属性の値は変更できませんが、検索に使用したり(たとえば、管理コストが\$1.00未満の全オファーを検索できます)、レポーティング(パフォーマンスROI分析レポートなど)に使用したりできます。
- パラメータ化された属性 オファー割り当て時に値を指定できるオファー属性。値は、直接入力したり、事前定義済みドロップダウンリストから選択したり、データベース内の項目を使用したり、ユーザ定義項目で値を計算することにより指定します。 オファーテンプレートの作成時に、管理者はパラメータとして標準オファー属性またはカスタムオファー属性を設定できます。

オファーテンプレート内のパラメータ化された属性には既定値があり、オファーの作成時、または割り当て時に上書きできます。 たとえば、クレジットカードオファーの初期利率をそのオファーテンプレートでパラメータ化して、このテンプレートを使用してオファーを作成するときに、ユーザがドロップダウンリストから既定利率として5.99%、8.99%、または12.99%を選択できるようにします。 その後、オファーをフローチャートで使用してセルに割り当てるときに、必要に応じて利率を別の値に変更できます。

オファーバージョン

◇ Campaignバージョン7.xから使用されている「オファーバージョン」という言葉は、以前のCampaignリリース(5.1~6.x)で使用されていた「オファーバージョン」とは意味が異なります。 オファーバージョンは、オファーツリー階層では表示されません。バージョン名やバージョンコードもありません。 オファーのインスタンスを一意に識別するためには、処理コードを使用する必要があります。

オファーのパラメータ化された属性を変更して一意の組み合わせを作成するたびに、オファーバージョンが生成されます。

たとえば、クレジットカードオファーで次の属性を変更できます。

- グラフィック(灯台、子猫、スポーツカー)
- 初期利率(5.99%、8.99%、12.99%)
- オファー有効期限(1月中、6月中、9月中)

つまり、灯台のイメージ、5.99%の初期利率、2006年9月1~31日のオファー有効期限が設定されたカードは、灯台のイメージ、5.99%の初期利率、2007年1月1~31日のオファー有効期限が設定されたカードとは異なるオファーバージョンになります。

関連トピック

• 処理

オファーテンプレート

Campaignでは、使用可能なオファーテンプレートを使用してオファーを作成できます。 これらのテンプレートは、システム管理者またはオファー管理者によって事前に作成されます。 各テンプレートにはセキュリティポリシーがあり、このポリシーによって、そのテンプレートにアクセスして使用できるユーザが決定します。ユーザは、アクセス権を持つオファーテンプレートしか表示できません。

適切なテンプレートを使用して新しいオファーを作成すると、効率的にオファーを作成できます。 たとえば、クレジットカードオファー用に設計されたテンプレートを使用してクレジットカードオファーを作成すれば、クレジットカードオファーに関連する項目に入力するだけで済みます。

また、管理者は、オファー情報を入力するときに値を選択するためのドロップダウンリストを用意することもできるため、データ検索にかかる時間を節約し、データ入力エラーを減らすことができます。 管理者は、オファー属性を設計する際、オファーで属性を使用する際に新しい項目を追加できるドロップダウンリストを作成することもできます。 新しい値を指定できる場合は、オファー属性の横に[追加]ボタンが表示されます。 このような属性に新しい値を追加した場合、自分が追加した値を削除することはできますが、自分が追加していない値を削除することはできません。

オファーテンプレートでは次の内容が定義されます。

- オファーコード形式
- ・ 処理コード形式
- オファー属性とその表示順序
- 属性が静的属性、表示されない属性、パラメータ化された属性のどれか
- オファー属性の既定値

新しいオファーテンプレートはいつでも追加できます。Campaignで定義できるテンプレート数に制限はありません。 テンプレートは、それを基に作成されるオファーの継承属性になるので、テンプレートを検索条件として使用してオファーを検索できます。

☆ オファーテンプレートは削除できませんが、管理者が回収することで、今後使用されないようにすることができます。回収されたオファーテンプレートは、オファーテンプレートのリストで淡色表示され、新しいオファーの作成には使用できなくなります。

オファーテンプレート管理の詳細については、『Campaign管理者ガイド』のオファーテンプレートの管理に関するセクションを参照してください。

関連トピック

• オファーの新規作成

オファーリストについて

オファーリストとは、複数のオファーまたは時間と共に変わるオファーセットを割り当てやすいようにするため、Campaignで作成できるオファーグループのことです。

同じオファーを複数のオファーリストに含めることができます。 オファーリストは、オファーと同じ階層に表示されますが、アイコンにより識別可能です。 単独オファーはドル記号が付いた一枚のシートのアイコンで表示され、静的オファーリストはドル記号が付いた複数のシートのアイコンで表示され、スマートオファーリストは、ドル記号と虫眼鏡の付いた複数のシートのアイコンで表示されます。

オファーと同様、オファーリストは一度使用したら削除することはできませんが、回収 することはできます。

回収されたオファーリストは割り当てできなくなり、回収された割り当て済みオファー リストは提供されなくなります。

オファーリストには次の2つのタイプがあります。

- 静的オファーリスト
- スマートオファーリスト
- ☆ オファーリスト名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「Campaignオブジェクト名の特殊文字」を参照してください。

関連トピック

- オファーリストの操作
- オファーリストの削除
- オファーの回収
- オファーリストの回収

静的オファーリスト

静的オファーリストは、明示的にリストを編集しない限り内容が変わらない、事前定義済みのオファーリストです。 静的オファーリストには、パラメータ化されたオファー属性に必ず既定値が使用されるという制約があります。

一般的に、特定の固定オファーセットを繰り返し使用する場合に、静的オファーリストを使用します。 たとえば、5つのRFM (最新(Recency)、間隔(Frequency)、金融(Monetary))セグメントがあり、125のセルが作成された場合、各セルに同じオファーを割り当てるには、静的オファーリストで1つのオファーセットを作成して、125すべてのセルにそのオファーリストを割り当てることができます。 フローチャートとキャンペーン間においても、同じように再利用が可能です。

スマートオファーリスト

スマートオファーリストは、スマートリストを使用するたびに異なる結果セットに変更される動的オファーリストです。 スマートオファーリストは、オファー属性、オファーの場所(フォルダまたはサブフォルダ)、オファー所有者などに基づいたクエリにより指定されます。

一般的に、定期的に繰り返し発生するキャンペーンでスマートオファーリストを使用します。 スマートオファーリストを受け取るセルをセットアップし、フローチャートを変更することなく、スマートオファーリストの内容を変更できます。 たとえば、スマートオファーリストが特定のフォルダの内容になるようにセットアップした場合、そのフォルダにオファーを追加したり、そのフォルダからオファーを削除することにより、キャンペーンを実行するたびに提供されるオファーを変更できます。

または、提供するオファーを自動的に返すようにスマートオファーリストをセットアップすることもできます。 「高価値顧客」のセルに、最高のクレジットカードオファーを提供する場合、全クレジットカードオファーを含め、最低利率でソートし、最大サイズが1のスマートオファーリストをセットアップできます。フローチャートコンタクトプロセスの実行時に一番低い利率のクレジットカードオファーが自動的に検出され、これが高価値セルに提供されます。

セキュリティおよびオファーリスト

オファーリストには、オブジェクトレベルのセキュリティが適用されます。このセキュリティは、オファーリストと、そのリスト内のオファーが含まれているフォルダに基づきます。

静的オファーリストを作成する際は、自分がアクセスできるオファーのみを追加できます。 ただし、オファーリストにアクセスする権限のあるユーザには、そのリスト内のオファーについてもアクセスできる権限が自動的に付与されます。 したがって、通常はセキュリティ権限によってオファーにアクセスできない場合でも、そのユーザがリストにアクセスできる場合は、オファーリストとそのリスト内のすべてのオファーを使用できます。

同様に、スマートオファーリストを含むフォルダにアクセスできるユーザは、そのスマートオファーリストを使用できます。 通常であれば特定のオファーにアクセスできない場合でも(たとえば、別の部署のフォルダ内にあるオファー)、ユーザがそのオファーリストを含むフォルダにアクセスできる場合は、そのオファーリストを実行するユーザと同じ結果を得ることができます。

処理

処理とは、特定の時点におけるセルとオファーバージョンの一意の組み合わせです。 処理を使用するとレスポンスを詳細にトラッキングできるため、処理コードを使用して レスポンストラッキングを行うことをお勧めします。

オファーが関連付けられているコンタクトプロセス(コールリストまたはメールリスト)を含むフローチャートを実行すると、処理が自動的に生成されます。 処理は、それぞれシステム生成処理コードにより一意に識別されます。処理コードの形式は、オファーが作成されたオファーテンプレートで定義されています。 ユーザは、処理コードを上書きすることはできません。

コンタクトプロセスが実行されるたびに(テスト実行以外)、Campaignは次の情報を記録します。

- コンタクトプロセスに割り当てられているオファーバージョン
- オファーが割り当てられているセル
- オファーバージョン、セル、日時の一意の各組み合わせに対する処理コード
- コンタクトプロセス実行日

同じコンタクトプロセスを本番実行で2回実行すると、2つの処理インスタンスが作成され、各インスタンスに一意の処理コードが生成されます。 これにより、レスポンストラッキングを詳細に実行でき、帰属先のコンタクトインスタンスを正確に判断できます。 たとえば、1月15日と2月15日に同じプロモーションを実行し、トラッキングに処理コードを使用した場合、両方のプロモーションで対象になってる人であっても、2月15日のメールに対してレスポンスした人と、1月15日のメールに対してレスポンスした人を区別することができます。

処理コードは実行時にのみ生成されるため、フローチャートを実行する前には使用できません。したがって、事前印刷要件には適していません。 ただし、トラッキングやオンデマンド印刷目的のCampaign生成項目として出力することができます。

コントロールグループ

オファーを計画する際、そのオファーを割り当てるセルに対して検証コントロールグループを使用するかどうかを検討する必要があります。 コントロールグループは、非コンタクトグループで、「リフト」や、オファーを受けたアクティブなターゲットセルからのレスポンスの違いを比較するのに使用できます。

Campaignでは、コントロールはセルレベルで適用されます。 セルにオファーを割り当てる際、フローチャート内のコンタクトプロセス、またはターゲットセルスプレッドシートのいずれから行う場合でも、ターゲットセルごとに1つのコントロールセルをオプションで指定することができます。

関連トピック

- ・フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当てるには
- ・現在のセルにコントロールセルを指定するには

ターゲットセルへのコントロールセルの関連付け

1つのコントロールセルを複数のターゲットセルのコントロールとして使用できますが、各ターゲットセルには1つのコントロールセルしか関連付けることができません。セルは、セルIDにより定義されます。 1つのコントロールセルが複数のコンタクトプロセスで使用される場合、各コンタクトプロセスにおいてターゲットセルとコントロールセルとの関係を同じにする必要があります。 複数の異なるコントロール関係が必要な場合、セルのコピーを作成します(たとえば、選択プロセスを接続し、前のセルからすべて選択を実行します)。 これにより、コントロールセルに異なる関係を適用できる別のターゲットセルを作成できます。

オファーの操作

オファーに関連するタスクは次のとおりです。

- オファーの新規作成
- オファーの複製
- オファーの編集
- オファーの移動
- オファーまたはオファーリストの追加
- オファーの削除
- オファーの回収
- セルへのオファーの割り当て
- オファーの検索
- [サマリ]ページからのオファーレポートの表示

☆ オファーを操作するには、適切な権限が必要です。 権限の詳細については、 『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

オファーの新規作成

オファーを作成する際、顧客または見込み客に伝えたいマーケティングメッセージを表すオファーを作成する必要があります。 新しいオファーを作成するのか、バージョンのみを更新するのかは、管理者がどのようにオファーテンプレートを定義しているかによって異なります。

次の場合、新しいオファーを作成する必要があります。

- 非パラメータ化オファー項目が変わった場合
- トラッキングするために新しいオファーコードが必要になった場合(たとえば、封筒 にレスポンスコードを事前印刷するなど)

まったく新しいオファーを作成するだけでなく、既存のオファーをコピーして、必要に応じて変更することで、オファーを追加することもできます。

☆ オファーをフォルダ内に作成するには、そのフォルダのセキュリティポリシーに対する適切な権限を持っている必要があります。

関連トピック

• オファーの複製

新規オファーを追加するには

- 1. [キャンペーン] > [オファー]を選択します。

[オファー]ページが開きます。

2. [オファーの追加]アイコンをクリックします。

Campaignシステムに複数のオファーテンプレートがある場合は、[オファーテンプレートの選択]ページが開きます。 オファーテンプレートが1つだけの場合、テンプレートは選択しません。すぐに[新規オファー]ページが開きます。

- 3. 新規オファーのベースとするテンプレートを選択します。 選択したオファーテンプレートの名前、説明、用途、オファーおよび処理コードの形式、静的属性およびパラメータ化された属性が表示されます。
- 4. [続行]をクリックします。

[新規オファー]ページが開きます。

5. パラメータ化された属性の既定値も含め、新規オファーの値を入力します。

ドロップダウンリストで値が提供され、かつリストアイテムの追加が可能な属性では、オファーを作成する際に、ここでリストアイテムを追加できます。 追加した新規リストアイテムはここで削除できますが、以前からあるリストアイテムは削除できません。 ここでリストアイテムに加えた内容は、オファーのカスタム属性に保存されます。

- ☆ オファー名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊 文字について」を参照してください。
- 6. オファーの詳細を入力したら、**[変更の保存]**をクリックします。 新規オファーの[オファーサマリ]ページが開きます。

オファーの関連製品

関連製品は、オファーごとに入力する必要はありませんが、オファーテンプレートの必須属性です。 オファーを作成するとき、このオファーと関連付ける製品IDのリストを返すクエリを指定できます。 これらの製品IDは、イベント(たとえば、購入)がレスポンスであるかどうかを判断する推定レスポンストラッキングで使用できます(たとえば、オファーに関連付けられた関連製品を購入した場合、レスポンスと考えられます)。

オファーの作成時に、製品IDのリストをインポートすることもできます。新しいオファーの作成時に、リストをソースファイルからコピーして関連製品定義に貼り付けることにより、リストをインポートします。

貼り付けを使用して関連製品リストをオファーにインポートするに は

- 1. Campaignで新規オファーを作成するときに、[新規オファー]ページの**[製品IDをインポート]**をクリックします。 [製品の選択]ウィンドウが開きます。
- 2. コンテキストメニューのCopyまたはCtrl+Cを使用して、ソースファイルから製品IDをコピーします。
- 3. コンテキストメニューのPasteまたはCtrl+Vを使用して、コピーしたIDを[製品IDをインポート]リストに貼り付けます。. [製品の選択]ウィンドウでの作業中に、[製品IDをインポート]リストのエントリを手動で追加、編集、または削除することもできます。 [製品IDをインポート]リストには、エントリをいくつでも貼り付けることができます。

- 4. [製品IDをインポート]領域にエントリを追加したら、[インポート]をクリックします。 [製品IDをインポート]領域内のIDがインポートされて[次の条件の製品の選択]セクションに一覧表示されます。各製品IDの先頭には"PRODUCTID ="が付けられます。 インポート中にエラーが見つかった場合は(たとえば、[製品ID]項目が数値の場合に英字が使用されていたり、テキストの製品IDが最大文字列長を超えているなど)、エラーごとにポップアップが表示されます。 各エラーを書き留め、[OK]をクリックして次のエラーを確認します。
 - ☆ インポート機能では製品IDを一度だけインポートします。同じ値の重複したIDがある場合は自動的に無視されます。
- 5. 製品IDをインポートしたら、**[変更の保存]**をクリックします。 [次の条件の製品の選択]リスト内の製品IDがオファーのクエリとして保存され、製品IDのリストが[関連製品]に表示されます。
- 6. 続けてオファーを作成します。

関連トピック

・オファーの新規作成

オファーの関連製品クエリを編集するには

オファーの関連製品リストをインポートすると、そのリストがクエリとして保存されます。 オファーを編集するときに、クエリ条件を追加するなどして、このクエリを編集できます。

- 1. Campaignで、関連製品リストを編集するオファーを開きます。
- 2. [関連製品]リストの**[クエリの編集]**をクリックします。 [製品の選択]ウィンドウが開き、[次の条件の製品の選択]に現在クエリ内にあるIDのリストが表示されます。
- 3. クエリを編集します。[<<]ボタンを使用して、選択したエントリをリストから削除したり、上下の矢印ボタンを使用してエントリの順番を変更したりします。UA_Productsテーブル内の属性(製品IDを含む)を使用してクエリ句を追加します。[>>]ボタンを使用して、[次の条件の製品の選択]リストにクエリ句を移動します。
- 4. クエリを編集したら、[変更の保存]をクリックしてクエリを保存します。
- 5. オファーの[編集]ページで、[変更の保存]をクリックしてオファーを保存します。

オファーの関連製品クエリを消去するには

オファーの関連製品リストをインポートすると、そのリストがクエリとして保存されます。 オファーを編集するときに、クエリ内の既存のすべての製品IDを含め、クエリ全体を消去できます。

- 1. Campaignで、関連製品のリストを消去するオファーを開きます。
- 2. [関連製品]リストで**[製品IDをインポート]**をクリックします。 製品IDをインポートすると既存のすべての条件がリセットされることを示す警告が表示されます。
- 3. **[OK]**をクリックします。 [製品の選択]ウィンドウが開きますが、IDは表示されません。 新しい製品IDをインポートすることも、IDをインポートせずにクエリを空のままにしておくこともできます。
- 4. [保存の変更]をクリックして、クエリを保存します。
- 5. オファーの[編集]ページで、[変更の保存]をクリックしてオファーを保存します。

選択した製品を関連製品クエリから削除するには

クエリ全体を消去する代わりに、選択した製品を関連製品クエリから削除することができます。

- 1. Campaignで、選択した製品IDを関連製品から削除するオファーを開きます。
- 2. [関連製品]リストで、Ctlrキーを押しながらクリックして、削除するアイテムを選択します。
- 3. 削除するアイテムを選択したら、[削除]をクリックします。 選択したアイテムが関連製品から削除されます。
- 4. 「変更の保存」をクリックしてオファーを保存します。

オファーの複製

既存のオファーを複製して新しいオファーを作成すると、データを入力する時間を節約できます。 回収済みオファーも、アクティブオファーと同様複製可能です。 複製により作成されたオファーには自動的に一意のオファーコードが割り当てられ、名前は「<元のオファー名>のコピー」となり、元のオファーと同じ説明、セキュリティポリシー、およびオファー属性値が設定されます。

関連トピック

オファーまたはオファーリストを移動するには

[オファー]ページからオファーを複製するには

- 1. [キャンペーン] > [オファー]を選択します。 [オファー]ページが表示されます。
- 2. 複製するオファーが含まれているフォルダまで移動します。

- 3. 複製するオファーの横のチェックボックスをオンにします。
- 4. **[選択したオファーの複製]**アイコンをクリックします。 確認ウィンドウが開きます。
- 5. **[OK]**をクリックして続行します。 選択したオファーが複製されてオファーリストに表示されます。

オファーをオファーの[サマリ]ページから複製するには

- 1. コピーするオファーの[オファーサマリ]ページで、**[重複オファーを作成]**アイコンを クリックします。 確認ウィンドウが開きます。
- 2. **[OK]**をクリックして続行します。 [新規オファー]ページが編集モードで開き、新規 オファーコード以外の項目は元のオファーの値が事前に入力されています。
- 3. オファー名や説明など、変更したい値を編集します。
 - ☆ オファー名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊 文字について」を参照してください。
- 4. [変更の保存] をクリックして新規オファーを作成します。 オファーが保存され、新規オファーの[オファーサマリ]ページが表示されます。

オファーのグループ化

レポーティング目的または分析目的で、オファーをグループ化することが必要になる場合があります。 たとえば、さまざまなチャネルを通じて年に複数回送られる「送料無料」オファーに対するレスポンス率を確認したいとします。

☆ グループ化またはロールアップ目的でオファー属性を使用するレポートについては、レポート管理者がカスタマイズする必要があります。

オファーのグループ化は次の2つの方法で行うことができます。

- 属性の使用
- フォルダの使用

関連トピック

- オファーの複製
- オファーリストの操作

属性の使用

オファー内には、「オファーのグループ化項目」として使用するカスタム属性をいくつでも作成できます。 たとえば、大学提携のクレジットカードプロモーションが複数ある場合、レポートで使用できる「領域」というカスタム属性を作成できます。 この属性により、ニューイングランドの大学と西海岸の大学のそれぞれの卒業生をターゲットとするオファーをグループとしてまとめることができます。

カスタム属性を使用するオファーを作成する場合は、値を手動で入力する必要があります。 また、データ入力の手間を省くため、同じようなオファーを複製することもできます。パラメータ化された属性の値もコピーされます。

また、スマートオファーリスト内でも、オファー属性を使用してオファーを識別したり 分類したりできます。

フォルダでのオファーのグループ化

レポーティングを行うために、オファーをフォルダで分類しておくと便利です。 関連オファーのすべてを同じフォルダに保管しておき、レポート対象のオファーを指定する際、ターゲットとしてフォルダを指定すれば、そのフォルダ(およびそのサブフォルダ)内のすべてのオファーが自動的にレポーティング用として選択されます。

☆ このように、レポーティング対象としてフォルダとサブフォルダを指定した場合、 オファーの「ロールアップ」レポーティングは実行できません。 オファーは、単純 にフォルダ構造に含まれているかどうかに基づいて選択されます。

オファーを編集するには

既存のオファーはコンタクトプロセスで使用されているかどうかにかかわらず、ユーザ の役割と権限に応じていつでも編集できます。

- ☆ 一度本番で使用されたオファー(本番で実行されたフローチャート内のセルに割り当てされてコンタクト履歴に記録されたオファー)は、オファー名、説明、パラメータ化されたオファー属性の既定値のみ編集できます。 この制約により、Campaignは個人に送信されたオファーの詳細を正確に追跡できます。
- 1. [キャンペーン] > [オファー]を選択します。 [オファー]ページが表示されます。
- 2. 編集するオファーまで移動して、ハイパーリンクが設定されたオファー名をクリックします。 オファーの[サマリ]ページが読み取り専用モードで開きます。
- 3. [編集]アイコンをクリックして編集モードに入ります。
- 4. 変更を加えます。
 - ☆ オファー名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 5. 変更を加えたら、[変更の保存]をクリックします。 変更が保存され、読み取り専用 モードのオファーページに戻ります。

オファーまたはオファーリストを移動するには

1つ以上のオファーをフォルダ間で移動できます。 オファーを移動する手順はオファーリストを移動する手順と同じです。また、オファーとオファーリストを同じ操作で移動できます。

- ☆ Campaign内のオブジェクトを移動するときは、アクセスする場所ごとに異なるセキュリティポリシーが指定されていることに注意してください。 ユーザがオファーを移動する権限を持つセキュリティポリシーが指定されたフォルダにのみ、オファーを移動できます。
- [オファー]ページで、移動するオファーまたはオファーリストを選択して、[選択したアイテムの移動]アイコンをクリックします。

あるいは、オファーの[オファーサマリ]ページを表示して[別のフォルダに移動]アイコンをクリックして、オファーを移動することもできます。 ただし、この方法で移動できるのはオファーだけでオファーリストは移動できないことに注意してください。

[アイテムの移動]ウィンドウが開きます。

- 2. 選択したアイテムを移動するフォルダまで移動します。
- 3. **[OK]**をクリックします。

選択したオファーまたはオファーリストが、選択したフォルダに置かれます。

オファーまたはオファーリストの追加

オファーは、オファーリストの作成時、またはリストを編集することで静的オファーリストに追加できます。

関連トピック

オファーリストを編集するには

オファーの削除

オファーまたはオファーリストを削除するには、適切な権限が必要です。 加えて、システムの整合性を保持するため、Campaignでは、システムテーブルで参照されているオファーまたはオファーリストは削除できません。 削除できないオファーまたはオファーリストは次のとおりです。

- キャンペーンに関連付けられているオファーまたはオファーリスト
- コンタクト履歴が作成されているフローチャート内のコンタクトプロセスでセルに 割り当てられているオファーまたはオファーリスト

- フローチャート内の最適化プロセスでセルに割り当てられているオファーまたはオファーリスト
- このようなオファーまたはオファーリストを削除しようとすると、このオファーまたはオファーリストは削除ではなく回収されることを示す確認メッセージが表示されます。 システムテーブルで参照されているオファーまたはオファーリストが以後使用されないようにするためには、このようなオファーまたはオファーリストは削除ではなく、回収する必要があります。

削除したいオファーが静的オファーリストに含まれている場合、削除を確認するメッセージが表示されます。 続行を選択すると、削除したオファーは自動的に静的オファーリストから除外されます。

削除されたオファーが割り当てられていたセルを含むコンタクトプロセスは設定されたままになりますが、そのオファーは、プロセス設定ダイアログで「不明なオファー」と示され、フローチャートが実行されると警告メッセージが表示されます。

オファーの削除は、オファーリストの削除と同じ手順です。オファーとオファーリストは同時に削除できます。

関連トピック

- オファーの回収
- オファーリストの回収

オファーまたはオファーリストを削除するには

1. [オファー]ページで、削除するオファーまたはオファーリストを選択して、**[選択したアイテムの削除]**アイコンをクリックします。

または

削除するオファーの[オファーサマリ]ページで、**[オファーの削除]**アイコンをクリックします。

確認ウィンドウが開きます。

2. **[OK]**をクリックします。 [オファー]ページに戻ります。 削除したオファーは表示されていません。

オファーの回収

適切な権限があれば、オファーとオファーリストを回収して、今後使用されないようにすることができます。 オファーを回収しても、そのオファーが既に使用されているキャンペーンやフローチャートには影響しません。コンタクト履歴やレスポンス履歴など、そのオファーに基づいて生成されているシステムテーブルデータの整合性も維持されます。

回収されたオファーはオファー階層に表示されたままになりますが、淡色表示になります。 回収したオファーは、検索機能を使用して検索したり、コピーして新しいオファーを作成したり、レポーティングで使用したりできます。 ただし、割り当てたり、オファーリストの一部として提供することはできません。

回収したオファーを静的オファーリストから削除することにより、オファーリストをクリーンアップできます。 スマートオファーリストは、クエリ条件に合った、回収されていないオファーのみ解決するため、クリーンアップの必要はありません。

オファーは、オファーリストと同じ手順で回収できます。また、オファーとオファーリストは同時に回収できます。

オファーまたはオファーリストを回収するには

1. [オファー]ページで、回収するオファーまたはオファーリストを選択して、**[選択したオファー/リストの回収]**アイコンをクリックします。

あるいは、オファーの[オファーサマリ]ページを表示して[フォルダの回収]アイコンをクリックして、オファーを回収することもできます。 ただし、この方法で回収できるのはオファーだけでオファーリストはできないことに注意してください。

確認ウィンドウが開きます。

2. **[OK]**をクリックします。 [オファー]ページに戻ります。

選択したオファーおよびオファーリストは、回収されてグレーで表示されます。

プロセス設定ダイアログからセルにオファーを割り当 てるには

☆ Campaign環境がMarketing Operationsと統合されている場合、Marketing Operationsを使用して、キャンペーンプロジェクトのターゲットセルスプレッドシート形式で出力セルにオファーまたはオファーリストを割り当てる必要があります。 Campaign環境がレガシキャンペーンにアクセスできるように設定されている場合、このガイドのインストラクションに従って、レガシキャンペーンの出力セルにオファーまたはオファーリストを割り当ててください。 レガシキャンペーンでは、2つの方法でセルにオファーを割り当てることができます。 キャンペーンのターゲットセルスプレッドシートから、またはプロセス設定ダイアログ内で、オファーをセルに割り当てることができます。 詳細については、「Marketing Operationsとの統合について」を参照してください。

オファーまたはオファーリストは、コンタクトプロセスの設定ウィンドウから出力セル に割り当てることができます。

コンタクトプロセスを設定する前に、使用するオファーまたはオファーリストが存在していることを確認してください。

- 1. 編集モードのフローチャートで、オファーを割り当てるセルが含まれているコンタ クトプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. [処理]タブをクリックします。

[セルに対応するオファーを指定します]インタフェースが開き、プロセスに定義されているターゲットセルごとに1行が表示されます。

- テーブルに表示されるターゲットセルごとに、[オファー]列をクリックして、ドロップダウンリストから選択可能なオファーを選択するか、または[オファー指定]をクリックします。
- 4. 検証コントロールグループを使用するには、[検証コントロールグループを使用] チェックボックスをオンにします。

オファー指定テーブルが動的に更新されて追加の列が表示され、ターゲットセルがコントロールであるかどうか、および現在のセルのコントロールはどのセルであるかが示されます。

a. セルごとに、[コントロール?]列をクリックして[Y]または[N]を選択し、セルがコントロールセルであるかどうかを示します。 既定の設定は[N]です。コントロールセルとして割り当てられているセルにはオファーを割り当てることができません。 コントロールセルとして割り当てられたセルは[コントロールセル]ドロップダウンリストに表示されるので、ターゲットセルのコントロールとして選択できます。

- b. コントロールセルではない各セルについては、オプションで[コントロールセル] ドロップダウンリストからコントロールセルを割り当てます。 このリストに は、[コントロール?] に[Y]を割り当てたセルの名前が挿入されます。
- 5. [パラメータ]タブをクリックして、各セルにオファーパラメータを指定します。 割り当てるオファーにパラメータ化された属性が含まれている場合は、既定値を表示し、必要に応じて値をオーバーライドできます。 各オファーのパラメータごとに1行が表示されます。 たとえば、1つのオファーに4つのパラメータ化された属性があるとすると、そのオファーに対して4行が表示されます。
- 6. **[対象セル]**ドロップダウンメニューを使用して、指定したパラメータ値が適用されるセルを示します。

複数のセルがあり[すべてのセル]を選択すると、各パラメータのオファーごとに1行 が表示されます。 [指定値]項目に入力した値は、そのオファーを受け取るすべての セルに適用されます。

複数のセルに同じオファーが割り当てられていて、セルごとにパラメータ値が異なる場合は、[すべてのセル] ビューに、これらのパラメータの[複数の値]が表示されます。

個々のセルを選択すると、選択したセルに割り当てられているオファーのみがテー ブルに表示されます。 [指定値]項目に入力した値は、そのセルにのみ適用されま す。

- 7. [指定値]項目の値を必要に応じて編集します。
 - ※ 定数、ユーザ定義項目、テーブル項目をパラメータ値として使用できます。
- 8. オファーの割り当てとオファーパラメータ値の指定が終了したら、残りのプロセス 設定を完了する必要があります。

関連トピック

・コンタクトプロセス

オファーの検索

Campaignは、オファーを検索できますが、オファーリストの検索には対応していません。 次の条件のいずれかを使用して、オファーの基本検索を実行できます。

- 名前または名前の一部
- 説明または説明の一部
- オファーコードまたはオファーコードの一部
- 所有者名

また、詳細検索機能を使用して、オファー属性と指定値に基づくクエリを使用してオファーまたはオファーリストを検索できます。

詳細検索を使用してオファーを検索するには

- [オファー]フォルダの[詳細検索]アイコンをクリックします。
 [詳細検索オプション]ウィンドウが開きます。
- 2. [条件の作成]セクションで、 [検索する属性] 項目で使用するオファー属性を選択します。
- 3. 選択した属性のタイプに基づいて、さらに詳しい検索条件を入力できます。 例:
 - 「オファー当たりのコスト」属性で、\$10.00以下の値を検索する
 - 「終了日」属性で、11/30/2007が指定された日付を選択する
 - 「説明」属性で、文字列「2005」を含まない指定された値を検索する
- 4. [AND>>]または[OR>>]をクリックして、条件セットを[次の条件でオファーを検索] セクションに移動し、クエリを構築します。 [次の条件でオファーを検索]セクショ ンから条件を削除するには、[<<]をクリックします。
 - ◇ クエリで使用する演算子(=、>、contains、begins withなど)に応じて、複数の値を選択できる場合と単一の値のみ選択できる場合があります。場合によって、1つの演算子で複数の値を選択すると"OR"条件が作成されることがあるので注意してください。たとえば、「Color =」というクエリを作成し、青、赤、白を色として選択すると、作成するクエリは「Color = 青 OR color = 赤 OR color = 白」になります。
- クエリを構築したら、[検索]をクリックします。
 「検索結果]ページに、検索条件を満たすオファーがすべて表示されます。

[オファー一覧]ページのアイコン

[オファー一覧]ページでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

アイコン名	説明
オファーの追加	新しいオファーを追加する場合にクリックします。
リストの追加	新しいオファーリストを追加する場合にクリックします。
サブフォルダの追加	新しいオファーサブフォルダを追加する場合にクリックしま す。

アイコン名	説明
詳細検索	クリックして[詳細検索オプション]ダイアログを開きます。こ のダイアログでは、オファーを検索するための属性や値を指定 できます。
項目の印刷	各オファーの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のオファーを選択し、次にこのアイコンをクリックして、選 択したオファーを印刷します。
選択したアイテムの移動	各オファーの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のオファーを選択し、次にこのアイコンをクリックして、選 択したオファーを移動します。
選択したアイテムの削除	各アイテムの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のオファーまたはオファーリストを選択し、次にこのアイコ ンをクリックして、選択したアイテムを削除します。
選択したオファー/リストの回収	各アイテムの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のオファーまたはオファーリストを選択し、次にこのアイコ ンをクリックして、選択したアイテムを回収します。
選択したオファーの複製	各オファーの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のオファーを選択し、次にこのアイコンをクリックして、選 択したオファーを複製します。
オファーの再読み込み	ページのオファーの一覧およびオファーリストを更新するに は、このアイコンをクリックします。

オファーのレポートを[サマリ]ページから表示するに は

オファーのレポートには、[サマリ]ページからアクセスできます。 これらはアプリケーションの[キャンペーン分析]領域からアクセスできるレポートと同じですが、表示されるデータは現在のオファーに関するものだけになります。

- [キャンペーン] > [オファー]をクリックします。
 [オファー]ページが表示されます。
- 2. フォルダ構造を移動して、レポートを表示するオファーを見つけます。
- オファー名をクリックします。
 [オファーサマリ]ページが表示されます。
- 4. [レポート]タブをクリックします。
- 5. [レポートタイプ]ドロップダウンリストからレポートを選択します。

Campaignに、選択したレポートが表示されます。

オファーリストの操作

オファーリストに対して次の操作を実行できます。

- 静的オファーリストの追加
- スマートオファーリストの追加
- オファーリストの編集
- オファーリストの移動
- オファーリストの削除
- オファーリストの回収
- セルへのオファーリストの割り当て
- ☆ オファーリストを操作するには、適切な権限が必要です。 権限に関する情報については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

静的オファーリストを追加するには

- [キャンペーン] > [オファー]を選択します。
 [オファー]ページが表示されます。
- 2. **[**リストの追加**]**アイコンをクリックします。 [新規オファーリスト]ページが開きます。
- 3. 名前、セキュリティポリシー、オファーリストの説明(オプション)を入力します。
 - ☆ オファーリスト名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 4. [スマートオファーチェックリスト] チェックボックスはオフのままにしておきます。
- 5. **[含まれているオファー]**セクションで、ツリービューまたはリストビューを使用して、リストに追加するオファーを選択します。 **[>>]**ボタンを使用して、選択したオファーを**[含まれているオファー]**ボックスに移動します。
- オファーを選択したら、[変更の保存]をクリックします。 新規リストの[オファーリストサマリ]ページに戻ります。

スマートオファーリストを追加するには

- [キャンペーン] > [オファー]を選択します。
 [オファー]ページが表示されます。
- 2. **[**リストの追加**]**アイコンをクリックします。 [新規オファーリスト]ページが開きます。

- 3. 名前、セキュリティポリシー、オファーリストの説明(オプション)を入力します。
- 4. [スマートオファーリスト]チェックボックスをオンにします。
- 5. [含まれているオファー]セクションで、既存のオファー属性、それらの値、ANDおよびOR演算子を使用して、このオファーリストにオファーを含めるための条件を作成します。
- 6. 必要に応じて、[検索アクセスを制限(すべてのユーザ)]のフォルダビューを使用して、検索対象を選択したフォルダに限定します。 検索結果にサブフォルダを含めるには、[サブフォルダを含める]チェックボックスをオンにします。
 - ☆ 検索結果として選択されたオファーは、このオファーリストへのアクセス権限を 持つユーザであれば、通常はオファーを表示またはアクセスする権限を持たない 場合であっても使用できます。
- 7. 必要に応じて[一致するオファーのソート条件]のドロップダウンリストを使用し、 一致するソート条件でオファー属性を選択し、ソートを昇順にするか降順にするか を選択できます。
- 8. 必要に応じて、検索結果を一致する最初の"X"件のオファーに制限するかどうかを指 定できます。 既定では制限はありません。
- 9. スマートオファーリストの条件を定義したら、**[変更の保存]**をクリックします。 新 規リストの[オファーリストサマリ]ページに戻ります。

オファーリストを編集するには

オファーリストの変更を保存すると、オファーリストを使用しているキャンペーンは、 次回の実行時に最新のオファーリスト定義を自動的に使用します。

- 1. [キャンペーン] > [オファー]を選択します。
 - [オファー]ページが表示されます。
- 2. 編集するオファーリストのハイパーリンクが設定された名前をクリックします。 オファーリストの[サマリ]タブが表示されます。
- [編集]アイコンをクリックします。
 オファーリストの詳細が編集モードで開きます。
- 4. 必要な変更を加えます。
 - オファーリスト名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 変更を加えたら、[変更の保存]をクリックします。 リストの[オファーリストサマリ] ページに戻ります。

オファーリストの移動

オファーを移動するのと同じ手順で1つ以上のオファーリストをフォルダ間で移動できます。また、オファーとオファーリストは同時に移動できます。

関連トピック

オファーまたはオファーリストを移動するには

オファーリストの削除

オファーを削除するのと同じ手順で1つ以上のオファーリストを削除できます。また、 オファーとオファーリストは同時に削除できます。

関連トピック

オファーまたはオファーリストを削除するには

オファーリストの回収

オファーリストは、今後使用されないようにするために、いつでも回収することができます。 オファーリストを回収しても、そのリストに含まれるオファーには影響しません。

回収されたオファーリストはオファー階層に表示されたままになりますが、淡色表示になります。 回収されたオファーリストはレポーティングに使用できますが、割り当てることはできません。

オファーを回収するのと同じ手順でオファーリストを回収できます。また、オファーと オファーリストは同時に回収できます。

関連トピック

オファーの回収

セルへのオファーリストの割り当て

◇ Campaign環境がMarketing Operationsと統合されている場合、Marketing Operationsを使用して、キャンペーンプロジェクトのターゲットセルスプレッドシート形式で出力セルにオファーまたはオファーリストを割り当てる必要があります。 Campaign環境がレガシキャンペーンにアクセスできるように設定されている場合、このガイドのインストラクションに従って、レガシキャンペーンの出力セルにオファーまたはオファーリストを割り当ててください。 レガシキャンペーンでは、2つの方法でセルにオファーを割り当てることができます。 キャンペーンのターゲットセルスプレッドシートから、またはプロセス設定ダイアログ内で、オファーをセルに割り当てることができます。 詳細については、「」を参照してください。

コンタクトプロセスでセルにオファーリストを割り当てる方法は、オファーを個別に割り当てる場合と同じです。 同じセルに、オファーとオファーリストの任意の組み合わせを割り当てることができます。

ただし、オファーリストに含まれているオファーでは、パラメータ化された属性は既定値を使用します。 オファーリストに含まれるオファーにパラメータ値を割り当てることはできません。 パラメータ化属性の値を変更する必要がある場合には、次のいずれかを実行できます。

- 既存のオファーと関連付けられている既定値を変更し、オファーのコピーを目的の 既定値で作成し、これをオファーリストに含めます。
- オファーリストの外部でオファーを個別に割り当てます。

関連トピック

プロセス設定ダイアログからセルにオファーを割り当てるには

8 セルの管理

- セルについて
- セル名とセルコード
- セルの操作
- ターゲットセルスプレッドシートについて

セルについて

セルは、Campaignで1つ以上のオファーを割り当てる識別子(データベース内の顧客や 見込み客のID)のリストです。

フローチャート内でデータ操作プロセスを設定して実行することにより、セルを作成します。 これらの出力セルは、同じフローチャート内の他のプロセスへの入力としても使用できます(そのセルを生成したプロセスからのダウンストリーム)。

フローチャートでは、次のセルが生成されます。

- システム生成セルコード。 セルコードは、システム管理者が決定した標準形式に従い、一意のコードとして生成されます。 フローチャート設定パラメータAllowDuplicateCellCodesが「No」に設定され、セルコードが現在のフローチャート内で一意であることを強制されない限り、セルコードのチェックは行われません。 セルコードとセルコードジェネレータの詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。 IBM Unica Marketingで提供される中央設定パラメータの詳細については、『IBM Unica Marketing管理者ガイド』を参照してください。
- 現在のフローチャート内で一意となるシステム生成セル名。

フローチャートでのセルの作成に加えて、ターゲットセルスプレッドシートでプレースホルダセルコードを作成して、後でフローチャートで作成するセルにリンクさせることもできます。

関連トピック

- セル名とセルコード
- ・セル名の変更
- セル名のリセット
- ・ターゲットセルスプレッドシートについて

セル名とセルコード

セル名とセルコードは、セルを出力するプロセスと、セルを入力として使用するプロセス間にリンクを構築する際に使用するため重要です。

セルコード

セルコードは、システム管理者が決定した標準形式に従い、一意のコードとして生成されます。 セルコードは編集できるため、フローチャート設定パラメータAllowDuplicateCellCodesが「No」に設定され、セルコードが現在のフローチャート内で一意であることを強制されない限り、セルコードのチェックは行われません。ターゲットセルスプレッドシート(TCS)の一意性をチェックする機能はありません。セルコードとセルコードジェネレータの詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。 IBM Unica Marketingで提供される中央設定パラメータの詳細については、『IBM Unica Marketing管理者ガイド』を参照してください。

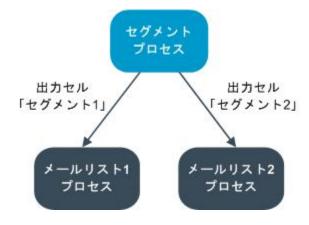
セル名

☆ セル名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。

既定では、セル名はそのセル名を生成するプロセスに基づきますが(たとえば、「Select1」というプロセスからセルが生成される場合、セル名は既定で「Select1」になります)、上書きは可能です。 プロセス名を変更すると、そのプロセス(そのプロセス内、および同じフローチャート内の接続されているダウンストリームプロセスも含む)により生成されるセル名が自動的に変更されます。 セル名を変更した場合、そのセルと、そのセルを入力として使用するダウンストリームプロセス間のリンクにも影響します。

たとえば、Segment1とSegment2の2つの出力セルを生成するセグメントプロセスがあり、これらのセルが2つのメールリストプロセス(Mail List 1とMail List 2)への入力として使用される場合、メールリストプロセスを接続した後セグメントセルの名前を変更した場合にCampaignがどのように新しいセル名を処理するのか、理解しておく必要があります。

次の図は、ダウンストリームメールリストプロセスへの入力となる2つのセルを出力するセグメントプロセスの基本的な例を示しています。

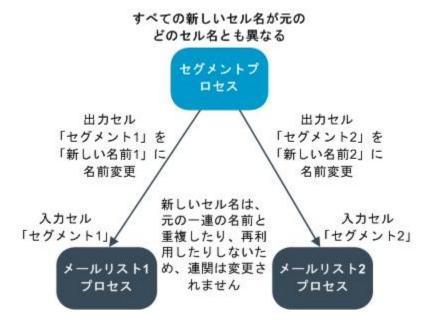


例: セル名の変更シナリオ

シナリオ1: すべての新しいセル名が元のどのセル名とも異なる。

新しいセル名が元の既定名と重複していなければ(つまり、いずれのセグメント出力セルの名前にも「Segment1」または「Segment2」を使用しなければ)、Campaignは、セルの元の順序に基づいて元のリンクを維持できます。 この場合、元のセル名は重複せず、また再利用されないため、次の図のように、セグメントプロセスの出力セルと2つの個々のメールリストプロセス間のリンクは保持されます。

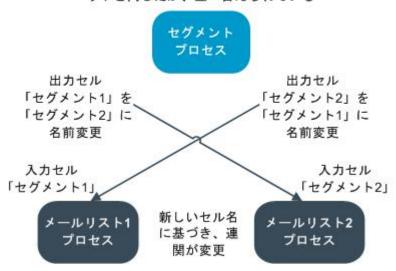
シナリオ1:



シナリオ2: 新しいセル名のセットは元のセル名のセットと同じだが、並べ替えられている。

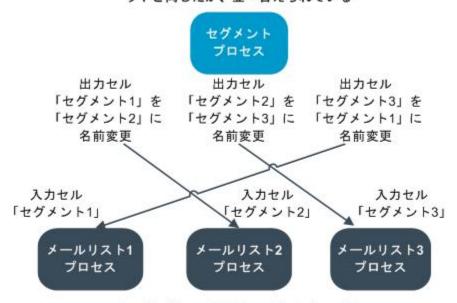
セルに対して選択した新しい名前が、元のセルセットの名前と完全に一致し、順番のみ入れ替えられた場合、ダウンストリームプロセスは使用可能な出力セルを名前(つまり、新しいセル名)で検索し、リンクを適宜切り替えます。 この例では、次の図に示されているように、新しい名前のSegment2出力セルは、Mail List 2への入力セルになり、新しい名前のSegment1セルは、Mail List 1への入力セルになります。

シナリオ2: 新しいセル名のセットは元のセル名のセットと同じだが、並べ替えられている



次の図は、3つの出力セルと入力セルによる同じ状況を示しています。

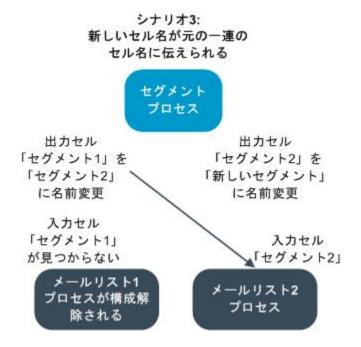
シナリオ2a: 新しいセル名のセットは元のセル名のセ ットと同じだが、並べ替えられている



セル名に基づき、連関が変更されます。ダウンストリームプロセスは、リンクされていた元の出力 セル名に基づいて、再リンクされます。

シナリオ3: 新しいセル名のセットには、元のセル名と同じものと、 新しいセル名がある。

一部の新しい名前が元の名前と重複しており、新しいセル名も追加されている場合、元のセル名セット内の名前を使用したリンクは認識されます。認識されない場合は、リンクが壊れています。 たとえば、「Segment1」セルの名前を「Segment2」に変更し、「Segment2」セルの名前を「NewSegment」に変更した場合、新しい「Segment2」はMail List2に関連付けられ、Mail List1は、「Segment1」という名前の入力セル名を見つけることができないため、設定されません。



セルの操作

セルに対して次の操作を実行できます。

- フローチャートのプロセス内にセルを作成するには
- 出力セルのサイズ制限について
- セル名の変更について
- セル名のリセットについて
- セル名とセルコードのコピーと貼り付けについて
- セルコードの変更について
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルをフローチャートセルにリンクするには
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルからフローチャートセルへのリンクを解除するには
- フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当てるには
- セルへのオファーリストの割り当てについて

• セルに割り当てられているオファーにパラメータを設定するには

フローチャートのプロセス内にセルを作成するには

セルはデータ操作プロセス(オーディエンス、書込み、マージ、選択など)の出力としてフローチャート内に作成します。

- 1. 編集モードのフローチャートで、データ操作プロセスを設定します。
- 2. プロセスを実行すると、1つ以上のセル(プロセスのタイプおよび設定の詳細によって異なる)がプロセスの出力として作成されます。
 - ☆ フローチャート内にセルを作成するだけでなく、ターゲットセルスプレッドシート内にプレースホルダセルを作成してから、後でそれらをフローチャート内のセルにリンクすることもできます。

出力セルのサイズ制限

オーディエンス、書込み、マージ、または選択などのデータ操作プロセスにより生成されるID数を制限するには、プロセス設定ダイアログの[セルサイズの制限]タブをクリックします。

出力セルサイズを制限するオプションは、そのプロセスがセルまたはテーブルからの入力を受け入れるかどうかによって変わります。 いずれかの入力タイプを受け入れるプロセスでは、[セルサイズの制限]ウィンドウに、その入力タイプに応じたオプションが動的に表示されます。

- 出力セルから入力を取得するプロセス
- テーブルから入力を取得するプロセス

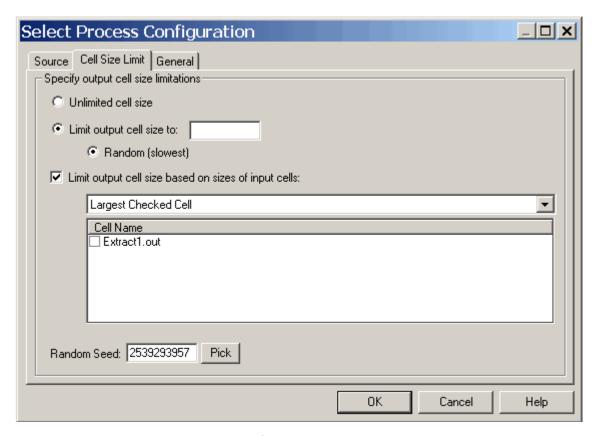
どちらの入力タイプに対しても、IDをランダムに選択するための乱数種も変更できます。

関連トピック

- ・サンプル
- 乱数選択用の種の変更

出力セルから入力を取得するプロセス

プロセスが出力セルから入力を取得する場合、次のような[セルサイズの制限]ウィンドウが表示されます。



このウィンドウでは、出力セルサイズに対する制限を指定します。

- セルサイズの制限なし このプロセスのタブ上のクエリ条件または選択条件を満たすすべてのIDを返します。 これは既定のオプションです。
- セルサイズの上限指定 クエリ条件を満たすすべてのIDからランダムに選択された特定数の一意のIDが返されます。 テキストボックスに、返したいID数を入力します。 この方法では、セルから入力を取得するプロセスについて、Campaignはデータベースから返される重複していないレコードを入力セルのレコードと比較して、最終セルサイズに到達するまでランダム選択を実行します。 プロセスからプロセスに渡されるセル内のIDリストは常に一意です。
- ⇒ ランダムオプションでレコードを選択する場合、すべてのIDをCampaignサーバで取得する必要があるため、十分な一時領域が必要で、時間もかかります。 正確にN個のレコードを返す必要がある場合のみ、このオプションを使用してください。

入力セルサイズに基づく出力セルサイズの制限

セルから入力を取得するプロセスでは、実際のセルデータまたはIDを使用しない場合でも、出力セルサイズを制限する属性として、接続している着信プロセスからのセルのサイズを使用できます。

たとえば、それぞれが1つの出力セルを持つ3つのプロセスを1つの選択プロセスに接続する場合、選択プロセスの実際のデータ入力として3つの着信セルの1つしか使用されない可能性はありますが、他の着信セルの属性を使用して、選択プロセスの出力セルサイズを指定できます。 選択プロセスにより実際に出力セルが使用されるプロセスは実線で接続され、データ入力としては使用されていないが、選択プロセスと一時的に関係している出力セルを持つプロセスは破線で接続されます。

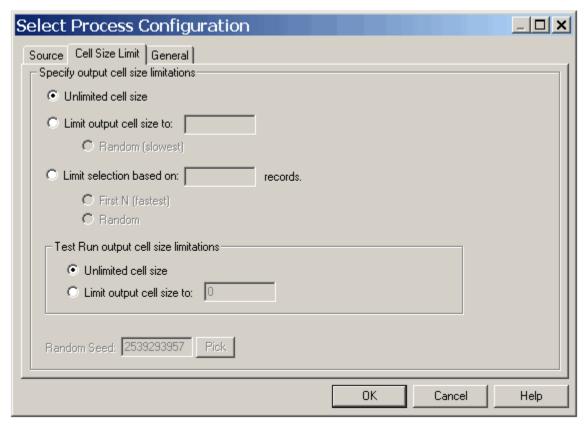
[入力セルサイズに基づく制限]チェックボックスを使用して、現在のプロセスの出力セルサイズを制限するためにサイズ属性を使用する入力セルを指定します。 これらのオプションのいくつかはセルサイズの上限指定値と共に使用されます。

入力セルのサイズに基づいて出力セルのサイズを制限するには

- プロセスの[セルサイズの制限]タブをクリックします。
 「セルサイズの制限]ウィンドウが開きます。
- 2. プルダウンリストからオプションを選択して、制限の計算方法を選択します。
 - 選択したセルの最大値 出力セルサイズが選択した最大の入力セルサイズを超えないことを指定します。 たとえば、セルA、B、Cを選択し、それぞれのサイズが250、500、100とすると、このプロセスの出力セルサイズの上限は最大の入力セルサイズ500になります。
 - 指定した上限値と選択されたセルの合計値の差 このオプションは、上で指定した[セルサイズの上限指定]値と併せて使用します。 このオプションは、上記の[セルサイズの上限指定]項目で指定した数値と選択したすべての入力セルの合計値との差を出力セルサイズが超えないことを指定します。 たとえば、[セルサイズの上限指定]値に1000を入力し、サイズが100と200の入力セルAとBを選択すると、このプロセスの出力セルのサイズは1000 (100+200) = 700が上限になります。
 - 選択したセルの最小値 出力セルサイズが選択したどの入力セルのサイズも超えないことを指定します。 たとえば、セルA、B、Cを選択し、それぞれのサイズが250、500、100とすると、このプロセスの出力セルサイズの上限は最小の入力セルサイズ100になります。
 - 選択したセルの合計値 出力セルサイズが選択したすべての入力セルの合計サイズを超えないことを指定します。 たとえば、セルA、B、Cを選択し、それぞれのサイズが250、500、100とすると、このプロセスの出力セルサイズの上限はこの3つの入力セルサイズの合計850になります。
- 3. 入力セルのリストで、出力セルサイズの条件ベースとする入力セルのチェックボックスをオンにします。

テーブルから入力を取得するプロセス

プロセスがテーブル(または、戦略的セグメントオプションを許可しているプロセスでは戦略的セグメント)から入力を取得する場合、次のような[セルサイズの制限]ウィンドウが表示されます。



このウィンドウでは、出力セルサイズに対する制限を指定します。 [セルサイズの制限なし]以外のオプション間の重要な違いは、リソースへのインパクトと、データソースを正規化していない場合における最終的な結果レコード数の違いになります。

- セルサイズの制限なし このプロセスのタブ上のクエリ条件または選択条件を満たすすべてのIDを返します。 これは既定のオプションです。
- セルサイズの上限指定 クエリ条件を満たすすべてのIDからランダムに選択された特定数の一意のIDが返されます。 テキストボックスに、返したいID数を入力します。 この方法では、Campaignはランダム選択の前にIDの完全セットに対して重複IDを除外し、ID項目に重複がある場合でも一意のIDリストが返されるように、指定のレコード数のみを保持します。
 - ☆ このオプションでレコードを選択する場合、すべてのIDをCampaignサーバで取得する必要があるため、十分な一時領域が必要で、時間もかかります。 ID項目でデータが正規化されていない場合で、正確にN個のレコードを返す必要がある場合に、このオプションを使用してください。
- 出力件数の指定 クエリ条件を満たすCampaignレコード数を制限するときにこのオプションを使用します。 このオプションは、最終レコードセットの選択にかかる時間を短縮しメモリを削減できますが、指定した数より一意のID数が少なくなる場合があります。

- 最初のN件(最速) Campaignは、データベースから、クエリ条件を満たす最初のレコードのみを取得します。 この方法では、Campaignは一度レコードを受信したら、レコードの取得を停止します。その後、CampaignはこれらのIDを重複を除外します。データが正規化されていない場合、最終結果は一意のレコード数より少なくなります。 これは、データの取得に時間がかからず、一時領域をあまり使用しないため、最速の方法です。
- ランダム Campaignは、クエリ条件を満たすすべてのレコードをデータベースから取得し、これらのレコードからランダムにレコードを選択します。その後、Campaignは、保持しているIDから重複を除外します。データが正規化されていない場合、最終結果は、一意のレコード数より少なくなります。 このオプションでは、Campaignはランダムに選択されたレコードのみを取得および格納するので、使用される一時領域は少なくて済みます。

テスト実行時のセルサイズ制限の適用

オーディエンスプロセスや選択プロセスなど、プロセスによっては、テスト実行時のセルサイズを制限することができます。 このセクションのオプションを使用して、テスト実行中に返され、処理されるデータサイズを制御できます。

- セルサイズの制限なし これは既定のオプションです。 このプロセスの[ソース]タブ上のクエリ条件または選択条件から返されるIDの数は変わりません。 このオプションでは、本番実行中と同じ全データでテスト実行が行われます。ただし、オファー履歴とコンタクト履歴には記録されません。
- セルサイズの上限指定 クエリ条件を満たすすべてのIDからランダムに選択された特定数のIDが返されます。 テキストボックスに、返したいID数を入力します。 この方法では、Campaignはランダム選択の前にIDの完全セットに対して重複IDを除外し、ID項目に重複がある場合でも一意のIDリストが返されるように、指定のレコード数のみを保持します。
- ☆ このオプションでレコードを選択する場合、すべてのIDをCampaignサーバで取得する必要があるため、十分な一時領域が必要で、時間もかかります。 ID項目でデータが正規化されていない場合で、正確にN個のレコードを返す必要がある場合に、このオプションを使用してください。

セル名の変更

既定では、プロセス内で作成されるセルの名前はプロセス名と同じになります。 複数のセルを作成するプロセスでは、出力セル名は、プロセス名とセグメント名の連結になります。 たとえば、「Segment1」という名前のセグメントプロセスで3つのセグメントを作成する場合、出力セルの名前は、既定で

は「Segment1.Segment1」、「Segment1.Segment2」、および「Segment1.Segment3」となります。

セル名は、そのセルが作成されたプロセスの名前にリンクするように設計されています。 プロセス名を編集すると、セル名も自動的に変わります。

ただし、セル名を編集すると、プロセス名とのリンクは解除されます。 つまり、その後にプロセス名を編集した場合、セル名は自動的には変更されなくなります。

関連トピック

- セル名とセルコード
- セル名のリセット

フローチャートのプロセス内のセルの名前を変更するには

- ☼ 出力セル名の変更を保存するとき、セルコードの[自動生成]がオンになっていると、セルコードが再生成されます。セルコードを変更したくない場合は、セル名を編集する前に[自動生成]をオフにしてください。
- 1. 編集モードのフローチャートで、出力名を変更するプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. [全般]タブをクリックします。 プロセス名や出力セル名など、プロセスの全般情報 が表示されます。
- 3. **[**出力セル名]項目内にカーソルを置くとテキストが選択されるので、セル名を編集 します。
- 4. **[OK]**をクリックします。 変更が保存されます。 セル名を編集したためプロセス名 と一致しなくなった場合、これらの名前はリンクされなくなります。

関連トピック

フローチャートの検証

セル名のリセット

既定では、プロセス内で作成されるセルの名前はプロセス名と同じになります。 複数のセルを作成するプロセスでは、出力セル名は、プロセス名とセグメント名の連結になります。 たとえば、「Segment1」という名前のセグメントプロセスで3つのセグメントを作成する場合、出力セルの名前は、既定で

は「Segment1.Segment1」、「Segment1.Segment2」、およ

び「Segment1.Segment3」となります。

プロセス名を変更した場合、セル名とプロセス名のリンクが維持されるように、セル名 も自動的に変わります。

ただし、セル名をプロセス名とは異なる名前に手動で変更した場合、セル名とプロセス名のリンクは壊れます。 セル名をプロセス名と同じ名前に戻すことにより、リンクを復元できます。

セル名をリセットするには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力名をリセットするプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. 「全般」タブをクリックします。プロセスの全般情報が表示されます。
- 3. 次のステップは、編集対象のプロセスが1つのセルを出力するか、複数のセルを出力 するかで異なります。
 - 1つのセルを出力するプロセスでは、[出力セル名]項目のテキストを編集して、[プロセス名]項目に表示されるプロセス名と同じにします。
 - 複数のセルを出力するプロセスでは、[セル名のリセット]をクリックします。 セル名は既定の形式、つまり現在のプロセス名とセグメント名を連結した名前に戻されます。

これでプロセス名とセル名が再リンクされます。 ここでプロセス名を変更すると、 出力セル名も自動的に変更されます。

4. **[OK]**をクリックします。 変更が保存されて、プロセス設定ダイアログが閉じます。

グリッド内のすべてのセルをコピーして貼り付けるに は

複数のセルを出力するプロセスでは、[出力セル]グリッドで、コピー機能と貼り付け機能を使用して、複数の出力セルのセル名とセルコードを編集できます。

- 1. 編集モードのフローチャートで、セル名とコードをコピーして貼り付けるプロセス をダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. **[全般]**タブをクリックします。 **[出力セル]**グリッドを含め、プロセスの全般情報が表示されます。
- 3. [出力セル]グリッドで、任意の場所をクリックしてすべてのセルを選択します。 カーソルの位置に関係なく、常にすべてのセルが貼り付け用に選択されます。
 - ☆ [セルコード]列は、[セルコードを自動生成]チェックボックスをオフにしない限り、選択も編集もできません。
- 4. [コピー]をクリックします。 すべてのセルがクリップボードにコピーされます。
- 5. セルを貼り付ける場所の一番左上のセル内をクリックします。
- 6. **[貼り付け]**をクリックします。 コピーしたセルブロックと同じサイズのセルブロックの元の内容が、コピーしたセルの内容で置換されます。

セル名とコードを外部のスプレッドシートから貼り付 けるには

1. 外部のスプレッドシートまたは他のアプリケーションからセルやテキストを選択してコピーするには、該当するアプリケーションのコピー機能を使用します。

- 2. Campaignの編集モードのフローチャートで、セル名とコードをコピーして貼り付けるプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 3. **[全般]**タブをクリックします。 **[出力セル]**グリッドを含め、プロセスの全般情報が表示されます。
 - ☆ [セルコード]列は、[セルコードを自動生成]チェックボックスをオフにしない限り、選択も編集もできません。内容を[セルコード]列に貼り付ける場合は、このチェックボックスを必ずオフにしてください。
- 4. コピーした内容を貼り付けるセルの内側をクリックします。 四角で囲ったセルグ ループをコピーして貼り付ける場合は、四角の左上のセルの内側をクリックします。
- 5. **[貼り付け]**をクリックします。 コピーしたセルの内容で、同じサイズのブロックのセルの元の内容が置換されます。

セルコードの変更

既定では、システム管理者がすべてのセルコードに対して定義した形式に基づいて、システムによりセルコードが自動的に生成されます。 セルコードの一意性は、フローチャートとキャンペーン間で強制されますが、フローチャートの設定パラメータAllowDuplicateCellCodesを「Yes」に設定した場合、セルコードの重複が可能になります。

IBM Unica Marketingで提供される中央設定パラメータの詳細については、『*Marketing Platform管理者ガイド*』を参照してください。

☆ 既定のシステム生成セルコードを上書きすることはできますが、手動で入力するセルコードも、セルコードの形式に準拠する必要があります。この形式は、プロセス設定ダイアログの[セルコード] 項目の下に表示されます。コード形式は、定数と変数により表されます。大文字はアルファベット定数であり、小文字「n」は数値を表します。たとえば、セルコード形式が「Annn」である場合、最初の文字「A」に3つの数値が続く4文字のセルコードということになります。この形式のセルコード例は「A454」です。

フローチャートのプロセス内のセルのコードを変更するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力名を変更するプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. 「全般」タブをクリックします。 プロセスの全般情報が表示されます。
- [自動生成]チェックボックスがオンの場合はオフにします。 [セルコード]項目が編集 可能になります。
- 4. [セルコード]項目で、セルコードを編集します。 変更したコードは、[セルコード]項目の下に表示されているセルコード形式に準拠していることが必要です。
- 5. セルコードの編集が終了したら、**[OK]**をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを使用してフローチャートのセルを照合してリンクするには

各プロセスの設定ダイアログからセルをリンクするだけでなく、[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログからフローチャート全体のターゲットセルをリンクして管理できます。 この操作を行う前に、プレースホルダのセルコードと名前がキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートに存在していることを確認してください。 自動照合を実行する場合は、ターゲットセルスプレッドシートに定義されているセルの名前、または名前の少なくとも最初の3文字が出力セル名と同じであることを確認してください。

1. 編集モードのフローチャートで、[オプション] > [ターゲットセルの照合とリンク]オ プションを選択します。

[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログが開き、左のペインに[使用可能なターゲットセル]が、右のペインにフローチャートの出力セルが表示されます。

2. ターゲットセルとフローチャートの出力セルを名前に基づいて自動的に照合するには、[自動照合>]をクリックします。

正常に自動照合されたセルのステータスは[正確]または[最適]になり、右のペインに 表示されます。 照合されたターゲットセルは赤で表示されます。

照合されたセルのペアのリンクを完了するには、[OK]をクリックして保存し、ダイアログを閉じます。

フローチャートの実行結果が失われることを示す警告が表示されます。 **[OK]**をクリックして続行します。

このフローチャートの[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを次回表示したとき、照合してリンクしたセルのステータスは[リンク済み]として表示されます。

☆ ターゲットセルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。 フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを使用してフローチャートのセルの照合またはリンクを解除するには

- 1. 編集モードのフローチャートで、[オプション] > [ターゲットセルの照合とリンク]オープションを選択します。

照合済みセルまたはリンク済みセルは右のペインに、そのステータスを示す[ステータス]列とともに表示されます。

2. すべての照合済みセルのペアの照合を解除するには、[すべて照合解除]をクリック します。

照合解除されたターゲットセルは[使用可能なターゲットセル]ペインで更新され、 出力セルの[ステータス]列と[ターゲットセル名]列が消去されます。 リンク済みセル のペアは変更されません。

すべてのリンク済みセルのペアのリンクを除するには、[すべてリンク解除]をクリックします。

以前にリンクされたペアのリンクは解除されますが、照合済みの状態はそのまま保持されます。 ターゲットセルは、照合済みターゲットセルとして[使用可能なターゲットセル]リストに赤で表示されるようになります。

☆ ターゲットセルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。 フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを使用してフローチャートのセルを手動で照合してリンクするには

1. 編集モードのフローチャートで、[オプション] > [ターゲットセルの照合とリンク]オープションを選択します。

[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログが開き、左のペインに[使用可能なターゲットセル]が、右のペインにフローチャートの出力セルが表示されます。

2. 照合するターゲットセルとフローチャートの出力セルのペアを1つ以上選択して、[照合> >]をクリックします。

選択したターゲットセルが、選択した順序で、選択したフローチャートの出力セルと照合されます。 正常に照合された出力セルのステータスは[手動]と表示され、照合されたターゲットセルは赤で表示されます。

3. 照合されたセルのペアのリンクを完了するには、[OK]をクリックして保存し、ダイアログを閉じます。

フローチャートの実行結果が失われることを示す警告が表示されます。 **[OK]**をクリックして続行します。

このフローチャートの[ターゲットセルの照合とリンク]ダイアログを次回表示したとき、照合してリンクしたセルのステータスは[リンク済み]として表示されます。

☆ ターゲットセルのリンクは、フローチャートを保存するまでデータベースに保存されません。 フローチャートの変更をキャンセルすると、セルのリンクはデータベースに保存されません。

プロセス設定ダイアログを使用してフローチャートの セルをターゲットセルにリンクするには

この操作を行う前に、プレースホルダのセルコードと名前がキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートに存在していることを確認してください。

- 1. 編集モードのフローチャートで、出力セルをターゲットセルスプレッドシートのセルにリンクするプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. [全般]タブをクリックします。 プロセスの全般情報が表示されます。
- 3. [ターゲットセルの選択]ウィンドウにアクセスします。
 - 1つのセルを出力するプロセス(選択プロセスなど)では、[ターゲットセルへのリンク…]をクリックします。
 - 複数のセルを出力するプロセス(セグメントプロセスなど)では、リンクするセルごとに[出力セル名]行または[セルコード]行をクリックします。 省略記号ボタンが表示されるのでクリックします。

[ターゲットセルの選択]ウィンドウが開き、現在のキャンペーンに対してターゲットセルスプレッドシートに定義されているセルが表示されます。

- 4. [ターゲットセルの選択]ウィンドウで、現在の出力セルをリンクするセルの行を選択します。
- 5. **[OK]**をクリックします。 [ターゲットセルの選択]ウィンドウが閉じます。 プロセス 設定ダイアログの[出力セル名]と[セル名]が、ターゲットセルスプレッドシートのセルのコードと名前で置換されます。 これらは斜体で表示され、ターゲットセルスプレッドシートにリンクされていることを示します。
- 6. **[OK]**をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

プロセス設定ダイアログを使用してターゲットセルからフローチャートのセルのリンクを解除するには

- コンタクト履歴に関連付けられているセルのリンクを解除すると、それらのセルが" 回収"されます。 回収されたセルはターゲットセルスプレッドシートに表示されな いため、ターゲットスプレッドシートでは見えなくなります。 ターゲットセルスプ レッドシートにセルを残すには、セルのリンクを解除する前にセルのコンタクト履 歴を削除します。
- 1. 編集モードのフローチャートで、ターゲットセルスプレッドシートのセルからリンクを解除する出力セルを持つプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. 【全般】タブをクリックします。 プロセスの全般情報が表示されます。
- 3. [ターゲットセルの選択]ウィンドウにアクセスします。
 - 1つのセルを出力するプロセス(選択プロセスなど)では、[ターゲットセルへのリンク…]をクリックします。

• 複数のセルを出力するプロセス(セグメントプロセスなど)では、リンクを解除するセルの[出力セル名]行または[セルコード]行をクリックします。 省略記号ボタンが表示されるのでクリックします。

[ターゲットセルの選択]ウィンドウが開き、現在のキャンペーンに対してターゲットセルスプレッドシートに定義されているセルが表示されます。 現在リンクされているセルはハイライト表示されます。

- 4. [ターゲットセルの選択]ウィンドウで、[リンクされていません]を選択します。 セル 名とコードはハイライト表示されなくなります。
- 5. **[OK]**をクリックします。 [ターゲットセルの選択]ウィンドウが閉じます。 プロセス 設定ダイアログの[出力セル名]と[セル名]は斜体表示でなくなり、ターゲットセルス プレッドシートにリンクされていないことがわかります。
- 6. [OK]をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当て るには

この操作を行うためには、オファーとセルが作成されていることが必要です。

- 1. 編集モードのフローチャートで、オファーを割り当てる出力セルのプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. **[処理]**タブをクリックします。 プロセスにオファーを割り当てるためのインタ フェースと、プロセスのすべての入力セルを示すグリッドが表示されます。
- 3. コンタクトから完全に除外されるコントロールグループを使用する場合は、[検証コントロールグループを使用]チェックボックスをオンにします。 コントロールグループに関連する列がターゲットセルのグリッドに追加されます。
- 4. 各セルの[コントロール?]列をクリックし、[Y]または[N]を選択して、このセルがコントロールセルであるかないかを示します。 セルがコントロールセルであると指定した場合、そのセルの残りの列が無効になり、そのセルにはコントロールセルまたはオファーを指定できません。 セルがコントロールセルでないと指定した場合は、そのセルにコントロールセルおよびオファーを指定できます。
- 5. コントロールセルでない各セルに対して、コントロールセルとなる1つのセルと1つ 以上のオファーを指定します。

オファーを割り当てる方法は2つあります。

- セルの[オファー]列をクリックし、選択対象オファーのリストを表示してオファーを選択します。
- [オファー指定...]をクリックして[オファー指定]ウィンドウを開きます。ここで[追加>>]ボタンと[<<削除]ボタンを使用して、[選択対象オファー]リストから[指定済みオファー]リストへオファーを移動します。
- ☆ 1つ以上のオファーを複数のセルに割り当てるには、オファーを割り当てる行を すべて選択し、[オファー指定...]をクリックして[オファー指定]ウィンドウを開きます。

6. プロセス内のセルにオファーを割り当てたら、**[OK]**をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

関連トピック

- ・オファーの新規作成
- フローチャートのプロセス内にセルを作成するには

セルへのオファーリストの割り当て

フローチャートから、またはターゲットセルスプレッドシートでセルにオファーリストを割り当てる手順は、セルに1つまたは複数のオファーを割り当てる場合と同じです。ただし、オファーリスト内のオファーのパラメータに値を指定することはできません。パラメータ化されたオファー項目には既定値が使用されます。

関連トピック

- ・フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当てるには
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルにオファーを割り当てるには

セルに割り当てられているオファーにパラメータを設 定するには

フローチャートのコンタクトスタイルプロセス(CSP)内のセルにオファーを割り当てた後で、パラメータ化された属性の値を指定済みオファーに指定できます。

- 1. 編集モードのフローチャートで、パラメータ化されたオファー属性の値を設定する 入力セルを持つプロセスをダブルクリックします。 指定したプロセスのプロセス設 定ダイアログが開きます。
- 2. [パラメータ]タブをクリックします。 パラメータ値を指定するためのインタフェー スが各入力セルに表示されます。
- 3. [対象セル]項目で、ドロップダウンリストを使用して特定のセルを名前で選択するか、[すべてのセル]を選択して複数のセルに同じパラメータ値を割り当てます。 省略記号ボタンをクリックして[セルの選択]ウィンドウを開き、入力として使用するセルをここで選択することもできます。

選択したセルまたはすべてのセルについて、オファーとパラメータの組み合わせご とに1行表示されます。

- ☆ [すべてのセル]を選択すると、セル/オファー/パラメータの複合ビューが表示されます。
- 4. オファー/パラメータの組み合わせごとに、[指定値]列をクリックして選択可能な値をドロップダウンリストで表示するか(該当する場合)、または項目内のテキストを編集します。 オファーを受け取るすべてのセルのパラメータ値が、入力した値に設定されます。

- ☆ 複数のセルがある場合、すべてのセルが同じオファーに割り当てられますが、パラメータの値は異なります。1つの行がそのオファーに対して表示されても、値[複数の値]は[指定値]列の下に表示されます。
- 5. オファーパラメータの値をしたら、**[OK]**をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。

関連トピック

・フローチャートCSP内のセルにオファーを割り当てるには

ターゲットセルスプレッドシートについて

◇ Campaign環境をMarketing Operationsと統合している場合、Marketing Operations を使用してターゲットセルスプレッドシートを操作する必要があります。 Campaign環境がレガシキャンペーンにアクセスできるように設定されている場合、レガシキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートの操作について、このガイドのインストラクションに従ってください。 詳細については、「Marketing Operationsとの統合について」を参照してください。

ターゲットセルスプレッドシート(TCS)は、各キャンペーンのスプレッドシートタイプ機能で、そのキャンペーン内のフローチャートで使用されるすべてのセル、およびそのセルに割り当てるオファーを含む詳細が表示されます。 TCSは、キャンペーンのフローチャートで使用するときにすべてのセルにアクセスできるビューとなるだけでなく、セルベースでオファーを割り当てるツールでもあります。

ターゲットセルスプレッドシートはいつでも編集可能であり、保存すると値 がCampaignシステムテーブルに書き込まれます。

TCSは2つのモードで使用できます。

- トップダウン ターゲットセルスプレッドシートにすべてのターゲットセルとコントロールセルを作成して、フローチャート内で作成したセルにセルコードを使用して後でリンクできます。 TCSで作成されたセルについては、フローチャートで使用されている項目以外のすべての項目をTCS内で編集できます。
- ボトムアップ フローチャートプロセスで作成する各ターゲットセルは、フローチャートを保存した後、TCSに表示されます。 フローチャートから作成されるセルについては、カスタム属性のみTCSで編集できます。

2つのモードはいつでも切り替えできます。ただし、通常、トップダウン定義とボトムアップ定義は別々のユーザが行うため、切り替えはあまり行われません。

↓ 関連キャンペーン内のフローチャートを編集または実行する際に、ターゲットセルスプレッドシートを編集する可能性を最小限にするビジネスルールを設定しておく必要があります。同時に別々の人間がフローチャートとTCSを編集した場合、たとえば、あるユーザがフローチャート内部からコンタクトプロセスを編集し、別のユーザがTCSから同じセルのオファー割り当てを変更した場合など、間違ったデータが保存されたりデータの競合が発生する場合があります。

ただし、場合によっては、モードを切り替えることが必要になる場合があります。 たとえば、フローチャートでの作業中、トップダウンモードでTCSに定義されていないターゲットセルを見つけた場合、まずフローチャートを保存します。その後、トップダウンモードに切り替えて(TCSに移動し、そこでセルを作成して)、再びボトムアップモードに戻ります(フローチャートに戻って、TCSの新しいセルにリンクすると、 コンタクトプロセスが正しく設定されます)。

トップダウンモードでTCSに作成されたセルは、ボトムアップモードで未使用な場合でも、視覚的に無効(淡色表示)にはなりません。

ターゲットセルスプレッドシートでのセルステータス 情報

Campaignのターゲットセルスプレッドシートには、セル数、前回の実行タイプ(フローチャート、ブランチ、またはプロセスの本番実行またはテスト実行)、前回の実行時刻を含む、各セルの現在のステータスが表示されます。 セル数とは、実行されたフローチャート内の出力セルにリンクする各セルの一意のオーディエンスID数です。 このセルステータスは、対応するプロセスの一番新しく保存された本番実行またはテスト実行の結果になります。

セルステータス情報は、Campaign (スタンドアロン)またはMarketing Operations (統合時)いずれかのターゲットセルスプレッドシートに表示されます。

セル数の更新

プロセス設定を変更すると、過去の実行結果が失われ、ターゲットセルスプレッドシートのセル数、前回の実行タイプ、前回の実行時刻の列が空白になります。 セル数を更新するには、フローチャートまたはブランチ、プロセスを本番モードまたはテストモードで実行し、フローチャートを保存する必要があります。

以下のタイプのプロセス設定の変更では、TCSのセル数への影響に注意してください。

- フローチャートの出力セルをターゲットセルにリンクする。 次の保存された本番またはテスト実行までセル数は空白となります。
- フローチャートの出力セルをターゲットセルからリンク解除する。 過去の実行結果 は削除され、セル数が空白となります。

セル数を手動で更新するには

ターゲットセルスプレッドシートのセル数は、フローチャート、ブランチ、またはプロセスを本番実行したとき、またはテスト実行を保存したときに自動的に更新されます。実行の完了時にTCSが開いている場合は、[セルステータスの取得]アイコンをクリックしてセル数を手動で更新する必要があります。

ターゲットセルスプレッドシートの操作

ターゲットセルスプレッドシート(TCS)の操作の詳細については、次のトピックを参照してください。

- ターゲットセルスプレッドシートに1行追加するには
- ターゲットセルスプレッドシートに複数の空白行を追加するには
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルに行を複製するには
- ターゲットセルスプレッドシート内を検索するには
- 現在のセルがコントロールセルであるかどうかを指定するには
- 現在のセルにコントロールセルを指定するには
- ターゲットセルスプレッドシート内にセルコードを生成して使用するには
- ターゲットセルスプレッドシートを編集するには
- 外部ソースからターゲットセルスプレッドシートにデータを貼り付けるには
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルにオファーを割り当てるには
- ターゲットセルスプレッドシート内のセルからオファーへの割り当てを解除するには
- 割り当てられているオファーまたはオファーリストを表示するには

ターゲットセルスプレッドシートに1行追加するには

- セルを追加するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。
 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. [編集]アイコンをクリックします。

スプレッドシートは編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。

3. **[セルの追加]**アイコンをクリックします。 スプレッドシートの一番下に1行追加されます。

ターゲットセルスプレッドシートに複数の空白行を追加するには

- 1. セルを追加するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。 現在の キャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. [編集]アイコンをクリックします。

スプレッドシートは編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。

- 3. **[多数のセルの追加]**アイコンをクリックし、ドロップダウンリストから**[N件の空**白行]を選択します。 [複数の新規行を追加]ウィンドウが表示されます。
- 4. [作成する行数]項目に、追加する行数を入力します。
- 5. [ターゲットセルの作成]をクリックします。

新しいターゲットセル行がスプレッドシートの一番下に追加されます。セルコードとセル名は既に入力されています。

6. 新しいセルの追加情報があればスプレッドシートに入力し、[保存]または[保存して 戻る]をクリックして変更を保存します。

ターゲットセルスプレッドシート内のセルに行を複製するには

- 1. セルを複製するキャンペーンで、**[ターゲットセル]**タブをクリックします。 現在の キャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. [編集]アイコンをクリックします。

スプレッドシートは編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。

- 3. 複製する行を選択します。
- 4. **[多数のセルの**追加]アイコンをクリックし、ドロップダウンリストから**[N件の重複** 行]を選択します。

[複数の新規行を追加]ウィンドウが表示されます。

- 5. [作成する行数]項目に、追加する行数を入力します。
- 6. [ターゲットセルの作成]をクリックします。

新しいターゲットセル行が選択した行の下に追加されます。セルコードとセル名は既に入力されています。 [使用しているフローチャート]以外のすべての列の値は、元のセルの行からコピーされます。

7. 新しいセルの追加情報があればスプレッドシートに入力し、[保存]または[保存して 戻る]をクリックして変更を保存します。

ターゲットセルスプレッドシート内を検索するには

ターゲットセルスプレッドシートの[検索]機能では、文字列の一部を入力して、部分的に一致する文字列をスプレッドシート内の列から検索できます。 たとえば、[検索]項目に"924"と入力すると、"A0000000924"というコードが指定されたセルを含む行と"Offer9242007"という名前のオファーが割り当てられたセルの行が一致します。

- ☆ この検索機能は、編集モードのターゲットセルスプレッドシートでのみ使用可能です。
- セルを検索するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。
 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- スプレッドシートの[編集]リンクをクリックします。
 スプレッドシートは編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。
- 3. [検索]をクリックします。
- 4. [検索]ウィンドウに検索する文字列を入力して、[文字列の検索]をクリックします。 最初に見つかった一致文字列を含む行がハイライト表示されます。

5. スプレッドシート内の一致文字列を続けて検索するには、[次を検索]をクリックします。

現在のセルがコントロールセルであるかどうかを指定するには

- 1. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、編集しているセルの[コントロールセル]列をクリックします。
 - セルにドロップダウンリストが付き、編集可能になります。
- 2. ドロップダウンリストから**[はい]**または**[いいえ]**を選択して、現在のセルがコントロールセルであるかどうかを示します。
- 3. [保存]または[保存して戻る]をクリックして保存を変更します。
- コントロールセル(たとえばセルA)を1つ以上のターゲットセルのコントロールとして割り当てた後で、セルAをターゲットセルに変更すると、セルAはそれまでコントロールとして使用されていたターゲットセルのコントロールからも削除されます。

現在のセルにコントロールセルを指定するには

- 1. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、編集しているセルの[コントロールセルコード] 列をクリックします。
 - セルにドロップダウンリストが付き、編集可能になります。 コントロールセルとして指定されているセル([コントロールセル]列の値が**[はい]**になっている)のセルコードは、コントロールセルとして選択できます。
- 2. 現在のセルのコントロールとして使用するセルをドロップダウンリストから選択します。
- 3. [保存]または[保存して戻る]をクリックして保存を変更します。

ターゲットセルスプレッドシート内にセルコードを生成して使用するには

ターゲットセルスプレッドシート内で使用する一意のセルコードをCampaignで生成するようにするには、この機能を使用します。

- 1. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、[セルコードの生成]アイコンを クリックします。
 - 生成したセルコードを示すウィンドウが開きます。
- 2. このウィンドウの内側をクリックし、マウスでセルコードを選択します。
- 3. 右クリックして、コンテキストメニューから[コピー]を選択します。
- 4. セルコードを貼り付けるターゲットセルスプレッドシートの項目をクリックします。
- 5. 右クリックして、コンテキストメニューから[貼り付け]を選択します。 生成された セルコードがターゲットセルスプレッドシートに貼り付けられます。
- 6. [保存]または[保存して戻る]をクリックして保存を変更します。

ターゲットセルスプレッドシートを編集するには

ターゲットセルスプレッドシートのセルの属性を随時変更するときは、関連付けられているキャンペーンのフローチャートが編集または実行されているときに同時に行わないように気をつけてください。

- 異なるユーザによってフローチャートとTCSに同時に変更が加えられると、間違ったデータが保存されて競合が発生する可能性があります。たとえば、一人のユーザがフローチャート内からCSPを編集しているときに、同時に別のユーザが同じセルに対するオファー指定をTCSから変更している場合などです。
- セルを編集するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。
 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. [編集]アイコンをクリックします。

スプレッドシートが編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。

- 3. 編集するセル項目をクリックして変更を加えます。
- 4. 選択した行をスプレッドシート内で上下に移動したり、選択した行を削除するには、[Campaign]ツールバーのアイコンを使用します。
- 5. 編集が終了したら、[保存]または[保存して戻る]をクリックして変更を保存します。

外部ソースからターゲットセルスプレッドシートにデータを貼り付けるには

- 1. セルを編集するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。 現在の キャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. スプレッドシートの[編集]リンクをクリックします。 スプレッドシートが編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。
- 外部アプリケーションで、ターゲットセルスプレッドシートに貼り付けるセルの内容またはテキストをコピーします。
- 4. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、コピーした内容を貼り付けるセルをクリックします。複数のセルを選択するには、Shiftキーを押しながらセルを選択します。
- 5. 右クリックして、コンテキストメニューから[貼り付け]を選択します。 コピーした セルの内容が選択したセルに貼り付けられます。
- 6. [保存]または[保存して戻る]をクリックして保存を変更します。

.csvファイルからターゲットセルスプレッドシートにデータをインポートするには

大量のターゲットセルデータを.csv形式のファイルからターゲットセルスプレッドシートにインポートできます。 ファイルは、「ターゲットセルスプレッドシートにインポートするCSVファイルの必須形式」の指定に従って形式設定する必要があります。

- ターゲットセルデータをインポートするキャンペーンで、[ターゲットセル]タブを クリックします。 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. スプレッドシートの[ターゲットセルのインポート]アイコンをクリックします。
- [TCSのインポート]ダイアログで、[参照]ボタンを使用してインポートする.cvsファイルまで移動し、ファイルを選択して、[ファイルの選択]ダイアログの[開く]をクリックします。
- 4. [インポート]をクリックします。
- 5. ターゲットセルスプレッドシートが更新され、TCSの既存のセルの下に.csvファイルの内容が追加されます。

ターゲットセルスプレッドシートにインポートするCSVファイルの 必須形式

データをターゲットセルスプレッドシートに正常にインポートするためには、準備するカンマ区切り値(.csv)ファイルが次の形式と一致する必要があります。 ターゲットセルスプレッドシートの内容をエクスポートする場合、これはエクスポートされるデータの形式でもあります。

- 定義済みセル属性およびカスタムセル属性と列名が一致するヘッダ行がファイルに 含まれていること。
- 各行の列数がヘッダ行で指定されている列数と同じであること。
- データのない列は空白のまま残してあること。
- カスタム属性の値は適切なデータ型に変換されること。 日付の場合は、日付の文字 列がユーザのロケール形式であること。

列名	説明	必須	有効な値
CellName	ターゲットセルの名前。	はい	
CellCode	ターゲットセルに割り当てられているセルコード。 空の場合、Campaignはセルコードを生成します。空でない場合は、指定されている値が使用されます。	IsControl に「はい」が 指定されてい る行の場合 は、はい	セルコードは定義されている セルコードの形式と一致する 必要があります。
IsControl	行のセルがコントロールセルであるか、 標準のターゲットセルであるかを示しま す。	いいえ	はい、いいえ

列名	説明	必須	有効な値
ControlCellCo de	IsControlに「はい」が指定されている セルのCellCode。	いいえ	IsControlに「はい」が指定さ れているセル用の有効なセル コード。
AssignedOffe rs	セミコロンで区切られた一連のオファー またはオファーリスト、あるいはその両 方の組み合わせ。	いいえ	オファーはオファーコードを使用して、オファーリストはオファーリスト名を使用して指定できます。形式は次のようになります。 OfferName1[OfferCode1]; OfferName2[OfferCode2];OfferListName1[];OfferListName1[];OfferListName1[];OfferListName2[]、この場合のオファー名はオプションですが、オファーリストは必須です。オファーリスト名には空の角かっこを付ける必要があります。
FlowchartNa me	関連付けられているフローチャートの名 前。	い列はCam- paignにさてす場さりにさいる。 この では、 はいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もいでは、 もっとも。 もっとも。 もっとも。 もっとも。 もっとも。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も。 も	
CellCount	セルのカウント。	いはCam- paignにさにまって で で の の の は い は い た さ に さ 定 は は は は す し ま れ る れ え 入 た れ し れ し れ し れ し れ し れ し れ し れ し れ し れ	

列名	説明	必須	有効な値
LastRunType	最終実行したフローチャートのタイプ。	い列はCam- paignにさてす場さりにす こってすまたれた こったではまれた ははすったれ ははすったれ はない で は は は は は は は は は は は は は は は は は は	
LastRunTime	フローチャートを最終実行した時刻。	い の はCam- paignに こってす 場合れ よれしま ポカさ にはす ーれ で はは で にま ボカさ にま ボカさ にま ボカさ にま ボカさ にま ボカさ にま の にま の にま の にま の にま の にま の にま の にま の にま の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の に の の に の の の の の の の の の の の の の	
Custom Attr1	インポートしているデータに対して定義 したカスタムセル属性ごとに列を追加し ます。	いいえ	カスタム属性のデータ型およ びユーザロケール/形式で必要 とされる有効な値。

ターゲットセルスプレッドシートからデータをエクスポートするに は

ターゲットセルスプレッドシートの内容は、.csv形式でローカルの場所やネットワークドライブにエクスポートできます。 TCSのすべての内容がエクスポートされます。内容のサブセットを選択することはできません。

- 1. TCSの内容をエクスポートするキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリック します。 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. [ターゲットセルのエクスポート]アイコンをクリックします。
- 3. [ファイルのダウンロード]ダイアログの[保存]をクリックします。
- 4. [名前を付けて保存]ダイアログで、ファイル名を指定し、ファイルを保存するディレクトリまで移動して、[保存]をクリックします。 [ファイルのダウンロード]ダイアログにダウンロードが完了したことが示されます。
- 5. [閉じる]をクリックして、ターゲットセルスプレッドシートに戻ります。

ターゲットセルスプレッドシート内のセルにオファーを割り当てる には

ターゲットセルスプレッドシート内のセルに「トップダウン」モードでオファーを割り 当てることができます。

- セルにオファーを割り当てるキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. スプレッドシートの[編集]リンクをクリックします。 スプレッドシートが編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。
- 3. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、オファーを割り当てるセルの行で[指定済みオファー]列をクリックします。

[オファーを検索]アイコンが表示されます。

4. [オファーを検索]アイコンをクリックします。

[オファーの選択]ウィンドウが開きます。

- 5. [オファーの選択]ウィンドウで、1つ以上のオファーまたはオファーリストを選択するオファーフォルダまで移動し、**[検索]**タブをクリックして、名前、説明、またはコードでオファーを検索します。
- 6. 現在のセルに割り当てるオファーを選択したら、**[承認して閉じる]**をクリックします。

[オファーの選択]ウィンドウが閉じ、選択したオファーが[指定済みオファー]列に挿入されます。

7. セルに対してオファーを選択したら、[保存]または[保存して戻る]をクリックして変更を保存します。

ターゲットセルスプレッドシート内のセルからオファーへの割り当 てを解除するには

オファーをセルに割り当てた後で、その割り当てを削除できます。

- 1. セルからオファーの割り当てを解除するキャンペーンで、**[ターゲットセル]**タブを クリックします。 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きま す。
- 2. スプレッドシートの[編集]リンクをクリックします。 スプレッドシートが編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。
- 3. 編集モードのターゲットセルスプレッドシートで、オファーの割り当てを解除する セルの列で[指定済みオファー]列をクリックします。

[オファーの表示]アイコンが表示されます。

4. [オファーの表示]アイコンをクリックします。

[オファー詳細の表示/編集]ウィンドウが開き、割り当てられているオファーまたは オファーリストが[指定済みオファー]セクションに表示されます。

- 5. セルから削除するオファーまたはオファーリストを選択し、**[>>]**ボタンをクリックして、選択したアイテムを[削除済みオファー]セクションに移動します。
- 6. オファーまたはオファーリストを削除したら、[変更の承認]をクリックします。 [オファー詳細の表示/編集]ウィンドウが閉じ、削除されたオファーまたはオファー リストは該当するセルの[指定済みオファー]列に表示されなくなります。
- 7. セルからオファーの割り当てを解除したら、[保存]または[保存して戻る]をクリックして変更を保存します。

割り当てられているオファーまたはオファーリストを表示するには

オファーまたはオファーリストをセルに割り当てた後で、割り当て済みのオファーを表示したり、割り当て済みのオファーリストの内容をプレビューしたりできます。

- セルに割り当てられているオファーまたはオファーリストを表示するキャンペーンで、[ターゲットセル]タブをクリックします。 現在のキャンペーンのターゲットセルスプレッドシートが開きます。
- 2. スプレッドシートの[編集]リンクをクリックします。 スプレッドシートが編集モードで開きます。 フローチャートで使用されている既存のセルは、色付きでハイライト表示されます。
- 3. Editモードのターゲットセルスプレッドシートで、割り当て済みのオファーまたはオファーリストを表示するセルの行で[指定済みオファー]列をクリックします。
 [オファーの表示]アイコンが表示されます。
- 4. [オファーの表示]アイコンをクリックします。

[オファー詳細の表示/編集]ウィンドウが開き、割り当てられているオファーまたは オファーリストが[指定済みオファー]セクションに表示されます。

5. オファーリストを選択して[オファーリストプレビュー]をクリックします。 選択したオファーリストの[サマリ]ページが開き、含まれているオファーのプレビューが表示されます。

[ターゲットセル]タブのアイコン

[ターゲットセル]タブでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

アイコン名	説明
編集	ターゲットセルスプレッドシートを編集するには、このアイコ ンをクリックします。

8 - セルの管理

アイコン名	説明
ターゲットセルのインポート	.csvファイルの内容をターゲットセルスプレッドシートにイン ポートするには、このアイコンをクリックします。
ターゲットセルのエクスポー ト	ターゲットセルスプレッドシートの内容全体を.csvファイルに エクスポートするには、このアイコンをクリックします。
セルステータスの取得	ターゲットセルスプレッドシートのデータを更新するには、こ のアイコンをクリックします。

9 コンタクト履歴とレスポンストラッキング

- コンタクト履歴について
- コンタクト履歴とオーディエンスレベル
- 詳細コンタクト履歴
- コンタクト履歴テーブルへのエントリの書き込み
- コンタクト履歴への書き込みの無効化
- コンタクト履歴とレスポンス履歴の消去
- レスポンストラッキングについて
- レスポンスタイプ
- レスポンスカテゴリ
- 帰属方法

コンタクト履歴について

Campaignでは、「コンタクト履歴」とは、次の内容についてキャプチャされた情報のことです。

- どのようなオファーが送信されたか
- どの顧客(または、オーディエンスレベルに基づいてアカウントまたは世帯)に送信 されたか
- どのチャネルで送信されたか
- いつ送信されたか

たとえば、キャンペーンのターゲット顧客のリストは、キャンペーンのフローチャート内のコンタクトプロセス(コールリストやメールリストなど)の出力として生成されます。 各ターゲット顧客は、1つ以上のオファーに割り当てられているセルに所属します。 コンタクト履歴への記録が有効になっている状態で、コールリストプロセスまたはメールリストプロセスが本番モード(テストモードではなく)で実行されると、詳細データがCampaignシステムデータベース内の複数のテーブルに書き込まれます。

そして、これらのテーブルにコンタクト履歴が格納されます。コンタクト履歴には、フローチャート実行時に各セル内の各IDに付与されたオファーバージョン(パラメータ化されたオファー属性値を含む)と、コミュニケーションの受け取りが抑制されるコントロールセルのメンバが記録されます。

Campaignのコントロールセルは、常に検証コンタクトコントロール、または非コンタクトコントロールであるため、コントロールセルに属する顧客にはオファーは割り当てられず、コンタクトプロセス出力リストには含まれません(ただし、コンタクト履歴テーブルには書き込まれます)。

コンタクト履歴とオーディエンスレベル

Campaignは、システム管理者によって定義されている各オーディエンスレベルに対して、個々にコンタクト履歴と詳細コンタクト履歴を記録し、保持します。 各オーディエンスレベルには、Campaignシステムデータベースに独自の関連コンタクト履歴テーブルと詳細コンタクト履歴テーブルがあります。ただし、これらのテーブルは、データベース内の同じ物理テーブルにマッピングされていることもあります。

コンタクト履歴とオーディエンスレベルの詳細については、『*Campaign管理者ガイド*』を参照してださい。

詳細コンタクト履歴

1つのセル内のすべてのメンバが同様に処理される場合(つまり、すべてのメンバに同じオファーバージョンが提供される場合)、ベースコンタクト履歴が記録されます。 ただし、同じセル内の異なる個人が、それぞれ異なる数のオファーや異なるオファーバージョンを受け取った場合(同じセル内の各個人が別々のオファーバージョンを受け取ることができるようにオファーがカスタマイズされている場合)には、Campaignの詳細コンタクト履歴に、各個人が受け取った内容が詳しく記録されます。

詳細コンタクト履歴には、すべてのコントロール情報も記録され、その個人が検証コントロールグループに含まれていなかった場合、受け取った可能性のある特定のオファーも識別できます。 この情報により、リフトおよびROI計算のターゲットセル対コントロールセルの適切な分析と比較が可能になります。

詳細コンタクト履歴はすぐにサイズが大きくなりますが、非常に詳細なレスポンストラッキングを実行し、ターゲットとコントロールを分析するために必要となる完全なデータを提供します。

関連トピック

・詳細コンタクト履歴(UA_DtlContactHist)

コンタクト履歴テーブルへのエントリの書き込 み

コンタクトログオプションが有効になっている状態でフローチャートコンタクトプロセス(コールリストまたはメールリスト)が本番モードで実行された場合のみ、コンタクト履歴テーブルへの書き込みが行われます。 テスト実行では、コンタクト履歴テーブルへの書き込みは行われません。

適切な権限がある場合に、コンタクトプロセスの設定ウィンドウでコンタクト履歴への 書き込みを有効または無効にできます。

コンタクトプロセスを含むフローチャートでは、フローチャートの各本番実行でコンタクト履歴が1回だけ生成されます。 同じIDリストから複数のコンタクトを生成するには、IDリストのスナップショットを作成し、フローチャートの実行ごとにリストから読み取ります。 複数のコンタクトプロセスへの入力として同じIDリストを使用することもできます。

コンタクト履歴のログを有効にすると、コンタクト履歴に次の情報がキャプチャされます。

- コンタクトの日時(既定では、コンタクトプロセスが実行された日時)
- コンタクトプロセスで割り当てられているオファーバージョン(パラメータ化された オファー属性値を含む)
- 各IDに提供されたオファーバージョン
- ターゲットセルとコントールセルについて、オファーバージョン、セル、日時の一 意の各組み合わせをトラッキングするための処理コード

フローチャートコンタクトプロセスを本番実行すると、次のシステムテーブルに影響します。

- 処理履歴(UA Treatment)
- ベースコンタクト履歴(UA ContactHistory)
- 詳細コンタクト履歴(UA DtlContactHist)
- オファー履歴

コンタクト履歴に書き込まれるシステムテーブルの詳細については、『*Campaign管理* 者ガイド』を参照してください。

関連トピック

- ・コンタクト履歴への書き込みの無効化
- ・コンタクト履歴とレスポンス履歴の消去
- ・スナップショット
- ・オファーについて
- ・プロセス設定ダイアログからセルにオファーを割り当てるには

処理履歴(UA_Treatment)

フローチャートを本番モードで実行するたびに、処理履歴テーブル(UA_Treatment)に行が追加されます。 つまり、定期的に実行されるようにフローチャートをスケジュールしている場合、フローチャートが新しく実行されるたびに、セル(コンタクトセルまたはコントロールセル)単位の各オファーごとに新しい一連の処理が生成されます。Campaignは、1つの処理が生成されるたびに個別インスタンスとして記録すること

により、最も詳細なトラッキングを提供します。処理履歴は、ベースコンタクト履歴と共に使用され、完全なコンタクト履歴情報を保存できる非常に簡潔で効率的な方法です。 ベースコンタクト履歴テーブル(UA_ContactHistory)は、適切なオーディエンスのセルメンバシップ情報のみを記録しますが、処理履歴テーブル(UA_Treatment)には、各セルに対して行われた処理が記録されます。

各処理インスタンスはグローバルに一意な処理コードで識別され、この処理コードがレスポンストラッキングで使用され、特定の処理インスタンスへの直接帰属を示します。

コントロールが使用されると、処理履歴にもコントロールセルが記録されます。 ターゲットセルに提供されたオファーに関連する行は、ターゲット処理と呼ばれます。 コントロールセルがコンタクトプロセスでターゲットに割り当てられている場合、ターゲット処理もコントロール処理に関連付けられます。 各コントロール処理にも一意の処理コードが割り当てられます。ただし、そのコードは、検証コントロールメンバに発行されることはありません。 コントロール処理コードは、カスタムフローチャートロジックによりコントロールを識別するカスタムレスポンストラッキングのために生成されます。 コントロール処理コードが検出され、イベントと関連付けられることにより、レスポンスが特定のコントール処理インスタンスに完全に帰属します。

関連トピック

- 処理
- ・コントロールグループ

ベースコンタクト履歴(UA_ContactHistory)

ベースコンタクト履歴テーブルには、ターゲットセルおよびコントロールセルのコンタクトID、セル、およびフローチャート実行日時の各組み合わせに対して1行ずつ書き込まれます。

重複禁止セルメンバシップ

セルが重複禁止セルであり、各IDが1つのセルのみに所属している場合、各IDが1つのコンタクトプロセス内で処理される場合は、割り当てられているオファー数に関係なく、コンタクト履歴テーブル内では各IDに対して1行使用されます。 たとえば、低価値、中価値、および高価値のセグメントに対応するセルを定義し、一定期間において顧客はそのいずれかのセルにしか所属できない場合がこれに該当します。 「高価値」セグメントが同じコンタクトプロセス内で3つのオファーを受ける場合でも、ベースコンタクト履歴はセルメンバシップを記録するので、ベースコンタクト履歴には1行しか書き込まれません。

重複許可セルメンバシップ

ただし、個人が複数のセルに所属できる場合(たとえば、各ターゲットセルがそれぞれ 異なるルールに基づいてオファーを受け取り、顧客は、オファー対象にならないこと も、1つだけ受け取ることも、複数受け取ることもある場合)、各個人は、コンタクト履 歴テーブル内で、その個人がメンバであるセル数に対応する行数を使用します。 たとえば、 「この3か月で買い物をした顧客」と「この四半期に\$500以上使った顧客」の2つのセルを定義した場合、この両方のセルに該当する個人もいれば、1つのセルのみに該当する個人もいます。 個人が両方のセルのメンバである場合、コンタクトプロセスが実行されると、その個人についてベースコンタクト履歴には2つのエントリが書き込まれます。

ある個人が複数のターゲットセルに所属するため、コンタクト履歴テーブルに複数の行が書き込まれた場合でも、同じコンタクトプロセスで提供されるすべてのオファーは、1つの「パッケージ」、または邪魔なものと見なされます。 コンタクト履歴テーブル内の一意の「パッケージID」は、個人に対するある特定のコンタクトプロセスの特定の実行インスタンスによって書き込まれた行をひとまとめにするものです。 1人の個人または1つの世帯に対して複数の「邪魔なもの」が発生するのは、その個人または世帯が別々のコンタクトプロセスで複数のセルに所属する場合のみです。

コンタクト履歴への追加トラッキング項目の書き込み

追加トラッキング項目を作成して、ベースコンタクト履歴テーブルに追加することができます。 たとえば、処理テーブルの処理コード、またはオファー属性を追加トラッキング項目としてコンタクト履歴に入力することが必要になる場合があります。

ただし、ベースコンタクト履歴でキャプチャされるのはセルメンバシップであり、各ターゲットセルまたはコントロールセルはオーディエンスIDごとに1行ずつ書き込まれるため、ベースコンタクト履歴の追加トラッキング項目にオファーまたは処理データを入力した場合、各ターゲットセルまたはコントロールセルの最初の処理のみが書き込まれます。

例

セル	関連付けられているコ ントロールセル	セルに提供されるオファー
ターゲットセル1	コントロールセル1	オファーA、オファーB
ターゲットセル2	コントロールセル1	オファーC
コントロールセル1	-	-

ターゲットセル1とターゲットセル2に一覧のオファーを割り当てるコンタクトプロセスを含むフローチャートを本番実行した場合(コンタクト履歴への書き込み有効)、セル、提供されるオファー、および実行日時の各組み合わせに対して1つの処理が作成されます。 つまり、この例では6つの処理が作成されます。

処理	処理コード
ターゲットセル1オファーAの受け取り	Tr001
ターゲットセル1オファーBの受け取り	Tr002
コントロールセル1オファーAの受け取り	Tr003
コントロールセル1オファーBの受け取り	Tr004

処理	処理コード
ターゲットセル2オファーCの受け取り	Tr005
ー コントロールセル1オファーCの受け取り	Tr006

ベースコンタクト履歴の追加トラッキング項目として処理コードを追加した場合、各セルの最初のターゲット処理またはコントロール処理のみが書き込まれます。 したがって、この例では、各セルの最初の処理として3行のみベースコンタクト履歴に書き込まれます。

セル	処理コード
ターゲットセル1	Tr001
コントロールセル1	Tr003
ターゲットセル2	Tr005

このため、ベースコンタクト履歴テーブルでオファーレベルの属性をキャプチャすることは推奨されません。完全なコンタクト情報をキャプチャできるのは次の場合のみです。

- どのターゲットセルについても1つのオファーしか割り当てられていない
- 各コントロールセルが1つのターゲットセルにしか割り当てられていない

それ以外の場合は、最初の処理(またはコントロール処理)に関連付けられているデータのみが出力されます。 あるいは、データベースビューを使用して、UA_ContactHistoryシステムテーブルとUA_Treatmentシステムテーブルを結合することにより、オファーレベルの情報をフラット化し、そのデータにアクセスすることも可能です。 代替コンタクト履歴にこの情報を出力するという方法もあります。

☆ 詳細コンタクト履歴と代替コンタクト履歴では、動作が異なります。各処理に対して(各セルではなく)1行が書き込まれます。したがって、追加トラッキング項目としてオファー属性情報を出力すると、すべての処理について行が書き込まれるので、完全な処理情報を取得できます。

コンタクト履歴の更新

コンタクト履歴テーブルの新しいエントリは、既存エントリの後に追加されます。 **履 歴の**消去機能を使用して、選択したエントリを手動で消去できます。

関連トピック

• コンタクト履歴とレスポンス履歴の消去

詳細コンタクト履歴(UA_DtlContactHist)

詳細コンタクト履歴テーブルは、同じセル内の個人が1つのオファーのさまざまなバージョンを受け取るというシナリオでのみ作成されます。 たとえば、同じセル内のメンバが同じローンオファーを受け取るが、メンバAには5%金利のオファーが、メンバBには4%金利のオファーが提供されるようにカスタマイズされる場合などです。 詳細コンタクト履歴には、個人が受け取る各オファーバージョンに対して1行、加えて、受け取った可能性があるオファーバージョンに基づいて、各コントロールセルに対して1行が含まれます。

オファー履歴

オファー履歴は、本番で使用したオファーバージョンについての正確な情報をまとめて 保存する複数のシステムテーブルで構成されます。 バラメータ化されたオファー属性 値の組み合わせが一意である場合のみ、オファー履歴テーブルに新しい行が追加されま す。 それ以外の場合は、既存の行が参照されます。

コンタクト履歴テーブルの詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してだ さい。

コンタクト履歴への書き込みの無効化

コンタクト履歴の書き込みは無効にできますが、コンタクト履歴ログを無効にする 設定は推奨されません。 キャンペーンの本番実行時にコンタクト履歴を記録してい なければ、後で基となるデータに変更があった場合、この履歴を正確に再生成でき なくなります。

ただし、次の2つの方法でコンタクト履歴テーブルに書き込まずにコンタクトプロセス を実行できます。

- テスト実行
- 本番実行用ログオプションの無効化

テスト実行

コンタクトログオプションが有効になっている状態でフローチャートコンタクトプロセス(コールリストまたはメールリスト)が本番モードで実行された場合のみ、コンタクト履歴テーブルへの書き込みが行われます。 テスト実行では、コンタクト履歴テーブルへの書き込みは行われません。

関連トピック

- フローチャートの検証
- ・コンタクト履歴テーブルへのエントリの書き込み

ログオプションを無効にするには

各コンタクトプロセスは、本番実行中のコンタクト履歴のログを無効にするように設定できます。

- 1. コンタクト履歴のログを無効にするコンタクトプロセスをダブルクリックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. **[ログ]**タブをクリックします。 コンタクトトランザクションのログを設定するため のウィンドウが開きます。
- 3. コンタクト履歴にログが記録されないようにするには、[コンタクト履歴テーブルに記録]および[任意の保存先に記録]チェックボックスをオフにします。

オプションで[詳細オプション]をクリックして、[コンタクト履歴ログオプション] ウィンドウを表示することもできます。 このウィンドウには、コンタクト履歴に記録される情報に関するその他のコントロールが示されます。 詳細については、「コンタクトプロセス(メールリストまたはコールリスト)を設定するには」を参照してください。

4. **[OK]**をクリックします。 プロセス設定ダイアログが閉じ、変更が保存されます。 上記のオプションを再度有効にするまで、このコンタクトプロセスの実行時に、エントリはコンタクト履歴テーブルにもその他の保存先にも書込まれません。

コンタクト履歴とレスポンス履歴の消去

たとえば、本番実行を誤って実行したり、本番実行後にキャンペーンのキャンセルを決定した場合など、コンタクト履歴またはレスポンス履歴のレコードを消去することが必要になる場合があります。

プロンタクト履歴とレスポンス履歴を消去すると、データベースからこのデータが完全に削除されます。 消去されたコンタクト履歴とレスポンス履歴は復元できません。 後で復元が必要になる可能性がある場合は、履歴を消去する前にシステムテーブルデータベースをバックアップしておくようにしてください。

すべてのCampaignシステムテーブル間において参照整合性は常に保持されます。 すべてのコンタクト履歴テーブルは同時に書き込まれ、すべてのコンタクト履歴テーブルにおいてコンタクト履歴の消去も同時に行われます。 たとえば、削除したい処理テーブルエントリを参照しているエントリがベースまたは詳細コンタクト履歴テーブル内にあった場合、この処理テーブルエントリを削除することはできません。

コンタクト履歴を消去できるのは、そのユーザに必要な権限があり、そのコンタクト履歴に関連付けられているレスポンス履歴レコードがない場合のみです。 したがって、コンタクト履歴を消去する場合は、関連付けられているレスポンス履歴を消去する必要もあります。

通常の状況では、レスポンスが記録されているコンタクト履歴は削除しないことが 推奨されます。 ただし、これらのコンタクト履歴を削除する必要がある場合は、関 連付けられているすべてのコンタクト履歴レコードとレスポンス履歴レコードを消 去するか、レスポンス履歴レコードのみを消去するか選択できます。

関連トピック

・実行履歴オプションについて

コンタクト履歴およびレスポンス履歴を消去するには

- コンタクト履歴を消去すると、コンタクト履歴レコードがシステムテーブルから完全に削除されます。 このデータは復元できません。
- 1. 編集モードのフローチャートで、履歴を消去するコンタクトプロセスをダブルク リックします。 プロセス設定ダイアログが開きます。
- 2. **[ログ]**タブをクリックします。 コンタクトトランザクションのログを設定するため のウィンドウが開きます。
- 3. [履歴の消去]をクリックします。 [コンタクト履歴の消去]ウィンドウが開きます。
- 4. 履歴の消去に関する適切なオプション (すべてのエントリ、選択した日付範囲内または特定のフローチャート実行内のすべてのエントリ、実行日時で特定されるすべてのエントリ)を選択します。
- 5. コンタクト履歴の消去に関するオプションを選択したら、[OK]をクリックします。
 - 消去するよう選択したコンタクト履歴のエントリにレスポンス履歴レコードが存在しない場合は、確認メッセージが表示されます。
 - 消去することを選択したコンタクト履歴のエントリにレスポンス履歴レコードが存在する場合は、[履歴の消去オプション]ウィンドウが開きます。
 - 次のいずれかのオプションを選択します。
 - 関連するすべてのコンタクト履歴およびレスポンス履歴のレコードを消去する 指定したエントリのコンタクト履歴とレスポンス履歴の両方を消去します。
 - 関連するレスポンス履歴のレコードのみを消去する 指定したエントリのレスポンス履歴のみ消去します。 コンタクト履歴レコードは消去されません。
 - キャンセル コンタクト履歴もレスポンス履歴も消去しません。
- 6. 選択した操作がCampaignによって実行されて終了すると、指定したレコードが消去 されたことを示す確認メッセージが表示されます。
- 7. **[OK]**をクリックして確認メッセージを閉じると、プロセス設定ダイアログに戻ります。
- 8. [OK]をクリックして、プロセス設定ダイアログを終了します。

レスポンストラッキングについて

Campaignでは、「レスポンストラッキング」とは、個人が行ったイベントまたはアクションが、提供されたオファーへのレスポンスなのかどうかを判断するプロセスのことです。 レスポンストラッキングには、コンタクトされていない個人に対しても、彼らが目的のアクションを行っているかどうかを検証するため、検証コントロールグループ内の個人動作のトラッキングも含まれます。

Campaignは、キャンペーンへのレスポンスについて次の情報をキャプチャします。

- だれがレスポンスしたのか 動作がトラッキング対象レスポンスタイプと一致しているオーディエンスエンティティ(個人の顧客または世帯など)のリスト。
- レスポンダが実行したアクションおよびこれらのアクションの実行日時 たとえば、Webサイトのクリックスルー、購入、または特定項目の購入などのアクション。
- どのオファー処理にレスポンスしたか Campaign生成コード(キャンペーン、オファー、セル、または処理コード)、およびレスポンダによって返されたNULL値以外のオファー属性がレスポンストラッキングのために照合されます。
- レスポンスのカウント方法 Campaign生成コードまたはNULL値以外のオファー属性の照合に基づき、レスポンスがどのようにキャンペーンに帰属したか、レスポンダが元のターゲットグループまたはコントロールグループに属していたかどうか、およびレスポンスが有効期限前に受信されたかどうかを判断します。

関連トピック

- ・レスポンスタイプ
- レスポンストラッキングの実行
- 帰属方法

レスポンストラッキングの実行

レスポンストラッキングは、選択または書込みプロセスを介してアクションテーブルから入力を取得するレスポンスプロセスを含むフローチャートを作成することで、実行します。 アクションテーブルは、アクションまたはイベントがレスポンスとしてコンタクト処理またはコントロール処理に帰属するかどうかを評価する、すべてのアクションまたはイベントのレコードを含むファイルまたはテーブルです。

レスポンスコード、またはアクションテーブル内のその他の標準またはカスタムオファー属性の組み合わせへの照合に基づいて、オファーに対するレスポンスとみなすIDを処理、評価、および出力するようにレスポンスプロセスを設定します。 レスポンスプロセス内でマッピングされるCampaign生成コード(キャンペーン、オファー、セルまたは処理コード)は、「対象のレスポンスコード」とみなされます。 レスポンスプロセス内でマッピングされるその他のオファー属性(標準またはカスタム)は「対象のレスポンス属性」とみなされます。 たとえば、推定レスポンスをトラッキングするのにオファー属性として「関連製品」項目を使用できます。 レスポンス処理ロジックでは、対象のレスポンスコードと対象のレスポンス属性の両方を使って、直接レスポンスと推定レスポンスを決定します。

レスポンスプロセスを実行すると、これらのレスポンスが、レスポンス履歴システムテーブル(UA_ResponseHistory、または各オーディエンスレベルにおける対応テーブル) に書き込まれます。 コンタクト履歴と同様、トラッキングする各オーディエンスレベルに対してそれぞれレスポンス履歴テーブルが存在します。

レスポンス履歴でキャプチャされるデータは、Campaignでパフォーマンスレポートを 使用する分析で使用されます。

Campaignは、レスポンストラッキングに関連するデータとして、次のデータを自動的 に記録します。

- レスポンスが直接レスポンスか(1つ以上のCampaign生成コードが返されている)、 推定レスポンスか(レスポンスコードが返されていない)
- レスポンスの発生が特定のオファーバージョンの終了日の前か後か
- レスポンダがキャンペーンのターゲットセルに所属していたか、コントロールセル に所属していたか
- レスポンスが一意であるか重複しているか
- 帰属方法(最適、断片的、複数)
- レスポンスの属性であるレスポンスタイプ(アクション)

関連トピック

- ・レスポンスカテゴリ
- ・レスポンストラッキングの日付範囲
- 帰属方法
- ・レスポンスタイプ

複数のレスポンストラッキングフローチャートの使用

社内ですべてのキャンペーンに対して1つのレスポンストラッキングフローチャートを使用することもできます。 1つのアクションテーブルのみを使用する場合、システム管理者は、通常、そのアクションテーブルにデータを書き込むようにセッションフローチャートをセットアップします。

ただし、Campaignの実装によっては、個別にレスポンストラッキングフローチャートを関連付ける場合など、複数のアクションテーブルの使用が必要となる場合があります。

次のような場合、複数のレスポンストラッキングフローチャートを使用します。

- オーディエンスレベルごとにレスポンストラッキングを行う
- リアルタイム処理要件とバッチ処理要件がある
- 大量のデータの重複を避けたい
- 状況に応じて固有のデータをハードコードする
- カスタムレスポンス処理ロジックが必要

オーディエンスレベルごとにレスポンストラッキングを行う

(必須)レスポンスの受信とトラッキングを行う各オーディエンスレベルに対して、それぞれレスポンストラッキングフローチャートが必要です。 レスポンスプロセスは着信セルのオーディエンスレベルで動作し、自動的にそのオーディエンスレベルの適切なレスポンス履歴テーブルへの書き込みを行います。 2つの異なるオーディエンスレベル、たとえば顧客と世帯に対してレスポンストラッキングを行う場合、2つのレスポンスプロセスが必要となり、通常、これらは2つのレスポンストラッキングフローチャートに実装されます。

リアルタイム処理要件とバッチ処理要件がある

(必須)レスポンストラッキングセッションの大部分がバッチフローチャートであり、定期的にアクションテーブルに入力されるイベントを処理します(たとえば、顧客の買い物データを夜間に処理するなど)。 レスポンストラッキングの実行頻度は、アクションテーブルへの入力に使用されるトランザクションデータの可用性に依存します。

たとえば、異なるチャネル(Webとダイレクトメール)からのレスポンスを処理する場合、着信トランザクションデータの可用性が各チャネルによって異なるので、個々にレスポンス処理セッションが必要になる場合があります。

大量のデータの重複を避けたい

(オプション)大量のトランザクションデータ(1日に何百万もの販売トランザクションが発生する場合など)を評価しなければならない場合、アクションテーブルに対してETL (抽出、加工、書き込み)を行うのではなく、ソースデータに対して直接マッピングを行うレスポンストラッキングフローチャートを構築することが必要になる場合があります。

たとえば、書込みプロセスが電子商取引システムの購入トランザクション履歴テーブルから直接トランザクションをプルし(特定の日付範囲に基づいて)、レスポンスプロセスで、この書込みプロセスから直接このテーブル内の列にマッピングを行うレスポンストラッキングフローチャートを構築できます。

状況に応じて固有のデータをハードコードする

(オプション)異なる複数のチャネルなど、状況に応じて固有データ(レスポンスタイプなど)をハードコードすることが必要になる場合があります。 たとえば、チャネル(「コールセンター」など)固有の特定のレスポンスタイプ(「照会」など)をトラッキングしたい場合、これらのレスポンスをフィルタするユーザ定義項目を作成し、レスポンス処理フローチャートでこの項目を使用してコールセンターデータベースからすべての照会をプルできます。 1つのアクションテーブルにデータを書き込むよりも、ユーザ定義項目を使用してレスポンストラッキングに必要なデータを作成し、ソースから直接データをプルする方が便利な場合があります。

カスタムレスポンス処理ロジックが必要

(オプション) レスポンスの帰属先を判断するための独自のルールを記述する必要がある場合、カスタムレスポンストラッキングロジックを実装するレスポンストラッキングフローチャートを作成できます。 たとえば、「3つ購入で1つ無料」のオファーへのレスポンダを識別する必要がある場合、個人が対象レスポンダであるかどうかを判断する複数のトランザクションが必要になります。 対象個人を検出した上で、レスポンスプロセスにそれらを入力し、処理コードと適切なレスポンスタイプを使用してレスポンスを記録することができます。

マルチパートオファーコードを使用したレスポンストラッキング

マルチパートオファーコード(つまり、複数のコードで構成される1つのオファーコード)で構成される1つのユーザ定義項目を使用してレスポンストラッキングを行うことができます。 オファーコードのすべてのパートを、パーティションレベルのofferCodeDelimiter設定プロパティを使用して連結する必要があります。 次の例では、既定の区切り記号"-"を使用して連結された2つのパートで構成されるMultipleOfferCodeというユーザ定義項目が作成されます。

MultipleOfferCode = string_concat(OfferCode1, string_concat("-",
OfferCode2))

操作項目候補としてユーザ定義項目を使用するようにレスポンスプロセスを設定している場合、そのユーザ定義項目は、マルチパートコード内の各オファーコードのオファー/処理属性と一致する必要があります。

レスポンストラッキングの日付範囲

レスポンストラッキングは、有効なオファー期間内(つまり、開始日以降および終了日前)にレスポンスが行われたかどうか、およびレスポンスがすべてのオファーにおける有効期間外であるかどうかも記録します。Campaignは、オファー終了日後のユーザ設定可能期間内に遅れて発生したレスポンスもトラッキングし、正式な終了日以降にレスポンスされたオファーについて、その頻度に関するデータを提供します。

Campaignでのレスポンストラッキングの日付範囲はグローバルに設定されており、すべてのキャンペーンオファーに適用されます。 システム管理者は、レスポンスのトラッキングを行うオファー終了日後の日数を設定します。

この日付設定は自動的に、イベントを照合できる処理インスタンスを制限します。 日付範囲を狭くすればするほど、処理テーブルから照合のために返されるインスタンスの数が少なくなるので、パフォーマンスが向上します。

日付範囲の設定の詳細については、『Campaign管理者ガイド』のレスポンスを記録するキャンペーン終了後の日数設定についての説明を参照してください。

コントロールのレスポンストラッキング

コントロールグループのレスポンスは、レスポンスプロセスを使用して、オファーレスポンスと同時にトラッキングされます。

コントロールセルのレスポンスは、最初にレスポンスコードが破棄される以外、推定レスポンスと同じように処理されます。 コントロールセルメンバからのレスポンスに対しては、レスポンストラッキングコードが無視され、対象の属性(たとえば、関連製品)が、コントロール処理インスタンスに対して照合されます。Campaignは、すべてのコントロール処理に対して生成されるグローバルに一意な内部処理コードを使用します。ただし、コントロール処理コードは発信されません。コントロール処理は常に非コンタクトの検証コントロールです。

ターゲット処理インスタンスとコントロール処理インスタンスの両方が同じイベントの帰属先となる可能性があります。 たとえば、ある顧客が婦人用品の購入に対する10%割引のオファーのターゲットとなり、同時に、同じ顧客がその店全体における購入を監視するための検証コントロールグループのメンバでもある場合、この顧客がそのクーポンを使って買い物をした場合、そのイベントは、ターゲット処理インスタンス(クーポンの処理コードを使用)とコントロール処理インスタンスの両方と関連付けられます。また、コントロール処理インスタンスも、ターゲット処理インスタンスと同様、有効期間内のものか終了日後のものかがマーキングされます。これにより、ターゲットセル内の遅延アクティビティに対しても有効なコントロール比較が可能になります。

コントロールセルレスポンスには、最適な帰属と断片的帰属は使用されません。常に複数帰属が使用されます。 つまり、レスポンダがあるオファーのコントロールセルに所属する場合、そのアクションが複数のコントロール処理において推定レスポンスとして判断されれば、これら一致したすべてのコントロール処理がそのレスポンスに帰属します。

関連トピック

・コントロールグループ

カスタマイズされたオファーに対するレスポンストラッキング

データ主導のカスタマイズされたオファー項目やユーザ定義またはパラメータ化されたオファー項目を使用してさまざまなオファーバーションを生成する場合、このようなカスタマイズされたオファーに対するレスポンスを正しく帰属するには、アクションテーブルにパラメータ化されたオファー属性項目を表す項目が含まれている必要があります。 これらの項目が対象の属性としてレスポンスプロセスでマッピングされて書き込まれると、これらの項目を使用して、レスポンスをオファーバージョンまたは処理インスタンスと照合できます。 その処理に帰属するには、これら「対象の属性」の値があるレスポンスが、その個人のオファーバージョン履歴に記録されている値と完全一致する必要があります。

たとえば、出発空港と到着空港でカスタマイズされたフライトオファーを受けている場合、アクションテーブルには「出発空港」と「到着空港」の項目が含まれている必要があります。 各フライト購入トランザクションはこれらの値を含み、レスポンストラッキングは、ある個人によって購入された特定のフライトを、その個人に対して提供されたオファーバージョンと照合できるようになります。 これらの項目は、コントロールグループメンバに対してオファーが提供されたフライトを購入したかどうかを確認するため、推定レスポンスのトラッキングにも使用できます。

関連トピック

- オファー属性
- ・オファーバージョン

レスポンスタイプ

レスポンスタイプとは、クリックスルー、照会、購入、アクティブ化、使用など、トラッキングしている特定のアクションのことです。 各レスポンスタイプは、一意のレスポンスコードによって表されます。 レスポンスタイプとレスポンスコードは、Campaignレスポンスタイプシステムテーブルでグローバルに定義され、すべてのオファーに対して使用できます。ただし、すべてのレスポンスタイプがすべてのオファーと関連するわけではありません。 たとえば、クリックスルーは、ダイレクトメールオファーのレスポンスタイプとしては通常対象外となります。

イベントがアクションテーブルに書き込まれる際、各イベント行は1つのレスポンスタイプにのみ対応します。 アクションのレスポンスタイプ項目が空(NULL)の場合、既定のレスポンスタイプ(「不明」)としてトラッキングされます。

1つのイベントを複数のレスポンスタイプと関連付ける必要がある場合、各レスポンスタイプに1行として、複数の行をアクションテーブルに書き込む必要があります。 たとえば、ある金融機関が、新しいクレジットカードについて、アクティブ化後の最初の月の間、「買い物100」、「買い物500」、「買い物1000」の3つのレスポンスタイプで買い物使用レベルのトラッキングを行っている場合、\$500の買い物は、「買い物100」と「買い物500」両方のレスポンスタイプの条件を満たしているため、これら両方のレスポンスタイプのイベントが生成される可能性があります。

1つのレスポンスイベントを構成する複雑な一連のトランザクションを検出する必要がある場合、対象トランザクションを探す監視セッションが別に必要です。トランザクションを検出したら、アクションテーブルにイベントを送信します。 たとえば、小売業者の販促キャンペーンで、12月に3枚のDVDを購入した顧客に特典を提供する場合、各顧客のDVDの購入枚数を計算し、購入枚数が3枚以上の顧客を選択し、これらの顧客を特別なレスポンスタイプ(「買い物3DVD」など)でアクションテーブルに書き込みます。

レスポンスタイプの詳細については、『*Campaign管理者ガイド*』を参照してください。

レスポンスカテゴリ

Campaignでは、レスポンスは次の2つのカテゴリに分類されます。

- 直接レスポンス オファーと共に送られた1つ以上のCampaign生成トラッキングコードが返され、返された対象の属性が一致している必要があります。
- 推定レスポンス トラッキングコードは返されなかったが、レスポンストラッキング用に使用されているオファー属性が少なくとも1つ返され、それが一致しているレスポンスです。 検証コントロールグループからのレスポンスは常に推定レスポンスになります。

関連トピック

- 直接レスポンス
- 推定レスポンス

直接レスポンス

次の場合、レスポンスは直接レスポンスとみなされます。

レスポンダが、Campaignによって生成されたターゲット処理インスタンスの1つ以上と完全一致する少なくとも1つのCampaign生成コード(キャンペーン、セル、オファー、または処理コード)を返している。

かつ

• 返される「対象の属性」(トラッキング用レスポンスプロセスでマッピングされた標準またはカスタムのオファー属性)が処理内の属性値と完全一致している。

たとえば、処理コードが対象のレスポンスコードであり、「レスポンスチャネル」が対象の属性である場合、処理コード値が「XXX123」で、レスポンスチャネルが「小売り」の着信レスポンスは、それぞれの値が「XXX123」と「Web」の処理に対しては、直接一致とみさなれません。

対象の属性値がNULLのレスポンスは、そのオファー属性を持つ処理と照合できません。 たとえば、「利率」値がないレスポンスは、オファー属性として利率を含むオファーテンプレートから作成されたオファーとは照合できません。

ただし、処理内にない対象の属性に対して値を持つレスポンスは、照合の邪魔になりません。 たとえば、送料無料オファーが「利率」オファー属性のないオファーテンプレートから生成され、「利率」が対象の属性である場合、Campaignが送料無料オファーに関連付けられている処理との照合を行う場合、着信レスポンスの「利率」属性値は意味を持ちません。

レスポンストラッキングは、レスポンスが有効なオファー期間内(つまり、開始日以降および終了日前)に行われたかどうか、またはレスポンスが有効な日付範囲外かどうかをトラッキングします。Campaignは、オファー終了日後のユーザ設定可能期間内に遅れて発生したレスポンスもトラッキングします。

レスポンストラッキングでは、直接レスポンスが、最初にコンタクトしたグループ、つまりターゲットセル内にあったレスポンダからのものかどうかも識別します。

この方法はターゲットグループから来るレスポンス数を把握するのに(特に、高価値顧客の獲得を狙っている場合に)役立ちます。 これらの値は、元々のターゲットグループからいくつの直接レスポンスがあったか、また、いくつのバイラルレスポンスがあったかを確認できるように、パフォーマンスレポートでは別々に記載されます。

直接レスポンスは、完全一致または不完全一致のどちらかになります。

関連トピック

- 直接完全一致
- 直接不完全一致

直接完全一致

レスポンスは、Campaignが帰属する1つのターゲット処理インスタンスを一意に識別できる場合、直接完全一致とみなされます。

☆ 処理コードが返されればCampaignは常に処理インスタンスを一意に識別できるので、トラッキング用にはCampaign生成処理コードの使用をお勧めします。

たとえば、コンタクトフローチャートから生成される処理コードをオファー内のクーポンコードとして使用し、オファーのターゲットセル内のレスポンダによって処理コードが戻された場合、レスポンスはそのオファーの直接完全一致となります。

対象のトラッキングコードまたは対象の属性が複数受信される場合、処理インスタンスが帰属しているとみなすには、すべてのコードと属性値が完全一致する必要があります。 つまり、レスポンダがオファーコード、処理コード、およびNULL値以外のオファー属性を返す場合、すべてがその処理内のコードとオファー属性値に完全一致する必要があります。

直接不完全一致

Campaignが処理インスタンスを一意に識別できず、返されるトラッキングコードが複数のターゲット処理インスタンスと一致する場合、レスポンスは直接不完全一致とみなされます。

このレスポンスが帰属するターゲット処理インスタンスを絞り込むために、いずれかのターゲット処理インスタンスがレスポンダにコンタクトしていれば、レスポンダにコンタクトしなかった処理インスタンスがCampaignによって破棄されます。 レスポンダにコンタクトしたターゲット処理インスタンスがなかった場合、すべての処理インスタンスが保持され、すべてがバイラルレスポンスに帰属します。

たとえば、高価値セグメント内の顧客が、高価値顧客と低価値顧客両方に提供されたキャンペーンからのオファーを受け取ってオファーコードを返した場合、このコードは、まず2つのターゲット処理インスタンス(高価値セルの処理インスタンスと低価値セルの処理インスタンス)に一致します。 このレスポンストラッキングルールを適用した場合、実際は、高価値セルの処理インスタンスがこのレスポンダをターゲットとしており、低価値セルの処理インスタンスはこのレスポンダをターゲットとしていなかったため、低価値セルの処理インスタンスは破棄されます。 高価値顧客グループに関連付けられている処理インスタンスのみがこのレスポンスに帰属します。

また、レスポンス日が、処理インスタンスの有効期間内であった場合、有効期間内にない処理インスタンスはすべて破棄されます。

たとえば、ある顧客が同じキャンペーンの1月のインスタンスと2月のインスタンスの両方でコンタクトを受け、オファーコードを返した場合、2つのターゲット処理インスタンス(1月と2月の処理インスタンス)と一致します。 各オファーバージョンが、発行された月の月末を有効期限としている場合、2月のレスポンスがあるため、その時点で有効期限が過ぎている1月の処理インスタンスが破棄されます。 この場合、2月の処理インスタンスのみがこのレスポンスに帰属します。

レスポンストラッキングルールが適用され、無効なターゲット処理インスタンスがすべて破棄された後、Campaignは、複数の帰属方法を使用して、残りの処理インスタンスへの帰属を計算します。

関連トピック

• 帰属方法

推定レスポンス

レスポンスは、次の条件が満たされる場合、推定レスポンスとみなされます。

- Campaign生成トラッキングコード(キャンペーン、セル、オファー、または処理 コード)が返されなかった
- レスポンダがターゲットセルまたはコントロールセルのいずれかに所属している
- レスポンストラッキングで使用されるオファー属性の少なくとも1つが返された
- 返されたオファー属性のすべてが一致している

対象の属性値がNULLのレスポンスは、そのオファー属性を持つ処理と照合できません。 たとえば、「利率」値がないレスポンスは、オファー属性として利率を含むオファーテンプレートから作成されたオファーとは照合できません。

ただし、処理内にない対象の属性に対して値を持つレスポンスは、照合の邪魔になりません。 たとえば、送料無料オファーが「利率」オファー属性のないオファーテンプレートから生成され、「利率」が対象の属性である場合、Campaignが送料無料オファーに関連付けられている処理との照合を行う場合、着信レスポンスの「利率」属性値は意味を持ちません。

また、レスポンスが推定レスポンスとみなされるためには、レスポンダがコンタクトを受けている必要があります(つまり、ターゲットセル、またはコンタクトを受けたグループに所属していたことが必要になります)。

たとえば、顧客に対して洗濯用洗剤の\$1割引クーポンが送られ、その顧客が洗濯用洗剤を購入した場合(そのクーポンを使用しなかった場合も含めて)、Campaignは、このレスポンスをそのターゲット処理インスタンスに対するレスポンスであると推定します。

関連トピック

・コントロールのレスポンストラッキング

コントロールグループからの推定レスポンス

コントロールグループメンバ(Campaignでは常に検証コントロール)からのレスポンスは、すべて推定レスポンスになります。 推定レスポンスの照合が、検証コントロールグループメンバからのレスポンスの帰属を決定する唯一の方法になります。

コントロールグループのメンバは、コミュニケーションを受けることはないため、返すトラッキングコードはありません。

レスポンストラッキングは、コントロールグループのメンバを監視し、オファーを受け取らなかった状態で目的のアクションを行ったかどうかを確認します。 たとえば、当座預金口座を開設していない顧客のグループを当座預金オファーのターゲットとするキャンペーンがあるとします。 コントロールグループのメンバは、当座預金オファーと同じ期間内に、当座預金口座を開設したかどうかを確認するためにトラッキングされます。

すべての着信イベントが評価され、コントロール処理インスタンスに対する推定レスポンスではないかどうか確認されます。 レスポンスコードがあった場合はすべて破棄され、残った対象の属性が、レスポンス帰属先を決定するため、コントロール処理インスタンスに対して評価されます。

帰属方法

Campaignは、どのレスポンスがオファーに帰属するかを判断する方法として、次の3つの方法をサポートしています。

- 最適な一致
- 断片的一致
- 複数一致

これら3つのレスポンス帰属方法はすべて同時に使用され、レスポンス履歴の一部として記録されます。 キャンペーンおよびオファーのパフォーマンスを評価するために、さまざまなパフォーマンスレポートで、これらの方法を1つ、2つ、またはすべて選択できます。

レスポンス帰属は、処理インスタンスがレスポンダにコンタクトしていない、または ターゲットインスタンスの有効期限が切れているかのいずれかの理由で、無効なレスポ ンスが破棄された後、残ったターゲット処理インスタンスで実行されます。

たとえば、あるターゲットセル内のレスポンダが3つのオファーを提供され、1つのセルコードを返した場合、処理インスタンスを識別することはできません。 最適な一致帰属は、3つのオファーのうちの1つを選択して、完全帰属となります。断片的一致帰属は、3つのオファーそれぞれに1/3ずつ帰属を付与します。また、複数一致帰属は、そのレスポンスに対して3つのオファーすべてに完全帰属を付与します。

最適な一致

最適な一致帰属では、レスポンスに対して1つのターゲット処理インスタンスのみが完全帰属となり、その他の一致処理インスタンスはゼロ帰属になります。 1つのレスポンスについて複数の処理インスタンスが一致する場合、Campaignは、最適の一致として最も新しいコンタクト日付の処理インスタンスを選択します。 同じコンタクト日時の処理インスタンスが複数ある場合、Campaignは任意に1つを選択して完全帰属とします。

☆ 同じコンタクト日時で複数の処理インスタンスある場合、毎回同じインスタンスが 帰属しますが、Campaignで特定の処理インスタンスが確実に選択されるわけではありません。

断片的一致

断片的一致帰属では、n個の一致処理インスタンスのすべてが、全帰属スコアの合計が1になるように、レスポンスに対して1/nの帰属を取得します。

複数一致

複数一致帰属では、n個の一致処理インスタンスのすべてがレスポンスに対して完全帰属となります。 この帰属方法では、処理に対して過度に帰属が起こる可能性があるので、使用には注意が必要です。 コントロールグループは、常に複数帰属を使用してトラッキングされます。 コントロールグループのメンバからのレスポンスはすべて完全帰属となります。

10 保存オブジェクト

- 保存オブジェクトについて
- ユーザ定義項目について
- ユーザ変数について
- カスタムマクロについて
- テンプレートについて
- テーブルカタログについて

保存オブジェクトについて

頻繁に使用するキャンペーンコンポーネントがある場合、これらを設計した後、保存オブジェクトとしてこれらを保存しておく必要があります。 フローチャート間および キャンペーン間で保存オブジェクトを再利用すると、時間の節約になり、キャンペーン間で一貫性を保つことができます。

Campaignの保存オブジェクトタイプは次のとおりです。

- ・ ユーザ定義項目
- ユーザ変数
- カスタムマクロ
- テンプレート
- テーブルカタログ

関連トピック

- ・ユーザ定義項目について
- ユーザ変数について
- ・カスタムマクロについて
- ・テンプレートについて
- ・テーブルカタログについて

ユーザ定義項目について

ユーザ定義項目はデータソースに存在しない変数で、複数のデータソースにまたがっている可能性もある、1つ以上の既存項目から作成されます。 多くのプロセスの設定ウィンドウに[ユーザ定義項目]ボタンがあり、このボタンを使用して、クエリ、セグメント化、ソート、計算、またはテーブルへの出力を行う新しい変数を作成できます。

ユーザ定義項目を作成する際に[固定する]オプションを有効にすることにより、作成するユーザ定義項目を後続のプロセスででも明示的に使用できるように設定できます。

一般的に、プロセスで使用できるユーザ定義項目は[ユーザ定義項目]フォルダに含まれます。 ユーザ定義項目は、そのユーザ定義項目が作成されたプロセスでしか使用できません。 プロセスでユーザ定義項目を作成していない場合、[ユーザ定義項目]フォルダは表示されません。

後続プロセスでない別のプロセスでユーザ定義項目を使用するには、ユーザ定義項目式を[ユーザ定義項目式]リストに保存します。 [ユーザ定義項目式]リストに含まれるユーザ定義項目は、すべてのプロセスおよびすべてのフローチャートで使用できます。

ユーザ定義項目の作成

ユーザ定義項目をサポートするプロセスの設定ウィンドウでユーザ定義項目を作成できます。

プロセス設定ダイアログで選択されているテーブル内の項目のみ、ユーザ定義項目式に 使用できます。 目的のテーブルが表示されていない場合、そのテーブルがソーステー ブルとして選択されていることを確認してください。

関連トピック

- ・ユーザ定義項目を作成するには
- ・既存のユーザ定義項目から、新規のユーザ定義項目を作成するには
- ・カスタムマクロを使用してユーザ定義項目を作成するには

ユーザ定義項目の命名制約

ユーザ定義項目の命名制約は次のとおりです。

- ユーザ定義項目の名前は、次の名前と同じにはできません。
 - データベースキーワード(INSERT, UPDATE, DELETEやWHEREなど)
 - マッピングされたデータベーステーブル内の項目
- YesまたはNoの単語も使用できません。

ユーザ定義項目の命名制約に準拠していない場合、ユーザ定義項目を呼び出すと、データベースエラーや切断が発生する可能性があります。

☆ ユーザ定義項目名には、使用できる文字の制約もあります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。

ユーザ定義項目を作成するには

1. ユーザ定義項目をサポートするプロセスの設定ウィンドウで、[ユーザ定義項目]をクリックします。

[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。

2. 「項目名」項目に、新しいユーザ定義項目の名前を入力します。

このプロセスで、過去に作成されたすべてのユーザ定義項目が、[項目名]ドロップ ダウンリストに表示されます。 新規ユーザ定義項目を作成するには、別の名前を入 力します。

- 3. この項目に対して計算された値を保存して渡せるようにするには、[固定する] チェックボックスをオンにします。
- 4. ユーザ定義項目の式を[式]テキストボックスに直接入力するか、[入力サポート]をクリックして、入力サポートを使用します。 または、[条件項目]リストに表示される項目から項目名を選択し、[< -使用]をクリックして、項目名を[式]テキストボックスに挿入します。

ユーザ定義項目を、NULL値に定義できます。 Campaignマクロでユーザ定義項目を使用できるようにするには、NULLを使用してスナップショットにNULL値を返すか、NULL STRINGを使用して文字列データタイプでNULL値を返します。

ユーザ定義項目の文字列を、定数として入力できます。 文字列を使用する場合は、 二重引用符で囲む必要があります。 たとえば、「my string」などです。 数値文字 列には、引用符は必要ありません。

5. (オプション)[**構文チェック**]をクリックして、入力したユーザ定義項目の式の構文を 検証します。

問題がある場合はエラーメッセージが表示され、構文が正しい場合は、「構文 チェックはOKです」と表示されます。

6. **[OK]**をクリックして、新しいユーザ定義項目を保存し、プロセス設定ダイアログに戻ります。

既存のユーザ定義項目から、新規のユーザ定義項目を作成するには

 ユーザ定義項目をサポートするプロセスの設定ウィンドウで、[ユーザ定義項目]を クリックします。

[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。

2. [項目名]ドロップダウンリストから、新しいユーザ定義項目の作成に使用する、既存のユーザ定義項目を選択します。

選択したユーザ定義項目が、[式]領域に表示されます。

- 3. 既存のユーザ定義項目の名前を、新規ユーザ定義項目に付ける名前に変更します。
 - ↓ ユーザ定義項目の名前として「Yes」および「No」は使用できません。これら を名前に使用した場合、そのユーザ定義項目が呼び出されたときに、データベー スへの接続が切断されます。
- 4. 必要に応じて、ユーザ定義項目の式を編集します。
- 5. **[OK]**をクリックして、新しいユーザ定義項目を保存し、プロセス設定ダイアログに 戻ります。

カスタムマクロを使用してユーザ定義項目を作成するには

1. ユーザ定義項目をサポートするプロセスで、[ユーザ定義項目]をクリックします。

[ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。

- 2. [ユーザ定義項目の作成]ウィンドウで[入力サポート]をクリックします。 カスタムマクロのリストが[入力サポート]に表示されます。
- 3. リスト内のマクロをダブルクリックして選択します。 マクロの宣言と説明が表示され、マクロ自体は[入力サポート]ウィンドウに挿入されます。
- 4. [条件項目]リストから適切な項目を選択して、式を完成させます。
- 5. **[OK]** をクリックして、新しいユーザ定義項目を保存し、プロセス設定ダイアログに戻ります。

ユーザ定義項目の保存

ユーザ定義項目は、そのユーザ定義項目が作成されたプロセスと、後続のプロセスでしか使用できません。 たとえば、あるプロセスで、「Pct_Usage」というユーザ定義項目を次の式で定義した場合:

(Curr_bal / Credit_limit) * 100

Pct_Usageは他のプロセスでは使用できません([固定する]を有効にした場合は、直後のプロセスでも使用できます)。

ただし、他のクエリを保存するのと同じように、ユーザ定義項目を保存することができます。 ユーザ定義項目の定義を[ユーザ定義項目式]リストに保存し、名前を指定できます(たとえば「Pct_of_limit_used」)。 後で、同じユーザ定義項目を、同じフローチャートまたは別のフローチャート内の別のプロセスで使用する場合に、最初から作成し直さないで、 [ユーザ定義項目式]リストから「Pct_of_limit_used」を選択し、ユーザ定義項目式を挿入することができます。

ユーザ定義項目を保存するには

- 1. ユーザ定義項目をサポートするプロセスで、保存する新規ユーザ定義項目を作成します。
- [ユーザ定義項目式]をクリックします。
 [式の保存/呼び出し]ダイアログが開きます。
- 3. [現在の式を保存する] オプションを選択します。
- 4. **[OK]**をクリックします。

[式の保存]ウィンドウが開きます。このウィンドウでは、選択されたユーザ定義項目を保存するフォルダ、セキュリティポリシー(該当する場合)、およびユーザ定義項目に関連するメモを指定します。

5. [保存]をクリックします。

☆ 既存のユーザ定義項目を保存するには、[項目名]ドロップダウンリストからユーザ定義項目名を選択します。 ユーザ定義項目の式が[式]領域に表示されたら、[保存された式]をクリックします。

ユーザ定義項目式を使用するには

- 1. ユーザ項目をサポートするプロセスで[ユーザ項目]をクリックするか、[ツール] > [ユーザ定義項目式] をクリックして、[ユーザ定義項目式]ウィンドウを開きます。
- 2. ユーザ定義項目式のリストから、使用するものを選択します。

ユーザ定義項目を固定するには

ユーザ定義項目を固定すると、Campaignで計算された値が保存され、以降のプロセスで使用できるようになります。 これにより、Campaignがフローチャートの下流工程で値を再計算する必要がなくなり、時間とリソースを節約することができます。

- 1. ユーザ定義項目をサポートするプロセスの設定ウィンドウで、[ユーザ定義項目]を クリックします。
 - [ユーザ定義項目の作成]ウィンドウが開きます。
- 2. この項目に対して計算された値を保存して渡せるようにするには、[固定する] チェックボックスをオンにします。

例: 永続的なユーザ定義項目

ユーザ定義項目の制約に基づいてIDを選択するように設定された選択プロセスを、スナップショットプロセスに接続して、そのユーザ定義項目を含む選択されたレコードを出力します。 永続的なユーザ定義項目として設定すると、計算された値が選択プロセスからスナップショットプロセスに渡されます。

また、永続的なユーザ定義項目は、集計タイプ(AVGまたはGROUPBYなど)のユーザ定義項目としても使用できます。 このような集計項目は、現在のセル内の複数のデータ行に基づいて計算されるので、セル内容が変わると、これら集計項目の値も変わります。 永続的なユーザ定義項目を選択することにより、元の計算値を保持して、他のプロセスに渡すことができます。 また、ユーザ定義項目を再計算するように選択した場合は、現在のセル内の残りのレコードに基づいて計算が行われます。

プロセスが複数の入力を取得する場合、たとえば、2つの選択プロセスから入力を得るスナップショットプロセスなど、すべての永続的なユーザ定義項目がダウンストリームプロセスに対して使用可能となります。

ある永続的なユーザ定義項目がすべての着信選択プロセスに対して使用可能ではなく、この永続的なユーザ定義項目がスナップショットプロセスの出力に含まれる場合、そのスナップショットプロセスは、永続的なユーザ定義項目を持っていなかった選択プロセスからのすべての出力行の永続的なユーザ定義項目に対してNULL値を表示します。

ある永続的なユーザ定義項目がすべての着信選択プロセスに対して使用可能ではなく、この永続的なユーザ定義項目を使用してセグメントプロセスを定義する場合、セグメントプロセスは、永続的なユーザ定義項目を持っていなかった選択プロセスに対して空のセグメントを生成します。

すべての選択プロセスで使用可能でない複数の永続的なユーザ定義項目を使用する式でセグメントを定義しようとすると、セグメントプロセスは未設定のままになります。

永続的なユーザ定義項目(PDF)には次のガイドラインが適用されます。

- PDFは受信セルに添付されます(ベクトル)。
- PDFはクエリ実行前に計算されます。
- 複数のPDFは次のプロセスで使用できます。
 - スナップショット あるセルに対してPDFが定義されていない場合、値 はNULLになります。1つのIDが複数のセルに対応している場合、各セルに対し て1行ずつ出力されます。
 - セグメント 複数の入力セルが選択される場合、データ項目によるセグメント 作成用にPDFは使用できません。クエリによるセグメント作成では、選択される すべての入力セルにPDFが存在している必要があります。
- PDFは、各ID値に対して1つの値のみを持ちます(ランダムに選択されます)。データ 内でそのID値が何回発生しても関係ありません。 したがって、出力にテーブル項目 が含まれず、IBM Unica IDが含まれる場合、各ID値に対して1つのレコードのみにな ります。

ただし、テーブル項目に基づくユーザ定義項目を使用している場合、出力には、 テーブル項目が間接的に含まれます。 したがって、ID値の各インスタンスに対し て1つのレコードになります。つまり、ID値がデータ内で7回出現した場合、7つの レコードが出力されます。

永続的なユーザ定義項目には、各オーディエンスIDに対して、使用可能な値からランダムに選択される1つの値のみが格納されます。 つまり、正規化されていないデータを使用する場合、目的の動作を得るためにはGROUPBYマクロ関数を使用する必要があります。

たとえば、購入トランザクションテーブルから、1人の顧客による1回のトランザクションでの最高金額を取得し、ダウンストリームプロセス用に永続的なユーザ定義項目としてこのデータを保存するとします。 次のようなユーザ定義項目を作成し、永続的なユーザ定義項目として設定します。

Highest purchase amount = groupby(CID, maxof, Purch Amt)

次のような正規化されていない購入トランザクションデータに対して、以下のように計算されます。

CID	DATE	PURCH_AMT	HIGHEST_PURCHASE_AMOUNT
Α	1/1/2007	\$200	\$300
Α	3/15/2007	\$100	\$300
Α	4/30/2007	\$300	\$300

ユーザ定義項目が永続的であるとき、任意の値(すべて\$300)が(ランダムに)選択され、 顧客Aに対して金額\$300が保持されます。 少しわかりにくい2つ目の例では、特定のモデルXのスコア設定テーブルから予想モデルスコアを選択します。次のようなユーザ定義項目が使用されます。

ModelX_score = groupby(CID, maxof, if(Model = 'X', 1, 0), Score)

データは次のとおりです。

CID	MODEL	SCORE	MODELX_SCORE
Α	Α	57	80
Α	В	72	80
A	×	80	80

ユーザ定義項目ModelX_Scoreを永続的に設定すると、スコア値80という目的の結果を取得できます。次のユーザ定義項目は不適切です。

Bad ModelX score = if(Model = 'X', Score, NULL)

次のような結果になります。

CID	MODEL	SCORE	BAD_MODELX_SCORE
Α	Α	57	NULL
А	В	72	NULL
A	Х	80	80

ユーザ定義項目Bad_ModelX_scoreを永続的に設定すると、固定値はNULLか80になります。正規化されていないデータを使用し、ユーザ定義項目値が同じでないので、そのユーザ定義項目を永続的とすると、結果は、返されるいずれかの値になります。 たとえば、Derived_field_Score = SCOREと定義し、これを永続的に設定すると、顧客Aの値は57、72、または80になります。目的の動作を得るためには、顧客IDに対してGROUPBYマクロを使用して、ユーザ定義項目がその顧客の全データに対して同じになるようにする必要があります。

ユーザ変数について

Campaignでは、プロセス設定中にクエリや式を作成するのに使用できるユーザ変数を サポートしています。

ユーザ変数使用ガイドライン

ユーザ変数には次のガイドラインが適用されます。

- ユーザ変数は、そのユーザ変数が定義および使用されているフローチャートでのみ 有効ですが、そのフローチャート内においてはグローバルになります。
- ユーザ変数の構文: UserVar.UserVarName
- ユーザ変数には初期値があります。この値は、[ユーザ変数]ダイアログでユーザ変数を最初に定義するときに割り当てられます。 初期値は、フローチャートの実行直前、現在の値を設定するときにだけ使用されます。 フローチャートの実行中にCampaignにより使用される値が現在の値です。
 - ユーザ変数の現在の値が設定されていない状態でプロセスまたはブランチを実行した場合、Campaignは、ユーザ変数を解決できません。Campaignは、フローチャートの実行の前にだけ、ユーザ変数の現在の値を初期値に設定します。
- 選択プロセスの[ユーザ定義項目]ウィンドウで、ユーザ変数の現在の値を変更できます。
- ユーザ変数は、定数にでも、UserVar.myVar = Avg(UserTable.Age)といった式にでも設定できます。
- SQLステートメント内でユーザ変数を使用する場合、引用符(一重引用符または二重引用符)でユーザ変数を囲まないようにしてください。
- オブジェクト名をデータベースに渡す場合(たとえば、フローチャート名を含むユーザ変数を使用する場合)、オブジェクト名には、使用データベースでサポートされている文字のみが含まれているようにします。 サポートされていない文字が含まれている場合、データベースエラーが発生します。
- ユーザ変数の値はプロセス実行時に渡すことができます。
- アウトバウンドトリガでユーザ変数を使用できます。
- カスタムマクロでユーザ変数を使用できます。

ユーザ変数を作成するには

1. 編集モードのフローチャートで、[オプション]アイコンをクリックし、[ユーザ変数] を選択します。

[ユーザ変数]ダイアログが開きます。

- 2. [変数名]列で、<項目を追加するにはここをクリック>ホットスポットをクリック し、新しいユーザ変数の名前を入力します。
- 3. **[データ型]**列で、ドロップダウンリストからデータ型を選択します。 データ型を選択しない場合、**[OK]**をクリックすると、**[なし]**が選択されます。

データ型を[なし]にすると予期しない結果につながる可能性があるので、適切な データ型を指定することをお勧めします。

- 4. [初期値]列に、ユーザ変数の初期(開始)値を入力します。 列の内部をクリックすると 省略記号のボタンが表示され、このボタンをクリックすると、使用可能な値の項目 をプロファイルすることもできます。
- 5. **[現在の値]**列に、ユーザ変数の現在の値を入力します。 列の内部をクリックすると 省略記号のボタンが表示され、このボタンをクリックすると、使用可能な値の項目 をプロファイルすることもできます。
- 6. 作成するユーザ変数ごとに、これらの手順を繰り返します。
- 7. ユーザ変数の定義を終えたら、[OK]をクリックします。

アプリケーションで新しいユーザ変数が保存されます。 後からプロセスを構成する ときに、これらのユーザ変数を使用できます。

フローチャートの実行後、各ユーザ変数の現在の値が、それぞれのユーザ変数の[現在の値]セクションに表示されます。 現在の値が初期値とは異なる場合は、[既定値に戻す]をクリックすると、初期値に戻すことができます。

☆ ユーザ変数の現在の値が選択プロセスで再定義された場合、[現在の値]を[初期値]に 手動でリセットしても、フローチャート、ブランチ、またはプロセスの実行時に、 ユーザ変数の値は変更されません。

カスタムマクロについて

カスタムマクロは、IBM Unica 式、未加工SQL、または値を含む未加工SQLのいずれかを使用して作成するクエリです。 カスタムマクロは、変数もサポートするため、置き換えて使用するように設計されている保存されたクエリよりはるかに強力です。

カスタムマクロは保存して、フローチャート内のプロセスを設定したり、ユーザ定義項目を定義するときに使用できます。

未加工SQLのサポートにより、アプリケーションサーバ上で未加工データをフィルタリングして操作するのではなく、データベース上で複雑なトランザクションを実行できるので、パフォーマンスが向上します。

Campaignは、次の3つのタイプのカスタムマクロをサポートします。また、これらのカスタムマクロは、無制限に変数をサポートします。

- IBM Unica 式を使用するカスタムマクロ
- 未加工のSQLを使用するカスタムマクロ
- 未加工SQLを使用し、指定の値を含むカスタムマクロ

技術的に熟練していないユーザでもカスタムマクロを使用できるので、カスタムマクロを作成する際には、マクロがどのように動作するのか注意深く説明したり、マクロをタイプ別に特別なフォルダにまとめておくなどして、他のユーザが誤ってカスタムマクロを使用して不要なデータを取得してしまわないように注意することが必要です。

カスタムマクロを作成するには

1. 編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[カスタムマクロ]を選択します。

[カスタムマクロ]ダイアログが開き、既存のカスタムマクロが表示されます。

- 2. [新規項目]をクリックします。
- 3. **[保存先]**ドロップダウンリストで、カスタムマクロを保存するフォルダの場所を選択します。
- 4. [名前]項目に、カスタムマクロの名前と宣言を入力します。そうすると、次の構文 を使用して参照できるようになります。

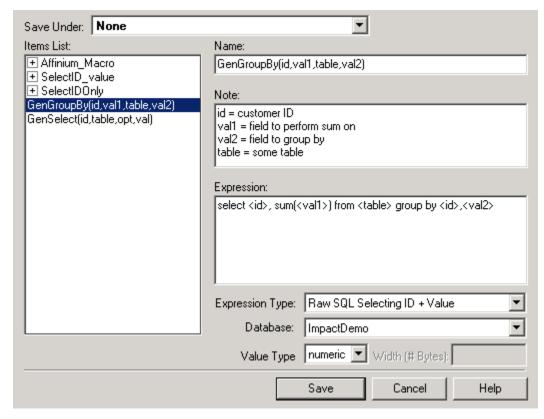
MacroName(var1,var2,...)

カスタムマクロの名前(一意であること)と、変数のリストのみを明示する必要があります。

*MacroName*には、英数字のみを使用できます。MacroName文字列にはスペースを含めることはできませんが、アンダースコア()は使用できます。

- 変数名は、[式]ウィンドウのカスタムマクロ定義の変数名と一致している必要があり、また、かっこ内にカンマ区切りで列挙する必要があります。
- 5. **[セキュリティポリシー]**ドロップダウンリストから、新しいカスタムマクロのセキュリティポリシーを選択します。
- 6. **[説明]**項目を使って、新しいカスタムマクロの説明を入力します(オプション)。カスタムマクロの役割と、それぞれの変数の意味を示します。
- 7. [式の分類]ドロップダウンリストから、作成するカスタムマクロのタイプを選択します。
 - [SQL(ID)] を選択した場合は、[データベース]項目のドロップダウンリストから データベースを選択する必要があります。
 - [SQL(ID+データ)]を選択した場合は、[データベース]項目のドロップダウンリストからデータベースを選択し、[値タイプ]ドロップダウンリストから項目の値タイプを選択する必要があります。 ここで選択した値のタイプが正しいことを確認してください。 正しくない場合、後でこのクエリをプロファイルするときに、「タイプ不一致」エラーが発生します。
 - 値のタイプとして[テキスト]を選択した場合は、[データ長(バイト数)] 項目に、 値のタイプの長さをバイト単位で指定します。 データ長(バイト数)情報は、デー タベースから取得する必要があります。 データベースへのアクセス権がない場 合、または情報を取得できない場合は、最大長である256を入力します。

- 8. [式]項目内をクリックして、[選択条件の指定]ウィンドウを開きます。
- 9. クエリ式を作成します。 変数は必要な数だけ使用できます。 変数構文には英数字を 使用します。変数は、山かっこ(<>)で囲む必要があります。 オペランド(値と文字 列)および演算子に変数を使用することができます。
 - カスタムマクロ定義には、フローチャートのユーザ変数を使用しないでください。カスタムマクロはグローバルですが、ユーザ変数はグローバルではないためです。
 - 例: 未加工SQLを使用し、IDと値を選択するカスタムマクロ



- 10. [保存]をクリックして、カスタムマクロを保存します。
 カスタムマクロが保存され、名前でアクセスできるようになります。
- 11. [閉じる]をクリックして、[カスタムマクロ]ダイアログを終了します。

関連トピック

• プロセス内でのクエリの作成

カスタムマクロの使用ガイドライン

カスタムマクロを作成または使用する際は、次のガイドラインに留意してください。

• カスタムマクロの名前は英数字にする必要があります。 名前文字列にスペースは使用できませんが、アンダスコア()は使用できます。

- プロパティENABLE_SELECT_SORT_BY = TRUEでデータソースが設定されている場合は、返されるレコードが使用しているオーディエンスレベルのオーディエンスキー項目でソートされるように、ORDER BY句を使用して未加工SQLカスタムマクロを作成する必要があります。こうしないと、予期しないソート順である場合、スナップショットプロセスのユーザ定義項目でカスタムマクロが使用されるときにエラーが生成されます。
- カスタムマクロからの戻り値を比較しないと、値が数値でゼロ以外の場合はTRUE として処理され(したがって、これらの値に関連付けられているIDが選択される)、ゼロの場合はFALSEとして処理されます。 文字列値は常にFALSEとして処理されます。
- 未加工SQLを使用するカスタムマクロを作成するときに一時テーブルを使用すると、処理する必要のあるデータ量の範囲が設定されるので、未加工SQLのパフォーマンスを飛躍的に高速化できます。

カスタムマクロの基となるロジックで一時テーブルを使用すると、一時テーブルが データベースに強制的に挿入されるため、ロジックが失敗しません。

ただし、カスタムマクロが最上位のSELECTで使用される場合は、一時テーブルを データベースに強制的に挿入するために使用するCampaignの履歴がないため、ロ ジックが失敗します。

したがって、未加工SQLを使用するカスタムマクロを作成するときは、同じカスタムマクロに対して2つのバージョン(一時テーブルのトークンを使用するバージョンと使用しないバージョン)の作成が必要になる場合があります。

一時テーブルのトークンを使用しないカスタムマクロは、ツリーの最上部(最初のSELECT内など)で使用できます。 一時テーブルのトークンを使用するカスタムマクロは、利用できる一時テーブルがある場合はツリーの他のどの場所でも使用できます。

非正規化データに対してクエリを実行するとき、カスタムマクロから返される値を 組み合わせると自己結合が発生する場合がありますが、これは望ましい動作ではあ りません。

たとえば、値を返す未加工SQLに基づいたカスタムマクロを使用していて、(スナップショットプロセスなどで)このカスタムマクロとカスタムマクロが基づいているテーブルの別の項目を出力する場合、Campaignはそのテーブル上で自己結合を実行します。 テーブルが正規化されていない場合は、最終的にデカルト積になります(つまり、表示されるレコード数が予想よりも多くなります)。

カスタムマクロは自動的に参照されるようになりました。これはカスタムマクロの 定義が現在のプロセスにコピーされないためです。

実行時に、カスタムマクロはUA_CustomMacrosシステムテーブル(定義が格納されているテーブル)で定義を検索して解決されてから、使用または実行されます。

• 保存されたクエリとは異なり、カスタムマクロ名はフォルダパスに関係なく一意である必要があります。 5.0よりも前のリリースでは、たとえばフォルダF1とF2の両方に、Aという名前の保存されたクエリを存在させられました。

Campaignは初期のリリースから保存されたクエリをサポートしています。 ただし、一意でない保存されたクエリの参照には、次の古い構文を使用する必要があります。

storedguery(<クエリ名>)

- カスタムマクロ内のユーザ変数を解決するとき、Campaignは構文をチェックする際にユーザ変数の現在の値を使用します。 現在の値が空白の場合、Campaignはエラーを生成します。
- 一時テーブルのトークンは、パフォーマンスを最適化する高度な機能(現在のプロセスで使用可能な一時テーブル内のオーディエンスIDセットによってデータベースから取得されるデータ量の範囲を設定する機能)として指定されます。 この一時テーブルのIDリストは、現在のセル内のIDのスーパーセットである場合があります。 そのため、一時テーブル上で実行される集計機能(平均や合計など)はサポートされず、正しくない結果が生成されることがあります。
- 複数の異なるデータベースにまたがってカスタムマクロを使用する場合は、未加工SQLではなくIBM Unica 式を使用することが必要になる場合があります。これは、未加工SQLが特定のデータベースに限定されることがあるためです。
- カスタムマクロに未加工SQLと別のカスタムマクロが含まれている場合、カスタムマクロが解決され、実行され、その値が返されてから、未加工SQLが実行されます。
- Campaignでは、カンマはパラメータ区切り文字として処理されます。 パラメータ 内でカンマをリテラル文字として使用する場合は、次の例のように開きかっこと閉 じかっこ({})でテキストを囲みます。

TestCM({STRING_CONCAT(UserVar.Test1, UserVar.Test2) })

次の表で、Campaignがクエリ内およびユーザ定義項目内のマクロをどのように処理するかについて詳しく説明します。

クエリ内およびユーザ定義項目内のカスタムマクロ(選択、セグメント、およびオーディエンスプロセス)

カスタムマクロのタイプ	処理方法
未加工SQL: ID	別個のクエリとして実行します。 IDリストは他の結果とマー ジされます。
	カスタムマクロに他のカスタムマクロと未加工SQLが含まれている場合、カスタムマクロが解決され、実行されてから、未加工SQLが実行されます。
未加工SQL: ID + 値	戻り値は、式内で使用されるか、または比較として使用される ものとみなされます。
	値がこのように使用されない場合、CampaignはIDの選択に対 してゼロ以外の値をTRUE、ゼロの値と文字列をFALSEとして 処理します。
IBM Unica 式	式が解決されて構文チェックが実行されます。 テーブルごと に1つのクエリがサポートされ、IDの照合/マージが行われま す。

未加工SQLクエリ内(選択、セグメント、およびオーディエンスプロセス)

カスタムマクロのタイプ	処理方法
未加工SQL: ID	カスタムマクロが解決されてからクエリが実行されます。
未加工SQL: ID + 値	サポートされていません。
IBM Unica 式	式は解決されますが、構文チェックは実行されません。 式が 正しくない場合は、実行時にデータベースサーバで検出されま す。

カスタムマクロを管理するには

フォルダ構造を作成して、カスタムマクロを整理できます。 この構造内のフォルダ間でカスタムマクロを移動できます。

- 1. 編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[カスタムマクロ]を選択します。
 - [カスタムマクロ]ダイアログが開きます。
- 2. [項目リスト]内を移動し、編集するマクロを選択します。 [情報]領域に、選択したマクロに関する詳細情報が表示されます。
- 3. 選択されたマクロを編集、または移動するには、[編集/移動]をクリックします。 [カスタムマクロの移動/編集]ダイアログが開きます。
- 4. マクロの名前の変更、説明の編集、または、マクロの保存先のフォルダ/場所の変更ができます。または、[編集]をクリックして式を編集することもできます。
- 5. [保存]をクリックして、変更内容を保存します。
- 6. 「閉じる」をクリックして、「カスタムマクロ」ダイアログを終了します。

テンプレートについて

テンプレートは、フローチャートから選択および保存されたプロセスのグループです。 テンプレートにより、1つ以上のプロセスを1回だけ設計および設定して、テンプレート ライブラリに保存できます。 テンプレートは、プロセス設定とテーブルマッピングを 保存します。どのセッションまたはキャンペーンでも使用できます。

テンプレートライブラリにテンプレートをコピーする には

テンプレートライブラリにテンプレートをコピーすると、テンプレートを追加することができます。

- 1. 編集モードのフローチャートで、テンプレートとして保存するプロセスを選択します。 Shiftキーを押しながらクリックするか、Ctrlキーを押しながらクリックすると、複数のプロセスを選択できます。
- 2. コピーするプロセスを右クリックし、[テンプレートライブラリへのコピー]を選択します。

[テンプレートの保存]ウィンドウが開きます。

3. [名前]項目に、テンプレートの名前を入力します。

名前文字列には、スペースを含めることはできません。 保存されたテンプレートは 名前で識別されます。名前は、保存先のフォルダ内で一意である必要があります。

- 4. (オプション)「説明」項目に、説明文を自由書式で入力します。
- 5. (オプション)テンプレートを保存するフォルダを選択します。 リストから既存のフォルダを選択するか、[新規フォルダ]を選択して新しいフォルダを作成します。 選択中のフォルダが、[リスト項目]の上の[保存先]項目に表示されます。 新しいフォルダを作成するには、[新規フォルダ]をクリックします。 テンプレートを整理し、保存するフォルダの数は、制限なく作成できます(階層構造になったフォルダも含む)。
- 6. [保存]をクリックします。

テンプレートライブラリからテンプレートを貼り付け るには

テンプレートライブラリから、構築中のフローチャートにテンプレートを貼り付けることができます。

編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[テンプレート]を選択します。

[テンプレート]ダイアログが開きます。

- 2. [項目]リストからテンプレートを選択します。
- 3. [テンプレートの貼り付け]をクリックします。

選択されたテンプレートが、フローチャートの作業空間に貼り付けられます。

テンプレートライブラリを使用することで、他のセッションやキャンペーンからテンプレートにアクセスできます。 テーブルマッピングが異なるフローチャートにテンプレートが貼り付けられると、それ以降のマッピングは、新しいマッピングによって補完はされますが、テーブル名が同一でない限り、置換はされません。

テンプレートを管理するには

このコマンドを使用して、新規フォルダの作成や、保存されたテンプレートの編集、移動、および削除を行えます。

編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[テンプレート]を選択します。

[テンプレート]ダイアログが開きます。

- 2. [項目リスト]で、編集または移動するテンプレートを選択します。
- 3. [編集/移動]をクリックします。

[テンプレートの移動/編集]ダイアログが開きます。

- 4. [保存先]項目で、テンプレートの移動先のフォルダ/場所を指定します。
- 5. テンプレートの名前を変更することや、テンプレートに関連付けられたメモを編集 することもできます。
- 6. [保存]をクリックして、変更内容を保存します。
- 7. 「閉じる」をクリックして、「テンプレート」ウィンドウを終了します。

テーブルカタログについて

テーブルカタログは、マッピングされたユーザテーブルのコレクションです。 テーブルカタログには、フローチャート間で再利用できるようにすべてのユーザテーブルマッピングメタデータ情報が格納されます。 テーブルカタログは、.cat拡張子を使用する専用バイナリ形式で保存されます。

テーブルカタログの作成と操作の詳細については、『*Campaign管理者ガイド*』を参照 してください。

テーブルカタログにアクセスするには

編集モードのページのフローチャートで、[オプション]アイコンをクリックし、[テーブ ルカタログ]を選択します。

[テーブルカタログ]ダイアログが開きます。

☆ 管理者権限がある場合は、[キャンペーン設定]ページからテーブルカタログにアクセスすることもできます。 詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

テーブルカタログを編集するには

1. 編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[テーブルカタログ]を選択します。

[テーブルカタログ]ダイアログが開きます。

2. [項目リスト]で、目的のテーブルカタログを選択します。

[情報]領域に、テーブルカタログ名やファイルパスなど、選択されたテーブルカタログに関する詳細情報が表示されます。

- 3. [編集/移動]をクリックします。
- 4. テーブルカタログの名前の変更、テーブルカタログの説明の編集、またはテーブルカタログの保存先のフォルダ/場所の変更ができます。
- 5. [保存]をクリックします。
- 6. [テーブルカタログ]ウィンドウで[閉じる]をクリックします。

テーブルカタログを削除するには

- テーブルカタログの削除は、Campaignインタフェースを使用してのみ行えます。 ファイルシステム内でテーブルを削除したり、その他の方法でテーブルカタログを 直接変更したりすると、Campaignは、システム内のデータの整合性を保証できなく なります。
- 1. 編集モードのフローチャートページで、[オプション]アイコンをクリックし、[テーブルカタログ]を選択します。

[テーブルカタログ]ウィンドウが開きます。

2. 「項目リスト」で、目的のテーブルカタログを選択します。

[情報]領域に、テーブルカタログ名やファイルパスなど、選択されたテーブルカタログに関する詳細情報が表示されます。

3. [削除]をクリックします。

選択されたテーブルカタログを本当に削除するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

- 4. [OK]をクリックします。
- 5. [テーブルカタログ]ウィンドウで[閉じる]をクリックします。

11 セッション

- セッションについて
- セッションの操作
- セッションの整理について
- [セッション一覧]ページのアイコン
- 戦略的セグメントについて
- グローバル抑制とグローバル抑制セグメントについて
- ディメンション階層について
- キューブについて

セッションについて

キャンペーン同様、セッションも、個々のフローチャートで構成されます。 ただし、セッションでは、固定データコンストラクタ(戦略的セグメント、保存されたディメンション階層、キューブなど)を作成できます。これらは、すべてのキャンペーンに対してグローバルに使用できます。 セッションを使用して、次の作業を行うフローチャートを作成できます。

- キャンペーン間で必要なデータの変換
- PredictiveInsight入力ファイルの作成
- 戦略的セグメントの実装
- ☆ フローチャートを設計する際、プロセス間で循環依存が発生しないように注意する必要があります。 たとえば、選択プロセスがセグメント化プロセスに入力を渡すようなフローチャートです。 選択プロセスで入力として選択したセグメントが、その選択プロセスが出力を渡した同じセグメント化プロセスによって作成されたセグメントである場合、循環依存が発生しています。 このような状況は、プロセス実行時にエラーの原因となります。

セッションの操作

セッションに対して次の操作を実行できます。

- セッションを作成するには
- セッションの整理について
- セッションを表示するには
- セッションのサマリ詳細を編集するには
- セッションのフローチャートを編集するには
- セッションのコピーについて
- セッションの実行について
- セッションを移動するには
- セッションを削除するには
- ☆ セッションを使用するには、適切な権限が必要です。 権限の詳細については、 『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

セッションを作成するには

1. Campaign > Sessionsを選択します。

[セッション一覧]ページに、企業のセッションを分類するために使用されるフォルダ構造が表示されます。 [セッション一覧」ページ内でサブフォルダを開いていた場合は、そのサブフォルダが代わりに表示されます。

- 2. セッションを追加するフォルダの内容が表示されるまで、フォルダ構造を移動します。
- 3. **[セッションの**追加]アイコンをクリックします。 [新規セッション]ページが開きます。
- 4. セッションの名前、セキュリティポリシー、および説明を入力します。
 - ☆ セッション名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「付録A Campaignオブジェクト名の特殊文字」を参照してください。
- 5. [変更の保存]をクリックします。
 - ☆ [保存とフローチャートの追加]をクリックして、セッションのフローチャートの作成をすぐに開始することもできます。

セッションを表示するには

1. [キャンペーン] > [セッション]を選択します。

[セッション一覧]ページが開きます。

2. 表示するセッションの名前をクリックし、そのセッションの [サマリ]タブを開きます。

または

- 3. 表示するセッションの名前の隣にある[タブを表示]アイコンをクリックします。 コンテキストメニューに、[サマリ]と、セッション内のフローチャートの名前が表示されます。
- 表示するセッションタブを選択します。
 セッションが開き、選択したタブに表示されます。

セッションのサマリ詳細を編集するには

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- サマリ詳細を編集するセッションの名前をクリックします。
 セッションが開き、[サマリ]タブに表示されます。
- 3. [サマリの編集]アイコンをクリックします。
- 4. [サマリ]タブで必要な編集を加えます。
 - ☆ セッション名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「付録A Campaignオブジェクト名の特殊文字」を参照してください。
- 5. 変更を加えたら、[変更の保存]をクリックします。 変更が保存され、セッションが閉じられます。

セッションのフローチャートを編集するには

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- 2. フローチャートを編集するセッション名の隣にある、[タブを編集]アイコンをクリックします。
- 3. コンテキストメニューから、編集するフローチャートの名前をクリックします。 フローチャートページが、読み取り専用モードで開きます。
- 4. [編集]アイコンをクリックして、フローチャートを編集モードで開きます。
- 5. フローチャートに必要な変更を加えます。
- 6. 変更作業が完了したら、[保存]または[保存して終了]をクリックします。

セッションのフローチャートのプロパティを編集する には

- 1. 編集するフローチャートを開きます。
- [フローチャート]ツールバーで[プロパティ]をクリックします。
 [フローチャートプロパティの編集]ページが開きます。
- 3. フローチャートの名前または説明を変更します。
- 2. [変更の保存]をクリックします。
 変更したフローチャートの詳細が保存されます。

セッションのコピーについて

セッションはコピーしませんが、セッション内のフローチャートはコピーします。

関連トピック

・フローチャートのコピー

セッションの実行について

セッションを実行するには、その各フローチャートを実行する必要があります。

関連トピック

フローチャートの実行

セッションを移動するには

セッションを1つのフォルダから別のフォルダに移動して、整理することができます。

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- 2. 移動するセッションが含まれているフォルダを開きます。
- 3. 移動するセッションの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のセッションを選択して同じ場所に移動できます。

- 4. [移動]アイコンをクリックします。
 - [アイテムの移動]ウィンドウが開きます。
- セッションの移動先のフォルダをクリックします。
 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 6. **[OK]**をクリックします。
 - ☆ また、フォルダをダブルクリックすると、フォルダの選択と確定を一度に行うことができます。

セッションが移動先フォルダに移動されます。

セッションの削除について

セッションを削除すると、セッションとすべてのフローチャートファイルが削除されます。 セッションの一部を再利用するために保存する場合、保存オブジェクトとして保存できます。 詳細については、「ユーザ定義項目について」を参照してください。

プロンタクト履歴レコードまたはレスポンス履歴レコードが関連付けられているセッションを削除すると、対応するすべてのコンタクト履歴レコードとレスポンス履歴レコードも削除されます。 関連付けられているコンタクト履歴とレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、セッションを削除しないでください。

セッションを削除するには

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- 2. 削除するセッションを含むフォルダを開きます。
 - フォルダ名をクリックして開き、**[セッション一覧]**をクリックして[セッション一覧]ページに戻るか、**[親フォルダ]**をクリックして現在開いているフォルダをの上位のフォルダを開いて、フォルダ構造内を移動します。
- 3. 削除するセッションの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のセッションを選択して削除できます。
- 4. [選択項目の削除]アイコンをクリックします。
 - ☆ 関連するコンタクトまたはレスポンス履歴レコードがあるセッションを削除しようとすると、すべての対応するコンタクトとレスポンス履歴レコードも削除されることを示す警告メッセージが表示されます。 該当するコンタクト履歴およびレスポンス履歴を保持する必要がある場合は、「キャンセル」をクリックします。
- 5. 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。
 - セッションが削除されます。

セッションの整理について

1つまたは複数のフォルダを作成することにより、セッションを整理できます。 作成したフォルダ構造内で、セッションをフォルダから別のフォルダに移動できます。

セッションを整理するためのフォルダを追加、移動、または削除することができます。 また、フォルダの名前と説明を編集することもできます。

セッションフォルダを追加するには

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- 2. サブフォルダを追加するフォルダをクリックし、**[サブフォルダの追加]**をクリック するか、[サブフォルダの追加]をクリックして最上位レベルにフォルダを追加しま す。

[サブフォルダの追加]ページが開きます。

- 3. フォルダの名前、セキュリティポリシー、および説明を入力します。
 - ☆ フォルダ名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「付録A Campaignオブジェクト名の特殊文字」を参照してください。
- 4. [変更の保存]をクリックします。

[セッション一覧]ページに戻ります。 作成した新しいフォルダまたはサブフォルダが表示されます。

セッションフォルダの名前と説明を編集するには

- [キャンペーン] > [セッション]を選択します。
 [セッション一覧]ページが開きます。
- 2. 名前を変更するフォルダをクリックします。
- [名前の変更]アイコンをクリックします。
 [サブフォルダ名の変更]ページが開きます。
- 4. フォルダの名前と説明を編集します。
 - ☆ フォルダ名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「付録A Campaignオブジェクト名の特殊文字」を参照してください。
- 5. [変更の保存]をクリックします。

[セッション一覧]ページに戻ります。 フォルダまたはサブフォルダの名前が変更されます。

セッションフォルダを移動するには

- 移動する予定のセッションのフローチャートが、他のユーザによって編集されている場合は、セッションを移動するとフローチャートの結果、またはフローチャート全体が失われる可能性があります。 セッションを移動する前に、セッション内のフローチャートが編集対象として開かれていないことを確認してください。
- 1. [キャンペーン] > [セッション]を選択します。

[セッション一覧]ページが開きます。

- 2. 移動するサブフォルダが含まれているフォルダをクリックします。
- 3. 移動するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して同じ場所に移動できます。
- 4. [移動]アイコンをクリックします。

[アイテムの移動]ウィンドウが開きます。

- 5. サブフォルダの移動先のフォルダをクリックします。 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 6. **[OK]**をクリックします。

サブフォルダおよびその内容がすべて移動先フォルダに移動されます。

セッションフォルダを削除するには

フォルダを削除するには、事前にフォルダの内容を移動するか、削除しておく必要があります。

- ☆ フォルダを削除するために必要な権限がある場合は、そのフォルダ内のサブフォルダも削除できます。
- 1. [キャンペーン] > [セッション]を選択します。

[セッション一覧]ページが開きます。

- 2. 削除するセグメントが含まれているフォルダを開きます。
- 3. 削除するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して削除できます。
- 4. [選択項目の削除]アイコンをクリックします。
- 5. 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。

フォルダおよびすべての空のサブフォルダが削除されます。

関連トピック

- セッションを移動するには
- セッションを削除するには

[セッション一覧]ページのアイコン

[セッション一覧]ページでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

☆ Campaignインタフェースのアイコンの多くは、権限を必要とする機能に関連付けられています。 詳細については、『Marketing Platform管理者ガイド』を参照してください。 次の[セッションの追加]アイコンと[サブフォルダの追加]アイコンは適切な権限がないと表示されません。

アイコン名	説明
セッションの追加	新しいセッションを追加する場合にクリックします。
サブフォルダの追加	新しいセッションサブフォルダを追加する場合にクリックしま す。
項目の印刷	各セッションの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ 以上のセッションを選択し、次にこのアイコンをクリックし て、選択したセッションを印刷します。
移動	各セッションの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ 以上のセッションを選択し、次にこのアイコンをクリックし て、選択したセッションの移動場所を指定します。
選択項目の削除	各項目の隣にあるチェックボックスをクリックして1つ以上の セッションを選択し、次にこのアイコンをクリックして、選択 したセッションを削除印刷します。

戦略的セグメントについて

戦略的セグメントとは、IDのグローバル固定リストのことです。 戦略的セグメントは、通常、セッションフローチャート内のセグメント化プロセスを使用して、Campaign管理者によって作成され、すべてのキャンペーンでグローバルに使用できます。

Campaignは、複数の戦略的セグメントをサポートします。各戦略的セグメントとオーディエンスレベルに対して作成されたIDリストがCampaignシステムテーブルに保存されます。 1つのキャンペーンに関連付けることのできる戦略的セグメント数は無制限です。

戦略的セグメントはキューブでよく使用されます。 キューブは、IDのリストから作成できますが、戦略的セグメントに基づいている場合、より強力になります。これは、戦略的セグメントに基づいたキューブがグローバルであり、さまざまなセグメントレポートによって分析可能であるためです。

戦略的セグメントは、グローバル抑制セグメントとして使用できます。 グローバル抑制セグメントは、特定のオーディエンスレベルに対するフローチャート内のセルから自動的に除外されるIDリストを定義します。

戦略的セグメントは、キャッシュする(戦略的セグメントを使用する各フローチャートに対して戦略的セグメントIDをアップロードする必要がないように、データベースに保存しておく)先として1つ以上のIBM Unica データソースを任意で指定できます。 これにより、戦略的セグメントの使用パフォーマンスを大きく向上させることができます。

キャッシュされた戦略的セグメントは、一時テーブルに保存されます。TempTablePrefix設定パラメータが割り当てられます。

☆ 戦略的セグメントを使用するには、適切な権限が必要です。 権限の詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

関連トピック

- ・キャンペーンへの戦略的セグメントの関連付け
- ・キューブについて
- ディメンション階層について

戦略的セグメントのパフォーマンスの向上

既定では、セグメント化プロセスは、アプリケーションサーバ上にセグメントbinファイルを作成しますが、戦略的セグメントが大きい場合、この処理に時間がかかる場合があります。 Campaignがバイナリファイルを更新すると、キャッシュテーブルから行がいったん削除され、再挿入されます。つまり、ソートのためにファイル全体が再度書き込まれることになります。 非常に大きな戦略的セグメント(たとえば、4億のIDが含まれるセグメントなど)の場合、そのIDのほとんどに変更がなくてもファイル全体が再度書き込まれるので、非常に時間がかかります。

パフオーマンスを向上させるには、設定ページのdoNotCreateServerBinFileプロパティを使用して、戦略的セグメントが、アプリケーションサーバ上のbinファイルではなく、データソース内に一時テーブルを作成するように指定できます。 このプロパティをTRUEに設定する場合、セグメント化プロセス設定で少なくとも1つのデータソースが指定されている必要があります。

また、インデックスを作成したり、統計情報を生成するなどしてパフォーマンスを最適化する方法もありますが、この最適化は、キャッシュセグメントテーブルには適用できません。これは、セグメントー時テーブルで使用できます。 設定ページ

のPostSegmentTableCreateRunScript、SegmentTablePostExecutionSQL、SuffixOnSegmentTableCreationの各プロパティにより、これらのパフォーマンス最適化がサポートされます。

設定ページのプロパティの詳細については、『*Campaign管理者ガイド*』を参照してく ださい。

戦略的セグメントを作成するための前提条件

戦略的セグメントを作成する前に、次のことを行っておく必要があります。

- 戦略的セグメントの整理方法、フォルダ階層および命名規則を決定する。
- どんな戦略的セグメントが必要なのか正確に把握する。
- 戦略的セグメントで使用するロジックを決定する。
- 戦略的セグメント間の関係を把握する。
- 戦略的セグメントに応じたオーディエンスレベルを決める。
- 戦略的セグメントの更新頻度を決定する。
- 各戦略的セグメントで定義する詳細レベルを決定する。 たとえば、1つのセグメントにすべての抑制を含めるか、など。
- アーカイブフォルダに今までの戦略的セグメントを保持するかどうか決める。
- 作成する戦略的セグメントのサイズと、パフォーマンスに与える影響を検討する。「戦略的セグメントのパフォーマンスの向上」を参照してください。

戦略的セグメントを作成するには

☆ 戦略的セグメントを使用するには、適切な権限が必要です。 権限の詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

戦略的セグメントは、セグメント化プロセスが運用モードで正常に実行された場合にのみ作成され、選択可能になります。 セグメント化プロセスを設定するだけでは十分ではありません。 プロセスをテストモードで実行しても、戦略的セグメントは作成されず、既存のセグメントも更新されません。

- 1. セッションを作成するか、既存のセッションを開いて編集します。
 - ☆ セグメント名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 2. 最終的な出力プロセスがセグメント化プロセスになるフローチャートを構築します。
- 3. フローチャートの作成が完了したら、「保存して戻る」をクリックします。

フローチャートが保存されます。 戦略的セグメントは[セグメント一覧]ページにリストされ、すべてのキャンペーンで使用できるようになります。

関連トピック

- セッションのサマリ詳細を編集するには
- セッションのフローチャートを編集するには
- セグメント化

例: 戦略的セグメントを作成するセッションフローチャート

Campaignのセッション領域のフローチャートで、2つの選択プロセスを追加し、1つの選択プロセスで、データマート上のマッピングされたテーブル内の特定の項目からすべてのレコードを選択し、もう一つの選択プロセスで、オプトアウトとして分類されているため、全体IDリストから除外する必要のあるすべてのレコードを同じデータマートから選択します。

次に、2つの選択プロセスの出力セルで入力が構成されるマージプロセスを使用して、 オプトアウトIDを除外し、対象IDの出力セルを生成します。

それから、マージプロセスから対象IDを渡すセグメントプロセスを追加し、ここで、対象IDを3つのグループに分類します。

最後に、セグメント化プロセスを使用して、3つのセグメントをオーディエンスIDのグローバル固定リストとして出力します。

運用モードでフローチャートを実行して、戦略的セグメントを作成し、この戦略セグメントを複数のキャンペーンで使用できるようにします。

[セグメント一覧]ページからセグメントを表示するに は

- 1. [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. 表示するセッションの名前をクリックします。

セグメントの[サマリ]ページが開きます。このページには、セグメントのサマリ情報が表示されます。

要素	説明
説明	セグメント化プロセスで示される、セグメントの説明
ソースフローチャート	セグメントが定義されているフローチャートの名前
オーディエンス	セグメントのオーディエンスレベル
現在のデータ件数	このセグメントのIDの数と、このセグメントが最後に実行され た日付

要素	説明
使用しているキャンペーン	セグメントを使用するすべてのキャンペーンのリスト。キャン ペーンへのリンクも示されます。

[キャンペーンサマリ]ページから戦略的セグメントを表示するには

- 1. 表示するセグメントを使用する任意のキャンペーンで、[サマリ]ページを開きます。
- 2. **[関連セグメント]**リストからセグメントの名前をクリックします。 セグメントのサマリページが開きます。

セグメントのサマリ詳細を編集するには

- [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。
 [セグメント一覧]ページが開きます。
- サマリ詳細を編集するセグメントの名前をクリックします。
 セグメントが開き、[サマリ]タブに表示されます。
- 3. セグメントの名前や説明に、必要な編集を加えます。
 - ☆ セグメント名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 4. 変更を加えたら、[変更の保存]をクリックします。 変更が保存され、セグメントが閉じられます。

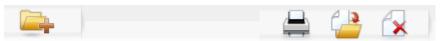
戦略的セグメントのソースフローチャートを編集する には

- [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。
 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. フローチャートを編集するセグメントの名前をクリックします。 セグメントの[サマリ]ページが開きます。
- 3. [ソースフローチャート]で、フローチャートのリンクをクリックします。 フローチャートページが、読み取り専用モードで開きます。
- 4. [編集]を開き、編集モードでフローチャートを開きます。
- 5. フローチャートに必要な変更を加えます。
- 6. 変更作業が完了したら、「保存」または「保存して終了」をクリックします。

既存の戦略的セグメントは、更新されたフローチャートを運用モードで再実行するまで更新されません。

[セグメント一覧]ページのアイコン

[セグメント一覧]ページでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

アイコン名	説明
サブフォルダの追加	新しいセグメントサブフォルダを追加する場合にクリックしま す。
詳細検索	クリックして[詳細検索オプション]ダイアログを開きます。こ のダイアログでは、オファーを検索するための属性や値を指定 できます。
印刷	各セグメントの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ 以上のセグメントを選択し、次にこのアイコンをクリックし て、選択したセグメントを印刷します。
移動	各セグメントの隣にあるチェックボックスをクリックして1つ 以上のセグメントを選択し、次にこのアイコンをクリックし て、選択したセグメントの移動先を指定します。
選択項目の削除	各セグメントのにあるチェックボックスをクリックして1つ以 上のセグメントを選択し、次にこのアイコンをクリックして、 選択したセグメントを削除します。

戦略的セグメントの実行

データマートのコンテンツが変更された場合、戦略的セグメントを再生成する必要があります。 戦略的セグメントを再生成するには、そのセグメントを生成したフローチャートを運用モードで実行します。 テスト実行で[出力を有効にする]設定を使用しても戦略的セグメントは生成されません。戦略的セグメントは、運用モードでのみ出力されます。

☆ セグメント化プロセスを運用モードで再実行すると、そのプロセスにより生成された既存の戦略的セグメントは削除されます。 つまり、既存の戦略的セグメント(グローバル抑制を含む)を使用していたユーザには、新しいセグメント化プロセスの実行が正常に完了しなかった場合、または実行中に、「無効なセグメント」エラーが表示されます。

関連トピック

フローチャートの実行

戦略的セグメントの整理

1つまたは複数のフォルダを作成することにより、戦略的セグメントを整理できます。 作成したフォルダ構造内で、戦略的セグメントをフォルダからフォルダに移動できま す。

☆ 戦略的セグメントが含まれるフォルダには、セキュリティポリシーがあり、これが 戦略的セグメントに適用され、誰がそのセグメントにアクセスできるか、誰がセグ メントを編集できるのか、または削除できるのかが決まります。

セグメントフォルダを追加するには

フォルダを追加、移動、削除して、セグメントを整理できます。 また、フォルダの名前と説明を編集することもできます。

- 1. [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. サブフォルダを追加するフォルダをクリックします。
- 3. **[サブフォルダの追加]**アイコンをクリックします。 [サブフォルダの追加]ページが開きます。
- 4. フォルダの名前、セキュリティポリシー、および説明を入力します。
 - ☆ フォルダ名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 5. [変更の保存]をクリックします。

[セグメント一覧]ページに戻ります。 作成した新しいフォルダまたはサブフォルダ が表示されます。

セグメントフォルダの名前と説明を編集するには

- [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。
 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. 名前を変更するフォルダをクリックします。
- 3. [名前の変更]をクリックします。 [サブフォルダ名の変更]ページが開きます。
- 4. フォルダの名前と説明を編集します。

- ☆ フォルダ名には、使用できる文字の制約があります。 詳細については、「特殊文字について」を参照してください。
- 5. [変更の保存]をクリックします。

[セグメント一覧]ページに戻ります。 フォルダまたはサブフォルダの名前が変更されます。

セグメントフォルダを移動するには

- 移動しようとしているセグメントのソースフローチャートが、他のユーザによって編集されている場合は、セグメントを移動するとフローチャート全体が失われる可能性があります。 サブフォルダを移動する前に、ソースフローチャートが編集対象として開かれていないことを確認してください。
- 1. [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。

[セグメント一覧]ページが開きます。

2. 移動するサブフォルダが含まれているフォルダを開きます。

フォルダ名をクリックして開き、**[セグメント一覧]**をクリックして[セグメント一覧] ページに戻るか、フォルダ名をクリックしてツリー内のフォルダを開き、フォルダ 構造内を移動します。

- 3. 移動するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して同じ場所に移動できます。
- 4. [移動]アイコンをクリックします。

[アイテムの移動]ウィンドウが開きます。

- サブフォルダの移動先のフォルダをクリックします。
 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 6. **[OK]**をクリックします。

サブフォルダおよびその内容がすべて移動先フォルダに移動されます。

セグメントフォルダを削除するには

フォルダを削除するには、事前にフォルダの内容を移動するか、削除しておく必要があります。

- ☆ フォルダを削除するために必要な権限がある場合は、そのフォルダ内のサブフォルダも削除できます。
- 1. [キャンペーン]>[セグメント]を選択します。

[セグメント一覧]ページが開きます。

2. 削除するセグメントが含まれているフォルダを開きます。

フォルダ名をクリックして開き、**[セグメント一覧]**をクリックして[セグメント一覧]ページに戻るか、フォルダ名をクリックしてツリー内のフォルダを開き、フォルダ構造内を移動します。

- 3. 削除するフォルダの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のフォル ダを選択して削除できます。
- 4. [選択項目の削除]アイコンをクリックします。
- 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。
 フォルダおよびすべての空のサブフォルダが削除されます。

セグメントを移動するには

戦略的セグメントを1つのフォルダから別のフォルダに移動して、整理することができ ます。

- 移動する予定のセグメントのソースフローチャートが、編集対象として開かれている場合は、セグメントを移動するとフローチャート全体が失われる可能性があります。サブフォルダを移動する前に、ソースフローチャートが編集対象として開かれていないことを確認してください。
- [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。
 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. 移動するセグメントを含むフォルダを開きます。
- 3. 移動するセグメントの隣にあるチェックボックスをクリックします。 一度に複数の セグメントを選択して同じ場所に移動できます。
- 4. [移動]アイコンをクリックします。

[アイテムの移動]ウィンドウが開きます。

- セグメントの移動先のフォルダをクリックします。
 フォルダの隣にある+をクリックして開き、リスト内を移動します。
- 6. **[OK]**をクリックします。

セグメントが移動先フォルダに移動されます。

戦略的セグメントの削除

戦略的セグメントは、次の方法で削除できます。

- [セグメント一覧]ページ上でフォルダから戦略的セグメントそのものを削除する。 この方法で削除される戦略的セグメントは、それらのセグメントを最初に生成した セグメント化プロセスが運用モードで再実行されると、再作成されます。 詳細につ いては、「戦略的セグメントの削除」(p.240)を参照してください。
- 戦略的セグメントを作成したセグメント化プロセスを削除する。 戦略的セグメント は、フローチャートが保存されたときのみ削除されます。 この方法で削除された戦 略的セグメントは復元できません。 フローチャート内のプロセスの削除の詳細については、「プロセスの削除」(p.65)を参照してください。
- 戦略的セグメントを作成したセグメント化プロセスを含むフローチャートを削除する。 この方法で削除された戦略的セグメントは復元できません。 フローチャートの削除の詳細については、「フローチャートの削除」(p.56)を参照してください。

関連トピック

- セグメントを削除するには
- プロセスを削除するには
- フローチャートの削除

セグメントを削除するには

[セグメント一覧]ページから戦略的セグメントを直接削除するには、次の手順を実行します。

- ☆ この方法で削除される戦略的セグメントは、それらのセグメントを最初に生成したセグメント化プロセスが運用モードで再実行されると、再作成されます。
- [キャンペーン] > [セグメント]を選択します。
 [セグメント一覧]ページが開きます。
- 2. 削除するセグメントを含むフォルダを開きます。
- 3. 削除するセグメントの隣にあるチェックボックスを選択します。 一度に複数のセグ メントを選択して削除できます。
- 4. 「選択項目の削除」アイコンをクリックします。
- 5. 確認ウィンドウで[OK]をクリックします。

セグメントが削除されます。

☆ セグメントを含むアクティブなフローチャートがまだ存在する場合は、フローチャートの実行時にセグメントが再作成される可能性があります。 セグメントを含むフローチャートが、セグメント削除時に編集対象として開かれていた場合も、再作成されます。

グローバル抑制とグローバル抑制セグメントに ついて

グローバル抑制機能を使用して、Campaign上でフローチャート内のすべてのセルから 自動的に除外するIDリスト(1つのオーディエンスレベル)を指定します。

このためには、一意のIDリストを戦略的セグメントとして作成し、そのセグメントを特定のオーディエンスレベルのグローバル抑制セグメントとして指定します。 各オーディエンスレベルに対して設定できるグローバル抑制セグメントは1つだけです。

グローバル抑制の適用

あるオーディエンスレベルでグローバル抑制セグメントが定義されている場合、そのオーディエンスレベルに関連付けられているトップレベルのすべての選択プロセス、書込みプロセス、またはオーディエンスプロセスが、出力セルから、グローバル抑制セグメント内のIDを自動的に除外します(ただし、特定のフローチャートについてグローバル抑制が明示的に無効になっている場合を除く)。 フローチャートは、既定でグローバル抑制が有効になっているので、設定したグローバル抑制を適用するための操作は必要ありません。

グローバル抑制が既定で有効にならない例外としては、独自にグローバルな戦略的セグメントを作成しているセグメント化プロセスを含むフローチャートの場合があります。 このフローチャートでは、グローバル抑制は常に無効になります(グローバル抑制セグメントが作成されているオーディエンスレベルに対してのみ)。

☆ また、選択プロセス、書込みプロセス、またはオーディエンスプロセスで件数確認が実行される際にも、グローバル抑制は考慮されません。

グローバル抑制を持つオーディエンスの切り替え

フローチャート内でオーディエンス1からオーディエンス2に切り替える際、これらオーディエンスレベルに対してそれぞれグローバル抑制が定義されている場合、オーディエンス1のグローバル抑制セグメントは入力テーブルに適用され、オーディエンス2のグローバル抑制セグメントは出力テーブルに適用されます。

グローバル抑制の無効化

適切な権限がある場合のみ、個々のフローチャートに対してグローバル抑制を無効にできます。 適切な権限がない場合は、設定を変更できないため、既存の設定でフローチャートを実行する必要があります。

管理者は、特定のユーザに対して、グローバル抑制上書き権限を付与して、汎用検証グループ内のIDなど、通常は抑制されるIDへのコンタクトを許可する特別なキャンペーンをそのユーザが設計したり実行したりできるようにします。

フローチャートのグローバル抑制を無効にするには

- 1. 編集するフローチャートを開きます。
- 2. [システム管理]アイコンをクリックし、[詳細設定]を選択します。
- 3. [詳細設定]ウィンドウで[このフローチャートのグローバル抑制を無効にする]チェックボックスをオンにします。
- 4. **[OK]**をクリックします。

ディメンション階層について

ディメンション階層は、IDリストに適用できるSQL選択クエリのセットです。 戦略的 セグメントと同様、ディメンション階層は、選択プロセスでグローバルに使用したり、 キューブ構築のベースとして使用できます。

よく使用されるディメンションは、時間、地域、製品、部署、および流通チャネルです。 ただし、事業やキャンペーンの内容に応じて、最適なディメンションを作成できます。

ディメンションは、キューブの構成要素としてさまざまなレポートのベースになります(集計レベルを上げながら全製品の総売上高の計算、地域ごとの経費対売り上げについてのクロス集計レポートなど)。 ディメンションは1つのキューブに制限されません。多くのキューブで使用できます。

ディメンション階層は、さまざまな*レベル*で構成され、レベルは*ディメンション要素*(または*要素*)で構成されます。

Campaignは、無制限の数のレベルと要素で構成されるディメンションと、次の要素を サポートします。

- 顧客分析レポーティングおよび視覚的選択のための入力として構築されるデータ要素
- ドリルダウン機能をサポートする無制限の数のカテゴリへのロールアップ (ディメンションは、要素が重複しないように明確に境界をまたいでロールアップする必要があります)

例: ディメンション階層

次の2つの例は、データマートで作成され、Campaignでマッピングされる基本ディメンション階層を示しています。

例: 年齢ディメンション階層

最低レベル:(21-25)、(26-30)、(31-35)、(36-45)、(45-59)、(60+)

ロールアップ: 若年(18-35)、中年(35-59)、老年(60+)

例: 所得ディメンション階層

最低レベル: >\$100,000、\$80,000-\$100,000、\$60,000-\$80,000、\$40,000-\$60,000 ロールアップ: 高(\$100,000超)、中(\$60,000~\$100,000)、低(\$60,000未満) (\$100,000 超)、(\$60,000~\$100,000)、(\$60,000未満)

ディメンション階層の作成

Campaignでディメンションを作成するには、次のことを行う必要があります。

- データマート内のテーブルまたは区切り記号付きフラットファイルに階層的ディメンションを定義し、作成します。
- この階層的ディメンションのテーブルまたはフラットファイルをCampaignのディメンションにマッピングします。
- ☆ 階層的ディメンションはCampaignシステム管理者またはIBM Unica コンサルティングチームのメンバによりデータマート上で作成される、Campaign外の操作です。また、階層的ディメンションの最低レベルが、未加工SQLまたは純粋なIBM Unica式(カスタムマクロ、戦略的セグメント、またはユーザ定義項目なし)を使用して個々の要素を定義していることが必要です。

この階層的ディメンションをCampaignにマッピングすると、Campaignは、このコード を実行して、さまざまなロールアップを実行します。

Campaignディメンションに階層的ディメンションをマッピングする には

- ☆ 次の手順では、データマートに階層的ディメンションが既に存在することを想定しています。
- ☆ ほとんどの場合、ディメンションはキューブを作成するために使用されるので、ア プリケーションのセッション領域のフローチャートからディメンションを作成する ことをお勧めします。
- 1. 次のいずれかの場所から、[ディメンション階層]ウィンドウを開きます。
 - 編集モードのフローチャートで、[システム管理]アイコンをクリックし、[ディメンション階層]を選択します。
 - [システム管理設定]ページで、**[ディメンション階層の管理]**を選択します。 [ディメンション階層]ウィンドウが開きます。
- [新規ディメンション]をクリックします。
 「ディメンションの編集]ウィンドウが開きます。
- 3. 作成するディメンションに関する情報を入力します。
 - ディメンション名
 - 説明

- ディメンションのレベルの数(ほとんどの場合は、このディメンションをマッピングするデータマートの階層的ディメンションのレベル数に対応するはずです)。
- キューブのベースとしてこのディメンションを使用する場合は、[データの重複を許可しない]チェックボックスがオンになっていることを確認します(Campaignでは、このオプションは既定でオンになっています)。 キューブでは要素の値を重複させることはできないので、この設定を行わなければ、キューブを作成するためにこのディメンションを使用しようとするとエラーが発生します。
- 4. [テーブルマッピング]をクリックします。

[テーブル定義の編集]ウィンドウが開きます。

- 5. 次のいずれかのオプションを選択します。
 - 既存ファイルにマップ
 - 選択したデータベースの既存テーブルにマップ

テーブルをマッピングする手順を続行します。 詳細については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

☆ ディメンション階層にテーブルをマッピングする際、フィールド 名「Level1_Name」、「Level2_Name」などがテーブルになければ、マッピン グは成功しません。

ディメンションのテーブルのマッピングが終了したら、新規ディメンションのディメンション情報を示す[ディメンションの編集]ウィンドウが開きます。

6. [OK]をクリックします。

[ディメンション階層]ウィンドウが開き、新たにマッピングされたディメンションが表示されます。

7. ディメンション階層を後に再生成することなく後で使用できるようにするには、[ディメンション階層]ウィンドウで[保存]をクリックします。

ディメンション階層を更新するには

Campaignでは、ディメンション階層の自動更新をサポートしていません。 基礎のデータが変更されると、ディメンション階層を手動で更新する必要があります。

- ☆ キューブは、戦略的セグメントをベースにするディメンションによって構成されているため、戦略的セグメントが更新されるたびに、ディメンションを更新する必要があります。
- 1. 次のいずれかの場所から、[ディメンション階層]ウィンドウを開きます。
 - 編集モードのフローチャートで、[システム管理]アイコンをクリックし、[ディメンション階層]を選択します。
 - 「システム管理設定」ページで、「ディメンション階層の管理」を選択します。

[ディメンション階層]ウィンドウが開きます。

- 2. [すべて更新]をクリックします。
 - ☆ 個々のディメンションを更新するには、ディメンションを選択し、[更新]をクリックします。

保存されたディメンション階層を読み込むには

- 1. 次のいずれかの場所から、[ディメンション階層]ウィンドウを開きます。
 - 編集モードのフローチャートで、[システム管理]アイコンをクリックし、[ディメンション階層]を選択します。
 - [システム管理設定]ページで、[ディメンション階層の管理]を選択します。[ディメンション階層]ウィンドウが開きます。
- 2. 読み込むディメンション階層をハイライト表示し、[読み込み]をクリックします。

キューブについて

キューブとは、多数のディメンション階層により提供されるクエリによるIDリスト(通常、戦略的セグメント)の同時セグメントです。 キューブを作成した後、任意の時点でキューブの2つのディメンションによりドリリングしたセグメントクロス集計レポートを表示できます。

キューブを作成するには、次の作業を事前に行っておく必要があります。

- 戦略的セグメントの作成
- 戦略的セグメントに基づくディメンションの作成
- キューブには以下のガイドラインが適用されます。
- キューブ指標をCampaign式として定義できます。次の制約があります。
 - 無制限に追加数値指標を指定でき、Campaignでは、これらの指標について最小、最大、合計、平均が計算されます。 選択された指標を、ユーザ定義項目または永続的なユーザ定義項目にすることができます。
 - セル数の集計機能(最小、最大、平均、合計割合など)は自動的に計算されます。
 - 属性値の集計機能(たとえば、avg(age))により、自動的に、最小値、最大値、合計、および平均値が計算されます。
 - 複数の属性値を含む式(たとえば、(attribute1 + attribute2))は、ユーザ定義項目で サポートされます。
 - キューブプロセスは、ユーザ定義項目と、永続的なユーザ定義項目をサポートします。
 - Groupby式(たとえば、(groupby_where (ID, balance, avg, balance, (trxn_date > reference_date))))はユーザ定義項目でサポートされます。

- ユーザ変数を含む式(キューブプロセスと同じフローチャートで定義され、Distributed Marketingで公開)は、ユーザ定義項目と永続的なユーザ定義項目でサポートされます。 (Distributed Marketingの詳細については、『Distributed Marketingユーザガイド』を参照してください。)
- 未加工SQLを使用する式は、未加工SQLカスタムマクロを使用するユーザ定義項目でサポートされます。
- カスタムマクロを使用する式は、ユーザ定義項目でサポートされます。
- キューブは最大3つのディメンションで構成されますが、1度に2つのディメンションの指標しか表示できません。3番目の表示されていないディメンションも計算されサーバ上に保存されますが、そのレポートで視覚的に選択したりレポーティングで使用することはできません。
- キューブは、セルおよびセグメント(たとえば、トランザクションレベルで作成可能)に対して構築できます。ただし、キューブをセルに対して構築した場合、そのキューブはそのフローチャートでしか使用できません。この理由から、キューブは戦略的セグメントに対して構築することをお勧めします。
- テーブルが正規化されていない場合、オーディエンスレベルと多対多リレーションシップになるディメンションを定義すると予期しない結果が生じる可能性があります。 Campaignにより使用されるキューブアルゴリズムは、 正規化テーブルに依存します。 キューブを選択および構築する前に、ロールアップによりデータを正規化しておく必要があります(たとえば、データ準備セッションで顧客レベルにまでロールアップしておきます)。
 - 非正規化ディメンションでキューブを構築すると、CampaignがディメンションIDを処理する方法により、クロス集計レポートに間違った合計数が示されます。非正規化ディメンションを使用しなければならない場合には、2つのディメンションのみでキューブを構築し、トランザクション合計を正しい値にするため、トランザクションを、顧客IDではなく、非正規化ディメンションの最低レベル指標として使用してください。
- キューブディメンションを作成する際、ディメンションに、名前、オーディエンスレベル、およびそのディメンションに対応するテーブルを指定する必要があります。後で、セッションまたはキャンペーンフローチャートで作業する際に、データベーステーブルをマッピングするように、このディメンションをマッピングします。
- キューブは、ユーザがキューブにアクセスしないとき(営業時間後や週末など)に、 構築する必要があります。

関連トピック

- ・戦略的セグメントについて
- ディメンション階層について

12 IBM Unica Campaignで のレポートの使用

- IBM Unica Campaignでのレポートについて
- レポートタイプ
- Campaignリストポートレット
- Campaign IBM Cognosレポートポートレット
- レポートの操作
- Campaignのレポートリスト

IBM Unica Campaignでのレポートについて

Campaignで使用できるレポートは、インストールされている製品およびCampaign環境の設定方法によって異なります。 使用できるレポートのタイプは次のとおりです。

- 標準レポート Campaignのインストールに含まれています。 これらのレポートには[キャンペーン分析]ページからアクセスできます。
- キャンペーンレポートパックのサンプルレポート Campaign環境がIBM Cognos 8 BIに統合されている場合に使用できます。 これらのレポートには、[キャンペーン分析]ページおよびキャンペーンやオファーなどの特定オブジェクトの[分析]タブからアクセスできます。
- 関連製品のサンプルレポート Campaign環境がIBM Cognos 8 BIに統合されていて、その他のCampaign関連製品(eMessage、Interact、Distributed Marketingなど)のレポートパックがインストールされている場合に使用できます。 これらのレポートには、各製品の[分析]ページおよびキャンペーンやオファーなどの特定オブジェクトの[分析]タブからアクセスできます。 レポートの詳細については、各製品のマニュアルを参照してください。

またCampaignには、セッションやキャンペーンの特定のフローチャートのセルに関する情報を提供するフローチャートセルレポートもあります。 すべてのセルレポートは、Editモードでフローチャートを表示したときに[レポート]アイコンからアクセスできます。

レポートタイプ

Campaignは、3つの一般的なタイプのレポートをサポートします。

- システム規模のレポート Campaign内の複数のオブジェクトにまたがるレポート。これらのレポートには、メインのナビゲーションペインの[分析]リンクから起動される[キャンペーン分析]ページからアクセスできます。 たとえば、[キャンペーン分析]ページのフォルダから、キャンペーンカレンダーレポートにアクセスできます。このレポートは、システム内のすべてのキャンペーンをカレンダー形式で表示します。
- オブジェクト固有のレポート 特定のオブジェクト(キャンペーンやオファー)に関するレポート。これらのレポートには、オブジェクトの[分析]タブからアクセスできます。たとえば、キャンペーンの[分析]タブから、オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリレポートにアクセスできます。このレポートは、対応するキャンペーンごとにグループ化されたオファーに関するキャンペーンおよびオファーのパフォーマンスのサマリを示します。
- フローチャートセルレポート セッションやキャンペーンにおける特定のフローチャートのセルに関するさまざまな情報を提供するレポート。セルレポートは、フローチャートを編集モードで表示したときに[レポート]アイコンをクリックすると、アクセスできます。
- ☆ オブジェクトのフローチャート、[分析]タブ、および[キャンペーン分析]ページへのアクセスは、権限によって異なります。

Campaignリストポートレット

このセクションでは、Campaign レポートパッケージがインストールされていない場合でもダッシュボードで使用可能な、標準的なCampaignポートレットについて説明します。

レポート	説明
カスタムブック	レポートを表示するユーザによって作成された、Webサイトまたはファイ
マーク	ルへのリンクのリスト。
最近使ったキャン	レポートを表示するユーザによって作成された、最新のキャンペーンのリ
ペーン	スト。
最近使ったセッ ション	レポートを表示するユーザによって作成された、最新のセッションのリスト。
キャンペーン監視	レポートを閲覧しているユーザが作成した、実行済みまたは現在実行中の
ポートレット	キャンペーンのリスト。

Campaign IBM Cognosレポートポートレット

このセクションでは、Campaignレポートパッケージで使用可能なダッシュボードポートレットについて説明します。

レポート	説明
Campaign投資収 益率の比較	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、キャンペーンのROIを高いレベルで比較するIBM Cognosレポート。
Campaignレスポ ンス率の比較	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、1つ以上の キャンペーンのレスポンス率を比較するIBM Cognosレポート。
Campaignオ ファー別収益比較	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、オファーを含む各キャンペーンの現在までに発生した収益を比較するIBM Cognosレポート。
過去7日間のオ ファーレスポンス	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、オファーごと に過去7日間に受け取ったレスポンス数を比較するIBM Cognosレポート。
オファーレスポン ス率の比較	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、オファー別に レスポンス率を比較するIBM Cognosレポート。
オファーレスポン スの詳細	レポートを表示するユーザによって作成または更新された、各種のアク ティブなオファーをステータス別に分類して表示するIBM Cognosレポー ト。

レポートの操作

次のセクションでは、Campaignでのレポートの使用に関する情報を提供しています。

- レポートのアクセスと表示について
- レポートコントロールについて
- 「レポート]ツールバー
- 電子メールでレポートを送信するには
- さまざまな形式でのレポートの表示について
- レポートの再実行について

レポートのアクセスと表示

レポートへのアクセスは、オブジェクトや機能に対するアクセス権によって異なります。 たとえば、フローチャートを編集する権限がない場合は、フローチャートのセルレポートにアクセスできません。

レポートは、Campaignの次のセクションからアクセスできます。

• [分析]メニューの[キャンペーン分析]リンク - このリンクは、Campaignで使用できるすべてのレポートのフォルダを表示する[キャンペーン分析]ページを開きます。 実行できるレポートのサブフォルダまたはリストを表示するには、フォルダのリンクをクリックします。 レポートは、更新された日時とともに一覧表示されます。

- オブジェクトの[分析]タブ このキャンペーン、オファー、またはセグメントのレポートへのリンクを表示します。表示するレポートのタイプは、ページの右上にある[レポートタイプ]ドロップダウンリストから選択します。
- 編集モードのフローチャートページ ページの上部にある[レポート]リンクは、当該フローチャートのセルレポートを開きます。 セルレポートへのアクセスおよびセルレポートのエクスポート機能は、アクセス権によって異なります。

[キャンペーン分析]ページからレポートを表示するには

- 1. [分析] > [キャンペーン分析]を選択します。
 - [キャンペーン分析]ページが開きます。Campaignで使用可能なレポート用のフォルダが表示されます。
- 2. 表示するレポートが保存されているフォルダをクリックします。 フォルダの内容を表示するページが開きます。サブフォルダがある場合は、サブフォルダも表示されます。
- 3. 表示するレポートへのリンクをクリックします。 レポートでフィルタリングが許可されている場合は、[レポートパラメータ]ウィンドウが開きます。
- 4. レポートのフィルタリングに使用するオブジェクトを1つ以上選択します。 アクセス権があるオブジェクトのみが表示され、選択できます。 複数のオブジェクトを選択できるレポートの場合、Ctrlキーを押しながら選択すると、複数のオブジェクトを選択できます。
- 5. レポートのオブジェクトの選択を終了したら、[レポート作成]をクリックします。 レポートが同じウィンドウに表示されます。

キャンペーンの[レポート]タブからレポートを表示するには

- 1. レポートを作成するキャンペーンを選択します。 [キャンペーンサマリ]ページが表示されます。
- 2. **[レポート]**タブをクリックします。 ページ右上に、[レポートタイプ]ドロップダウン リストが表示されます。
- 3. ドロップダウンリストから、表示するレポートのタイプを選択します。 レポートが 同じウィンドウに表示されます。

[キャンペーン]ページの[レポート]タブのアイコン

[キャンペーン]ページの[レポート]タブでは、次のアイコンを使用します。



アイコンは、左から右への順に、次の表で説明します。

☆ Campaignインタフェースのアイコンの多くは、権限を必要とする機能に関連付けられています。 詳細については、『Marketing Platform管理者ガイド』を参照してください。

アイコン名	説明
項目の印刷	[レポート]タブのフローチャートリストを印刷するには、この アイコンをクリックします。
キャンペーンの移動	キャンペーンの移動先を指定するには、このアイコンをクリッ クします。
キャンペーンの削除	キャンペーンを削除するには、このアイコンをクリックしま す。

セルレポートをフローチャートから表示するには

セルレポートにアクセスできるかどうかは、権限によって異なります。 たとえば、フローチャートを編集または確認(保存せずに編集)する権限がない場合は、フローチャートのセルレポートにアクセスすることはできません。 さらに、セルレポートを表示したり、セルレポートをエクスポートしたりするには、明示的なアクセス権が必要です。システムで定義されている管理者の役割に割り当てられているセルレポート関連の権限については、『Campaign管理者ガイド』を参照してください。

- 1. 編集モードのフローチャートで、[レポート]アイコンをクリックします。 [セル別詳細レポート]ウィンドウが開きます。 既定では、セルリストレポートが表示されます。 右上に、[対象データ]ドロップダウンリストが表示されます。
- 2. ドロップダウンリストから、表示するレポートのタイプを選択します。 レポートが 同じウィンドウに表示されます。
- 3. (オプション) [オプション]をクリックして表示設定を選択するか、[印刷]または[エクスポート]をクリックして現在のセルレポートを印刷またはエクスポートできます。

レポートコントロール

表示するレポートを生成するときに、次のコントロールおよび情報を使用できます。

- レポート生成時刻 レポートページの右下に表示されます。
- レポート生成日 レポートページの左下に表示されます。
- 上/下コントロール これらのリンクをクリックすると、レポートの最初や最後が表示されます。 現在のレポートが複数ページにわたっている場合にのみ表示されます。
- ページアップ/ページダウンコントロール これらのリンクをクリックすると、レポートの前のページや次のページが表示されます。 現在のレポートが複数ページにわたっている場合にのみ表示されます。

レポートツールバー

E Keep this version ▼ ♣ ♣ ♣ ▼ ■ ▼

☆ レポートツールバーは、Cognosで生成されたレポートにのみ表示されます。 この ツールバーは、カレンダーレポートまたはセグメントレポート、あるいはフロー チャート内のセルレポートでは使用できません。

レポートが生成されると、レポートツールバーが表示され、次のタスクを実行できます。

- ・ このバージョンを維持 レポートを電子メールで送信します。
- ドリルダウン/ドリルアップ ディメンションドリルをサポートするレポートに使用されます。
- 関連リンク ディメンションドリルをサポートするレポートに使用されます。
- 表示形式 レポートの既定の表示形式はHTMLです。 ドロップダウンリストから他 の表示形式を選択できます。 表示形式のアイコンは、現在選択している表示オプ ションによって異なります。

レポートを電子メールで送信するには

このオプションを使用するには、Cognosを使用できるようにSMTPサーバが設定されている必要があります。 この機能が使用できない場合は、レポート管理者に確認してください。

IBM Unica 製品のCognos BIライセンスを取得している場合、レポートへのリンクを含めるオプションはサポートされていません。 この機能を使用するには、Cognos BIのフルライセンスを購入してください。

- 1. レポートの実行が完了したら、レポートツールバーで[このバージョンを維持]をクリックし、ドロップダウンリストから[レポートの電子メール送信]を選択します。 [電子メールオプションの設定]ページが表示され、電子メールの受信者、およびオプションのメッセージテキストを指定します。
- 2. 電子メールメッセージの添付ファイルとしてレポートを送信するには、[レポートを添付する]チェックボックスをオンにし、[レポートへのリンクを含める]チェックボックスをオフにします。
- 3. レポートの電子メール送信に関する詳細の指定を完了したら、[OK]をクリックしま す。 要求が電子メールサーバに送信されます。

さまざまな形式でのレポートの表示

☆ すべてのレポートがすべての形式で表示できるわけではありません。 たとえば、複数のクエリを使用するレポートはCSV形式やXML形式では表示できません。

レポートビューアを使用すると、レポートを次の形式で表示できます。

- HTML
- PDF
- Excel

- CSV
- XML

レポートをHTML形式で表示するには

☆ これはレポートの既定の表示です。

レポートの生成が完了したら(HTML以外の形式で表示されている場合は)、レポートツールバーで[表示形式]アイコンをクリックし、ドロップダウンリストから[HTML形式で表示]を選択します。 ページが更新されて、レポートはHTML形式で表示されます。レポートが複数のページにわたっている場合は、レポートコントロールを使用してレポート内を移動できます。

レポートをPDF形式で表示するには

レポートを生成したら、レポートツールバーで[表示形式]アイコンをクリックし、ドロップダウンリストから[PDF形式で表示]を選択します。 ページが更新されて、レポートはPDF形式で表示されます。 PDFリーダコントロールを使用して、レポートを保存または印刷できます。

レポートをExcel形式で表示するには

使用しているMicrosoft Excelのバージョンに応じて、レポートの生成後に、レポートツールバーの[表示形式]アイコンをクリックし、[Excelで表示オプション]をクリックして、ドロップダウンリストから[Excel 2007形式で表示]、[Excel 2002形式で表示]、[Excel 2000単一シートで表示]、または[Excel 2000形式で表示]を選択します。 新しいウィンドウが開きます。 ファイルを開くか保存するかを確認するウィンドウが表示されます。

- レポートを保存せずに表示するには、[開く]をクリックします。 レポートはExcel形式の1ページとして表示されます。
- レポートを保存するには[保存]をクリックします。 [名前を付けて保存]ウィンドウが表示されます。 ファイルを保存する場所に移動し、[ファイル名]項目に名前を入力します [保存]をクリックします。 ファイルの保存が完了すると、[ダウンロード完了]ウィンドウが表示されます。

レポートをCSV(カンマ区切り値)形式で表示するには

レポートを生成したら、レポートツールバーで[表示形式]アイコンをクリックして[Excelで表示オプション]をクリックし、ドロップダウンリストから[CSV形式で表示]を選択します。 新しいウィンドウが開きます。 ファイルを開くか保存するかを確認するウィンドウが表示されます。

• レポートを保存せずに表示するには、[開く]をクリックします。 レポートはスプレッドシート形式の1ページとして表示されます。

・ レポートを保存するには[保存]をクリックします。 [名前を付けて保存]ウィンドウが表示されます。 ファイルを保存する場所に移動し、[ファイル名]項目に名前を入力します (既定では、ファイルは.xlsファイルとして保存されます)。 [保存]をクリックします。 ファイルの保存が完了すると、[ダウンロード完了]ウィンドウが表示されます。

レポートをXML形式で表示するには

レポートを生成したら、レポートツールバーで[表示形式]アイコンをクリックし、ドロップダウンリストから[XML形式で表示]を選択します。 ページが更新されて、レポートは同じウィンドウにXML形式で表示されます。

Campaignのレポートリスト

このセクションでは、Campaignで使用可能なレポートを次のカテゴリに分けて説明します。

標準レポート:

- フローチャートセルレポート
- セグメントクロス集計レポート
- キャンペーンカレンダーレポート

Campaignレポートパックに提供されるレポート(オプション):

- キャンペーンおよびオファーリストレポート
- パフォーマンスレポート

IBM Unica レポートのインストールおよび設定の詳細については、インストールガイドおよび『IBM Unica *IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*』を参照してください。

各レポートで使用するデータ項目、クエリ、および式の詳細については、IBM Unica Campaignレポート仕様のマニュアルを参照してください。

フローチャートセルレポート

セルレポートは、セッションまたはキャンペーンにおける特定のフローチャートのセルに関するさまざまな情報を提供します。 すべてのセルレポートは、編集モードでフローチャートを表示したときに[レポート]メニューからアクセスできます。

Campaignでサポートしているセルレポートのタイプは次のとおりです。

- セルリストレポート
- セルプロファイルレポート
- セルクロス集計レポート
- セル内容レポート

• セルウォータフォールレポート

セルレポートを印刷およびエクスポートするには

[セル別詳細レポート]ページの上部にある[印刷]または[エクスポート]ボタンをクリックすると、セルレポートの印刷、または Excelスプレッドシートへのエクスポートができます。

セルリストレポート

セルリストレポートは、現在のフローチャートで使用されるすべてのセルに関する情報を示します。 この情報は、フローチャートで実行されるすべてのプロセスからのセル 出力の結果です。

セルリストレポートを生成するには

- 1. 既存のフローチャートを編集モードで開くか、新規フローチャートを作成します。
- 2. [レポート]アイコンをクリックします。

[セル別詳細レポート]ウィンドウが開き、既定でセルリストレポートが表示されます。 フローチャート内の各セルが、レポートの1つの行に表示されます。

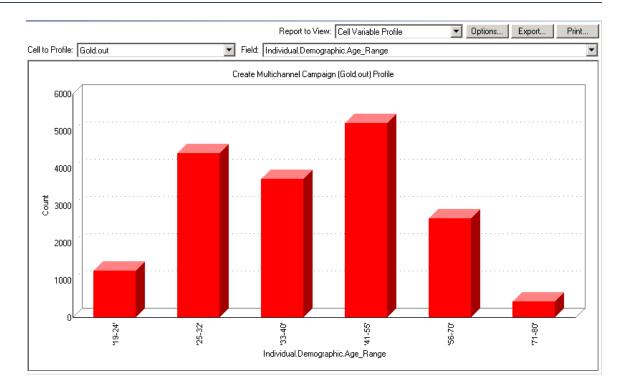
このレポートには、フローチャートの最終実行時のデータが表示されます。 ステータス列には、実行されたフローチャートのタイプ、つまり テスト実行か本番実行が示されます。

- 3. (オプション)ツリー表示とテーブル表示を切り替えるには、[オプション]をクリックします。 [レポートオプション]ウィンドウが表示されるので、次のオプションの中から1つを選択します。
 - [ツリー表示] フォルダ構造をシミュレートするツリー表示で、フローチャートのセルを表示します。 この表示のレベルは、フローチャート内のレベルを表します。 上位レベルのフォルダを展開したり折りたたんだりすると、その下にあるアイテムを表示、または非表示にできます。
 - [テーブル表示] フローチャートのセルをテーブル形式で表示します。 これは 既定のオプションです。

セルプロファイルレポート

セルプロファイルレポートは、指定したセルの1つの変数に関連付けられているデータを表示します。 たとえば、次の図は、マルチチャネルリテンションキャンペーンのGold.outセル(ゴールドクレジットカードを所有する顧客)を示しています。 Age-Range変数が表示され、Gold.outセルに属する顧客の年齢範囲が示されています。

セルプロファイルレポート



セルプロファイルレポートを生成するには

- 1. 既存のフローチャートを編集モードで開くか、新規フローチャートを作成します。
- 2. **[レポート]**アイコンをクリックします。 [セル別詳細レポート]ウィンドウが開き、既 定でセルリストレポートが表示されます。 フローチャート内の各セルが、レポート の1つの行に表示されます。
- 3. [対象データ]ドロップダウンリストから[セルプロファイル]を選択します。
- 4. [対象セル]ドロップダウンリストから、並べ替えるセルを選択します。
- 5. **[項目]**ドロップダウンリストから、選択されたセルをプロファイルする項目を選択します。
- 6. 選択されたセルと項目に基づき、Campaignがセルプロファイルを生成します。
- 7. (オプション)レポートの表示を修正するには、[オプション]をクリックします。 [レポートオプション]ウィンドウが表示されるので、次のオプションの中から選択します。
 - [階級数] レポートに表示する階級数を入力します。 水平軸上の項目値は、階級で分類されています。 指定した数が、項目値の種類の数よりも少ない場合は、いくつかの項目が1つの階級に結合されます。 既定では25です。
 - [データ型による並べ替え] メタデータ別に並べ替えます。 メタデータ別の並べ替えに関する詳細については、「データ型による並べ替え」を参照してください。 このオプションは、既定で有効になっています。
 - [テーブルの表示] レポートをテーブル形式で表示します。 各階級は行として 表され、各階級のカウントは列として表わされます。

- [グラフの表示] レポートをグラフとして表示します。 これは既定のオプションです。 2次元または3次元レポートを表示する際、レポートを右クリックすると、その他の表示オプションを選べます。
- [2つ目のセル表示] 2つ以上のセルを並べ替えに使用できる場合は、このオプションを使用すると、レポートで2つ目のセルを表示できます。 このオプションを選択すると、並べ替える追加セルを選択するためのドロップダウンリストが表示されます。 2つのセルが、グラフ形式で並んで表示されます。

セルクロス集計レポート

セルクロス集計レポートは、2つの項目で同時にプロファイルされたセルの詳細を示します。 選択された各項目はさまざまな階級に分割され、それぞれが交わる部分のボックスのサイズは、選択された属性を持つ顧客IDの相対数を表します。 たとえば、次の図では、Gold.outセルの2つのレコードは、 資金(Indiv._Total_Funds)と名前(First_Name)でプロファイルされています。 別の例として、年齢と購入額でのプロファイルも考えられます。

☆ セルをプロファイルするためには、セルが生成されるプロセスが完全に設定されていて正常に実行される必要があります。

セルクロス集計レポート



セルクロス集計レポートを生成するには

1. 既存のフローチャートを編集モードで開くか、新規フローチャートを作成します。

- 2. **[レポート]**アイコンをクリックします。 [セル別詳細レポート]ウィンドウが開き、既 定でセルリストレポートが表示されます。 フローチャート内の各セルが、レポート の1つの行に表示されます。
- 3. [対象データ]ドロップダウンリストから[セルクロス集計]を選択します。
- 4. [セル]ドロップダウンリストからセルを選択します。
- 5. **[項目1]**および**[項目2]**ドロップダウンリストから、並べ替える項目(変数)を選択します。

選択された項目に基づき、Campaignによってレポートが生成されます。

- 6. (オプション)レポートの表示を修正するには、[オプション]をクリックします。 [レポートオプション]ウィンドウが表示されるので、次のオプションの中から選択します。
 - [階級数] 表示される階級の数を変更します。 水平軸上の項目値は、階級で分類されています。 指定した数が、項目値の種類の数よりも少ない場合は、いくつかの項目が1つの階級に結合されます。 既定では10です。
 - [データ型による並べ替え] メタデータ別に並べ替えます。 メタデータ別の並 べ替えに関する詳細については、「データ型による並べ替え」を参照してくださ い。 このオプションは、既定で有効になっています。
 - [テーブルの表示] レポートをテーブルとして表示します。
 - [2次元グラフの表示]: レポートを2次元グラフとして表示します(既定の設定)。 2 次元または3次元レポートを表示する際、レポートを右クリックすると、さまざ まな表示オプションを選べます。
 - [3次元グラフの表示]: レポートを3次元グラフとして表示します。 2次元または3 次元レポートを表示する際、レポートを右クリックすると、さまざまな表示オプ ションを選べます。
 - [セル1表示]: セル情報がX軸に表示される方法を選択します。 数値項目によって は、[項目]ドロップダウンメニューから、使用する項目を選択できます。
 - [項目]: ([セル1表示]および[セル2表示]の両方)。 並べ替えられる既存の変数に、 変数を追加します。 この2つ目の変数は、1つ目の変数を表すボックス内のボッ クスとして表示されます。

セル内容レポート

セル内容レポートは、セル内のレコードの詳細を示します。 現在のオーディエンスレベルで定義されているすべてのテーブルソースの値を表示できます。 このレポートは実行結果を検証する場合に便利です。

セル内容レポートを生成するには

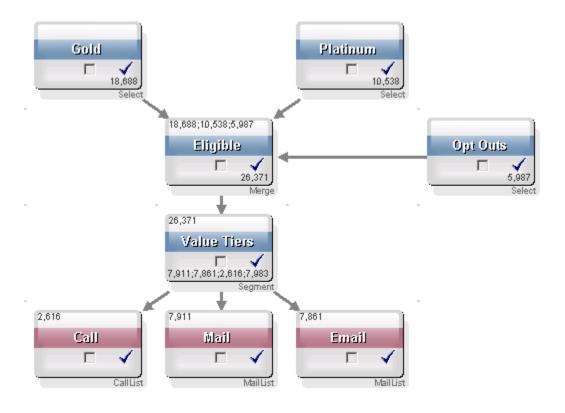
- 1. 既存のフローチャートを編集モードで開くか、新規フローチャートを作成します。
- 2. **[レポート]**アイコンをクリックします。 [セル別詳細レポート]ウィンドウが開き、既 定でセルリストレポートが表示されます。 フローチャート内の各セルが、レポート の1つの行に表示されます。

- 3. 「対象データ」ドロップダウンリストから「セル内容」を選択します。
- 4. [セル名]プルダウンメニューからセルを選択します。
- 5. (オプション)レポートの表示を修正するには、**[オプション]**をクリックします。 [レポートオプション]ウィンドウが表示されるので、次のオプションの中から選択します。
 - [最大表示行数] レポートに表示される最大行数を変更します。 既定では100 です。
 - [表示項目] [選択項目]領域から項目を選択して[表示項目]領域に追加することで、レポートに表示する項目を選択します。
 - [重複IDのデータを除外] 重複項目を持つレコードを除外します。 この設定 は、正規化されていないテーブルを使用する場合に便利です。 このオプション は、既定では無効になっています。

セルウォータフォールレポート

セルウォータフォールレポートは、フローチャートのさまざまなプロセスでセルが入出力される過程でのオーディエンスメンバのフォールオフを示します。 このレポートは出力ボリュームを減らしたプロセスを識別し、減少の詳細をパーセントと数量で示します。 セルウォータフォールレポートを使用して、それぞれの一連の条件によって発生するフォールオフを表示することでターゲットカウントを絞り込みます。

たとえば、次の例のレポートは、マルチチャネルリテンションキャンペーンフローチャートのGoldプロセスからGold.outセルをプロファイルします。

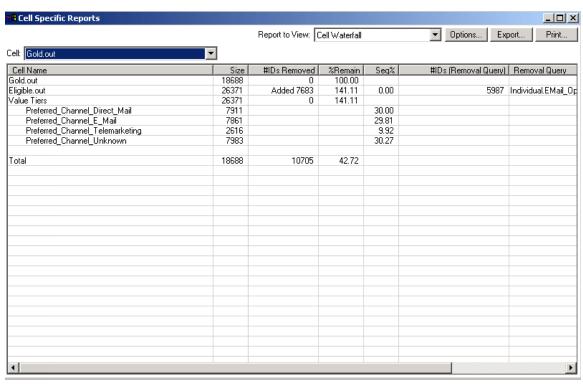


Gold.outセル内のIDは、Eligibleという名前のマージプロセスに渡されます。 マージプロセスの出力セルEligible.outは、7683件のIDをGold.outに追加します。次にGold.outはPlatinum.outセルにマージされ、結果的にID数は減少ではなく増加します。 オプトアウトプロセスにより、一部のIDはGold.outとPlatinum.outのマージ結果から除外されるため、結果はこの2つのセルの合計よりも少なくなります。 次に、Eligible.outセルは価値層(Value Tiers)と呼ばれるセグメントプロセスに渡され、ここでいくつかのコンタクトチャネルに解析されます。

このフローチャートに基づくセルウォータフォールレポートを次の図に示します。

セルウォータフォールレポートの合計行は、10,705件のIDがGold.outセルから削除されたことを示しています。 このレポートは、残っているIDの数と残っている元のGold.outのIDのパーセントも表示します。

マルチチャネルリテンションキャンペーンフローチャートのセルウォータフォールレポート



セグメントクロス集計レポート

セグメントクロス集計レポートは、Campaignの[分析]セクションからアクセスでき、次の個々のレポートから構成されています。

- セグメントクロス集計レポート
- セグメントプロファイルレポート

セグメントクロス集計レポート

セグメントクロス集計レポートは、キューブプロセスでの定義に従って、キューブ内の任意の2つのディメンションに関する詳細情報を計算し、その結果を表形式で表示します。 このレポートでは、セルにドリリングして、キャンペーンまたはセッションのフローチャートで使用できる選択プロセスを作成できます。

セグメントクロス集計レポートで分析できるのは、キューブに含まれる戦略的セグメントまたはセルだけです。

セグメントプロファイルレポート

セグメントプロファイルレポートは、戦略的セグメントのディメンションのカウントを計算して表示します。 情報は表形式とグラフ形式の両方で表示されます。 セグメントプロファイルレポートで分析できるのは、キューブに含まれる戦略的セグメントだけです。

キャンペーンカレンダー

キャンペーンカレンダーレポートでは、キャンペーンの開始日と終了日をカレンダーに 表示できます。

キャンペーンおよびオファーリストレポート

キャンペーンおよびオファーリストレポートは、IBM Unica レポートおよびCampaign レポートパックがインストールされている場合のみ使用できます。 IBM Unica レポートのインストールおよび設定の詳細については、インストールガイドおよび『IBM Unica IBM Unica Campaign管理者ガイド』を参照してください。

キャンペーンおよびオファーリストレポートは、Campaignの[分析]セクションからアクセスでき、次の個々のレポートから構成されています。

- キャンペーンサマリ
- オファーキャンペーンリスト

キャンペーンサマリ

キャンペーンサマリレポートは、作成されたすべてのキャンペーンの概要を示します。 キャンペーンコード、作成日、開始日と終了日、前回実行日、キャンペーンタイプと目 的をキャンペーンごとに一覧表示します。

オファーキャンペーンリスト

オファーキャンペーンリストレポートは、キャンペーンをオファー別に一覧表示します。 キャンペーンコード、キャンペーンタイプ、開始日と終了日、前回実行日を一覧表示します。

パフォーマンスレポート

パフォーマンスレポートは、IBM Unica レポートおよびCampaignパックがインストールされている場合のみ使用できます。 レポートのインストールおよび設定の詳細については、インストールマニュアルおよび『*IBM Unica Marketing Platform管理者ガイド*』を参照してください。

パフォーマンスレポートの出力例は、IBM Unica Campaignレポート仕様のマニュアルを参照してください。

パフォーマンスレポートは、Campaignの[分析]セクションからアクセスでき、次の個々のレポートから構成されています。

- 「What If」オファー収支サマリ
- キャンペーン詳細 オファーレスポンスの詳細
- オファー別キャンペーン収支サマリ(実績)
- 月別キャンペーンオファーパフォーマンス
- キャンペーンパフォーマンス比較
- キャンペーンパフォーマンス比較(収益)
- キャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンス比較
- セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ
- セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)
- セルおよびキャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンスサマリ
- オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ
- オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)
- 日別オファーパフォーマンス
- オファーパフォーマンス比較
- オファーパフォーマンス指標
- キャンペーン別オファーパフォーマンスサマリ

「What If」オファー収支サマリ

「What If」オファー収支サマリレポートは、入力に基づいてオファーの仮想的な収支パフォーマンスを計算します。 さまざまなレスポンス率のシナリオを評価するためのパラメータを指定します。 レポートは、指定したレスポンス率とレスポンス率の増分に基づいて上向きに増大していく6つのシナリオの収支パフォーマンスを計算します。 たとえば、レスポンス率を2%、レスポンス率の増分を0.25%に指定すると、レスポンス率が2%から3.25%までの6つのシナリオのパフォーマンスデータがレポートから返されます。

「What If」レポートのパラメータ(コンタクト単位のコスト、オファー実現固定コスト、レスポンス当たりの売上など)を変更することもできます。

キャンペーン詳細 - オファーレスポンスの詳細

キャンペーン詳細 - オファーレスポンス詳細レポートは、レスポンスタイプごとにキャンペーンのパフォーマンスデータを示します。 キャンペーンに関連付けられているすべてのオファーとレスポンスタイプごとのレスポンス数を一覧表示します。

オファー別キャンペーン収支サマリ(実績)

オファー別キャンペーン収支サマリ(実績)レポートは、キャンペーン内のオファーの収支データを示します。 コンタクトコスト、総収益、純利益、ROIなどのデータが含まれます。

月別キャンペーンオファーパフォーマンス

月別キャンペーンオファーパフォーマンスレポートには、指定した月のキャンペーンパフォーマンスとキャンペーン内の各オファーのパフォーマンスデータが表示されます。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、指定した月のレスポンス率を一覧表示します。

キャンペーンパフォーマンス比較

キャンペーンパフォーマンス比較レポートは、キャンペーンの収支パフォーマンスを比較します。 レスポンストランザクションとレスポンス率、一意のレスポンダ数とレスポンダ率などのデータが含まれます。 解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

キャンペーンパフォーマンス比較(収益)

キャンペーンパフォーマンス比較(収益)レポートは、選択されたキャンペーンの収支パフォーマンスを比較します。 レスポンストランザクション、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率、実際の収益などのデータが含まれます。 オプションの解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

キャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンス比較

キャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンス比較レポートは、キャンペーンタイプ別にグループ化されたキャンペーンの収支パフォーマンスを比較します。 レスポンストランザクションとレスポンス率、一意のレスポンダ数とレスポンダ率などのデータが含まれます。 オプションの解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ

セル別キャンペーンパフォーマンスサマリレポートは、対応するキャンペーン別にグループ化されたセルについて、キャンペーンのパフォーマンスデータを示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率などのデータが含まれます。 解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)

セル別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)レポートは、対応するキャンペーン別にグループ化されたセルについて、選択されたキャンペーンのパフォーマンスデータを示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率、実際の収益などのデータが含まれます。 オプションの解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

☆ このレポートでは、レスポンス履歴テーブルに追加トラッキング項目[収益]が必要です。

セルおよびキャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンスサマ リ

セルおよびキャンペーンタイプ別キャンペーンパフォーマンスサマリレポートは、対応するキャンペーンおよびキャンペーンタイプ別にグループ化されたセルについて、選択されたキャンペーンのパフォーマンスデータを示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率などのデータが含まれます。 オプションの解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ

オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリレポートは、対応するキャンペーン別にグループ化されたオファーについて、キャンペーンおよびオファーのパフォーマンスのサマリを示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率などのデータが含まれます。 解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)

オファー別キャンペーンパフォーマンスサマリ(収益)レポートは、選択されたキャンペーンのオファーパフォーマンスのサマリを示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率、実際の収益などのデータが含まれます。 オプションの解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

日別オファーパフォーマンス

日別オファーパフォーマンスレポートは、指定した日付または日付範囲のオファーパフォーマンスを示します。 指定した日または日付範囲中の指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率を一覧表示します。

オファーパフォーマンス比較

オファーパフォーマンス比較レポートは、選択されたオファーのパフォーマンスを比較します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率などのデータが含まれます。 解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

オファーパフォーマンス指標

オファーパフォーマンス指標レポートは、最適な一致、断片的一致、複数一致などのさまざまなレスポンス帰属に基づいて、選択されたオファーのパフォーマンスを比較します。 オプションの解除されたコントロールグループ情報や、さまざまな帰属率間の差異のパーセントも含まれます。

キャンペーン別オファーパフォーマンスサマリ

キャンペーン別オファーパフォーマンスサマリレポートは、選択されたオファーのパフォーマンスのサマリをキャンペーン別に示します。 指定したオファー数、レスポンストランザクション数、レスポンス率、一意のレスポンダ数、レスポンダ率などのデータが含まれます。 解除されたコントロールグループの情報も含まれます。

A IBM Unica Campaignオ ブジェクト名内の特殊文 字

- 特殊文字について
- サポートされていない特殊文字
- 命名上の制約がないオブジェクト
- 命名上の特定の制約があるオブジェクト

特殊文字について

Campaignのオブジェクト名には固有の要件があります。 特殊文字によっては、Campaignオブジェクト名でサポートされない文字もあります。 加えて、固有の命名上の制約があるオブジェクトもあります。

☆ オブジェクト名をデータベースに渡す場合(たとえば、フローチャート名を含むユーザ変数を使用する場合)、オブジェクト名には、使用データベースでサポートされている文字のみが含まれているようにします。サポートされていない文字が含まれている場合、データベースエラーが発生します。

サポートされていない特殊文字

次の表に一覧表示されている文字は、以下のオブジェクトの名前に使用しないでください。

- ・ キャンペーン
- フローチャート
- ・フォルダ
- ・ オファー
- オファーリスト
- セグメント
- セッション

文字	説明
%	パーセント
*	アスタリスク
?	疑問符
1	パイプ(縦棒)
:	コロン
,	カンマ
<	小なり記号
>	大なり記号
&	アンパサンド
1	バックスラッシュ
	スラッシュ
и	二重引用符

命名上の制約がないオブジェクト

Campaignの次のオブジェクトは、名前に使用する文字の制約がありません。

• オーディエンスレベル(オーディエンスレベルの項目名には命名上の制約があります)

- カスタム属性の表示名(カスタム属性の内部名には命名上の制約があります)
- オファーテンプレート

命名上の特定の制約があるオブジェクト

Campaignの次のオブジェクトは、名前に関する特定の制約があります。

- カスタム属性の内部名(カスタム属性の表示名には命名上の制約はありません)。
- オーディエンスレベルの項目名(オーディエンスレベル名には命名上の制約がありません)
- セル
- ・ ユーザ定義項目
- ユーザテーブル名と項目名

これらのオブジェクトの名前は次のようにする必要があります。

- 英数字またはアンダスコア()文字のみを使用すること
- 英字で始めること
- ☆ ユーザ定義項目には、追加の制約事項があります。 詳細については、「ユーザ定義項目の命名制約」を参照してください。